十六日、明日より福岡縣に於て、震災救護に關する九州各縣の內務部長會議が開かれるので、之に列席せしむる爲め內務部長及主任屬を派遣した。

十月五日、鐵道の便を有する五郡より、衣類及蒲團の寄贈を受くるやう募集に着手せしめ、寄贈が尠からずあつた。

今次の大災禍に對しては、縣民の同情湧くが如く、各種團體及篤志者は、夜を日に繼いで義捐金品の募集に勉め、何れも先を爭うて之に應じ、義捐金額總計十五萬五千八百九十九圓七十七錢、外に國庫債券百圓一枚を算した。更に義捐品として價格千圓以上の品目では、白米一千四百六十九俵、玄米三千二百六十八俵、梅干百八十三樽、衣類百九十六箱、書籍五十九箱等で、其他を合しての總見積價格は約十萬圓に上つた。

治安維持に關しての施設は略する。

第四十四章　鹿兒島縣

九月二日夜、知事官舍に部長・各課長參集して救援に關する協議をなし、爾來十月二十日迄實施した事項は左の如くである。

第一　義捐金募集

三日縣廳幹部・鹿兒島市長・商業會議所會頭並に議員・縣農會長其他參會して義捐金募集を計畫し、印刷物及新聞の廣告以外に鹿兒島市內の常設活動寫眞館に社會主事を派して幕間に義金の醵出を勸誘し、九月三十日までに金二十八萬七千六百五十圓十五錢に達した。

第二　救恤品と寄贈品

義捐金を以て、應急策として購入發送したる第一回救恤品は、白米一千俵、甘藷三千俵、澤庵五拾五樽、黑砂糖百樽の外衞生材料にして、更に第二回救恤品として經節一千貫、梅干五百樽、味噌三萬斤、甘藷五千俵、和傘一萬本、下駄二萬足を調達し、內務省宛に發送した。

神奈川縣知事に對して其の回答を求め、經節一千貫、和傘一萬本、黑砂糖五百樽及衣類四百梱を寄贈し、更に九月六日罹災者の應急救護に資する爲め、衣類の募集に着手し、一般有志或は團體の盡力を求め、特に各婦人團體の斡旋を依囑して發送した數量は、郡市を通じて六萬一千四百九十五點に達した。右の外愛國婦人會鹿兒島支部に於ては、各郡市の同會に對して慰問袋八千五百五個を蒐集し、其他教科書、特志家よりの寄贈品とともに送付した。

第三　救恤品の輸送

購入又は寄贈の物資輸送に就いては鹿兒島運輸事務所と交渉して便宜の經路に依りて輸送した。然し貨車不足の上に貨物輻湊停滯せる結果、熊本・宮崎兩縣と聯合して鹿兒島港より汽船にて輸送したるも意の如くならず、軍艦の寄港を佐世保鎭守府に交涉せるも時期遲く、遂に長崎縣を除く九州各縣及山口縣聯合の救恤品は鐵道省汽船多喜丸にて、門司より品川沖に輸送するの便をかりて、第一回の購入物資の一部と衞生材料とを門司より同船に積換へ又遞信省にて徵發した大阪商船の大義丸によりて、輸送することにした。

第四　罹災避難者の救護

九月九日より、鹿兒島驛構內に天幕張の救護所を設けて、廳員・市役所吏員・愛國婦人會員等は專ら之が斡旋をなし、赤十字社鹿兒島支部の救療班は疾患者の手當を行つた。更に姶良郡吉松驛は鹿兒島線と宮崎線との分岐點なるがため、避難者通過多きを豫想して救護所を設置し、何れも茶菓・辨當を供給した。尙ほ鹿兒島市を經て大島郡・熊毛郡（種子島・屋久島）又は沖繩縣の各島に歸還する者には便船を待つ爲め市內十三箇所の旅館を指定し、一千六百八十九人を收容して、大阪商船の定期船大義丸・安平丸・中洋丸に依りて之を送り、補足として鹿兒島郵船の大球丸・正吉丸・沖繩丸・太洋商船の鶴嶺丸・白川丸の無賃取扱を協定した。尙ほ大阪商船は九月二十六日より避難者に限り、特定運賃の二割引扱ひを開始し、更に本縣の手當を受けたものにして自己の都合に依り、又は共の目的とせる人の所在不明なる爲め、更に鄕里又は親戚知己を賴り關東・京阪地方其他に復行する者には、所定の乘車賃及辨當賃を支給したが、其數は四十名であつた。其他職業の紹介等の便宜をも與へた。

第五　東京に於ける救護狀況

赤十字社本縣支部は、九月七日救護班を震災地に派遣し、十月十三日には交替班を派して、東京府下龜戶町第一小學校に於て救療を行つた。

本縣並宮崎縣の一部の者にして、關東方面に在住して罹災したる者の救護を目的として、東京市麹町區三年町公爵島津忠承邸內の三州俱樂部と共同に救護所を設け、罹災歸鄕者には金十圓以內、在留する罹災者には相當の金品を與へ、又は就職を斡旋する爲めに、本縣にては屢〻義捐金募集發起人會を開き、三千五百圓と一萬圓を兩回に支出せる外に、購入並寄贈の救恤品中經師十一樽・慰問袋八三箇・古衣類八十一箇を送付した。

第四十五章　沖繩縣

第一　救護事業

關東大震災の報傳るや、臨時・各郡區長・在鄕軍人會・青年會等と協力して物資の調達に努め、九日十四日臨時震災救護事務局へ宛てて大體左の物資を發送した。

澱粉　一、二五三袋　琉球疊表　八五四個　牛蒡　四九九個　冬瓜　八五四個　黑砂糖　三〇〇個

第二　義捐金品

縣費收出　二四、〇〇〇・〇〇圓　一般義捐金　一八、五六七・八一圓
其他　四、〇三四・二二　愛國婦人會取扱　慰問袋二百個、衣類八百四十六點　郡市長島司義捐金　四二、一三五・一五圓

第三　避難民救護

歸鄕罹災者は、一千八百八十名に達したが、之等に對しては、縣救濟會員が、那覇市・警察・婦人團體と協力して救療保護に努めた。歸鄕罹災者は殆んど出稼工女・學生などであつて、歸宅の便宜を與ふれば足りるものが多かつたが、中には、就職の爲來縣せる他縣人もあり、之等に對しては適等の方法を講じた。十四日迄に十箇所の宿舍に收容した人員は二百二十名、救療者二十四名、入院患者二名であつた。

第四十六章　朝鮮總督府

第一　救護施設の打合

本府に於ては、震災の飛報を得るや、直に事務官三名を急派して情報を蒐集し、之に依りて救護に關する協議を遂げ、慰問義捐金の募集、救護班の派遣、罹災朝鮮人の救護及慰問品輸送方法其他の事項を定め夫々活動に着手した。

第二　民心安定の通牒

交通通信の杜絶に依りて、災害狀況は明かならず、爲に無稽の流言蜚語行れて人心を惑はすものなきを保し難きを以て、本府に於ては已に帝都の秩序恢復して何等の憂慮なきに依りて、安んじて各自の業務に勵精するとともに罹災者の窮狀に同情し、同胞相愛の誠を致すべき趣旨の通牒を各道知事に發し、之を一般に周知せしめた。

第三　生活必需品の暴利取締

生活必需品の暴利取締に關する緊急勅令の施行に伴ひ、九月十九日府令第百八號を以て其適用を受くべき品目を指定し、違反者なき樣一般に周知せしめた。

第四　精白米の廉價提供

震災地に於ける食料品供給救援の爲め、白米一萬石を低廉なる價にて提供する計劃を立てて當業者に諮りたるに、何れも其の趣旨を贊し、仁川及群山より一萬石を輸送することとし、朝鮮郵船株式會社所屬汽船昌福丸に搭載して、九月八日群山出帆、同十六日芝浦に入港し、更に同十七日横濱へ回航して、横濱市の罹災者に配給した。

第五　通信事務應援

九月一日東京・大阪・下關地方へ遞信官吏十七名を急派し、通信連絡に關する應急措置及罹災地發着郵便・電報の通信事務を應援し、且つ罹災地に配送する電信機械類・自働電信機・音響電信機其他三百九十四個及同紙類電報賴信紙外二十二種百七十萬二千枚、郵便行嚢一萬七千個を配送して通信上の應援をなした。

第六　慰問品及避難民の無賃輸送

慰問品・救恤品に對しては滿鐵其他の鐵道會社及朝鮮郵船會社に交渉して、無賃又は割引輸送の事を協議し、尙ほ震災地其他の各府縣より歸鮮する朝鮮人に對しても、滿鐵其他の私設鐵道會社及朝鮮郵船會社は、一齊に無賃輸送を實施した。

第七　義捐金品の募集

義捐金の募集に就ては官公吏側・民間側・赤十字社及愛國婦人會側と分割し、互に聯絡を保つて募集に着手したが其結果は豫想以上の額に達した。

(一)　義捐金　各官公吏は月收額の百分の五以上醵出することとし、民間に於ては額の多少を區別せず、其醵出を慫慂したが、十月末日現在の醵出總額は金百三十八萬五千六百四十二圓であつた。

(二)　慰問品　朝鮮各地よりの慰問品にして總督府に於て取り纒めたるものは、汽船に依りて震災地へ輸送する事

に定め、之が蒐集・船積・輸送等に關する事務取扱の爲め、九月九日、釜山第一棧橋に震災慰問品取扱事務所を設置し、釜山府廳及總督府より職員を派遣して事務を開始したが、慰問品は豫期以上に達し、之が運搬・倉積及船積等は地元運送業者及修養團員・在鄕軍人有志の奉仕的勞務に依り、前後五回に亙り、爲に海上輸送の荷役作業は敏速に些の費用をも要せずして完了し、釜山取扱事務所にて收受したる慰問品の數量は八千三百六十六個に上つた。

第八　日本赤十字社愛國婦人會朝鮮本部の救護施設

(1)　日本赤十字社朝鮮本部

本部は震災傷病者救護應援の爲め、九月三日急遽救護班を編成して、總督府醫院成田醫官引率の下に、一行四名は、同四日午前京城發、同八日著京の上、赤十字社と打合せて、日暮里第五小學校內臨時救護所に配屬せられたが其後本部を衆議院內朝鮮總督府出張所內に移し、自動車巡回診療を開始し、一千二百名の患者を診療した。救護用衞生材料の蒐集に就て、本部は赤十字社篤志看護婦人會朝鮮本部と協力し、繃帶六千二百を直に調製し、有吉本部長以下役員總出にて繃帶卷を爲し、更に昇汞ガーゼ四百七十反、ガーゼ二百反を購入して救護事務局に寄贈し、李王妃殿下には、右繃帶卷の擧に對して作業場たる愛國婦人會朝鮮本部に女官を派遣せられたる外、特に傷病者の爲めに、御內殿に於て女官を指揮して、御手づから繃帶卷を遊ばされた。

(2)　愛國婦人會朝鮮本部

義捐金の募集に就ては、各道支部長に電照して全鮮會員三萬餘人より醵出あり、更に衣類の寄贈・蒐集の爲めには格安の反物を購入して會員に裁縫をなさしめ、且つ府內各官公私立女學校生徒に依賴して衣類の調製をなし、一面古着の蒐集整理を行ひ、第一回は百七十五梱、三萬二千九百五十六點、第二回は百三梱、三萬一千五百六十七點、第三回は二十四梱、二千八百四十三點、見積價格四萬二千八百六十四圓に達したる外、各支部又は委員部に取纏めて輸送したるもの、六百七十四箱、七萬三千九百五十六點あつた。

第九　歸還朝鮮人の救護

災害地及各府縣より歸來する朝鮮人救護の爲めに本府事務官二名・視學官一名及屬・囑託五名を順次釜山に派遣し、同地に救護事務所を設け、釜山官民及愛國婦人會と連絡を執り、避難歸來する者に慰問・診療・食糧の給與及船車の無賃輸送をなし、又旅費なき者に旅費を支給し、且つ一身上の措置に就き種々の指導を與へた。

避難民通過沿線の主要なる驛には關係官憲・愛國婦人會員等出場して、慰問施療・食糧の給與に從事した。釜山に於て九月六日以降十月二十日までに取扱ひたる震災地より歸來せる朝鮮人は、學生一千五百二十六名、勞働者四千二十九名、其他百九十一名、合計五千七百四十六名で、震災地外より送還せられたる者一千三百八十九名、合計七千百三十五名に達した。尙ほ九月一日以來十月三十一日迄に朝鮮人の還鮮したる者二萬八千四百四十三名で、內譯は左の如くである。

震災地より歸還者六、三三二
- 留學生　一、六〇二
- 勞働者　四、五一六
- 其他　二一七

震災地外より歸還者二二、一〇八
- 留學生　一七七
- 勞働者　二〇、九四二
- 其他　九八九

朝鮮人學生にして、震災地所在の中等學校及專門學校に在學するものにして、朝鮮內同種の學校に轉學希望者に對しては、便宜取計ふ事とし、十月末日轉學を許可したる者、中等學校二〇三名、專門學校一一七名、計三百二十名に及んだ。

第十一　總督府東京出張所の救護施設

學生の救護、學生の救護に就ては、東京出張所之れに當り、督學部燒殘建物三棟に九十名を收容し、尙ほ燒跡にバラックを建てて宿舍とし、其他食堂・炊事場・洗面場用バラックを建てた。學生に對する食料其他の副食物は初め本府に於て斡旋したが、九月六日より警視廳、九月十二日より區役所より配給を受け、九月二十日よりは文部省に一任する事とし、十月初旬より督學部、長白寮收容生に對しては、東京出張所より食料其他の救護品を配給することに變更し、十月末日を以て其の配給を打切る事とした。尙ほ同所にて救護したる罹災學生は九月六日より十月末日迄、督學部に於て延人員四千六百十五人、長白寮に於て二千五百八十四人、計七千百九十九人にして、一日平均百二十八人に達した。

勞働者の救護、九月中旬に於て習志野收容者三千二百人は、陸軍當局に於て救護し、目黑收容者六百十七人は警視廳に於て救護し、此の外各警察署に於て救護せる者九百人、相愛會に收容せる者三百人、督學部に百二十人（學生）長白寮に六十人（學生）其他の建物に二三十人乃至六十人を收容し、區役所及篤志家に於て給養し、間接に警察署に於て保護せる者六百人內外、合計五千八百餘人である。

日本橋區蠣殼町、日鮮企業株式會社は本府援助の下に其の建物に勞働者百五十人を收容して、警視廳より食料配給（後日東京市より給與を受く）を受け、九月十一日より社會奉仕的勞働に從事し、漸次增加して約三百人に達し更に九月十九日より各警察署及近郊に散在せる者約千人を收容して、本府より食料器具を配給し、夫々勞働に從事せしめた。九月十九日東京市より青山の明治神宮外苑バラック九棟を借受け、陸軍及各警察署にて保護中の者及警察署にて間接に救護しつつあつた市內各所に散在せる勞働者一千人を收容する事となし、且つ、勞働可能者は日本橋救護所に、老幼婦女病者、歸鮮希望者は青山救護所に收容した。習志野收容所に保護中の勞働者は青山救護所の整理に伴ひ、十月四日には一千二十人を引受け、十月二十四日迄に全部の引受を終了した。右救護人員は青山救護所（自九月二十一日至十月三十一日）にて人員三千九百二十三人、延人員一萬五千八十八人、日本橋救護所にて千四百七十二人、延人員二萬五千七百五十九人であつた。猶青山救護所にて收容したもので、殘留希望者は日本橋へ移し、歸鮮希望者は送還し、確實なる引取人ある者は引取らしめたが、十月三十一日迄に引受に依る退去者は九百三十九人、送還者二千百五十六人、無斷逃走者其他百八十六人、日本橋へ移送したる者六百四十一人であつた。日本橋救護所に收容したる者の中引受られた、退去者は五百四十人、無斷逃走者其他は百八十二人、青山へ移したる者百九十六人、歸還者二千百五十六人である。

督學部及長白寮に對しては、十月末日を以て救護を打切つたが、青山救護所に收容せるものは十月下旬現在百七十四人にして、大部分引受人及歸鮮者ありたる爲め、十月末日閉鎖し、日本橋は十月下旬で打切り、殘留勞働者は之を相愛會に於て引受けて職に就かしめ、又彼等の爲に宿泊所建設等の方針を立てた。

歸還に就ては、朝鮮內の治安關係上、九月二十八日より開始し、輸送方法は船便及び陸路に依る事とし、各收容

所に在る者は集團的に船舶輸送をなし、散在者は陸路に依ることとし、共送還者は若年者・老幼・婦女・夫婦子供ある者、旅行に堪ふる疾病者歸還希望者にして特殊の事由なき者に限ることとし、鐵道省及滿鐵・朝鮮郵船會社と交渉の上汽車汽船何れも無賃輸送をなした。其輸送數は九月二十八日より十月三十一日迄に四千四百二人、其の內學生七百八十人、勞働者三千六百二十二人、特別の便船に依りたる者は、一千二百三十六人、鐵道に依りたる者は三千百六十六人、東京府救護所に收容したる者にして歸還したる者二千四百三十六人、散在者一千九百六十六人である。歸還朝鮮人を搭乘せしめたる船舶は光濟丸・櫻島丸・羅南丸・昌德丸の四隻である。

醫療、日本赤十字社朝鮮本部より派遣せられたる救護應援隊は罹災朝鮮人の傷病に對する施療に從事したが、重傷者十二人は赤十字病院に無料入院せしめ、輕傷者たる習志野收容所に在つた者は陸軍に委託し、目黑及各警察署に收容中の者並靑山・日本橋兩救護所に收容せる者は巡回診療を行ひ、十月十日靑山救護所に天幕病院を假設して三十人を收容すると共に醫員三名、看護婦六名を增派して診療に從事せしめた。九月十日以來十月二十六日迄の診療延人員は二千三百六十五人に達し、天幕病院は十月二十六日限り閉鎖して、病者十二人は滿鐵臨時病院へ委託入院せしめた。

安否通報、朝鮮在住者の家族又は近親者に對して、罹災者の安否通報を爲すべく、新聞廣告をなし、罹災者の需に依りて、朝鮮內に通知すると共に朝鮮內居住者の依賴に應じて安否調査を行ひたるが、其の取扱件數は十月末日迄に八千七百三十四件であつた。

罹災朝鮮人に對する同情、特に罹災朝鮮人に對し、金品を寄贈したるものは、東洋拓殖株式會社の金二萬圓、金三千圓（米代）、朝鮮銀行、殖產銀行の各一萬四千圓、兼二浦三菱製作所の金七千圓、三重縣諸戶清六の金三千圓、福岡縣旭硝子株式會社の金二千四百圓と物品、韓城銀行東京支店の金一千圓を初め、第一師團・海軍省・に東京市其他個人より團體よりの寄贈物品は多數に上つた。

第四十七章　臺灣總督府

第一　報道接手

關東大震災の報道は、鳳山なる海軍無線電信に依つて、比較的早く二日の午前に到達し、其の刻々に達する報道に依つて、未曾有の大慘禍たることを知つたので、痛く全島の官民を驚愕せしめ、深甚の奉公心と同情心とを喚起せしめた。其の一たび義捐金募集に着手するや、全島を擧げて之に應じ、內地人は云ふに及ばず、本島人も共に其の赤誠を表はした就中香港在住の本島籍民郭春秧が立所に金三十萬圓を醵出したるが如きは、其の最たるものである。震災の際、田總督は上京不在中で、賀來總務長官より全島の官民を代表して、取敢へず天機奉伺及御機嫌伺の電報を發したが、島民中有志數名も天機奉伺及御機嫌伺の爲め、上京方を申出でたので、之に關して其筋の內意を電照した處、目下混亂の際に付成るべく、上京は見合はせよとのことで、仍つて臺北の林熊徵、臺中の辜顯榮及臺南の許廷光の三名は、各個人の資格に於て、夫々奉伺の書面を差出だすと共に、罹災諸縣の知事へも慰問狀を發した。

第二　物資の調達輸送

未曾有の大災禍に對しては、第一に物資の救援を爲すの必要を認め、該事務の進捗を圖る爲め、東京地方災害救助事務部を設け、其の規程を定めて、部長以下の係員を任命した。部長は賀來總務長官、幹事は岡本事務官外十名、庶務係長は藪參事官、情報係長は下村參事官、義捐係長は佐藤事務官で、係員は書記の名義を以て府屬數十名を之に充てた。

救援の方法に就ては、官民中の重なる者を府廳に召集して、協議した結果、取敢へず全島の官民より義捐金五十萬圓を九月三十日までに募集することとし、總務長官之が發企人總代となり、直に之に着手し、臺灣日日新聞社臺灣新聞社及臺南新報社も此擧に極力應援することとなつた。其の後被害大なるに鑑み、更に議を進めて義捐金募集額を倍額一百萬圓となし、期限を十月十五日に延伸した。

罹災者に對する直接應急救助としては、地還隔なる爲め、取敢へず三井物産會社に依頼し、同社神戸支店より金二十萬圓の繰替支出を得て、十八萬三千四百餘圓の食糧品を神戸に於て購入し、一面大阪商船會社へも交渉して銀山丸を傭船し、三井支店員三名、當府員の代理として之に便乘し、九月八日神戸出帆、横濱に廻送した。購入品は左の如くである。

白米七千五百袋、食鹽五百叭、ミルク五百箱、醬油二百樽、ヒスゴ二百二十五俵、砂糖五十袋、鹽鮭及鹽鯖二百二十五箱、梅干二百十八樽、千切大根四十俵、干海老二十九箱、澤庵六百十二箱、昆布五十三俵、漬物三百四十五樽、開鰹四十九俵

以上の食糧品は東京七、横濱二、横須賀一の割合を以て陸揚の豫定であつたが、實地に就て見ると、横濱も東京も非常な船込みで、容易に陸揚が出來ないのみならず、物資も相當に手廻るべき樣子なので、寧ろ横須賀に先航するの議を決し、乃ち十日横須賀に到着、野間口鎭守府司令長官を訪問した處、長官の言には、各方面よりの救護は東濱方面にのみ集中し、横須賀始め三浦半島方面に着目せられず、海軍所藏の食糧を全部提供するも、此後二日を支へ得るや否やを氣遣はるる次第なれば、此際何卒積込品全部を玆に陸揚して、此方面の罹災民二十二萬人の不安を除かんたるとの懇請であつた。併し乍ら當初の豫定もあるので、全部の陸揚といふことには直に應じ難く、兎も角も米半額と其他の食糧品若干の陸揚を爲し、十二日更に横濱に、十三日芝浦に廻航した處、先着の船艦が、既に三十隻もあり、陸揚は益々困難なので、各方面と懇議の末、遂に全部を横須賀に陸揚することとなり、十五日芝浦を出帆、風浪を冒して十六日更に横須賀に入港、十八日より海軍側の手にて荷役を開始し、二十二日を以て全部の引渡を爲した。實際野間口長官の言の如く、若し本府の救援船到らざりせば、三浦半島二十二萬の罹災民は必ずや飢渇に瀕する次第であつたので、當初の豫定と齟齬したことは聊か遺憾ではあるが、而も臨機の措置を惹らなかつたことに於て、必ずしも遺憾とは謂ひ得ないと信ずるのである。

右の外、必要に應じて臺灣米約十三萬石を輸送するの計畫を樹てたのであつたが、救護事務局より、近縣にて調達の見込立ちたるに付輸送を見合はせよとの電信があつたので、其儘中止した次第であつた。

建築材料の輸送に關しては、種々の手筈を定め、府吏員をも上京せしめて調査を爲さしめ、一面嘉義製材工場に命じて、其の全能率を發揮せしめた結果、十月十九日、汽船多顏丸に一萬三千五百三十二石の木材を積載して、高

雄港を解纜せしめ、斯くして以て廉價に罹災民に供給し得るの途を採つた。

第三　義捐金品

義捐金の募集に關しては、其の要項前述の如くであるが、其他府關係の官吏々員よりも、釀出額の標準を定めて義捐せしめ、一面各新聞社の應援を得て、民間各方面に宣傳した結果、同情翕然として高まり、十月二十日迄の申込額百四十三萬二千四百十六圓餘を計上し、當初の豫定額五十萬圓の約三倍に達するに好成績を擧げた。而して義捐金の處分に關しては、救護事務局の意見に從ひ、全部現金にて同局に引渡し、其の處分は一切同局に一任することとした。

本島は遠地である爲め、特に寄贈品の取扱は爲さなかつたけれども、而も尙自發的に寄贈せんとする者も尠からぬので、市・街・庄・廳に於て取纏めの上、鐵路無賃にて基隆港務所に送付せしめ、衣類は全部同所にて消毒の上、便船毎に神戸まで輸送し、兵庫縣知事の手を經て救護事務局に引渡した。斯くして十月二十日迄に發送した、義捐品は、古衣類五百九梱、其他二萬六千三百五十點、新物四十梱、四千十三點、外に清凉劑一萬五千包であつた。

第四　避來民の處置

震災地方より本島に歸還する罹災者の取扱方に關しては、各汽船會社一齊に無賃乘船の手續を執つた。本府は尙郵船・商船の兩支店及關係各官衙と交涉して、可及的便宜の方法を講ずることとし、府の鐵道部に於ても、無賃輸送を爲すこととした。斯くて歸還した罹災者は、十三日笠戸丸での十三人を初めとし、十月二十日までに五百十三人で內、內地人二百五十六人、本島人二百五十七人を算した。便船到着毎に府吏を基隆港に派遣し、基隆郡役所と協力して適當の措置を爲した。

右以外に、罹災地方の失職者で本島に職を求むる爲め來島し、臺北に滯在した內地人は二百二十人あつたので、事情に依り無料宿泊所に收容し、市の職業紹介所をして就職口を周旋せしめたが、財界不振の爲めに成績思はしからず、十月二十日までに就職せしめた者は僅に十四人で、同日までに內地に歸還した者が百七十人、殘留者三十餘人となつた。歸還した者の大部分に對しては管內の鐵道賃を無賃とし、事情に依りては汽船賃及小遣錢を給し、汽船會社は船賃を半減とし、後二割引となした。歸還留學生に對しても便宜の取扱を爲し、學力調査の上、相當學年に編入し、其の數は二十六人、外に聽講生三十六人を算した。

第五　罹災本島民の調査

本島在住者で、震災當時罹災地に現住したる者に對しては、當府東京出張所に於て極力其の救助に努力したのであるが、當時尙安否不明の者が多數あるべきを氣遣ひ、殊には島內在住家族の憂慮をも察し、當府に於ても之が調査に着手することとなり、十二日其旨を各州知事及廳長に通達して、各管下よりの申込を取纏め、安否不明者名簿を作製して之を本府東京出張所に送付し、極力搜査の上、判明の都度電報で通告することとした。斯くて全島より十月二十日までに搜査判明したもの九百五十三人で、其內、十月二十日までに搜査判明の旨屆出でたもの四百二十七人、合計千三百八十人を算した。

第四十八章　樺太廳

東京地方に於ける大震災の報は樺太廳では、無線電信に依つて比較的早く二日に達した。之に於て長官は廳内幹部を一堂に會し、此際島民に對し出來得る限り、義捐金の醵出を勸誘すべきことを諮り、一面、食糧品輸送の事を配置し、取敢へず本島産の鹽鱒三萬七千六十尾（此代價輸送費と共に五千二百八十四圓餘）を募集し、高橋事務官をして携帶せしめ、九月十三日大泊出帆の平和丸に搭載して芝浦に廻送した。

管内住民の醵出した、義捐金は十月二十日に八萬三千五百餘圓に達し、前記鹽鱒代金を控除して送付した。共他の義捐品として廳で、取扱つたものは醬油五樽、繃衿八十九點、官製葉書千三百五十七枚であつた。邊隊の島地とて義捐品の集まりの良くないことは已むを得ない。

罹災地の警察力を援助する爲め、五日警察官五名を急派し、二十四日歸廳した。

避難民は九月五日本島着の連絡船にて初めて到り、十月八日入港の明石丸が最終で、其の間に二百六十一名を算した。廳では大泊町の移民休泊所の一部に臨時救護所を開設し、一時之を收容して食事を給し、又身廻品をも給與し、旅行する者は無賃で輸送し、就職希望者に對しては係員をして夫々職業の紹介を爲さしめた。

永井長官及酒井内務部長は親しく宿泊所を見舞うて慰問し、將來の奮起を促し、其他隨時に吏員を出張せしめて慰問を爲した。

以上の外、赤十字社樺太委員部及愛國婦人會支部及本島住民の團體或は個人等よりも、直接金品の寄贈を爲したやうである。

第四十九章　關東廳

母國關東地方に起つた、變災の報に接したのは二日の午後で、其後頻々として到達する各地よりの電報で災害の大なるを知り、應援の急なるを認めた。斯くて翌三日早朝、廳内各主務官を會合して應急救助の方法を議した。其の要旨は左の如くである。

（一）日支人に亙つて廣く義捐金品の募集を爲すこと。

（二）救護班を派遣すること。

（三）生活必要品輸送の必要あらんも、災害の程度狀況等判明せざるを以て、此後電報に接し次第、何時にても輸送し得る樣、急速に物資の調査を遂げ置くこと。尙今後の情報に依り臨時必要の方途を講ずること。

（一）に就ては關係各方面と提携するの要があるので、四日小川地方課長を大連民政署に派遣し、同署・滿鐵・旅順・大連の兩市役所、商業會議所、華商公議會及六新聞社（滿日・遼東・大連・泰東・關東・滿洲）幹部の會合を求めて募集方法を協議し、六新聞社に於て募集の宣傳を爲し、應募の金品は其處分を關東廳に一任することに定め、直に實行に着手し、（二）に就ては滿鐵及赤十字社滿洲委員部より、各救護班一團宛を派遣することとし、滿鐵では尾見醫學

博士以下五十二名にて一團を組織し、四日出發、赤十字では鈴木醫師以下十四名の一團を組織し、六日出發せしめた。(三)に就ては直に調査に着手し、日ならずして完全なる資料を得た。斯くて救援事務は漸次に繁忙となりしに依り、小川地方課長を首班とし、北崎理事官以下八名の吏員に臨時救援事務係を命じ、着々進捗せしめた。

義捐金の募集に就ては、尙滿洲各地に駐在する總領事・領事と相提携するの必要があるので、其の旨を電報で依頼した。

右の如くにして、母國大震災義捐金品募集の檄が、一たび六新聞の上に現はるるや、各地在住の邦人は相競うて義捐を爲し、其の意氣や熾盛で、應募申込は日と共に增加した。依つて直に滿鐵として、此等救恤品に限り本年中無賃で輸送せしめることとし、各地に集まつた、救恤品は所在の各驛より直に大連なる滿鐵埠頭に輸送せしめ、埠頭事務所に於て便宜取纏めを爲し、隨時當廳に報告せしめた。共の際古着類は消毒を行ひ、萬一の事なきを期した。

罹災の狀況に關して次第に詳報を得たので、物資購入の必要を感じたる折柄、會〻滿鐵會社に於て、同社豫備金中より救援費百萬圓を支出するの議を決し、該金の使用方に關して當廳に申出があつたので、取敢へず此金で以て生活必需品を購入し、特に汽船を傭入れて輸送することに決定し、即ち震災救護事務局の指揮を受けたる上、製品の選定を爲し、滿鐵をして之が購入に當らしめ、第一回船として長順丸(二千二百四十五噸)に各種の食糧竝に生活必需品價格二十七萬五千圓の物を積込み、小川警視等附添うて七日大連に急航せしめた。續いて十日第二回船として泰陽丸(二千六百五十七噸)を、十三日第三回船として西京丸(二千八百四十九噸)を派遣し、更に第四回船として滿洲丸を派遣するの準備中なりし處、救護事務局より、既に物資は多量に集積した故、輸送は見合はせにせられ度旨の電報に接したので、準備中の物資は便宜賣却或は解約の方法で處分した。其後に於ける義捐品は主として日本郵船及商船の定期船で、一先づ神戸迄送り、更に滿鐵の大阪出張所をして罹災地方面行の便船に積換へしめることとした。

是より先き、關東州及南滿洲より輸出する救護品に對し、支那海關稅免除の取扱を得ん爲め、駐支公使を通じて支那政府に交涉した結果、食糧品・古着類及藥品に限り、領事又は大連民政署長の證明あるものは特に免除の取扱を受けることとなつた。

大震災の報が一たび傳はるや、關東州は勿論、滿鐵沿線各地の支那人間に於ても多大の同情を惹起し、義捐に應ずる者が多く、特に東三省保安總司令張作霖氏は、特に同情の意を表し、救護に關し應分の援助をし度旨を申出あり、同時に麥粉二萬袋、生牛百頭の寄贈あり。又東三省全般の義捐金としてメキシコ銀五十萬弗を出金し、白米・麥粉其他生活用物資を購入して寄贈された。

一般有志よりの義捐金品の最も多く集まつたのは九月十日前後で、大連滿鐵埠頭の倉庫は物資で充滿するの有樣で、加之滿鐵よりの申出に係る、百萬圓の物資購入輸送は一層事務の繁忙を來さしめたので、大連民政署に設けた臨時救護事務所では、當廳より派遣の小川事務官以下の職員は、連日連夜衣帶を解くの暇もなかつた次第である。

震災地に於ける陸上交通機關が、全滅したといふ報を得たので、自動車十臺(內六臺は寄贈品)にガソリン等を滿載し、運轉手七名を附添はして第三回の輸送船西京丸で輸送し、罹災民へ配給を手傳はしめた。

曩に派遣した救護班二團は九月十一日、十二日相前後して到着し、滿鐵救護班は橫濱社會館跡に假病院を開き、赤十字救護班は東京日比谷公園內に救護所を開設し、班員一同日夜精勵して救療に從事した。後、滿鐵救護班は明治神宮外苑に移り、二班とも永く滯京して引續き其の任務に盡した。

一般有志の義捐金應募額は十一月五日の計算で、八十四萬四千餘圓に達した。滿鐵より寄附の百萬圓は此以外である。

義捐物品は張作霖氏よりの價格五十萬弗のものを首とし、關東州は勿論、滿鐵沿線各地、遠きは哈爾賓に至るまでの日支人が寄贈し、其の數額は莫大に達した。

第五篇　各種團體の救援狀況

第一章　恩賜財團濟生會

第一　活動の開始

芝區赤羽町の濟生會本部・病院・麹町分院は大破損を蒙り、更に常置六診療所の內、深川・本所・淺草・下谷の四箇所は類燒の厄に遭つた。恰も本部病院の入院患者は百二十四名であつたが、構內東方の安全地に避難させ、尋で專賣局・赤羽分院・日本電氣株式會社・村井銀行支店等、附近の建物が悉く崩壞して二百十名の負傷者を出したので、之を病院に收容し、一方各所より避難し來る罹災者に對しては應急の手當を施し、七日までに四百七十二人を救療した。然るに全燒したる慈惠會病院・鐵道病院・東京病院等の患者は、多數同所に避難し來つた爲めに、一時收容の上それ〳〵手當を加へ、尙ほ一千餘名の避難民を構內に一週間收容した。麹町分院は丁度外來患者の診察・投藥等がまだ終らない時刻であつた爲め大混雜を呈したが、職員は各病室に馳付け、七十三名の收容患者を正門外の堤防上に移し、幸に延燒を免れたので、病床を增設して患者の收容力を擴張した。

燒失を免れた小石川・四谷の二診療所では外來患者の診察に努め、小石川診療所は震災當日より職員出動して、植物園・德川岩崎兩邸內・護國寺・各小學校・小石川メソヂスト教會等に在る三百四十三名の避難傷病者を救療し、尙ほ

臨時診療班を編成し、芝區古川橋に派遣して罹災患者百九十三名を診療し、又濟生會の事業を委囑せる兵庫縣・大阪府より應援の爲めに上京せる診療班は、淺草公園及市外吾嬬町に出動して臨時診療に從事した。

常置診療班は從來八班に分れて常時市内各區を巡回救療してゐたが、震災後は其内四班を殘存地區に配置し、他の四班は東京府に派遣して隣接町村に於ける救療事業を應援せしめた。

震災當日より同月末日迄に病院・分院・診療所・診療班に於て救療せる患者は八千九百九十五人、此の外、事務を委嘱せる東京府廳前に臨時診療所を設けて罹災傷病者の救療に努め、九月中に六千六百十三人と、府下に於て只一つ倒壞を免れた南千住町の診療所が二千九百六十五人、合計九千五百七十八人の患者を救療することが出來た。

神田駿河臺袋町の元濟田病院の燒跡には、新に駿河臺産院を設けて十月十五日より事業を開始し、更に娙婦調査を行ふ爲めに十組の巡回班を編成して、市内各區の燒跡に出動せしめ、七百三十一人の娙婦を調査した。

十月十八日、會長德川公爵は本院の狀況を視察し、同月二十二日には二條理事長・宮島・高木兩參事と視察の上、小畑院長以下職員一同に、

本會は明治天皇陛下の御聖旨に基いて成立したる特殊の團體なるが故に、宜しく　聖旨を奉戴し、患者に對し懇切叮嚀に職務に盡すべし。

との訓示を與へ、宮島參事よりは、

職員は上下和協相一致して事業の遂行に當るべく、浪費を愼み節約を主として、特に患者に對し不滿等の念を起さしめざるやう。

との注意を與へた。

産院の收容豫定數は百五十人で、開始以來二十日に至る五日間の外來患者數は百九十五人で、入院者は三十一人、退院者は二人であつた。

第二　救療事業の擴張

傷病者及其他患者に對する救療の普及と一般秩序の回復とに伴ひ、警視廳其他の各診療機關が漸次撤回さるべきを察し、九月十三日特に役員會を開いて臨時費五百萬圓支出を決議し、從來の設備を完成すると共に必要なる個所に救療の機關を增設し、徹底を計る爲めに臨時救濟部を設けるに至つた。

第三　橫濱に於ける救療概況

橫濱市岡野町に橫濱病院を設け、十月一日以來事業を開始した。同所は神奈川縣に於て濟生會委託事業の一部として、大正九年十月一日以降創設せる診療所であつたが、震災後之を擴張して直營の病院組織に改めたのである。

此診療所は震災當時直ちに罹災者數百人を收容し、同時に來援せる神戸市・大阪第四師團・衞戍病院、日本赤十字社神奈川縣・奈良縣兩支部合同及神奈川縣救護班の援助により、又同病院に於て之等を引繼ぐことになつた。

橫濱市内診療班は十月十七日南太田町、十八日橫濱驛前、十九日本牧北方町等に於て天幕を使用して診療を開始し、各班共醫員一名、看護婦二名、每日出張午前八時より午後四時迄診療を行つたが、開始以來三日間の患者數は

二百十八人であつた。

第四　御慰問及御下賜

畏くも皇后陛下には病院收容の罹災傷病者御慰問の爲め、十月二日午前十時三十分大森皇后宮大夫其他の供奉員を隨へさせられ、赤羽臨時病院に行啓あらせられ、總裁載仁親王殿下を初め德川會長・蜂須賀副會長・二條理事長・其他の奉迎を受けさせられ、大谷病院長の御先導にて各病室を御巡閲ありて優渥なる御慰問を賜はりたる後、同十一時四十分還啓あらせられた。

總裁載仁親王殿下には九月十八日午前十時同會に台臨の上、病院及分院に於ける實況を御巡閲あり、久邇宮邦彥王妃殿下には、皇族方御一同の總代として、九月二十七日午前十時台臨の上、患者に御菓子を御下賜あり、山階宮大妃殿下並武彥王殿下には、十月四日午前十時、同分院に台臨あらせられた。

各宮殿下よりは同會の各病院に收容中の罹災患者に對し、左記の通り御下賜相成つたので、本會は拜受して、夫夫患者に拜戴せしめた。

一、男物袷衣　五拾四枚　一、女物袷衣　貳拾九枚　計八拾參枚

（右は十月一日及五日の兩度麹町分院へ御下賜）

一、男物袷衣　貳拾參枚　一、女物袷衣　貳拾貳枚　一、子供袷衣參枚　計四拾八枚

（右は十月十三日橫濱病院へ御下賜）

一、男物袷衣　七拾六枚　一、女物袷衣　六拾貳枚　一、四ツ身男袷衣　貳拾枚　一、同　女袷衣　拾七枚

一、一ツ身袷衣　貳枚　計　百七拾七枚

（右は十月十八日赤羽病院へ御下賜）

東伏見宮妃殿下、東久邇宮妃殿下、竹田宮妃殿下には十月二十二日橫濱市內震災狀況御視察の際、午後二時四十分岡野町の橫濱病院へ臺臨あらせられ、患者に御菓子を下賜せられた。

皇后陛下には、更に十一月五日橫濱市岡野町なる臨時橫濱病院へ　行啓仰出され、神奈川縣救療病院を御巡閲後、午前十時四十分着御あり、同院の各病室を御巡閲遊ばされて、特に負傷者には御慰めの優渥なる御言葉を賜はり、同十一時五分還啓あらせられた。

猶十一月十九日午後一時二十分には臨時麹町病院に、同日午後三時四十分には、臨時駿河臺產院へ行啓あらせられ、親しく御言葉を賜ひ、午後四時三十分還啓あらせられた。

皇后陛下には入院患者に對し　畏くも大御心を漉がせられて、十二月二十二日防寒の衣類を左記の如く同會に御下賜あらせられた。

臨時赤羽病院		四八九枚
同　麹町病院		一三六枚
同　下谷病院		七五枚
同　芝　病　院		二一七枚
同　駿河臺產院		二二六枚
同　橫濱病院		八〇枚
同　東神奈川病院		一〇九枚
姙產婦保護所		四〇枚
豫　備		一四〇枚
合　計		一、五一一枚

本會の各病院に入院中の患者に對して、東京市社會局より十二月二十九日のし餅百五十枚を寄贈されたので、直ちに各病院に配送して患者一同に配給した。

佛國新聞協會より臨時震災救護事務局に送られし天幕病院は、同會が經營上の援助をなす事となりて、芝區三田綱町有馬ヶ原に建設して一月中旬より開院した。

十一月五日臨時評議員會を午後四時より華族會館に開會したる際、總裁載仁親王殿下には台臨ありて左の令旨を賜はつた。

令旨

本日臨時評議員會ニ臨ミ玆ニ諸氏ト相見ルヲ欣フ。

今次關東ノ大震火災ハ未曾有ノ大慘事ニシテ罹災傷病者ノ救療ヲ要スルコト極メテ緊切ナリ、此時ニ當リ本會機宜ヲ失セス應急ノ施設ヲ爲シ、施藥施療ニ遺憾ナカラシメ、日夜盡瘁大ニ機能ヲ發揮シタルハ洵ニ嘉スヘシ。諸氏更ニ一層奮勵シテ事業ノ遂行ヲ期シ、以テ本會ノ目的ヲ達成センコトヲ望ム。

第五　診療班の變更及增設

事業遂行を容易ならしめ且つ運用を圓滑ならしむる爲め、臨時震災救護事務局・社會局・警視廳其他の關係官公署・日本赤十字社の諸救療機關と連絡を保ち、更に同會の統一を計る爲め毎日幹部打合會を開いて協議し、計劃を進捗しつつある中に、各方面共バラックの建設漸次增加するに從つて罹災者の移動集散と健康狀態とを精査し、東京市內は勿論、橫濱・橫須賀・小田原・千葉の方面に理事長以下幹部出動して其の實狀を踏査し、更に警視廳に於て出動せしめた一百の診療班は同廳と打合せの上、之を繼承して同會の直營となし、在來よりの巡回診療班の巡回區域を變更し、新に詰所を設けて診療の便利を計つた。

尙ほ下谷區龍泉寺町の下谷病院は十二月三日より、市外三河島產院は十二月二十日より、四谷區東信濃町の信濃町病院は十二月二十五日より開始し、芝區赤羽町本院裏空地には乳兒院を設置し、更に妊產婦保護所を市外寺島町外四ヶ所に增設し、神奈川縣浦賀診療所を開設したが、新に配給部を置き貨物自動車を備へて材料の配給に努めた。

囊に協調會にて設置したる芝公園及橫濱市神奈川町の二病院は十二月一日以降之を同會にて繼承し、小田原町には臨時診療班を同町第一小學校運動場內に設け、臨時橫濱病院より醫院を派遣して、十一月七日より開始した。

千葉縣下の實地踏査の結果、安房郡那古船形町に診療所を設置し、十一月五日より同郡富崎村布良の診療所は同十四日に救療を開始し、橫濱本牧小港診療班は十一月十二月三十一日調に據ると同會の臨時診療機關は、赤羽病院・麴町病院・橫濱病院・下谷病院・信濃町病院・芝病院(協調會と聯合)・駿河臺產院・三河島產院・東神奈川・小田原兩病院・日暮里・寺島・大島・龜戶の各妊產婦保護所・深川・本所・淺草・下谷・小石川・四谷・浦賀・那古船形・富崎の各診療所、第一より第五十班までの診療班と巡回診療班、橫濱病院附屬南太田町・橫濱驛前・千代崎・磯子・藤棚各診療班・小田原診療班等である。

尙ほ芝區赤羽町の同會病院は臨時赤羽病院と稱し、麴町區富士見町の麴町分院も臨時麴町病院と改稱した。

東京府に委囑せる東京市內を除く府下の救療事業は、南千住及東京府廳門前の二箇所であつたが、九月二十七日以來十月九日迄に他の十二診療所を再興開始し、十月二十七日に至りて府下大島町に一箇所を增設し、十五箇所を算した。之を列記すると品川・大井・大崎・千駄ヶ谷・淀橋・高田・西巢鴨・日暮里・三河島・南千住・寺島・龜戶・大島・府廳門前の各診療所である。

第六　患者の慰安

罹災傷病者其他の患者に對して診療醫治を加ふると共に一面精神的に慰安鼓舞せしめることに勉め、十月二十七日及二十八日の兩日、臨時赤羽病院に於て活動寫眞を映寫し、十月七日には　皇后陛下臨時横濱病院に行啓の節拜寫せる活動寫眞を映寫して患者に拜觀せしめ、十一月九日には音樂會を開き、官內省雅樂部員の奏樂ありて患者を慰めた。

第七　診療成績

各診療機關職員は日夜勵精して救療し、殊に本部及診療機關相互の間に於ける連絡統一を計る爲めに每月數回定期又は臨時に各診療機關の首長及事務長等集合して打合せをなした。

臨時赤羽病院の罹災患者救療數は九月一日より十二月三十一日迄の累計、外來者五千三百四十三人、收容者七百二十八人、麹町病院は外來者一千三百四十七人、收容者二百六十六人で、横濱病院に開設以來十一月十五日迄に一萬四千二百六十六人、芝病院は十二月十五日迄に收容者三百十八人、外來者二千七百六人、下谷病院は收容者十九人、外來者八百四十四人、信濃町病院は十二月三十一日迄に外來者六百九十八人、駿河臺產院は十一月十五日迄に外來者一千三百六十三人、收容者二百四十六人で、東京府委托は九月一日より十一月三十日迄に八萬九千一人である。

千葉縣下の分は開設以來臨時那古船形診療所六千八百十四人、富崎町診療所三千四百十四人（自十一月十四日至十二月十五日）である。

第八　神奈川縣下の救療狀況

横濱以西横須賀市・浦賀町方面より鎌倉・藤澤・厚木・平塚・茅ヶ崎・大磯・小田原の各町各所に於ける縣下の死傷者は無慮九萬人に達したので、各公共團體を初め、本會は赤十字社と縣當局と協定の上、病院・診療班等四十餘所を設置し、約五十萬內外の罹災傷病者を救療したが、震災當時は東京方面より救護準備を整へて來援し來る事を期待してあつたのに、數日を經て東京市全滅の悲況ありし故に、神奈川縣下の救療は一般に後れたものの如く、震災後の死亡者は著しく增加して横濱市のみにても左表の如き數を示したのである。

横濱市の調査

九月	震災に因る死亡者	三、六三〇人	
	普通死亡者	七〇二	
	小計	四、三三三	
十月	震災に因る死亡者	三、七四三	
	普通死亡者	一、一四三	
	小計	四、八八五	
十一月	震災に因る死亡者	一、五二二人	
	普通死亡者	九四九	
	小計	二、四七一	
	通計　震災に因る死亡者	八、八九四	
	普通死亡者	二、七九七	
	合計	一一、六八八	

第九　宣傳用看板

本會の病院・診療所の所在、事業を一般に知らしむる爲めに情報部に於ては宣傳ビラを調製して、東京市內は勿論、遠く横濱・小田原方面より千葉縣下の診療所々在地に亘り交通頻繁の場所に約一萬枚を貼付し、更に赤色又は青色の宣傳ビラを印刷して救療所々在地附近の各戶に配布し、尙ほ新に所在地明記の看板を各所に建てた。

第二章　日本赤十字社

第一　救護活動

日本赤十字社は震災と同時に本部建物構內を避難者の爲に開放し、天幕を張つて救護所を設け、職員及看護婦二名を出張せしめて徹宵傷病者の救護の從事中であつたが、二日午前、倉庫の一部を除く外、全部燒失したので、直ちに市外下澁谷の本社病院內に假事所を置いて病院と東京支部とを督勵し、各支部より派遣の救護班を增援せしめ、罹災傷病者の救護に從事しつつあつたが、事務の擴大するに及んで、本社自ら統一するの必要を認め、九月十日新に臨時震災救護部を設け、事務所を丸の內帝國農會に移し又支部を橫濱に設けて、東京・神奈川各方面の救護事務に當つた。

第二　東京方面の罹災者救療

東京支部は震災後、直ちに宮城外苑に天幕を設けて救護所を開設し、更に東京府廳前にも救護所を設けて罹災傷病者の救護に從事し、九月二日午前千葉支部救護班の出動を初めとして、群馬・栃木・福島・長野各支部派遣の救護班相次で到着し、臺灣・沖繩及他罹災地所管の支部を除く外、朝鮮・滿洲に至る各支部よりも續々と到着したので、之を東京支部に配屬し、市內各方面に三十箇所の救護所を設けて活動したが、臨時震災救護部の設置に伴ひ之を其の直轄に移轉した。

此等の救護所と相俟ちて事務の徹底を期する爲めに巡回救護班四ケ班を組織し、內一班は主として朝鮮人傷病者の救護に從事し、十月十日朝鮮總督府が市內各地に散在する鮮人を一箇所に集合せしめし爲めに不必要となり、三ケ班にて巡回救護に努めた。

右の事務開始以來十月十七日迄に取扱ひたる患者數は十九萬六千五百八十二名である。病院に配屬せる救護班は陸軍設置の市ケ谷・寺崎各臨時病院に各二班、陸軍軍醫學校臨時病院に一班、本社病院及產院に三班、東京第一衞戍病院に二班であつたが、其後陸軍各臨時病院の閉鎖と共に五班は盡く之を引揚げた。此等各救護班の陸軍各臨時病院に於て取扱ひたる患者數は一萬五千四十名である。

本社病院は建物大破したが幸にして燒失を免れたので、院內を整理して罹災傷病者の收容を直ちに開始し、千名の患者を收容する計劃のバラックを構內に建設した。同院十月十七日現在の收容患者は六百九十三名で、最初より の取扱罹災患者の延人員は入院二萬五千六百十五名、外來六千四百名である。

更に各地に臨時病院を建設するに決し、洲崎臨時傳染病院は十月十二日開院し、麻布臨時病院は十月十三日米國救援團より繼承し、深川臨時病院は病舍竣工せさる爲め天幕を以て十月十五日より外來診療を開始し、各病院は順次竣工の上事務を開始した。

淺草臨時病院（淺草東東願寺）　深川（深川岩崎公園）　京橋（築地本願寺）　日本橋赤十字社
傳染病院（府下板橋）　麻布臨時病院（麻布高松宮邸內）　協調會聯合洲崎臨時傳染病院（洲崎）　板橋臨時

產院は罹災妊產婦及乳兒の收容に努め、續々入院の傾向あるが爲め、五十名收容のバラックを急設すると共に、

府下大久保百人町の婦人ホームを借入れ、約百名收容の分院を設置し、十月一日より開院し、更に百五十名收容の乳兒院を併設した。

十月十七日現在の收容者數は本院に罹災妊産婦百六名、産兒四十四名、乳幼兒五名、分院に妊産婦九名、産兒四名、開始以來十月十七日迄の取扱數は三百八十六名である。

水道橋外松平伯爵邸内に二百人收容の臨時産院を、更に百名收容の乳兒院を建設したが、工事竣成前は何れも天幕内で外來者の診療を開始した。

孤兒・迷兒を收容の目的として福田會及麻布笄町の慈眼院の家屋を借入れて兒童收容所を設けた。十月十七日現在の收容兒童五十八名、開所以來六十五名である。

第三　神奈川縣方面の罹災者救療

神奈川縣支部より震災と同時に救護員應援を求められたので、本社は直ちに病院より救護員に材料を携帶し、逐次各支部より到着する救護班を增派し、同支部は此等各支部の直接應援の救護班と横濱・鎌倉・小田原の各地に設置した救護所とで同地方の罹災傷病者の救護に從事した。

九月十二日臨時震災救護部神奈川支部を設け、各救護班は支部の指揮の下に活動せしめ、二十一ヶ所の救護所を置き、十月十七日迄に取扱つた患者總數は十二萬三千六百十八名に達した。

病院に配屬した救護班は、最初根岸臨時病院に二班、横須賀市立傳染病院に一班、米國救援團より繼承の天幕病院に一班であつたが、其後根岸臨時病院の二班は之を引揚げて他に活動せしめた。

神奈川支部は建物の大破せる根岸療養院を借入れて應急の修繕をなし、十一月一日より臨時病院を開設し、十月十七日迄の收容患者は累計五百六十名であつた。上記病院の外に東神奈川浦島に二百名收容の臨時病院を建設し、其他米國救援團寄贈の天幕病院を繼承して患者を收容した。

第四　千葉方面の罹災者救療

千葉支部では直ちに臨時救護班を組織し、構内に天幕及バラックを建て、九月一日の夜より罹災傷病者の救療に從事し、尙ほ千葉醫科大學に依頼して別に救護班を組織し、一日は徹宵龜戸方面に出動し、二日午前同地第一小學校内に救護所を開設し、同日更に縣醫師會と協力して救護班を組織し本所區綠町に開設し、其他安房市原君津の各郡にも派遣し、佐倉町にも開設した。其の取扱つた患者の總數は一萬四千七十六名である。

千葉縣習志野廳舍に收容した朝鮮人・支那人及一般避難者中、傷病者の救護は陸軍に於て擔當したが、陸軍の撤退と共に本社が繼承し、以來十月十七日迄に取扱つた患者總數は五千百五十二名である。

第五　其他の方面の罹災者救療

東京・横濱近接の各支部は勿論、其他汽車沿道の各支部に於ても通過避難者の救助及傷病者の救護に努力した。

第六　傳染病の豫防

震災後の非衞生狀態に鑑み、傳染病の蔓延を顧慮して傳染病豫防心得を印刷して各所に配布し、各救護所では傳染病及同疑似患者を發見したる場合は、直ちに官公吏に届出でて速に之を隔離病舍に送致し、患家には消毒法を行ひて蔓延防止に努めた。

本社病院は傳染病室の擴張を圖り、一時天幕を設けて患者を收容したが、後にバラックを設けて收容し、更に府下板橋の傳染病院を擴張して二百名の患者を收容することとなつた。

本社の材料倉庫全部を燒失せし爲めに、直ちに市內及郡部に人を派して材料の蒐集を始めると共に、通信機關の障碍の爲め九月三日栃木支部書記の宇都宮に歸還するに際し、同人に托して宇都宮より東北・北陸及關西に於ける十七支部に極力衞生材料を蒐集の上送付すべきやう電命し、之れが爲めに九月中旬以降に至り續々として各支部より材料が到着し、本社の調辨したる材料と臨時震災救護事務局及陸軍省より配給された材料と各救護班の携行した材料とに依り、東京市及神奈川縣下に開設したる各救護所及病院の需要を充した。

第三章　愛國婦人會

第一　救護事業

愛國婦人會は罹災者の救援に盡すべく、愛國婦人會震災臨時救護班を設け、救護事務を執る爲めに班長一名、副班長四名を置き、班長は本部事務總長・副班長は本部第一部長・第二部長・發行所長・兒童健康相談所主任醫が任ぜられ、本部事務員及發行所・職業紹介所・兒童相談所の各員は救護員となつて幸に類燒を免れた。本部內に事務所を置いて活動を開始し、先づ九段郵便局の避難所として提供せる事務室以外を開放して一般罹災者を收容し、更に精華女學校・牛ヶ淵公園・佛國大使館跡に避難せる約二千名の罹災者に對して、本部と東京支部とが協力して炊出を行ひ、尙ほ罹災者中の小兒・婦人・老人を救濟する爲めに、綿ネル單衣用の材料を購入し、本部內の婦人職業紹介所及實踐女學校の職員・生徒に裁縫を委囑した。

兒童健康相談所では醫員四名・看護婦四名を常置して無料診療に從事したが、其の診療患者（自九月至十一月）は二千七百七十二名である。職業紹介所は從事員を增加し四百八十四名の罹災婦人を紹介し、更に罹災婦人にして就職に困窮せるものを收容して附屬實業部で裁縫せしめ、一般の秩序の回復と共に市內大商店或は各家庭よりの委托品潤澤となるや收容婦人の數を增加して、收容延人員（自九月至十一月）二千八百六十二名を算した。

本部は取敢ず金五萬圓を臨時震災救護事務局に、金三萬五千圓餘を陸軍省を經て在鄉軍人會本部に寄贈し、尙ほ內務大臣の內意を受けて、救恤衣類寄贈配給に主力を注ぎ、第一着手として避難場所もなく燒跡に彷徨する罹災者、特に本所・深川・龜戶・淺草・下谷方面の老幼より初めて、一般に及ぼす方針の下に調査することとなり、警視廳馬場警務部長に依賴して管下各警察署長の好意により本部員と警察署員の協同作業として第一期の目的を遂行しだが、第二期以後の計畫としては漸次市內各方面に收容所が設置さるるに至つたので、各警察署長・方面委員の援助によつて敏活に處置することが出來た。

此の救護事業に就ては本部並に朝鮮本部其他地方の五十支部で卒先職員を招集して救護金品の募集に着手し、或は衣類の調製に或は縣下各方面の勸誘に活動して應募金品を發送し來たのに依るのである。

配給方法としては、委托配給と直接配給とに區別して、成るべく同種類の救恤を平等に一般的に配給し、罹災者の生活程度に留意する所があつた。委托配給は警察署・各郡及千葉支部に委托して配給し、直接配給は本部救護班が

各官公衙の援助の下に直接に配給したのである。

第二　皇室の御思召

畏き邊りの御思召を拜し、十月四日皇后宮職より西邑事務官を本部に差遣はされて、活動狀況につき下田會長、宇佐美東京支部長より聽取せられた所があつた。

名譽會員竹田宮大妃殿下には、九月十六日同宮附宮內屬を、總裁殿下には九月十七日御用取扱を御差遣になり、九月二十七日名譽會員・東伏見宮殿下並に竹田宮大妃殿下は本部に台臨あられせられて、婦人職業紹介所の寄贈衣類裁縫の狀況・兒童健康相談所の無料診療所・傷病孤兒の狀態を御巡覽あつた。各宮妃殿下・女王殿下の御手にて御裁縫遊ばされた御救恤の衣類其他は、東久邇宮家にて御取纏め、其の內二千七百餘點を十一月初旬に御下賜あつたので、殉職訓導の遺族に配給した。

第三　東京支部

東京支部內の比較的被害少き地方の幹事部及幹事は奔走して寄贈品の蒐集に努め、又自ら金品を寄贈し、被害の程度最も甚しき本所・深川方面と配給薄しと認めたる方面の罹災者に配給し、更に事務所に困難を訴へ來れる多數の罹災者に贈與し、戰死軍人遺族及廢兵は其の安否を調査し被害程度に準じて一人二十圓迄等差を設けて贈與した。其の衣類米穀等を給した數は次の如くである。

一、家屋倒壞又は類燒に罹りたる者　七百十八家族
一、安否の判明して金員物品を贈與せる者　九十一家族
一、同上の中生計困難で當時保護せる者　百三十七家族

迷兒の保護につきては警視廳・東京府・東京市に交涉し、又十三日以來東京市より負傷病兒の診療を依頼され、看護婦專任二名・兼任一名・保姆一名・雜役夫一名を置いて、救療事業を開始し、男女兒計十六名を診療した。

姙產褥婦及乳兒の保護に就ては、姙產婦乳兒保護班を編成し、十九日より開始し、佐藤・南兩醫學士・產婆二名・看護婦一名が二班に別れ、每日自動車にて巡回診療を行ひ、乳に窮する乳兒には煉乳を給し、「牛乳に依る育兒法」と題する印刷物を配布し、且つ一般患者をも診療した。「其の診療數は（自九月至十一月）

一、姙產褥婦　百五十九人、一般患者　千四百五十四人。

である。

第四　救濟事業成績（自九月至十一月）

愛國婦人會として救護せる人員は（震災地方に於ける配給品によりて救濟されたる者を含まず、救療・職業紹介・地方避難者救濟によるもの、本部及二十九支部にて）二十五萬五千七百三十九人、百二十六世帶である。

配給數（本部及東京支部）は七十五萬九千二百六十七點、百石九斗九升二合、七十二樽、調製數（本部外六支部）は九萬九千二百五十一點である。

救濟經費（本部及二十三支部）は二十七萬六千三百八十一圓七十九錢。

義捐金は三十三萬八千四百六十六圓三十錢。

救恤品數は衣類其他百五十八萬七千百十三點、白米其他穀類三千八百七十一石一斗九升三合、食糧三千三百二十四貫五百二十匁、同上七百五十二樽。

震災地方配給狀況

本部の配給數は衣類其他六十六萬五千八百二十三點、白米其他穀類百石九斗九升二合、食糧七十二樽。
東京支部にては衣類其他二萬四千七百八十九點である。
救恤品の大部分は臨時震災救護事務局に、一部は本部、其他は在鄉軍人會本部及罹災者地方避難者に寄附し又は救濟品に代へた。

第四章　財團法人協調會

震災後直ちに芝公園內の協調會館を開放して附近の避難者約一千名を收容したが、漸次減少するに及んで、芝離宮收容所に交涉し、九月二十七日に至りて全部移轉し、一方芝公園增上寺の內外及下谷金杉の三箇所に炊出場を設置し、一日一箇所五俵乃至三十俵の炊出を實行したが、金杉は九月十三日限り、芝公園の分は九月二十二日限り廢止した。

市內主要なる箇所五十箇所に揭示板を設置して震災公報其他の情報を揭示し、更に品川驛前・芝赤羽橋際・飯田橋際・上野公園山下の四箇所に案內所を設置し、臨時震災救護事務局其他各所よりの確實なる情報を蒐集して、罹災者の相談に應じたが、品川驛前外二箇所は九月十五日、上野公園山下は同月十九日限り廢止することとした。

十月五日より深川猿江裏町善隣館跡に約三百坪の罹災者收容所を設け、三十五家族百五十名を收容した。
芝公園增上寺前に三百人を收容し得る、內科・外科・產科の三科を有する無料產院を、橫濱市神奈川平尾前には二百人を收容し得る同樣の病院を設置し、前者は十月一日より後者は同月二十日より開院し、十一月末日兩院共、濟生會に經營を引渡し、洲崎埋立地には三百人を收容し得る傳染病舍を建設し、十月十一日工事完成と共に、共の經營を日本赤十字社に移した。

其他避難者の慰安會や帝都復興講演會を開催する外、震災以來罹災工場の被害・能力・職工の異動狀況・爭議等に關して調査し、政府より下付せられたる百五十萬圓の資金に對し東京府社會事業協會・中央社會事業協會の各團體と共に震災救護上施設を要する事業を調査して政府に提示する所があつた。

第五章　大震災善後會

公爵德川家達、粕谷義三の兩氏が罹災者救濟會を組織せんと協議中、澁澤子爵(榮一)外都下の重なる實業家が奮起して救濟と共に經濟組織の復興とを計劃しつつあるを聞きし爲め、相協力して救濟、復興の事業に努力せんとて、臨時震災救護事務局の了解を得て九月九日發起人會を開會して直ちに事業を開始し、汎く天下の同情者に訴へて寄附金募集に着手した。

十月二十日現在に於ける應募總額は、金三百五十九萬五千九十圓八十錢、英貨金一百八十磅に達し、寄附金品の

處分は(罹災地)各府縣市へ金一百萬圓(第一回)を寄附した。其內譯は

東京市	金六十萬圓	千葉縣　金六萬圓
東京府	金五萬圓	埼玉縣　金二萬五千圓
橫濱市	金十五萬圓	靜岡縣　金一萬五千圓
神奈川縣	金十萬圓	

右の寄附金に據る各府縣市の施設は

東京市

一、牛乳配給所費(十箇新設並維持費六箇月分)　金八萬二千圓
二、託兒所費(三箇所新設費)　金二萬圓
三、產院乳兒院費(二箇所新設並維持費)　金七萬九千圓
四、公衆食堂費(十箇所新設費)　金拾五萬圓
五、共同炊飯場費(十箇所新設費)　金四千圓
六、質屋費(五ヶ所新設費)　金十五萬圓
七、屎尿處分費(沒取費)　金十萬圓
八、傳染病豫防費(寄贈衣服消毒費)　金一萬五千圓

東京府

一、臨時職業紹介所費(五箇所設備及經常費)　金二萬圓
二、勞働合宿所費(十棟の設備及經常費)　金三萬圓

神奈川縣

一、失業者に對する職業補導施設費(職業補導所一箇所設備及一箇年經常費)　金二萬二千三百十一圓
二、縣設職業紹介所費(六箇所設備及一箇年經常費)　金二萬三百六十七圓
三、ポスター製作費　金九百圓

等である。

第六章　南滿洲鐵道株式會社

滿洲の一角に重大なる使命を負うて居る滿鐵會社は、帝國に大凶變の突發したといふ報道に接すると共に、之が善後に關して能ふ限りの力を盡くさゞるべからざることを覺つた。時恰も川村社長は上京中なので、大連に在る重役は三日鳩首して救援方針の大綱を定め、(1)關東廳及市役所と協力して救援に當ること。(2)救恤金の社線無賃輸送を行ふこと。(3)慰問團を派遣すること。(4)救恤品輸送の爲め必要あらば大連汽船會社より傭船すること。(5)救護品を派遣すること。(6)大連方面に於ける救恤金品は全關東廳に取纏め、同廳に其の處置を一任すること等を決定したのである。

災禍に直面する東京支社は、丸の內なる丸ビルに在つたが、幸に類燒は免かれたけれども、一時は執務が不可能であつた。社員の殆んど全部も大小の罹災者であるが、何れも私事を放擲して麻布狸穴なる社宅に集まり、折しも上京中であつた川村社長指揮の下に善後救護の策を講じたのである。

第一　救護團の派遣

本社では何よりも先づ救護團の派遣を急ぎ、其の先發隊として三日、內田少佐を發足せしめ、信越線を經て八日着京麻布狸穴なる本社々宅に於て、支社員と打合せ、其準備を爲した。本團の組織は派遣後屢々其內容を變更したので、常置の人員は揭げ難いけれども、其の最も永く續いたのは、本部として團長入江理事以下二十二名、衞生班

として班長大連醫員長以下醫師十三名、技術員一名、看護婦二十六名、傭員五名、外に大阪出張所詰として五名、下關出張所詰として一名を揭げ得る。夫等は當初三日・四日の兩日相前後して出發し、神戸に於て落合ひ、大阪に於て所要の藥品・衞生材料等を調達し、九日大阪港發にて出發、一部は橫濱に上陸、他は芝浦に上陸し、狸穴なる救護本部の指揮を待つた。

第二　東京支社の活動

東京支社では四日麻布狸穴なる社宅に於て、川村社長・在京重役・課長等が參集して、諸般の打合せを爲し、本社及關係諸官廳との連絡を取ると共に、五日より滿鐵救護假事務所を狸穴社宅に置き、罹災社員及一般罹災者救護に關する應急事務を開始した。

打合せの結果、救護物資として滿洲生產物中、應急品價格百萬圓を目安として寄附申出の件を決定し、其の品目に就ては救護事務局の意見を參酌して、毛布・白米・大豆・小麥粉・砂糖・罐詰・衞生材料・木材・食鹽等を寄贈することとし、直に本社に通告したが、本社に於ても既に百萬圓支出の計を樹てて銳意準備中で、本支社共に期せずして一致の意見を持したことは實に一奇であつた。

七日、取敢へず麻布在鄉軍人會・同青年會へ計二千五百圓、報知社主催の救恤義捐金中に五千圓を寄贈した。

第三　救護團の入京と其活動

十一日、入江理事・牧野社會課長以下の救護團本部員は、先發入京の內田少佐一行、支社員・東亞經濟調査局員全部と協議して、救護事務の部署を左の如く定め、直に活動を開始した。

救護團長　理事入江海平
庶務部（庶務係、文書係、交渉係の三係に分つ）六名
運輸部（鐵道係、船舶係、自動車係の三係に分つ）八名
衞生部　事務員二名、病院當務者尾見大連病院長以下四十九名
慰問部　三十二名
經理部（會計係、用度係、自動車係の三係に分かつ）七名

右の外、東亞經濟調査局でも、震災に關する經濟界、勞働界等の各方面に亙つて調査を開始した。

（當社の救護事務に關する各方面との連絡に就ては、當初社員一名を清水港に滯在せしめて之に當らしめたが、次で特に官報同樣に取扱ふ旨の許可を得ることとなり、大に便宜を得た。）

救護團活動の狀況を左に記るす。

一、在滿邦人及社員竝に家族の安否調査

救護團（衞生班を除ける）は、先づ在滿邦人及社員關係の罹災者安否調査を爲した。通信交通兩つながら缺如せる際一方ならざる苦心を重ねて戶別訪問を爲し、二十三日まで續け、二十四日以後は其の事務を東京支社に引繼ぎ、爾後其の一部は橫濱に於て同樣の調査を爲した。其の成績としては調査總件數三千九百十二中、安否判明件數三千二百七十八である。尙ほ張作霖將軍よりの依賴をも諒し、將軍より派遣の李德新氏を案內して、東三省留日學生の安否調査及救護をも爲した。

二、京濱に於ける救恤品の運搬業務

救護團運輸部は京濱に於ける救護物資及人員の運輸事務に當り、之が陸揚・陸上輸送等に關し、救護事務局其他關

係官廳と交渉して、連日連夜の活動を爲した。

三、衞生部の救療事務

救護事務局と交渉の結果、衞生部は尾見大連醫院長の率ゆる衞生班をして、横濱に於て臨時病院を開設せしむることとなり、十四日より横濱社會館の燒殘り建物に滿鐵臨時病院の札を揭げた。之より先き同館の一部では既に廣島縣の救護病院が開設せられてゐたが、それが二十二日引揚げることとなつたので、其の收容の患者は悉く滿鐵に引受けた。斯くて本病院は十月五日迄之を繼續し、後之を救護事務局神奈川支部に引繼ぎ、爾後は內務省の委囑に依り、東京青山明治神宮外苑に於て別に計畫を樹てて開設し、院長以下醫員三名・看護婦二名・小使一名を殘して他は悉く引揚げた。其の橫濱に於ける成績は、入院實數二百八十五人、內死亡二十九人、外來新患者一千九人、舊患者八百三十九人で、費用計八萬二千圓を要したが、靑山に於ける病院は尙ほ大規模に且つ長期に亙つて開設することとなり、警視廳經營の病院患者三十二名を引繼ぎ、外來患者をも救療することとした。橫濱引揚の際、從事員の大部分を還したのは、滿洲に於ける公衆衞生も忽せにならぬからであつたが、而も殘留の從事員のみでは事足らぬので、已むなく東京に於て臨時に數多の醫員・看護婦を雇傭することとした。斯くて建物としては內務省建設のバラック五百棟を用ゐ、從事員としては十二月十日現在に於て、院長以下醫員十五名・藥劑師三名・事務員七名・看護婦五十一名・雜使婦八名・小使八名・炊事夫六名・運轉手二名・木工一名・計百一名で、各地より東上した救療班中、規模最も大にして且つ長期なものである。其の內容は內科・外科・眼科・產科婦人科・耳鼻咽喉及齒科の七科に分かれ、經費として十八萬四千五百圓を計上した外に、內務省より一萬圓の補助があつた。入院及外來患者數は固より多數に上ぼつたのであるが、此稿起草の十三年一月頃は尙開設中なので、計數は記し難い。

斯くて救護團は九月二十四日以來、其の一部を殘し、存殘事務は東京支社に引繼いで夫々歸滿の途に就いた。

第四　會社の義捐金及救恤品

會社は前述の如く義捐金として一百萬圓を支出し、之を以て食糧品其他の救護物資を調達送付することに決し、夫々物資を購入して、七日先づ長順丸に積載して派遣し、次で十日泰陽丸を、更に十三日、避難者輸送用として西京丸を派遣し、何れも大連港を解纜した。（救護品目は略す）而も尙ほ滿洲各地より、東三省政府寄贈の物資、殊に張將軍より寄贈の生牛百頭を始め、寄贈の物資が多く、會社よりの調達品も尙ほ二十萬圓許あるので、是等と輸送する爲め、滿洲丸を傭船する手續を執りつつありし際、罹災地於ては最早物資が充實したとの報を得たので、急に見合せることとし、買付の物資は夫々相當の損害賠償金を支出して解約した。尤も生牛は其後十月二十日神山丸で門司彥島まで輸送し、屠殺して罐詰に更へ輸送したが、夫等の費用七千三十圓は會社に於て負擔した。

斯くて右百萬圓は物資購入の爲めに五十七萬五千四百三十二圓だけを使用して、豫定通り全部を支出せずに了つたのであるが、物貨保險料・社員出張費・傭船料・賠償金・輸送費・病院費等を加算するときは、無論百萬圓を超過したのである。

第五　救恤品及罹災者の無賃或は割引輸送

會社は、滿鮮各地より震災地の官憲又は公共團體に向け發送せられる救護物資は、會社の沿線は固よりのこと、海上輸送に至るまで悉く無賃・無料にて輸送することとし、之が爲には會社の調達輸送する物資と共に特に傭船を爲

して送つた。東三省より寄贈の物資も皆斯くて輸送されたのである。尙ほ罹災民にして滿鮮地方に避難し、或は職業を求めて渡滿する者に對しては、無賃乃至五割引の特別取扱を爲した。

第六　義捐金品の募集

會社は關東廳・市役所其他の各團體と協力し、關東州内に於て義損金品の募集を爲すこととし、沿線各地方に亙つて大に之が宣傳に努めた。斯くして募集し得た金品も相當多額に上ぼり、悉く關東廳に於て取纏め送付のこととなり、物品の輸送は會社が悉く其の衝に當つた。沿線各地より見舞の爲めに上京せんとする者が尠なくなかつたけれども、罹災地の混亂と食糧不足とを顧慮して、成るべく中止せしめるの方針を採つた。（關東廳の條對照）

第七章　宗教團體竝社會事業

第一　緒　言

今次の大震災に際し、神・佛・基各宗派竝其の所屬の寺院教會等は、罹災者の慰藉救護に關して何れも多大の活動を爲した。別章記るすが如く、各宗派所屬寺院教會等の罹災は頗る多數に上ぼり、甚大の打撃を被つたのであるが、當事者は何れも夫等のことには頓着なく、鋭意熱烈、獻身的の態度を持して、或は精神方面に、或は物質方面に各種の施爲を講じ、濟衆救世の事に努め、以て宗教の有する使命を達した。

左に神・佛・基各宗派團體の活動振を記述する。

第二　神　道

(1)　神　道

本局内を開放して、一般罹災者を收容し、殃死者の葬儀靈祭を無料取扱を爲す旨廣告して之を實行し、避難者に食品・日用品・寢具等の寄贈を爲し、地方各教令をして義捐金の募集を爲さしめ、三日より向ふ五十日間、教職員を避難民集團地に派して神符・慰問袋・衣類等を配布した。罹災者の通信補助を爲したこと電報七十五通、書信三百六十九通に及び、被服廠跡・淺草田中町・同吉原の三箇所に於て弔祭を執行した。

(2)　修　成　派

醫師に委囑して無料診療を爲し、辯護士に委囑して法律相談に應じ、布教師を避難集團地に派し、兒童を會合してお伽噺會を開き、雜記帳一萬冊を配布した。

(3)　大　社　教

東京出張所に於ては、災後直に罹災者の收容を爲し、其の多き日は三百名に及び、之を悉く食事を給し、十月十六月に及んだ。出雲なる本社では義捐金二千七百六十九圓餘を集めて島根縣廳に寄託し、地方教會でも四百餘圓を集め、外に衣類五百七十二枚、雜品三十四點を集めた。

(4)　扶　桑　教

災後直に救護班を組織し、支部を四谷區に置いて、救護に努めた。何分にも部内の被害が甚だしく、燒失及全潰が二十五教會に及んだので、他に餘力を注ぐことが出來なかつた。殘存の七教會では、二週間に避難者四百二十名

を、後三週間に二百名内外を收容し、物資を施與したのが白米十五俵、味噌十八樽、慰問袋二千袋を算した。

(5) 大成教

災後十七日までの間に避難者二百五十名を教務廳に收容し、十月二十日には殘留者五世帶あつた。之に配給した品は白米三十六俵、現金七百五十二圓餘、古着類數百點であつた。部內の各教會でも義捐金品の寄贈を爲した。

(6) 黒住教

震災當時、在京の各教會は全力を盡くして信徒、一般避難及傷病者を收容救護し、一面流言浮說の防遏及家業の精勵を辻々に說き、橫死者の慰靈に關しては、神道各教派と聯合して被服廠跡に招魂祭を行ひ、靈代を各教會に頒祭した。岡山市外なる本教廳は、變報に接するや直に廳員を東上せしめて視察、慰問及救護を督せしめた。大教會所を始め全國の數會所は何れも人心の安定、復興の祈念及橫死者の追弔を爲し、一面義捐金品を募集し、地方の官公衙若くは新聞社に托して之を罹災地に寄贈した。各教會の青年會・婦人會等も金品の募集に奔走した。就中大阪・神戸等の青年會・婦人會等は、全員日日交代にて避難者の慰問救護に努めた。大阪に於ける本教團は天王寺公園公會堂に於て橫死者大追弔祭及記念講演會を開き、來會者二千餘名に達し、京都の教團でも同樣の催をなした。

(7) 實行教

罹災者の收容、金品の寄附を爲し、部內の三教會では、京橋區鍛冶橋畔に玄米の施與所を開き、義金を醵出すること百十九圓餘、衣類の給與一千餘點を算した。

(8) 神習教

救護團を組織して給與を爲し、地方教會にも通牒を發して避難者の救護を爲さしめた。

(9) 御嶽教

各方面の救護を爲し、又神葬祭無料引受所を設けた。

(10) 神理教

避難者の收容、金品の給與を爲した。

(11) 金光教

神田區和泉町なる本教出張所內に救護事務所を置き、教職員を各部署に分屬せしめて、罹災者の收容、食糧及日用品の配給、慰問、人事相談等の事に當らしめ、此間の收容延人員は二千百六十六人、之に對しては一切本教にて配給した。地方信徒より金品を寄贈し來るもの引きも切らず、相當の多額に達した。十月七日よりバラック收容所五棟(二百八十七坪)を麹町區下二番町に設け、信徒竝一般罹災者を無料にて收容し、同月二十日の現在は世帶數五十七、人員二百六十五人を算した。玆には禮拜堂、圖書室、託兒所、人事相談部等を置き、警備及濟生には特に意を拂つた。岡山縣なる本教本部は、全國信徒より義捐金を募集し、其の額二萬五千圓を其の筋に差出した。外に地方信徒より地方の新聞社を經て義捐した金品も尠からぬ。尙ほ本縣本部では、其の所在地金光驛に救護所を設け、通過の避難者に飮食其他の給與を爲し、之が費用一千餘圓を要した。十月一日、東京出張所に於て遭難者弔慰祭を行ひ、參拜者一同に白米五合宛を頒布した。

(12) 天理教

奈良縣下に於ける本教々廳内に臨時震災救護本部を設け、東京に其の出張所を置き、取敢へず金二萬圓を送付して救護費に充て、教務支廳建物を全部開放し、別に大天幕を張り、上敷六百枚を敷詰め、約八百人の罹災者を收容し、之に飲食を供し、其の十月二十日迄に於ける延人員二萬二千三百六十人を算した。九月五日、丸ノ内・日比谷・芝公園・銀座の四箇所に於て、翌六日、上野・電門・厩橋の三箇所に於て炊出を爲し、各四石の握飯を配與した。上野公園・須田町・厩橋・芝金杉の四箇所に、五日乃至二十日間、麥湯接待所を出だし、入來る者に薩摩漬物等を配與したが、各所一日の接待數平均八千人。延人員四十七萬人に上ぼつた。横濱市太田町・蒔田町の二箇所でも同樣に爲した。九月二十日、日本橋教會跡に接待浴場を設け、鐵炮風呂三槽を据付け、午前九時より午後八時迄沸かして、避難者の便に供したが、一日平均六百人の入浴者があり、十月二十日迄の入浴者一萬八千人を算した。部内の教會をして義捐金を全信徒より募集せしめ、之を各官衙に委託して罹災者へ配付を請うた。其の金額が本教管長名義を以てせるもの四十七萬三千八百六十五圓、外に地方支廳の名義を以てせるもの合計一千四百二十二圓に上ぼつた。本教臨時救濟本部・高安・河原町・船橋・芦津・兵神のに教會及東京教務支廳にて取扱つた寄贈の衣類は其の數七萬五千六百四十三點（此見積價格九萬五千四百五圓）で、此の外地方の教務支廳より各地方廳へ委託寄贈の額が十四萬一千六百二十三點（此見積價格十萬二千六十七圓）を計上する。右衣類の募集は主として本教婦人會の斡旋蒐集に係るものである。被服廠跡を始め各地の擧式には毎に教師三名を派遣して懇ろに弔祭せしめた。

第三　佛教

(1) 天台宗

二日、凶報に接するや、管長よりは直に門末一般へ諭達を發して、義捐金の募集其他慰藉救護に關して迅速適切の施設を執らしめ、擧宗一致以て之に處することとした。救援事務所を宗教廳内に、同出張所を上野寛永寺内に設置し、竝に淺草なる淺草寺に於ては特に救護事務所を設け、各部署を定めて慰藉救護に從事した。一宗より慰問使數十名を特派し、之に寛永・淺草兩寺の僧侶を加へて救護班及弔祭班を組織し、救護班は右兩寺に於て人事相談、金品施與其他慰問に當り、弔祭班は巡回回向を主とし、被服廠其他十數箇所に於て弔祭を執行した。九月十日、比叡山延曆寺に於ては一山の衆徒を集めて大追弔法會を嚴修し、又十月四日には僧侶三百五十名被服廠跡に出仕して更に大追弔祭を嚴修した。本宗より取敢ず糧米數百俵の調達寄贈方を所轄廳に委託し、寛永寺・淺草寺・法輪寺（高崎）四天王寺（大阪）妙法院（京都）善光寺（長野）等に於ては夫々義捐金品の募集を始めた。震災直後、寛永・淺草兩寺境内に於ける罹災避難者は恰も雲霞の如くで、幾萬なるかは知れなかつた。之に對しては能ふ限り便宜を圖つた。神戸の能福寺では九月八日より海路避難者の收容を爲し、毎日五百名許、同市の善光寺でも同樣で二百名許を算した。寛永・淺草兩寺に人事相談所を設け、同時に避難者の調査、見舞人の案内、迷子及行方不明者の調査等をも爲した。

淺草寺は人も知るが如く四面環火の裡に在りながら奇蹟的に類燒を免かれたのであつて、當時境内に避難してゐた數萬の群集も隨つて命拾ひした譯で、宗内でも信徒でも是れ偏へに大慈大悲觀世音菩薩の靈驗に因るものと確信してゐるのである。されば寺方では此際全力を傾倒して、罹災者救護の事に當り、報恩の微衷を表せんとて、夫々の活動を爲したのである。災後、本寺境内は淺草方面唯一の避難場所となり、雜閙を極めたのであるが、此間に處

して寺方では、先つ救護事務所を設け、一山の僧侶を擧げて其の働に鞅掌することとなり、境内傳法院の建物及庭園の全部を開放して、罹災者を日々一萬五千位宛收容し、當日より五日まで日々數俵宛の炊出を行ひ、六日よりは淺草區役所の委託を受けて引續き食糧其他の配給を行ひ、十月二十日迄に於ける人員一日平均一萬一千人に達した。此間、寺方の費用を以ても能ふ限りの物資を調達配給した。五日より二十五日迄、仁王門下に尋ね人の受付を開始し、淺草公園地及寺境内に避難せる一萬四千人三千餘戸の戸主名を調査して、日々來る數百名の見舞人に對し避難場所を指示し、市街と連絡の下に迷兒、行方不明者の受付及調査を爲した。九月十一日より二十五日迄、仁王門下に於て端書の代償を爲しこと一日約八百枚、其中四千枚は淺草郵便局よりの寄贈で、四千枚は寺方より出だした。觀音堂にて横死者の回向を受付けて絶えず修行した。寛永寺と共同して被服廠跡外十數箇所に追弔會を營んだことは前項記るす通りである。仁王門下に於て慰問金の喜捨を受けたけれども、參指者の多くは罹災民なので好成績を得なかつた。淺草寺婦人會は八百名の會員及全國天台宗寺院二千二百に檄を飛ばして衣類の募集を爲し、便宜上、高崎市の法輪寺に之が事務所を設け、衣類數二百五十包、五萬數千點、外に夜具若干の應募を得て、之を配布した。高崎よりの運搬費及募集費四百圓は婦人會に於て負擔した。十月十三日より淺草區内の小學校で假教授が始まつたので、寺方の僧侶は代用教員として多數出勤し、バラック建校舍の成るまで繼續した。十月十三日より毎週土曜日の午後、寺内に罹災者慰安會を開き、講話後、餘興として諸藝人の演藝を聽聞せしめ、十三年三月まで續けた。淺草寺救護所は明治四十三年の創立に係り、救療事業を行つておたが、今回燒失したので、十月十五日境内にバラックの假病舍を建てて事業を繼續し、日々多數の患者を診療しつつある。其の本年度の經常費一萬二千圓に上ぼる。傳法院内に託兒所を建設し、十一月一日より日々六十名宛を保育しつつある。建設費三千五百圓は三井家の寄附で。經常費は淺草寺の支出。少年保護事業として施無畏學園をも經營する豫定である。

(2)　天台宗眞盛派

各地方の教務所に於ては避難者の慰問救護を行ひ。特に東京府下杉並村の眞盛寺及横濱の善光寺では避難者の收容保護を爲した。

(3)　眞言宗各派聯合

眞言宗各派管長竝に大師教會本部長よりは、管下の各寺院に對して慰問傳道及喜捨救護に努力すべき旨輸達を發した。聯合法務所は所員を派して各宮家及諸官廳を歷訪見舞を述べしめ、兼ねて罹災寺院及一般被害狀況を視察せしめた。京都各本山及高野山金剛峯寺も同樣であつた。本宗布教師及高野山大學學生の聯合組織に成れる慰問團一行十九名は京濱間を來往して罹災者の慰問救護及殃死者の弔靈に努むること十日に及び、又高野山各寺住職の組織に係る弔慰團一行二十二名も同樣の働を爲すの外、被服廠跡に於て追弔法會を嚴修し、尙同地にバラック建の參詣者休憩所を設け、更に遺骨の分配を受けて歸山し、教會本部に於て山内各寺院合同の大追弔會を嚴修した上、該分骨を奥の院に納めた。聯合法務所及金剛峯寺々務所共同して、阪神地方に來る避難者の慰藉救護を開始し、第一班を梅田驛に、第二班を神戸驛に配置し、各大天幕を張つて其の事務所となし、幼老者及傷病者の救護、物資の供給、道案内、通信等の世話を爲し、之が費用約四千圓に上ぼつた。各本山よりの釀金一萬六千三百五十五圓を新聞社に委託寄贈した。本宗の二機關雜誌として募集せしめた義捐金約三萬圓及聯合法務所の募集した三千圓は夫々適宜活

用した。宗内の地方寺院に於ても、義捐金品の募集、追弔法會の修行等夫々盡力する所があつた。

(4) 新義眞言宗豐山派

本宗務所は、大塚の護國寺・關口の新長谷寺・瀧野川の興樂寺・中野の寶仙等と協同して、罹災者の收容救護に努めた。此總延人員一萬九千四百五十五人、當派寺院及檀徒の寄附金一萬五百二十圓を罹災寺院及一般罹災者に寄贈した。罹災檀徒約一萬二千戸に對し、屏風形の本尊御影に慰問品を添へて贈與した。豐山大學生をして佛教聯合會に應援せしめ、主として小石川・本鄉方面を受持ち、避難者の慰問救護、人事相談、通信補助等を爲し、又豐山大學に於て避難兒童の爲めに子供の會を催ふし、之に茶菓を饗して慰安した。被服廠跡を始め其他慘狀を極めたる地及橫濱海岸に於て川施餓鬼法要を營んだ。東京府下及神奈川・千葉・埼玉の三縣下に於ける當派所屬寺院百三十七箇寺に於て、罹災者の收容救護を爲した員數合計五萬三千餘人に上ぼつた。栃木縣の鷄足寺は慰問品七千點を募集寄贈し來り、千葉縣の當派寺院住職十數名は托鉢を行ひて二千五百餘圓を集め、千葉縣廳及本宗務所に送付し、埼玉縣八條村佛教會は衣類夜具千七百七十八點を集めて寄贈し來つた。何れも配給の手續を採つた。

(5) 眞言律宗

管長より管下寺院末徒に對し、應分の義捐金品を其の地方官憲に經て爲すべき旨を諭達した。本山及末寺は何れも追弔法會を營んだ。

(6) 律宗

右と略ゝ同樣。

(7) 淨土宗

宗務所内に臨時救護部を設け、執綱以下事務員を部員となして、被害狀況の調査、罹災者の救恤、救護事業の連絡、義捐金品の醵集、弔祭の執行等、各部署を定めて之に當らしめ、之が實行は專ら大本山增上寺に委囑したのであるが、尙本部としても直接の施爲を講じた。其れを略述すると、災害直後より十月二十日迄の間、宗務所（芝公園内）外一箇所に罹災者を收容し、其の實人員一千二百四十人、延人員一萬七百十四人に上り、公私諸方面より寄附を受けて之を配給したもの、白米百俵、味噌三十樽、衣類七百二十五點、同七十六梱、同三十八包を算し、外に宗務所より調達した茶を五千包施與した。救療を爲したもの百四十一人、兒童慰安會を開くこと二回。巡回慰問弔祭從事員二十四人、避難實勢調査員十五人、全國巡回震災實況報告員十三人を派遣した。宗内一般に對し、此際救護其他遺漏なかるべき旨訓諭を發した。罹災者の進むべき道を說示したる印刷物三萬部を調製配布した。

更に增上寺の施爲した救護狀況に就て記るすと、當初より十月二十日に至る間の收容人員一日平均九千八百九十九人、延四十九萬四千九百五十人、配給品は衣類五萬五千百九十六點、米百五十俵、慰問袋一千七百六十五點、味噌十二樽、端書一萬九千三百枚で、多くは各方面よりの寄贈に係るものである。巡回救療は從事員延四百四十人、日數五十日間、施藥三萬一千二百五十袋、病院慰問は從事員三人、人事相談に從事員延四百七十三人、取扱人員延一萬五百七十八人、職業紹介指導一千四百三十二人、宿泊救護延人員五千八十四人、葬祭取扱二百七十一人、遺骨預り二百四人、慰安會を催ふすこと四十六回、託兒收容一日平均五十六人、延一千百二十人、增上寺補習學校を九月十六日より六日間開き、一日出席平均三百八十五人、其後は少年園開催の野外小國民學校に引繼いだ。野外文庫

三箇所、接待風呂五箇所、延七十二回、入浴延人員三千三百六十二人、鮮人保護一日平均二十五人、延九百人。バラック建應援従事員十一人、弔祭回向七箇所、従事員三十七人、延三千三十六人。納骨作業従事延百五人。其他人心作興講話會、實費食堂、授産部の開設等である。

市内殘存の本宗寺院、接續町村竝に千葉縣下に於ける寺院で、罹災者の收容を爲したもの百九十八箇寺、其收容總延人員四十一萬三千三百六十五人。其の他宗内の婦人會・少年會・小學校・勞働共濟會・マハヤナ學園・慈光學園・芝中學校等に於て、各方面の救療慰藉に盡くしたことも尠なくない。

(8) **淨土宗西山光明寺派**

京都なる本山は、末寺一般に對し、救援に盡力すべき旨竝に勤勞節約を勸說すべき旨諭達を發し、之が徹底の爲め布敎師十四名を各地に派した。本山關係者より金千四百二十七圓を醵出寄贈し、外に光明寺婦人會の義捐として金二千百十一圓七十錢、白米十一石二斗一升、衣類二百七十點、慰問袋二百を算した。本山よりは罹災地に慰問使を特派し、殃死者の追弔法會を修行し、出勤僧侶百名、參拜者一千名を算した。檀信徒及一般罹災者の學童救濟の爲め慰問金の募集を始め、十月二十日迄に其の額四千萬に達した。

(9) **淨土宗西山深草派**

金五百圓を京都府廳の義捐金掛に納付し、末寺の被害寺へは七百圓を贈與した。各末寺は何れも三十圓以內の義捐を爲した。其他末寺にして救護慰問及義金の募集を爲した向も尠からずあつた。

(10) **臨濟宗天龍寺派**

末寺及檀信徒に對して、救恤に盡力すべき旨訓示を發し、殃死者の爲めに追弔法要を營んだ。

(11) **臨濟宗大德寺派**

末寺に對して、義捐金品の募集、殃死者の追弔等、或分の努力を爲すべき旨諭達を發し、本山では避難民の慰藉收容、大法會の執行等を爲した。

(12) **臨濟宗南禪寺派**

右同樣。

(13) **臨濟宗相國寺派**

末寺一般へ罹災民救濟に關する諭告を發し、罹災地へは慰問使を派し、義捐金五百圓を支出し、追悼法要を爲した。所屬寺院は京都驛に救護班を出だし、其他義捐金品の募集を爲した。

(14) **臨濟宗永源寺派**

管長より末寺一般へ罹災者救護方を諭達し、本山よりは慰問使を派した。義捐金として本山より二百圓、僧堂より五十圓を出だし、尙專門道場學生の托鉢によりて義金を募集し、末寺では罹災兒童慰問義金の募集を爲した。

(15) **臨濟宗方廣寺派**

檀下篤志者の醵金を以て食糧品及衞生材料を調達、三日慰問使をして携帶東上せしめた。本山よりは七百圓の救濟金を支出した。靜岡縣下の末寺では罹災者の收容救護を爲した。

役員四名を罹災地に派し、慰問並回向を爲し、本山では追弔會を營んだ。臨時救護費二萬金を支出して、被害寺院及檀信徒の慰問費に充つるの外、本山塔頭及學生百名は京都市內で托鉢勤行を爲し、四百五十圓の義金を集めた。東京所在寺院住職等の組織せる圓成會は、簡易食堂、慰問所等を設置して、罹災者の慰藉を爲した。支院、末寺等も夫々金品の募集を爲した。

(16) 臨濟宗妙心寺派

末派一般と告諭を發して、義捐金品の募集に着手し、遠く布哇に在る檀信徒よりも送付し來るあり、目下募集中九月末頃の現況)。宗務本支院職員を各班に分かち、罹災者を訪問して施藥を爲し、大本山總持寺は横濱驛前に救護本部を設け、六名の布教師を係員として、給水及慰問を爲し、人事相談にも應じた。罹災者を收容した數は、宗務本院八百五十人、永平寺出張所百四十人、總持寺出張所三百七十一人で、其他東京市內及附近の末寺六十三箇寺で二百六十六家族、一千五百九十二人を收容した(九月末當時の概況)。總持寺・永平寺を始め末寺悉く慰靈法會を執行し、總持寺には遺骨を集めて壯麗な弔魂塔を建つべく計畫中である。

(17) 曹洞宗

末寺及僧俗一般に對して義捐金募集の旨を普告し、罹災地の末寺へは罹災者の收容救護、死體遺骨の收容弔靈に盡力すべく、又人心の安定を圖るやう說敎すべき旨通達した。神戸市の長樂寺・長崎市の崇福寺・興福寺・福濟寺・聖福寺等では、特に多數の支那避難民を收容救護した。

(18) 黃檗宗

二日朝、大變災の報に接するや、直に全國各敎務所に對し、救援慰藉適宜迅速の方途を執るべき旨電命した。三日、執行より門末寺院及敎務所に對して『前略、直俗二諦の敎義を奉じ、慈悲博愛を旨とする我等眞宗敎徒にありては、此慘禍に當面して寸時の躊躇なく、率先各寺住職に於て檀信徒及所屬團體を督勵し、左記の方法(記載を略す)に依り迅速救援の擧に出づべし』との訓告を發した。四日、臨時救災事務所を本願寺內に開始し、之が事務規程を定め、所員を補命した。同日、全國巡敎中の布敎師に對し、恰も九月一日より『共存共榮』なる題下に布敎開催中なるを利用して、此際該趣旨の徹底を圖り、義捐救災の激勵に充分の努力を爲すべき旨電命した。本派關係の佛敎婦人會聯合本部は、全國八百有餘の婦人會に檄を發して、義捐金品の募集に着手すべく、應募の金品は便宜地元の府縣廳に取纏め差出すべき旨を附記した。本派學務部では、全國日曜學校一千五百餘校に對し、醵金を爲すべき旨を通牒した。六日、末寺代表に召集令を發し、十一日之が臨時集會を開き、特別會計臨時救災事務所費收支豫算を議題として次の如くに議決した。『收入四十五萬圓、內四十萬圓立敎開宗記念慶讚事務所納金中より支出、五萬圓一時借入。支出四十五萬圓、內四十萬圓臨時救災費、五萬圓罹災末寺復興補助費』十日、管長より門末信徒一般に對し、『前略、されば佛法に志あらん人々は、深く阿彌陀佛の本願を賴み、金剛不壞の眞心に安住して、處世の常道を誤らざるやう心掛けらるべく候。殊に此度異常の災害に對しては、返す返すも佛心者大慈悲、是の金言を服膺して、衆生共保の大義を思ひ、報恩の誠意を抽んで、慰安救護の力を竭くし、遺漏なきを期せん候樣、切に希ふ所也』との垂示を發した。大谷枝子・同紘子・同泰子・九條武子の發企に依り、兒童愛護袋二百萬枚を調製して全國門末信

徒に配布し、之に慰問金品を容れて差出すべきやう督勵した。臨時救災事務所に於ける十月二十日迄の各部事業一班を掲げると、宣傳部に於ては、直屬布教師五名を滋賀・岐阜及北陸四縣に派遣し、百數十箇所に於て救災に關する講演を爲し、九月の彼岸會を利用して本願寺內外に特別宣傳を爲さしめ、慰問使三名をして京都・大阪神戸市中を巡回し避難民を慰問せしめ、之に菓子・扇子及小冊子を配布し、映畫救災宣傳班を組織し、其の二箇所は九月中、更に四箇所は十月中、何れも關西各地方を巡回して宣傳に努め、各地の女教士をして婦人會に救災宣傳を爲さしめ、其の幾分は東京に派遣して罹災兒童の救護に當らしめ、地方婦人會八百十三に通牒して其の活動を促がし、罹災者に對しては金品の募集寄贈、避難者に對しては慰問接待救護及宿舍提供、橫死者に對しては遺族慰問及追弔法要を爲さしめた。新しく各地の狀況報告が續續到達したのであるが、其うち十月二十日までに本部に屆け出でた地方婦人會に於ける金品の應募額は、義捐金八千六百餘圓、衣類十四萬四千三百餘點、慰問袋五萬七千七百餘點、米八十五石五斗餘、馬鈴薯三百六十九俵、蒲團四百枚、梅干百二樽、白紙百梱、鍋百十個、雜品三百六十梱で、何れも直接罹災地に送られた。樺太・臺灣・朝鮮・支那・西比利亞・米國・布哇等の開教地に對しても、布教使を督勵して活動せしめ、尙ほ救災宣傳及慰問鼓舞に關する各種の小冊子及ビラを數多發行して配布した。救護部に於ては、先づ京都驛に於て慰問救護に從事し、龍谷大學學生をして救護班を組織し、連日驛頭に出勤せしめ、避難者に對して慰問品に給與し、尙列車內にも乘組ましめ、別に東京へ三十名、淸水港へ十名、四日市へ五名、神戸港へ五十名を遣はして、何れも救護に從事せしめた。既記兒童愛護袋募集の爲め、京都女學校・京都女子高等專門學校・京都裁縫女學校生徒延人員一千六十名の應援を受け、市

內四十八箇所に於て宣傳した結果は、袋數四萬一千五百十五、其內現金の總額六千五十六圓餘に達した。京都以外の應募は固より此外である。庶務部に於ては、他部に屬せざる各種の事務を取扱つたのであるが、先づ手始めとして、取敢へず本派事務所單獨としての義捐金一萬圓を府廳に差出だすの手續を執ると共に、救恤米二百石を名古屋より海路急送し、十一日築地別院假事務所に到達、直に配給を爲した。救災事務所に於て直接取扱つた地方より送付の義捐金品としては、金八萬一千五百八十圓十一錢、毛布四千百七十九枚、衣類七萬七百二十二枚、慰問袋一萬六千七百七十袋、布團四百二十枚、書籍四萬九千二百七十二冊、白米四十二俵、味噌及漬物十五樽、煎豆十八叺、雜品十萬二千九百二十一點、外に兒童愛護袋に依る寄附金十六萬三千七十五圓二十七錢五厘、指定寄附金七千五百六十三圓で、以上は十月三十日迄の分で、其の以後の分は別である。地方の末寺では、應急の場合、直接地元の官公衙を經て義捐金品を送つたのであるか、その中本山に報告した分を總計すると、義捐金三十六萬七千二十五圓餘衣類四十四萬二千五百一點、木綿六百六十六反、ネル九十碼、外に六百尺、慰問袋十萬三百九十五袋、白米五千七十九俵、馬鈴薯一千三百八十三俵、梅干及漬物百六十五樽、味噌三百貫、茶二十五斤、毛布及布團千三百八枚、兒童愛護袋六千三百三十袋、古本及古雜誌五萬七千九百三十冊、念珠九萬連、鍋百十個、煎豆六叺、雜品二十二萬一千二百六十二點を算する。日曜學校の慰問金合計額は一千八百八十五圓六十八錢となる。以上の外、海外に在る本派信徒よりの慰問金品としては、布哇より米貨一萬四千四十八弗餘、衣類二百二十二點を、瓜哇リフェより五千五百七十二弗餘、衣類其他三千三百七點を、モイクより二百弗、衣類二千點を寄贈し來つた外に、尙ほ其の後送付の分及他の海外各地より送付の分も尠からずあるべき見込である。本派救災事務所に於て調達し、事務所の手を經て

罹災地に送付した慰問救護品は、合計二百二十一噸に達し、其の內建築材料五十一噸半、食糧其他の慰問品九十六噸半、愛護袋に依る救恤品百五十七噸に達する。本派關係者の設立に係る大日本佛教慈善會財團は、醫師二名、外に助手・看護婦・事務員・人夫等合計九名を以て救護團を組織し、三日出發上京、日比谷公園及上野公園に於て傷病者の救療に從事し、一日平均二百名の患者に接し、十月下旬に亙つた。築地別院始め東京市內の罹災末寺六十六箇寺其他罹災各地の末寺に對し、慰問使として連枝三名東上、慰問金品を贈つた。

本派東京出張所に於ける施爲としては、三日、築地本願寺燒跡に臨時救護部を設置し、應急救護の準備に着手し、京都本山よりの救援を待つて、各方面の活動を始めた。十日より境內を開放して、京橋區役所に約二千坪、日本赤十字社の救護所に約千五百坪、竝に裁判所臨時出張所の使用に供した。十日、天幕張の救護所を境內、上野公園美術館前、神田明治會館燒跡、日比谷公園奮音樂堂前に開設し、端書の供給・通信代筆・藥品供給・飯料供給・橫死者の讀經・飛行郵便の取次・人事相談・遺骨預り等のことに當り、三十日乃至四十日間繼續した。市內巡回講演班八箇班を遣き、『共存共榮』の題下に、人心の安定・思想の善導に資した。九月中旬に至り、諸般の準備が漸く成つたので、更に救護事業を徹底すべく第二期計畫の實行に入つた、其の種類は次の如くである。兒童愛護施設としては日比谷幼稚園・上野子供學校・深川幼稚園・深川夜學校・築地託兒所・本所龜澤町幼稚園及託兒所・三河島託兒所・深川託兒所を開設した。救護竝に濟生施設としては、日比谷醫療班・上野醫療班・日暮里醫療班・築地浴場・上野浴場・深川公園浴場を開設した。隣保事業としては、日比谷人事相談所・上野人事相談所・神田明治會館人事相談所・日暮里人事相談所・深川人事相談所・被服廠跡人事相談所・長崎町人事相談所・日比谷無料宿泊所・上野無料宿泊所・上野簡易食堂・上野職業補導館・猿江裏職業補導館・猿江裏獨身勞働者無料宿泊所・築地本願寺無料宿泊所・同罹災盲人宿泊所・明治會館跡罹災學生寄宿舍・同無料宿泊所・同婦人職紹介及宿泊所・三河島人事相談所・被服廠跡職業紹介所・本所龜澤町人事相談所を開設した。教化事業としては、日比谷日曜講演・深川日曜講演・上野日曜講演・被服廠跡臨時講演・病院慰問・巡回傳導・日比谷日曜學校・上野日曜學校・深川日曜學校等を開催した。其他民衆娛樂會・慰安會を催ふしたもの約三十箇所、慰問品の配給を爲したもの三十九箇所、兒童愛護の爲めに子供服を配給したもの約六十學校、海外信徒より寄贈に係る慰問袋及衣類雜品約五萬點は、各地の末寺をして其の罹災檀徒に配布せしめた。

遺族の請に依り法名を授與した數十一月二十日迄に約三千五百、讀經を爲した數二千二百十、遺骨預り八百二十六永代讀經取扱三千六百七十。鮮人の集團地に鮮語の巧なる布教使を出張せしめて慰問を爲し、物品及印刷物等を配布した。本派關係の婦人團體である東京眞宗婦人會・令女教會・坊守會・千代田女學校內みのり會・日の出女學校々友會等は、何れも協同して兒童愛護の宣傳、救護竝に配給品の整理に從ひ、近く上野に職業補導館を開設して、裁縫・ミシン・毛絲編物等を無料にて教授し、其の製品に對しては料金を支拂ひなどして、罹災婦人の救濟に努めつつある。地方に於ける本派關係の寺院、教會及團體等も夫々の活動を爲したのであつて、就中、大阪・神戸等の働は最も目覺ましく、西陲の島地たる沖繩縣でも克く六千四百餘圓の義金と二千五百點の衣類とを蒐集寄贈したのであるが、其の一々に就ては玆に略する。

(20) 眞宗大谷派

震災の報に接するや、直に上局會議を開いて救援事務局を設け、取敢へず金一萬圓を京都府廳に寄託した。三日

全國三十二教務所、七十七別院へ、此際慰問救護に盡力すべき旨訓電を發した。實情視察及慰問の役僧數名を東上せしめた。四日、海陸兩方面より救護部隊を派遣した。五日、天幕・張幕・荷車・毛布・椅子・疊及食糧數多を神戸發便船で送り、八日、橫濱公園に天幕張の救護所を設け、十日淺草別院燒跡に天幕張の避難者收容所を設けた。八日大工及人夫十一名を派遣し、淺草假本堂及避難者收容所二棟を建てた。四日管長は敎示を發し、七日寺務總長は諭達を發して慰問救護を激勵すると共に、心身を安堵し、思想を健實にすべきを誨へた。四日訓電を全國の敎務所及別院に發して、義捐金品の募集を爲すべきこと、慰問救護に一層の努力を爲すべき旨を促がした。六日布敎師を召集して、復興氣運の促進・共存共榮の氣風養成竝に迷信の打破に就て協議決定を爲し、右趣旨宣傳の爲めに小冊子數種數十萬枚を印刷配布した。九日管長は各地を巡錫し、尙連枝をも派して門末信徒を策勵した。十四日青年救護班員三十四名を橫濱に派遣し、死體の取片付及讀經を爲さしめた。十六日、罹災の八十餘箇寺へ金一千圓宛及見舞品を贈り、尙罹災信徒へも見舞品を贈つた。二十六日、議制會を召集して、震災事件費五十萬圓、（內應急費十萬圓、復興費五萬三千六百圓、救濟費十萬一千六百五十圓、事業費十五萬五百圓、地方部費四萬八千百圓、關東部費一萬九千三百四十圓、役員手當一萬一千三百六十圓）支出の件を議決した。十月四日大谷大學學生等は上京し、救援事務局關東支部の事業に參加した。九月二十四日より五日間、映畫班を各地に派遣して慘害の實況を見せしめ、救援方を奬勵し、且つ思想の善導に努めた。十月五日、映畫班は罹災者慰安の映畫を携へて東上した。十月十六日、法主は隨員を率ゐて東上し、十九日は橫濱別院跡、二十日は淺草假別院に於て橫死者の追弔法要を嚴修した。救援事務局より同關東支部へ送つた救恤慰問品は多額は上るのであるが、之は記述を略する。地方に於ける大谷派寺院及敎會の活動及義捐金品の募集に就ても記述を略する。東京に於ける此派寺院は相聯合して霞ヶ關なる大谷伯爵邸に救護本部を設けて、端書代筆及巡回慰問回向を爲し、端書の寄贈二萬枚を算した。免災寺院五十八寺は何れも建物及境內を開放して一般罹災者を收容した。九月十二日以後は、本山救援隊・大垣救援隊・名古屋救療班・栃木縣靑年救護班及市內末寺住職とを以て一大救護班を組織し、總務・會計・監理・通信・外交宣傳・慰問・託兒・孤兒收容・バラック監理・無料宿泊・寄贈品配給・弔祭・診療の各班に分かれて、官憲と連絡の下に活動を續けた。十月二十日、淺草別院に於て罹災者慰安大會を催ふした。活動映畫班は市內七箇所で慰安會を催ふした。十月十一日、移動浴場を始め、罹災地域三十九箇所に於て延日數百四日間之を開き、入浴者三萬六百二十人を算した。十月十七日、同二十七日、十一月七日の三日無料理髮を爲すこと九百二十人、十一月十九日無料理髮を爲すこと八百三十六人に及んだ。淺草別院境內を公衆及官公署に提供し、電話局淺草分室・公衆浴場・罹災者バラック赤十字社診療所・市立淺草圖書館等が建てられた。九月十八日より寄贈品の配給を行ひ、橫濱・小田原等にも手を延ばして、其の數量は多大に上り、衣類だけでも二十萬枚に達したが一々記述せぬ。社會事業を各所に開設した其の概略を次に記るす。無料診療所は九月十一日淺草別院境內に開き、取扱患者五千五十一人、十一月五日赤十字社診療所に引繼ぐ。佛眼協會は九月十一日眼科專門の施療所を別院境內に開き、十三年六月末日迄(以下皆同じ)取扱患者延數八萬八千八百二十六人に達した。淺草無料宿泊所は十二日別院境內に開き、收容延人員三萬二千五百五十二人を算した。上野無料宿泊所は上野公園內に開き、十三年二月七日閉鎖、收容人員五千五百四人を算した。深川無料宿泊所は十一月一日深川數矢町に開き、收容人員一萬四千九百人を算した。金杉簡易宿泊所は下谷區金杉下町戶

田邸内に開き、收容入員一萬五百三十九人を算した。淺草託兒所は十月四日別院境内に開き、十三年三月三十一日閉鎖、收容兒童延數八千二百四十六人を算した。上野託兒所は九月十六日上野公園博物館前に開き、收容兒童延數一萬七千八百七十人を算した。上野第二託兒所は十一月五日不忍池畔に開き、收容兒童延數一萬百八十六人を算した。月島託兒所は十一月二日月島二號地に開き、收容兒童延數八千五百人を算した。田中町託兒所は十三年一月二十六日淺草田中町に開き、收容兒童數八千百二十四人を算した。十二年の歲末、別院境内バラック居住民全部に對して新年用の餅を施與した。別院境内居住民の爲めに十月五日無料浴場を開き、十一月十一日市社會局の浴場開設せらるるに付閉鎖した。入浴者延數二萬七千九百九十人。市の浴場は別院に於て管理することとした。淺草本願寺簡易圖書館は別院境内に市立淺草簡易の圖書館と共同して之を開き、閱覽延人員一萬一千八百一人に達した。職業紹介所は九月中旬別院境内に開き、求人數二千八百七十人、求職者數三千百二十五人、紹介件數二千二百七十一人を算した。人事相談所は職業紹介所に併設して開き、法律相談二百五十五件、身上相談二百十二件、兒童相談六十三件を算した。橫濱託兒所竝に附屬兒童文庫は十一月十六日開設、收容兒童延數二萬二千九百六十人を算した。橫濱無料診療所は十月二十二日橫濱別院境内に開き、十三年四月二十八日閉鎖し、取扱患者延數一萬三千三百八十一人。之より先き橫濱公園内に開いた救療所は患者延數千九十一名を算した。京都に於ては、三日婦人法話會館内に救濟所を設け、京都驛にも救護班を出だし、避來者の救護、宿泊及職業紹介所に力を盡くし、十月十日迄續けた。其の間に給與した衣類・雜品・冊子・玩具・繪本等は數萬に達し、宿泊せしめた數は三千三百六十四名に達した。京都市内の寺院は極力義捐金の募集に盡力し、婦人法話會は率先金二千圓を京都府廳に委託し、金品及衣類の募集配給に盡力した。大阪・神戸・名古屋・桑名・岡崎・豐橋・淸水・沼津・三島・米原・長濱・大垣・岐阜・姬路・金澤・七尾・高田・三條・高松等の各市町及茨城縣・群馬縣・北海道等に於ける活動も夫々盛であつたが、記述を略する。

(21) 眞宗高田派

三重縣一身田なる眞宗高田派では、直に救援事務局を置くと共に、特使を罹災地に急派して調査及慰問を爲さしめ、門末一般に對しては金品の喜捨及極力救援の事に當るべき旨諭達を發し、縣衙の募集義金中へ法主より一千圓派内より二千圓を寄附し、別に罹災末寺に對して一萬餘圓及現品若干を贈付し、一身田及名古屋の驛頭に避難民救護所を設けて慰問救護を爲し、追弔大法會を專修寺に營み、再び慰問使を派して慰問に努むると共に、東京・橫濱に於て追弔法會を開き、教令を發して門末の此際に於ける心得を說き、小冊子を發行配布して聖意の遵奉を懇め、慰問袋を募集して八千箇（一箇一圓程度）を得、之を寄贈した。

(22) 眞宗木邊派

末寺及說教所へ對し、極力義金募集及救護集問に努むべき旨を布達を發し、本山よりは一千圓を寄贈して救濟の資に充て、執事及布教師を東上せしめて追悼法要を營ましめ、人心の安定をも圖らしめた。

(23) 眞宗興正寺派

末寺竝に門信徒に對し、義捐金品の募集、慰問袋の寄贈等急達を以て告示を發し、本山内に臨時救濟局を特設して其等の事務を統べ、管長は東上し、深川區東平井町に臨時出張所を設けて慰問、讀經及救濟の事を督し、京都驛頭には役僧其他が出張して日夜慰問救護を爲し、華園婦人會及日曜學校生徒をして義金の募集寄贈に當らしめ、本

山に於ては追悼法要及講演會を催ふした。地方の別院及末寺に於ても略ゝ同樣のことを爲した。

(24) 眞宗佛光寺派

義捐金の應募額を三回に亙りて二千八百圓寄贈したる外、婦人教會本支部に於ても義金の募集を爲し、竝に京都驛下車の避難民に對しても同會の役員親しく慰問救護等を爲した。尙ほ同會は罹災の檀信徒八百戶に木綿一反宛を贈與した。

(25) 眞宗山元派

本山證誠寺より金百圓、婦人會より七十二圓九十錢の義捐を爲し、罹災門信徒及避難歸鄉者の慰問・出迎等を爲し、又大法要をも營んだ。

(26) 眞宗出雲路派

管長及慰問使東上し、金百圓竝精米二十俵を寄贈し、婦人會よりは梅干二樽、下足百三十足、古着五梱を發送した。尙本山では追弔法要を營んだ。

(27) 眞宗誠照寺派

義捐金五百五十圓を郡町役場に寄託し、法要を營み、鯖江驛に救護員を派して、下車の罹災者に茶菓を頒ち、尙金五十圓を見舞として配與した。

(28) 眞宗三門徒派

金百圓及搗餅二十七俵を福井縣廳に寄託し、管長代理を東上慰問せしめ、婦人會をして慰問袋六百、其中には一圓以上七圓迄の衣類及日需品を容れ寄贈せしめた。

(29) 日蓮宗

四日、宗務院に會議を開いて救護慰問及法會等に就き議決し、日蓮宗震災救護團を組織して管長その總裁となり百餘名の委員を置き、直に部署を定めて之が實行に着手した。藥品・御符等を携へて慰問巡廻を爲すこと九日間、その從事延人員百二十七名、外に視察慰問を爲すこと二十六日間。芝區二本榎町なる本宗大學寄宿舍を開放して避難者十七家族七十餘名を收容すること二十日間、之に慰問品を給與した。全國の末寺に檄電を發して義捐金品の募集に着手せしめ、更に宣傳使を遣はして之を督勵せしめ、相當多額を蒐集した。被服廠跡に回向所を設け、役僧を常置して常に其の任に當らしめ、三七相當日には管長大導師となり、衆僧二百五十名を率ゐて大法要を同所に嚴信し、別に末寺の僧侶百餘名にて川施餓鬼を修行した。教師・學生多數隊を組みて集團バラックの慰問を爲し、或は人時相談に應じ、或は慰安會を開き、又藝人を聘して慰安演藝會を催ふした。每日曜及祭日には大學生の御伽噺慰問隊を組織して橫濱方面を巡廻し、バラック集團地の兒童をして聽聞せしめた。

(30) 本門法華宗

食糧米及衣類の供給を企てて直に之に着手し、別に一般寺院をして義金の募集に着手せしめた。斯くて其の應募高は、義金四千百九十圓、古衣類四千點、米四十俵に上つた。宗内の寺院教會、就中麻布區乘泉寺所屬の佛立講教會團は金一萬圓を出資して、罹災寺院へ五千圓、一般罹災者へ五千圓及慰問袋五千箇を寄贈した。役僧を特派して視察慰問を爲さしめ、又法會を營んだ。

宗内各支所長に布達して義捐金を募らしめ、罹災地附近の寺院を開放して罹災民の收容に努めたが、收容延人員は一萬六千三百五十六人を算した。

(31) 法華宗

宗内寺院に豫告を發して、金圓物資の喜捨・罹災民の救護・横死者の追弔法會等を行はしめ、本山に救護部を設けて其等の事務を統一し、宗務員を上京せしめて視察慰問を爲さしめた。救護費二千二百三十七圓、法要費は百五十圓を支出した。

(32) 融通念佛宗

臨時救護部を設け、宗内に諭達を發し及教師を遣はして救濟方を宣傳し、義捐金品の募集及罹災者の救護を爲し、各寺院及教會をして追弔會を催さしめた。

(33) 法相宗

本宗社會部は三日間奈良全市に亙つて救護物資の寄附勸化を爲し、金五千圓を縣廳に寄託し、約二週間停車場に出張して避來者の慰問救護を爲し、又大法要を營んだ。

(34) 華嚴宗

東京佛教團と協同して救護弔祭本部を芝增上寺内に設置し、以て官民一般の救護運動を援助し、之が統一連絡を圖り、併せて人心の豫定及災後の復興を促進するに努めた。

(35) 佛教聯合會

第四　基督教

(1) 天主公教會

小石川區關口なる聖母教會に於て、一日より十月二十日迄の間避難民を收容した延數五千二百餘人、信徒より寄贈した衣類二百數十枚及日用品を配給した。麻布の聖心教會に於ても避難民を收容して物資の配給を爲した。大阪教區よりの送金及東京公教青年會の募集金額六千八百九十一圓餘及衣類は何れも罹災者に分與した。神田猿樂町の教會堂及學校が罹災したことは本教にとつて大打撃であつた。

(2) ハリストス正教會

本教傳道團・婦人會・神學校々友會等の活動に依り、義捐金四千八百四十圓を醵集して、罹災信徒及一般罹災者に分配した。駿河臺の大殿堂が罹災した爲めに大打撃を受け、救護が意に任せなかつたことを遺憾とする。

(3) 組合基督教會

臨時社會事業所を本所區外手町に設けて無料浴場及簡易食堂を開始し、其の費用二萬圓は日米支三箇國の組合教會より寄附した。靈南坂教會は會堂を開放して罹災民を收容した。今回生じた迷兒及孤兒五十餘名を引受け、靈南坂に假家を建てて鞠育しつつあつたが、漸次引取人も生し、約半數に減じてゐる。(十月末の現況)

(4) 日本バプテスト教會

四谷教會に事務所を設けて義捐金品の募集を爲し、金一千二百圓及衣類二千餘點を得て配給した。

(5) 日本メソヂスト教會

残存の麻布教會・三田教會及青山學院を開放して罹災者を收容保護し、朝鮮人・支那人をも之に容れた。九段教會及駒込教會は醫療救護所に充て、更に九段教會を姙婦保護所に充てた。牧師信徒協力して救護團を組織し、物資の醵集及配與に奔走し、燒失した會堂跡にバラックを急造して、診療・人事相談・託兒等の事業を始めた。地方の教會に於ても、赤十字其其他の團體と協力して避難民の救恤慰問を爲した。被害教會の復舊、罹災の牧師信徒及一般罹災者救濟の爲めに資金の募集を企て、十月二十日迄に三萬七千圓を醵集し得た。

(6) 美普教會

東京部では三協會協力の下に義金五百六十四圓其他衣類・夜具等を蒐集寄贈し、會堂を開放して避難民を收容した。靜岡部では五教會協力の下に義金五百二十圓・衣類八百五十點、足袋及草履各數百足、白米六斗及慰問袋、藥品等を募集寄贈し、清水港上陸の避難者を會堂及牧師館に宿泊せしめた。名古屋部では六教會協力の下に義金一千餘圓其他衣類慰問袋を數多蒐集寄贈した。

(7) 福音教會

四教會・一寮舍に於て避難者を收容した數五百十六名、殊に小石川教會では傷病者四十人、指ケ谷町愛泉寮では迷兒五人を收容保護した。本教會々員の罹災者百數十人に金三千圓を醵集寄贈した。

(8) 同胞教會

罹災地外の各教會では、金品の醵出・物資の寄贈を受け、各團體と協力して救護に努め、職業紹介・巡回看護等をも爲した。別に金三千圓の醵出を得て罹災會員を救護すべく計畫した。大久保・澁谷・原宿の三教會では、衣類千三百點、下衣類七百點、下足二百點、雜品七百點を蒐集寄贈し、避難者を收容したこと計二百名に及んだ。

(9) 同仁基督教會

主として會員の罹災者に對し、衣類を蒐めて寄贈し、住居及職業の周旋を爲した。

(10) 基督友會

少年奉仕團を組織してバラック掃除を爲し、慰安音樂會・活動寫眞會等を開き、婦人會員は失業婦人の爲めに編物教授を始めた。芝公園内に二十八棟の簡易住宅を建てて寄附した。

(11) クリスチヤン教會

東京の四箇教會では避難者の收容及物資の蒐集寄贈を爲し、殊に麻布の教會では婦人會の事業として牛乳の配給を爲した。地方の大田原・宇都宮・眞岡・矢板・岩出山・仙臺・磐井の各教會では、所在救護所の應援に從事し、義捐金品の蒐集寄贈に盡力し、現金で總計五百四十四圓、衣類だけで五百餘點に上つた。

(12) 東洋宣教會

淀橋町の聖書學院を開放して罹災者を收容し、一時は百餘名に上つた。新宿驛に救護班を置いて避難者の救護に從事した。神田教會・秩父教會・上諏訪教會では義捐金品の募集を爲した。

(13) 救世軍

救世軍では神田の本營及中央會館を始め下谷の病院、淺草及月島の勞働寄宿舍、本所の社會植民部、其他東京及横濱に於ける多數の會館を燒失した上、士官二名を喪つた。二日、假本營を牛込市ケ谷なる本軍士官學校内に設け、

慰藉、救護及救靈の事業に取懸つた。第一に着手したのは慰問運動で、數十名の士官・兵士・義勇團員は眠食を忘れて日夜奮闘した。食糧品を始め日用物資を調達して、市内の避難集團地を訪問し、之を寄贈したが、その數十月末日までに約十五萬人に達した。尋で着手したのは隣保事業で、芝離宮・日比谷・九段・上野及青山外苑のバラック集團に於て、數人宛の士官が住居を構へ、毎日巡回して親切に奉仕する。其の場所々々に巡回看護婦及巡回助産婦も居る。更に芝離宮・九段・上野の三箇所に於て尚別に柳島梅森町の社會植民部跡に於て何れも兒童保育園を開始した此處では日曜毎に日曜學校をも營み、且つ折々は兒童の親達及隣人の爲めに講演會、說教等をも催ふして、環境の風化にも努めつつある。日比谷・丸ノ内・九段等では、市からの委托を受けて、毎日一石六斗宛の牛乳を幼者や病弱者に配布し、時々は家庭を訪問して慰藉救護を爲した。十二月よりは、下谷區仲徒士町なる本軍病院跡に大バラック病院を建て、米國の救世軍より送付して來た醫療器械、衞生材料等を据付けて、救療事業を復活し、日々幾百名の患者に接しつゝある。淺草區黒船町・京橋區月島に職業紹介所を置き、市府其他の該事業と連絡をとりつゝ盡瘁しつゝある。月島にバラックの勞働寄宿舍を建て、獨身勞働者百人を收容するの設備を構へて其の需用に應じつつある。府下中野在なる本軍結核療養所及麻布なる本軍婦人ホームは、災後收容者の數が二倍三倍となつてゐる。災後本軍は、横濱に於て、市よりの特別の依頼に因り、總て歐米人の救護を要するものの爲めに活動を開始した。之が爲め市は櫻道に大バラックを建設して本軍に委託した。

(14) 基督敎青年會

同會の事務所は、青年會館と共に燒失したが、山本總主事外幹部は翌二日燒跡に會合して市民救護の運動を開始することを決し、東京市役所に交涉し、會員有志を督勵して、死體の取片付、飮料水の供給、人事相談所を設け、更に幹部を關西に急派して阪神の青年會及敎會に援助を求め、九月九日大阪青年會佐島總主事は十名の職員と多量の物資を携へて到着し、玆に全國青年會の協同事業として活動することを決議し、救護テント・兒童收容所・巡回慰問部・巡回診療部・應急建築相談所を組織した。テント事業は地方行の避難者最も多き際に日暮里・田端・芝浦に設けたが、九月末日に之を廢止し、尋で須田町・六本木は十月初旬に廢止し、新に上野・錦糸堀・明治神宮・岩崎公園・芝離宮等に設け、更に芝浦より神戸・大阪に向ふ避難者の輸送船に對しては船內慰問班を乘込ませて便宜を與へた。横濱は九月十四日名古屋より職員到着と共に横濱支部の事業を開始し、會館・横濱驛前・長者町の三箇所に於て救護をなした。尙ほテント部では避難者の事情調査・身上相談・職業紹介・法律相談・生乳及煉乳配給・慰問品配給・代筆及尋ね人搜索・慰安(講談・蓄音器・お伽噺)傷病者應急手當、兒童の敎養(テント學校・運動遊戲)圖書雜誌閲覽等をなし、收容部は第一收容所(神田區美土代町東京青年會體育館)第二收容所(本所區龜澤町元電氣局出張所跡)に之を設けた。

慰問部は毎月數十名の敎師、信徒を數班に分ち、他部と聯絡し全市に亘りて罹災者及其家族を訪ひ次の事業をなした。罹災者家族慰問及實情調査、應急救護物資配給、葉書配給及書狀代筆、講話並活動寫眞、職業上・人事上の指導、行方不明者の搜索(家族カードは既に一萬家族、行方不明者のカードは一千五百枚を作製し、日々平均三名を發見通知しつつあつた)。更に震災地基督敎事業復興調査會を組織し、傳道部・敎育部・文學部・社會部に別ちて活動を始め、一方震災救護聯合祈禱會なるものを屢々開催した。建築相談部では關西方面より多量の木材を取よせて

低廉なる値段にて供給し、醫務部は第一收容所の外に上野・本所には夜間診療をなし牛乳配給は毎日一石二斗より二石六斗、煉乳は毎日平均百四十四罐(十月十日現在)を配給した。

本所基督教産業青年會

十月十九日、本所區松倉町二丁目に假事務所を開き、罹災者の爲めに各種の社會事業を施爲した。託兒所に來る一日平均人員六十人、配乳所八十七人、診療所百五人、別に教育部を開き、英語・裁縫・編物等を教授しつつある。賀川豐彦氏を主たる經營者とする。

第六篇　諸外國の同情

第一章　概　說

日本大震災の報が無線電信其他に依つて海外諸國に傳はるや、何れの國に於ても其の政府たると民衆たるとを問はず、被害の甚大なるに驚愕せざるはなく、殊に世界に重要の地位を占め、獨特の文化を有する極東帝國の首都や主要港が、殆ど全滅同然とも謂はれるまでに破壞し燒燼したといふことは、實に世界的の大凶變であり、國際的の大事變であるとして、深刻なる衝動に打たれ、甚大なる同情心と旺盛なる義俠心とを喚起し、決して之を對岸の火災視することなく、此大災禍に遭ひたる哀れむべき民衆を賑はし、其の善後の事に關して幾分にても力を添へることは、是れ實に人類本然の責務であり、友邦相互の交誼であるとして、國の遠近・大小・親疎を問はず、人種・宗教の異同を論ぜず、恰も言ひ合はしたかの如くに、一齊に同情を披瀝し、援助に着手した。或は宮廷・政府の官吏を我駐劄公使館に派して見舞を述べ、或は我皇室・政府及罹災の府縣市等に對して見舞又は慰問の辭を寄せ、或は救濟運動を起し、多額の義捐金品を募集して寄贈し、或は救護隊を組織して遙々派遣し、或は救護復興物資の調達輸送に努め、或は視察慰問の爲めに態々人を派し、又各新聞雜誌は筆を揃へて深き同情の辭を掲げ、救濟を絶叫するなど、世界の隅々に亙り、國々に及び、元首・政府・公共團體及民衆を通じて、何れも衷情を披き、赤誠を籠めて、敏速且

適切なる慰藉救護の方途を講じ、以て克く國際共助・四海同胞の大義を實現し、人類相愛の爲めには國境もなく繋爭もなきの概を遺憾なきまでに發揮し、世界史にも國際史にも未だ曾て見ざるほどの美はしき活動を示して、我當局に力強き援助を與へたことは、曾に直接其の好意に浴した罹災民のみならず、畏多けれど　皇室の御滿足は云ふも更なり、國民一同の深く感銘して已まぬ所である。而も尙之に依つて我邦と諸友邦とは、互に一段の諒解を得、親善を加へ、延いては平和を確保する上にも尠からざる力を得たことは疑ふべきでないのであつて、之は災厄に伴ふ一つの圖らざる收穫とでも謂ふべきであらう。

尙又、海外各地に移住勤勞せる我同胞が、今次の災殃を聞いて、何れも且つ驚き且つ悲み、衷心の至情を捧げると共に、多額の金品を醵集して遙々寄贈し來り、救護の資に加へたことは、是れ畢竟祖國を愛護する精神の發露であつて、亦我が美しき國民性の發現として大に誇りとする所である。

實に今回の災禍は、世界的大なるものであつたと共に、之に對する同情援助も、亦世界的に旺なるものであつたのである。其の諸國及在外同胞よりの寄贈金品は、多寡固より一樣でないのであるが、帝國政府及國民は、是れに依つて毫も感謝の念を異にするものでないといふことを、本節の冒頭に於て敢て一言する次第である。

諸國同情援助の一斑

諸國の同情及援助の狀況に就て先づ概括的に記るすならば、締盟諸國の元首より我皇室に對して御見舞の辭を寄せられたのは申すに及ばず、更に帝國政府及國民に對し、正式に同情若くは見舞の意を表したものは實に四十箇國の多きに上ぼり、世界の隅々に亙つた。其の國名を列擧すれば、英吉利、北米合衆國、支那、佛蘭西、伊太利、白耳義、獨逸、墺地利、洪牙利、和蘭、瑞典、諾威、瑞西、露西亞、丁抹、希臘、土耳古、羅馬尼、西班牙、葡萄牙、亞爾然丁、伯剌西、智利、玖瑪、コロムビア、チエツク・スロヴアキア、エクアドル、芬蘭、ラトヴイア、ユーゴー・スラヴ、ルクセンブルグ、墨西哥、パナマ、波斯、波蘭、秘露、サルバドル、サンマリノ、セルブ・クロアート スロヴエーヌ、遏羅等で、別に羅馬法王廳よりも見舞の辭を受けた。以上諸國の中には本邦と未だ修交なき國もあり、又平素殆ど交涉なき國もある。我國の大震災が如何に廣く且つ深く衝動を與へたかは、之に依つても判かるのである。

尙ほ以上の外、米領比律賓、英國の自治領たる愛蘭、加奈陀、濠洲、新西蘭、南阿聯邦、英國海外領土たる印度錫蘭、緬甸、馬來聯邦、海峽植民地、香港、佛領印度支那、蘭領東印度等の政府、政廳よりも、其他國際聯盟、主要聯合國大使會議、赤十字國際委員會、赤十字聯盟、救世軍本部、世界教育聯盟協會等の如き國際的機關又は團體よりも、夫々同情又は弔慰の表示に接した。公私團體及個人よりの同情表示に至りては殆ど枚擧に遑がない有樣である。

佛國及伊國の如きは、日本國民の不幸に對し、特に國民的表弔日を定め、其當日は半旗を揭げ、歌舞音曲を停止して、哀悼の意を表し、瑞典及波蘭の如きは、民衆の有志が寺院に參集して祈禱會を催し、震火に因る死亡者の冥福を祈るなど、鄭重を極めたのもあつた。

義捐金品の募集に就ては諸國とも非常なる熱心と努力とを捧げた。之に就ては國別にして次項に記するのであるが、玆に其一班として著しきものを記るすならば、米國の如きは大統領の教書を以て同國赤十字社を通じ、國民に

勸告する所あり、各種の募集運動は到る所に行はれ、忽ちにして數百萬弗の應募を見たのみならず、寄贈品をも頗る豐富に蒐集し得た。英國でも同情著るしく、各方面の救濟資金が多額に募集された中に、倫敦市長の募集した額の如きは十八萬磅にも達した。佛國では大統領及政府援助の下に巴里新聞組合の斡旋に依りて多額の金品を募集し伊國では政府より百萬リラを同國赤十字社に交付して救護物資の調達に充て、白耳義では皇室竝に政府後援の下に救濟委員會を組織し、是亦多額の金員を募集した。支那では、大總統令を發して國帑二十萬元を支出することとなり、同時に地方官憲有志竝に團體に對し、義捐金品の寄贈方を慫慂し、幽屏の悲境に在る前清の宣統帝は、特に家資を阿堵物に代へて義捐の資に供せられた。其他の諸國でも配意が一方でなかつた。直接救護では、英・米・佛・伊諸國は東洋方面に在る自國の艦隊又は船舶を急派して救護事業を援助せしめ、就中米國は横濱山下町及東京高松宮邸に、佛國は東京の大使館跡及赤羽橋の舊有馬伯邸に救護病院を設置し、支那の紅十字團は救護班を派遣して我赤十字社を援助し、何れも鋭意熱心に罹災傷病者の救療に從事した。其他海外各地に在留する本邦人は何れも一齊に救濟運動を始め、其募集したる義捐金品の額は海外より入つた全額の約一割に達した。

若し各國の寄贈に係る救恤金品の明細を掲げるならば、恐らく數十頁を費しても足らぬのである。左記は只其概括及主要なるもの（十一月三十日までに於ける）に止まるのである。

米國及屬領

赤十字社取扱義捐金總額（米國赤十字社の計算に據る）　約一千六十萬弗

内物資購入		約五百十萬弗
現　金		百十萬弗
殘　金		約四百三十萬弗
米國陸軍義捐品（米國大使館評價）		約七百萬弗
（横濱及麻布天幕病院等に使用）		
米國海軍義捐品		約二百萬弗
（震災直後軍艦「ブラックホーク」號等から物資を滿載して本邦へ急航せるもの等を指す）		

英國及屬領

現　金	約三百八十萬圓
（倫敦市長主催の「マンション・ハウス・ファンド」各自治政府の醵金等を含む）	
物　資	
a. 震災直後極東艦隊旗艦「ホーキンス」號は食料品・醫療材料布等を滿載して本邦へ急航せり。	
b. 「マンション・ハウス・ファンド」に屬する醵金中前記の現金を除きたる約一萬磅を以て購入せる物資	
c. 加奈陀政府支出の二十萬弗及赤十字の募集醵金により購入せる本材等多量の物資	
d. 濠洲政府主催の委員會募集醵金約十萬磅に相當する各種物資右は「オーストラルマウント」號安藝丸及「マドラス」號にて到着	
e. 香港聯合救濟會より毛布等	

支那

現　金	約八十萬圓
（註）前記金額中には大總統令にて發表の二十萬元を含まず右は帝國政府に於て正式の申込を受けざる爲なり	
物　資	東三省より五十萬元に相當する各種物資
	世界紅十字會中華總會より米多量

佛國及屬領

現　金	約二十萬圓
物　資	新聞組合主催の約二百萬法に相當する病院

伊太利

現　金	ローマ法王廳の約四萬圓
物　資	政府支出に係る百萬リラ等にて購入せる物資

白耳義

現　金	約十二萬圓（皇帝及政府等後援の下に組織せる救濟委員會募集の醵金に屬す）

和蘭及屬領

現　金	約二十萬圓

埃及國	物資	政府寄贈に係る醫療材料一式	
瑞典	現金	震災直後支那に碇泊中の汽船に来約三千袋を積載	約五萬圓
	物資	尚最後に一言附記すべきは、在外帝國臣民が母國救濟の爲、多額の金品を寄贈したことで、就中在米邦人の如きは、現金のみにても約二百七十萬圓の巨額を醵出したことは、特筆に値すべきである。	
		以上外國よりの義捐金及寄贈品の額を救護事務局取扱大正十三年一月末日現在に依つて記るすならば左の如くである。	
		義捐金一千四百七十五萬二千九十三圓四十八錢三厘（內實際の收納額一千三百四十六萬三千七百三十七圓六十一錢六厘）	
		寄贈品見積價格一千八百六十一萬三千三百圓。	

（右義捐金額は國內應募の義捐金額の約四割四分に相當する。寄贈品の見積價格は外國・內國略々同額である）

外國の寄贈品は其種類百二十六、數十萬點の多きに達した。就中、米・罐詰・小麥粉・ミルク等は食糧品中の首位を占め、衣類及毛布は被服・寢具中の上位に居り、木材十萬九千七十五石、天幕二千三百十五張、天幕材料六千六百九十四箇等は諸材料中の主なるものである。此等寄贈品を罹災民に配給するに際しては、出來得る限り諸外國よりの同情に基く義捐品たることを周知せしめ、其の好意を徹底せしめるやうに努めた。

外國寄贈品の主要なるものは、罐詰六萬四千二百九十二箱、同九百五十三叭、同一萬封度、同三百二十石、小麥粉十八萬二千三百十八袋、衣類二千七百九十二梱、同九十二箱同九千八百六十一包、同五百九十七袋、同一個、ミルク一萬五千七百九十五箱、毛布一萬四千七百四十七梱、同三千六百五十枚、木材十萬九千七十五石、自動車十五臺、天幕及其材料二千三百十五張、三千六百九十四個、組立倉庫材料四千三百三十五個、同二十五枠等である。

我國民の表謝

以上の如く、世界各國より深き同情を寄せられ、手厚き援助を受けたことの、我國民に如何なる印象を與へたかといふことは、當時全國都鄙各新聞が筆を揃へて深き感謝の意を表し、又、罹災民たると否とを問はず、互に話し合つて盛に其の好意を謝してゐたのに見ても、非常なる感謝を銘したことは瞭なることである。其他ウッヅ米大使が歸省の爲め出發するに際し、都民數萬之を見送りて大使の當時に於ける斡旋の勞を謝したるが如き、比律賓救護團の歸國するに際し、阪神市民の多數が之を途に要して熱誠籠めたる歡待を爲したるが如き、都下の各大學生が主催となつて、感謝署名帳を援助諸國の元首に贈呈すの擧を企つるや、忽にして數十萬人の署名を得て、日本、否世界にも曾て見ざる多大數の署名帳が旬日にして裝幀されたるが如き、貴衆兩院を始め各地方の自治・團體實業團體等に於て夫々感謝決議を爲したるが如き、東京市民其他各新聞社等の催に係る盛大なる感謝會の如き、此等の事例は殆ど枚擧に遑がない。帝國政府は諸國よりの同情表示に對し、其の都度深厚なる謝意表示を爲した。

十二月十一日、臨時議會開會の節、開院式に於て、攝政殿下御朗讀の勅語中には、左記の文がある。

今次ノ變災ニ當リ(中略)此時ニ際シ宇内ノ友邦亦咸我國民ニ救援ノ至情ヲ寄セタルハ朕ノ特ニ銘記スル所ナリ

右臨時議會の初めに於て、滿場一致を以て決議せられた、貴衆兩院の諸外國に對する感謝決議文は左の如くである。

貴族院

本邦大震ノ悲報一タヒ海外ニ傳ハルヤ各國ノ元首及國民ハ直ニ崇高ナル同情ヲ寄セ至大ノ援助ヲ與ヘラレタリ是レ我國民ノ感激シテ忘ルル能ハサル所ナリ玆ニ貴族院ハ院議ヲ以テ深厚ナル謝意ヲ表ス

衆議院

衆議院ハ振古未曾有ノ震災ニ際シ列國ヨリ寄セラレタル深甚ナル同情ニ對シ玆ニ院議ヲ以テ感謝ノ意ヲ表ス

尙ほ參考の爲め、東京市民の催に係る對外市民感謝會の狀況を記るす。同感謝會は十一月十二日午前十時より日比谷公園音樂堂に於て開かれた。正面ステーヂの一方には、英・佛・伊・獨の各一使(米大使は當時歸國中)を始め友邦約二十箇國の公使が列席し、他の一方には伊集院外相・永田市長・宇佐美府知事及各主催者側の代表者が列席し、暖かい小春日和は菊の薫りを漲らし、會場は市民で一杯であつた。永田市長は壇に立つて、『今日の平和記念日を選んで、私達東京市民は友邦の厚い同情に感謝したいと思ひます云々』と開會の挨拶を述べ、英大使エリオツト博士は之に對へて、『私共友邦は只出來得る事を致したまでで、恁うした盛大な感謝會などを開いて頂くことは却つてお恥づかしい次第である』と謙遜した。藤山東京商業會議所會頭から左の決議文が讀み上げられると、滿場の市民は一齊に拍手して即決したので、直に白耳義大使の手を經て友邦諸國に贈られた。市長の發聲で諸國の萬歳が唱へられ、引續き軍樂隊の演奏に移り、正午近く、主賓と主催者との握手裡に會は閉ぢられた。午後よりは餘興の催しがあつた。場外では感謝署名帖への署名が所々で盛に行はれ、紳士も淑女も學生も勞働者も先きを爭うてペンを走らせた。

決　議

今回の大震災に際して寄せられたる友邦諸國の深甚なる同情と敏速なる救援とに對し吾々二百萬の東京市民は衷心より感謝の意を表す

對外市民感謝會

國際聯盟其他の同情

尙ほ諸國に就て記述する前に、各程の國際會議よりの同情に就て記るさねばならぬ。

九月三日、瑞西ゼネヴアに於て開催中の第四回國際聯盟總會では、濠洲代表前首相クック氏は、『國際聯盟會は日本國民の遭遇せる大震災に對し深厚なる同情を表す』との動議を提出して、熱誠なる演說を試み、『我濠洲は日本に對し最大の敬意を表するものなり』と述べて喝采を博し、又智利及波斯の代表よりも熱烈なる演說あり、斯くて右動議は滿場一致を以て可決されたが、更に佛國代表の發議に係る國際聯盟の經費に對する日本の分擔金十二單位を減額すること、聯盟各國に對しては、日本の國定圖書館へ圖書七十萬卷の寄贈を要求することの決議を爲した。三日の總會に於て各國代表は個人的に義捐を申合せた處、立どころに世界各方面四十五箇國の代表より一萬七百八十五圓餘に相當する金額が集まつて、我代表に手交された。

聯合國大使會議でも鄭重なる弔意を申入れた。

東京帝國大學圖書館所藏圖書の燒失に對しては、諸國の大學及學者達は惜みても尙餘ありとし、補充の意を以て多數の圖書を寄贈せられた。

世界教育聯盟協會長トーマス氏よりは、日本罹災兒童に同情を寄せ、彼等の其學校に復歸することを助くる爲め、其の衷情を聯盟加入の諸國に訴へつつある旨の電報があつた。

在ゼネヴアの赤十字國際委員會では、我政府の赤十字社に對し、深甚なる哀悼の意を表すると共に、我同社に於て希望の事項があるならば、直に之に應ずべきに付、申越あり度旨の申出があつた。

之より諸國に就て一々記述することとする。但し玆に記述する救援狀況には、未だ結末に達せざる中途の狀態に在るものも尠からぬ。隨つて義捐金品の數額等も、未だ總決算に至らざるものがある。尙念の爲め一言すべきは、本節の記載事項は總て屬地主義に依つたもので、其國々に在留する邦人の同情援助も含まれてゐることである。

第二章　各國の救助

北米合衆國（本國）

米國の救援は其迅速であることと、大規模であることとの二つの點に於て、殊に異彩を放つものがある。

玆に米本國の救援を敍するに先だち、駐日大使ウッヅ氏の斡旋盡力に就て記るさねばならぬ。大使は着任間もなく大震に遭遇したのであつて、當時米國大使館も亦全燒の災厄に罹り、大使夫妻は負傷したる母堂を率じて纔かに身を以て免がれ出でた有樣であるが、大使は災禍の慘狀を親しく目擊して惻隱の情に禁へず、殊に罹災民が取亂したる態もなく健氣に行動を續けつつあるに痛く感動して、一入同情の念を高め、乃ち身を挺して銳意勵精、館員を指揮して救援の事に盡くした。米國よりの多大なる援助は、直接間接大使に負ふ所が尠なくないのである。大使夫人も亦夫君と志を同じうして救護の事に勤しみ、姑君を看護するの傍、馴れぬ針を手にしてキモノや足袋などを縫ひ、救恤品として差出したといふことである。

ウッヅ大使の措爲した事項は數々あるのであるが其の中、主なるものを左に擧げる。

米國大使より、今回の震災に對し、直に比律賓政廳に打電し、快速力の巡洋艦にて、出來得る限りの糧食を日本に輸送するやう手配し、其分配は全部日本政府に一任したき旨、外務省に申出があつた。

大使は四日午前、田中外務次官を訪ひ、米國大統領より天皇陛下宛左記御見舞電報の執奏方を依頼した。

日本國民の被れる大災害の報を受け、予は玆に衷心よりの同情を陛下に致すと共に、貴國民の怖るべき困厄を輕減する爲め出來得る限りの助力を爲すは、予が眞實冀ふ所なることを陛下に表明す。　カルヴイン・クーリッヂ

大使は今次の大震災に付、本國國務省に電報を發し、東京市中のみにて住居を失ひる者既に一百萬人以上ある爲め、差當り之が救濟には罐詰・煉乳・麵麭粉・下着類・亞鉛板・假小屋用木材等の物品を必要と認むるに依り、至急送付方を依頼せりと。

六日大使は外務次官を訪問して、數隻の米國艦船が、比律賓方面及本國より多量の食糧品・衞生材料等を積込み、

醫師其他救護從事員をも搭載して續々來航しつつありとて、一々其艦船名を列擧して報告した。

大使は五日在留米國人に對して左の告示を爲した。

前古未曾有の災害に際し、在留外國人が日本人に對して深甚なる同情心を發露するは人としての義務なり。予は在留米國人が日本人罹災民に友愛深き態度を以て接觸し、交通、運搬其他の制限に對して、嚴肅且忠實に其命令を守らんことを切言す。

米國大使館救護部（帝國ホテル内）に於ては、自國人に限らず他の外國人罹災者に對しても、衣類・食糧等を給與し、尚此際滯京の必要なき外國人に對しては、成るべく、震災地域外に退去することを勸告し、之が爲めに便宜を與へた。

大使は、我震災救護事務局に對し、大使館に在る自動車五臺及附屬品を寄贈した。

尚大使は、日頃親交ある邦人某と會見の折左の如く語つたといふことである。

今回の震災に就いて、私は早速各方面を巡視したが、斯くの如き前古未曾有の災厄に遇ひながら、罹災民は少しも氣落ちすることなく、老幼婦女子に至るまで非常な決心と勇氣を眉宇の間に漲らさせながら、整然たる秩序の下に、鋭意跡始末に從事しつつあるのは、世界何れに於ても見ることの出來ない大國民の態度である。之を以て思ふに、此の災厄の洗禮を受けた日本が、必らずや近き將來に於て、更に〳〵偉大な國家を現はすことは、少しも疑ふの餘地がないと。

大使は十月賜暇歸國したのであるが、其出發の際に於ける我官民の送別は非常に盛であつた。之に就て米國政府の某新聞紙には左の記事を載せてゐる。

ウッヅ大使東京出發の際に於ける一般の送別は、在日外國使臣の未だ曾て受けたことのないほど盛大なものであつて、到底通例見る外交的の交際振として所期し難いものである。右は這回の米國援助に對する感謝の發露に外ならぬ。米國民の眞情は慥かに日本國民の眞情を以て迎へられた。云々。

日本大震災の報は、早くも一日の夕刻、無線電信に依りて米國に達し、各地に甚大なる衝動を與へ、深甚なる同情を喚起した。華盛頓政府は、直に大統領よりの見舞電報を發すると共に、時を移さず援助の方途を樹て、第一に比律賓政廳に打電して、能ふ限りの食糧及救護物資を日本に輸送すべく命じ、同時に支那近海遊弋中の米國亞細亞艦隊に對し、即刻震災地に赴援すべきを命じた。是に於て同艦隊は所在より食糧其他の物資を滿載して續々來航之を我當局に引渡すと共に、更に當局の委囑に應じて、避難民及諸物資の輸送、無線電信の連絡等、重要の任務に從事した。一方比律賓政廳に於ても、不眠不休の活動を爲して、食糧・醫藥・天幕・寢具・毛布等を調達し、順次メリット號外二隻の運送船に積載して來航した。其の貨物中には假設病院・運水車・厨房等もあり、用意の極めて周到なるものがあつた。比島駐箚軍司令官リード將軍は、數多の軍醫看護婦を率ゐてメリット號に搭乘し來り、取敢へず橫濱山下町・東京築地等に假設病院は建てられ、避難者の爲めに別に神戸にも建てられた。尚比島總督の最高顧問たるマッコイ少將も旅行先の支那より命に依つて來航し、日本赤十字社と協同の下に、前記の假設病院を監督することとなり、一同鋭意熱誠、獻身的の活動を續けた。九月十日、青島方面より軍艦ブラックホークが品川に入津したのが即ち米國救援の最初で、之と相前後して入津した英艦ホ！キン號と共に、外國救援の魁であつたのである。

其の搭載品目は、米二十八萬一千斤・大豆二十一萬五千斤・麥粉十五萬斤・醬油二萬九千斤・鹽一萬八千斤・生牛肉三萬二千斤・生豚肉一千斤・馬鈴薯三萬一千斤・牛乳二百五十箱・牛肉罐詰三千斤・鯖罐詰一千斤・卵四萬箇・林檎五萬斤・莚七萬二千枚・木材一萬二千六百餘箇・木材(板)一千三百枚・木材(小角)四百二十四本・テント用材三百十八本・ガソリン三千ガロンであつた。引續いて來航した艦船に就ては略して記述せぬ。此等の山なす物資を曳々聲して陸揚を始めた時には、悲痛に沈める我國民に、如何に力強い慰安を與へたことであらう。

斯くして尚ほ米本國に於ては、三日午後、大統領クーリッヂ氏より米國赤十字社を日本救援事務所本部に指定して、『此際有らゆる力を傾注して、迅速に援助の途を講ずべき』旨の教書を發し、之に基いて熱烈なる救濟運動は同社を中心として到る所に開始された。是に於てか全米を擧げて一層深き同情は油然として起り、義捐金の募集に對しては『一分間速かなれば一人多く救助さる』との意氣を以て之に當り、富豪は率先して出金し、夫のロックフラー氏一族より二十萬弗の出捐あり、豫定額五百萬弗は忽ちにして突破し、二週間を出でずして八百萬弗に達し、大統領は國民並に赤十字社に對して感謝の敎書を出だすほどの盛況を呈した。同情が如何に盛であつたかを示す爲め其の狀況の二三を左に述べる。

紐育では九月一日の夜早くも京濱全滅を報道せられたので、翌二日は日曜日であるにも拘らず、全市の勞働者は殆ど全部就業し、其日の勞働賃の幾部は義捐金に提供された。

紐育の救世軍にては、數十人の同軍兵士が各〻提灯を手にして街頭に立ち、『日本を救へ』と大聲に呼んで、櫻の造花を通行人に賣付け、それを胸にかざした人が街々に滿ちた。

日本人で稀に活動寫眞館や劇場に入らんとする者もあつたが、『君は君の同胞は思はざるか』、『君は君の國の大凶變を聞かざるか』と木戸口で怒鳴られ、赤面して引下がつた。

紐育ブルークリンの諸團體は相聯合して、赤十字社の日本救濟義捐金募集を後援する大運動會を催し、小學兒童の群は悉く日米國旗を手にして救援を高唱した。

桑港では妙齡子女の一隊が義金を集める爲めに街頭に立つて花賣りをしたが、一束の花が五弗・十弗といふ法外な値段で飛ぶが如くに賣れた。

某地の某新聞記者は演劇物見の催しのあつた節、二百萬の友邦人が困窮に陷つてゐる、今日此頃、安閑と觀劇を爲すに忍びないとあつて、それを謝絶し、五十弗の義捐金に『地震・火事・洪水に鍛へられて來た、崇高なる富士山を象徴とする日本サムライ云々』といふ頗る奇拔な句を書き添へて差出したといふことである。

一般に斯かる意氣込なので、赤十字の係員は何れも之に勵まされ、倍々努力を續け、倍々成績を擧げたのであつた。而して此等應募義捐金の處置に關しては、日本の物資缺乏を察したるフーヴアー商務卿の提案と、ウッヅ駐日大使の注意とに基き、其の大部分は食糧・被服類・寢具類・建築材料・日需品・衞生材料等の購入に充てられ、一部は比律賓及日本に於ける救恤品の購入資金に充てられ、一部は現金で日本政府に送付せらるることとなつた。斯くして調達蒐集したる各種の物資は、桑港・シアトル兩港を殆んど連日の如く、發航する船舶に滿載し係員が附添うて續續本邦へ急送された。其の船舶の數は前後約三十隻の多きに達し、芝浦及橫濱の埠頭に物資の山を築いて、我係官

に引渡された。

本節の冒頭に於て既に斷はり置けるが如く、玆に記述の救援狀況は、中途の狀態に在るのもあるので、義捐金品の數額も的確でないのであるが、大體に於て米國及屬領全土の義捐金總額は、邦貨に換算して二千五百五十萬圓を突破し、內約千三十萬圓物資購入の爲めに支出されたのである。此外、義捐物資も非常に多く、其の總見積價格は約一千八百萬圓に達したことと思はれる。此等物資輸送の一端を偲ぶ爲めに、來航した數多の艦船の中で、比較的多額の物資を積載した、軍艦ヴェガ號と邦船天洋丸とだけに就て左に記るして見やう。

九月十九日桑港を出帆した、米艦ヴェガ號は、米國赤十字社取扱の寄贈品を全艦に積載したもので、其品目は、米八萬四千七百六十六袋、砂糖六十五噸、燒豆二十噸、エバポレーテッド・ミルク百二十五噸、麥粉七百五十六噸、挽木材百二十三噸、石鹼二十噸、銅鐵材四十六噸で、其の購入總價格五十七萬一千八百四弗餘である。其の解纜に際しては、市長・商業會議所會頭・赤十字社支部長・日本領事等立會ひの上、壯嚴なる發航式が行はれ、悲壯な祈禱や演說などがあり、日本領事は之に對して鄭重なる挨拶を述べた。

九月十八日桑港を出帆した、邦船天洋丸は、米國赤十字社取扱の寄贈品として、下着二十二萬五千枚、毛布十萬枚（以上購入價格百萬弗）外に米國救世軍寄贈の衣類及雜貨十七噸、ロスアンゼルス日本人會寄贈の麥粉六百袋、サンペテロ、アイリス兩基督敎婦人會寄贈の古着三十七包、桑港日本人會寄贈の食鹽千三百二十袋、毛布二萬枚、古着千百五十一袋、罐詰三十七箱、縫衣機三臺、米及豆五十袋を積載した。

米國各地より調達或は寄贈された物資を桑港・シアトル兩港まで輸送するに就き、紐育なる南太平洋鐵道會社は、

九月十日付を以て、各種救恤團體を經由する日本震災救恤物品は、同社の總ての線を通じて太平洋沿岸諸港まで無賃にて迅速に輸送を爲すべきことを聲明し、同じく紐育なるモルガン汽船會社も、紐育・カルヘストン間に於ける日本救恤品の無料輸送を決定した。以上二會社の取扱の爲め、結局紐育方面よりカルヘストンを經由して桑港に送らるべき救恤品は、一切無賃で輸送されることになつた。

華盛頓に於ては、橫濱地方激震に關する軍艦磐城の無電通信が早くも一日の各新聞夕刊に揭載され、次で二日の諸新聞には東京及近縣の大被害を報ぜる大阪及磐城等の諸電信が揭載され、中には逸早く論說を揭げて、米國民が日本に對する眞の友情を示すべき機會來れりとなし、義捐金其他有らゆる援助を惜まざるべきを主張したのもあつた。其後引續き各種の報道が各方面より到着して、被害の驚くべく、甚大なること、光景の凄慘言語に絶することが、稍々詳細に知れ渡るに從ひ、各新聞は筆を揃へて世界未曾有の大凶變なりとし、哀傷の辭を揭げ、深き同情の意を述べ、義捐金品募集の急なるを說き、連日の紙面は此等の記事で一頁餘も滿たされた。或新聞紙の如きは『日本の富は比較的豐ならざりしにも拘らず、往年桑港に震災ありし時は、即座に十萬餘弗を送つて來た。今回の震災は桑港の震災とは比らべがつかぬほど夐かに激甚である。今こそは日本の嘗て示せる好意に酬ゆべき絶好の時機である。豐かなる我米國は、右の十倍百倍の義捐を爲すも尙足れりとすべきでない』と論じ、或新聞紙は『政府の迅速なる措置は固よりのことであるけれども、是のみで滿足は出來ない、全國民を擧げて自發的に政府及赤十社等と協力して、國民的救恤に當らなければならぬ』と唱へ、又或新聞紙は『日本親善の障礙は兎角皮相なる自負心乃至僻見に基くのであるが、今回米國の切實なる同情義捐に依りて、此惡感情は一掃され、眞の親善を來たすべく、而

して此際米國民の示す眞の友情は、永久的に兩國間の羈絆となるであらう』と論じ、一齊に日本救濟を叫び、義捐金の應募を力說した。

九月六日、國務卿ヒューズ氏の地方巡視旅行より歸來するや、直に左の聲明をした。

米國々民は、日本の怖るべき災厄に因り、言語に絶したる衝動を受けたり。吾人は之に對して深甚なる同情を表はしたるが、更に緊急なる救恤の措置を此際迅速且充分に講ずるの要あり。日米兩國民間の傳統的友情は、華府會議に於て一層其の結合を强め、日本全權の同會議に於ける崇高なる態度は、吾人の忘るべからざる所にして今回同國の大慘事に方りては、曾に吾人の弔意を表はするに止まらず、進んで有らゆる救援に當ること、是れ各人の一齊に希望する所なり。

商務卿フーバー氏は、我政府に對し、『此際、何にても物資供給の要あらば、米國は好意を以て時價を變更することなく、之を應ぜんと欲す、成るべく迅速に申込を希望す』との旨を申込んで來た。復興物資として木材・鐵材・諸機械等は、日本より續々多額の註文が發せられた。

勞働界の頭目として有名なるゴムパース氏は、一般勞働者に對して各員二十五仙宛の醵出を爲さんことを慫慂し各地方に於ては、市民大會又は醫師會を開き、其他各種の團體も亦會合を開きて、義捐金品の醵出を決議し、活動寫眞館に於ては義捐勸誘の映畫を挿入したりなどした。

紐育に於ける日本人協會の幹部は、九月四日緊急會議を開き、デヤツヂゲリー氏を委員長とする特別委員會を組織して義捐金を募集し、共額二十五萬圓を東京なる日米協會代表金子子爵宛に送付し、別に日本人會よりも第一回として五萬圓を送付した。

紐育なる米國絹業協會に於ては、五日會合して、復興促進の爲めには、助力を惜まざるべき旨を決議し、僅か三十分間で十五萬弗の寄附應募を見、其後引續き二十五萬弗の應募があつた。

米國聖教會よりも懇篤なる慰問の電報を發した。

九月三十日、紐育市ブルークリンなるムイークリーニユース、フオート・ハミルトン軍人團體、ベークツヂ其他各團體聯合主催の下に、米國赤十字社に於ける日本震災救恤金募集應援の大運動會が擧行された。當日來會者は一萬人以上に達し、開會前先づ日本に對する新聞及下院議員クレアリー民の同情ある演說ありたる後、姉齒日本總領事は米國の同情に對して感謝の演說を爲した。當日最も人目を惹いたのは、日米兩國旗を手にした小學兒童の兩國親善を象徵した運動で、會衆に多大の感動を與へた。

紐育に滯在せる歐洲其他の外國人中、嘗て日本に滯在せしことある人々は、特に會合を催して、日本の災禍を悼み合ひ、其代表者より、深甚の同情を表する旨を外務大臣宛に申越した。

紐育の救世軍支部では、日本に寄贈する爲め、特に被服類の蒐集に着手した。桑港支部に於ても、ボストン支部に於ても亦然りで、桑港支部だけでも三十一箱に充滿し、其の見積價格は七萬弗に達する。

紐育市の劇場組合では、十月七日の日曜日を選び、二十四劇場が一齊に日本救恤大興行を行つた處、是れ亦非常の感況で、純益二十三萬弗を上げ、全部寄贈の手續を執つた。

ボストンなる日米協會に於ては、赤十字社を通じで義捐金を寄贈した。尙ほ同地に留學中の邦人學生にして、一

時學資に困難する者の爲めに、之を補給するの途も講ぜられた。

市俄古に於ける在留邦人よりは三萬圓許の醵金があつた。

ロスアンゼルスに於ては、震災の報に接するや、在留邦人は直に救助委員會を組織して義捐金品の募集に着手し、取敢へず米二千俵を發送したが、義捐金金額は其後旬日にして三十萬弗に上つた。米人側でも政黨・宗派の別なく多大の同情を表し、市廳・商業會議所・赤十字社・新聞社・教會等は何れも熱心に義捐金募集の運動を爲した。

ポートランド地方に於ては、市商業會議所・市俱樂部・在鄉軍人團・ロータリー俱樂部竝にアストリア市及同商業會議所より、各決議文の形式で見舞を日本領事に寄せ、商業會議所では日本救恤資金委員會を組織し、マーシュフキールド商業會議所と共に活動した。內外人より寄贈の毛布・古衣・麥粉等も多額に上ぼり、九月十九日出帆のジヤラナ號で輸送された。

シアトル商業會議所は、取敢へず諸會社より九百萬石の木材と三百萬枚の屋根板との寄贈を受け、在日本米國赤十字社宛に發送したが、更に商務卿より、物資を購入して日本へ輸送するの特別權限を與へられ、委員を任命して積極的活動を爲し、又赤十字社其他の團體と協力して宣傳ビラを撒き、劇場其他集合場に於て演說を爲す等、有らゆる方法で義捐金の募集に努めた。在留邦人募集金品も頗る多額に上ぼつた。尙在住日本實業家の重なる者二十餘名は、互に商品の買煽りを爲さざること、暴利を貪らざること、勤儉貯蓄を努むべきこと等を申合せた。

桑港では千九百六十年同市震災當時、日本より受けたる好意を忘れず、之を德として同情の特に深いものがあつた。即ち桑港市廳では三日恰も勞働祭の休日であるにも拘らず、直に赤十字支部長・商業會議所會頭等を招集して日本救援會の組織を議決し、市民の同情を喚起するの聲明書を公表すると共に、義捐金五十萬弗の募集に着手し、八日發のソンム號で第一回の救恤品を輸送した。各新聞紙は一齊に日本救濟を叫び、エキザミナー紙は『斯かる災厄に際して人種的差別觀念は無意味なり、桑港市民は貧富の別なく救恤金に應募せざるべからず』と說き、ジヤーナル紙は『日本罹災地復興の爲めに借款の申出あるときは、進んで之に應ぜざるべからず』と述べ、クロニツクル紙は『大統領が東洋艦隊を出動せしめたるは機宜を得たるの處置なり、日本今回の災禍は全人類が相互の災厄に對し如何に同感的なるかを表示すべき世界最高の記錄なり』と論じ、何れも筆を揃へて非常なる意氣込を示した。

加州選出上院議員フエラム氏は率先して救恤を高唱し、ハイラム・ジョンソン氏はメッカ勞働祭に於て同樣の演說を試み、何れも深き感動を與へた。

我大山領事は、邦人の組織せる各地の團體を招集し、其の代表者を以て母國救援委員會を組織し、逸早く六日出航のプレシデント・タフト號で米二千俵を、其後數回に亘つて續々多額の物資を送付し、別に義捐金も莫大に集めて送付した。

加州沿岸の救世軍日本人部より九名の救護班を組織し、各種の慰問品を携へて來航した。古庄班長の外に、兒童保育に經驗を有する河合女史と、ミシン裁縫教師の露木女史とがあて（九名の中、婦人は此二名）夫々其の專門を以て日本救世軍の救護事業に參加した。

タコマの商業會議所に於ても活動を開始したが、日本人側も活動を始め、多量の物資を大阪商船に托して發送した。

第二　米國領

(1)比律賓

比律賓では、震災の報に接するや、總督ウード將軍及上院議長クエゾン氏は、夫々官吏を我總領事館に派して慰問の辭を述べしめ、總督は四日早くも日本罹災者救恤委員會を組織して、自から其の委員長となり、比人其他在留外國人をも之が委員となし、金品の募集に着手した。尚クエゾン議長も其の主唱の下に比島民の日本救濟會を組織して自から委員長となり、各政黨を網羅せる上下兩院議員及各州知事を委員として『百萬ペソ募集運動』(一ペソは約我一圓)と稱し、全島を通じたる各自治體・學校・教會其他有らゆる機關を利用して、九月十五日より向ふ一箇月間に亙る一大運動を開始した。尚ほ在留邦人一同よりの義捐金は、其第一回として五千圓を右救濟會に提供し、第二回分一萬五千圓は直接本邦へ送付された。

マニラ駐屯の米國軍側に於ては、本國大統領の電命に依り、罹災者救恤の爲め、陸軍御用船メリット號・メーグス號及海軍御用船ペコス號の三隻に食糧及救護品を積載して派遣することとなつた。其のメリット號には比島駐屯軍司令官デヨーヂ・リード將軍坐乘の下に、陸軍軍醫二十五名、比島赤十字醫員及看護婦六十六名より成る救護班も乘組んでゐた。此救護班はコロネル・ミュンソン氏を監督に、軍醫リーチ博士を醫長に、アリス・フエツゼラルド孃を看護婦長として組織された極めて優秀なもので、同號及外二號に滿載して來航した莫大なる假設病院材料に依つて建てられた院舍に於て活動すべき使命を帶びたものである。

(2)布哇

布哇に震災の報達するや、米人、在留日本人を始め何れも驚愕憂慮せざるはなく、九月四日知事は重なる米人を招集し、山崎日本總領事にも臨席を請うて援助に關する協議會を開き、直に義捐金の募集に着手すること、該義捐金は米國赤十字社布哇支部に取纏むることを決議し、救濟市民委員を知事より指名して知事之が委員長となり、該委員會は其後隨時開會して救援方を協議することとした。翌五日知事は布哇縣民一般に對して救援勸奬の布告を發し、兩英字新聞も亦同情の詞を連載し、援助を力說した。斯かる程に縣民の同情湧くが如く、赤十字支部の受入たる義捐金は十月八日までに三十八萬一千百三十一弗餘に達し、外に被服類五噸の蒐集を見た。(右義捐金額中約十萬弗は日本人の醵出、被服類は悉く米人側)

日本人側では、三日總領事館に邦人團體代表者約五十名參集して協議の結果、母國震災救援會を組織し、山崎總領事委員長となり、本部事務所を日本商業會議所內に置き、ホノルル以外の地方にも支部を設置し、義捐金の募集を始めたる處、在留邦人の母國を懷ふの念は頗る熾烈で、十月八日までに受入れた金額は三十四萬九千百二十五弗餘に達し、前記米人側募集への提出額十萬弗を加ふるときは約四十五萬弗の巨額に達した。尚救援會は衣類及物品の寄贈をも取扱ひ、主として各婦人會に於て募集し、古着類は嚴重に消毒した上積込を了した。其第一回・第二回の輸送量は合せて百六十噸(外に日蓮宗婦人會單獨のもの十五噸)に達し、第三回分も引續き輸送した。

以下に列擧した、都市や地方の外、尚到る所で救護運動は行はれた。南洋の小島グアムでさへも、在留邦人は心盡くしの品々を寄贈して來たのであつた。

更に米本土及領土に就て述べる。

米國赤十字社の義捐金の應募額は九月十六日までに於て、既に八百萬弗に達した趣であるが、同日、大統領は、米國々民が救援の勸誘に快く應じたことを謝する旨の左の敎書を發した。

友邦國民の非常の秋に際し、米國民が迅速に其災厄救濟の擧に應じたるは、予の最も感激に堪へさる所なり。初め米國赤十字社は、予の布告に從ひ五百萬弗寄附の募集を爲したるが、其後二週間を出でずして、今や其應募額は豫定金額を超過すること大なるに至れり。予は此成功せる救濟事業の終りに方り、米國民に向つて、其常に進んで人類災厄の救援に應ずる義氣の發揮に關し、深甚なる謝意を表するものなり。云々。

九月八日、東京に到着せる米國亞細亞艦隊司令官アングーソン提督の參謀長スターン大佐は左の情報を日本當局に傳へた。

一、米國亞細亞艦隊は、大統領よりの訓令に基き、米國官民が衷心より感じ居れる、四海同胞の情を表示するに充分なるやう、日本政府の役務に服したし。

二、近海に遊弋する米國艦船及商船は、日本政府の希望に應じ、適宜政府及國民の役務（下記）に應じたし。（無線電信、避難者物資其他の輸送、食糧其他救護物品の隣國よりの蒐集及輸送）。

三、提督は日本政府に負擔せしむることなくして、以上の爲めに必要なる費用を支辨するやう訓令せられたり。

斯くてアングーソン提督の率ゐる米國亞細亞艦隊の殆んど全部は逸早く東京灣中に集中し、爾來約半箇月の間、日本海軍を幇けて、食糧及罹災民の運送に從事し、目覺ましき活動を續けて、救護事業に多大の貢獻を爲した。此間艦隊中の驅逐艦一隻は常に芝浦に碇泊して、他艦に旨を傳へ、每日午前八時三十分及午後三時三十分の兩回、芝浦・橫濱・淸水港間に定期航海を爲して、橫濱碇泊の本艦隊と連絡を取り、以て關東方面より關西方面に避難旅行を爲す者の運送及關西より關東に送致すべき救護貨物の輸送に從事した。

米艦隊の引揚前、九月十九日、山本首相は代理として松平外務省歐米局長を、又財部海軍大臣は代理として山梨人事局長を其旗艦に遣はし、懇篤に謝意を述べしめた。之に對し提督は、今回日本國民の享けたる慘害に慰問の意を表し、斯かる危急の際にも、日本國民が秩序を亂すことなく、官民一致して敏速に應急の措置を執り來れる態度を賞揚し、米國艦隊の助力が幾分にても此不幸を救ふに役立ちたりとせば、艦隊員一同の幸とする所なる旨を答へた。尙ア提督は答禮として翌二十日首相及海相を訪問した。

米國（比律賓）より寄贈された假設天幕病院は素晴らしい成績を示した。即ち是れは米國と日本との赤十字社提携の下に施設されたものであつて、一は橫濱山下町に、一は東京麻布の高松宮邸內に置かれた。何れも廣大なもので、千數百人を收容するに足り、而も設備は極めて完全で、天幕張ながらも、實驗應用室あり、X光線室あり、浴場あり、極寒にも堪へ得べき、ストーヴの取付もあり、從業員としては、米本國、比律賓のみならず、支那よりも滯在の米國醫師・看護婦・救護員等來援し、其數百數十名に及び、日本側と協力して、親切熱心に收容患者の救療に從事し、多大の成績を擧げた。皇后陛下・攝政殿下の行啓あり、其他各宮殿下も御成りあり、御親察竝に御慰問あらせられた。

尙ほ參考として、救援に關する各方面よりの情報の主なるものを、我當局の發表其他に依つて左に揭げることとする。但し此中には、救援の進行中に在る事柄や、斷片的の事柄やなどもあるのであるが、それは隨時に發せられ

た情報の性質として固より已むなきのことである。

植原駐米大使は、米國の輿論に關し、左の報告を外務省に致した。

今次災害に就て八日の諸新聞は商務長官フウバー卿が災害額を五十億弗と見積るは荒唐なりと爲し、日本の外債の少額なる事及其信用の良好なる事は、日本の復舊能力の重大要素にして、日本は迅速に回復することを得べく、又之を實現すべしと語りたる由を傳ふ。一方日本は災害復舊の爲二億乃至五億弗の外債を募るに至るべしと爲す者あり、紐育の各銀行家は喜んで日本の要求に應ずるの意向あるやに傳へられ、七日の新聞は、大藏長官メロン氏が新聞記者に對し、財政鞏固なる日本は米國に於て外債を募るに困難を感ぜざるべく、日本の信用は震災に依りて害せられずと語りたる旨を傳ふ。尙ハーストのプリスベインも、七日華府ヘラルドに、米國民に此際最も自由なる條件を以て日本の公債に應じ、以て日本を救助すべしと論じ、同系の諸新聞にも同樣の記事を掲ぐるもの多し。

九月六日桑港を出發したるプレシデント・タフト號にて、本邦人救恤團より米二千百俵、米國赤十字社より米五千俵を輸送したるが、八日桑港を出帆したる輸送艦ソンム號の積荷は合計五千五百噸にて、內譯（米國赤十字社より米五千俵、醫藥品及醫療機械類三千噸、天幕及附屬品五千箇、本邦人救恤團より罐詰食糧品八百七十五箱、米千九百四十俵、味噌百樽、衣類二十俵）尙ソンム號には前記積荷の外、軍醫十二名、看護婦七名、兵卒六十名を以て組織する衞生隊が同乘して居た。同艦は十二日間に橫濱着の豫定。（此種の情報は尙多いが、代表的に此一つを掲げたのである）。

比島總督の最高顧問たるマッコイ少將は、米本國より比島に歸任の途次、上海に滯在中、比島總督府を代表して日本の震災救恤事務を監督すべき電命を受け、直に渡日した。次で米國陸海竝に赤十字社よりも救護の全權を委ねられ、爾來日夜其の任務に鞅掌しつつある。

九月八日、上海を出帆した招商局汽船神銘號で、米國赤十字社上海支部の醫者四名、看護婦十二名が救援の爲め來着した。

米國赤十字の救濟業に關する活動は、全國の同情と共に目覺しき進捗を見た。義捐募集發表後三日にして、五百萬弗に達し、實行委員側は此風潮に勵まされ、フーヴアー商務卿自から魚類・衣類・下着・靴・鍼力・材木・假小屋用防水布の蒐集及船積の計畫を樹て、殊に太平洋沿岸には積荷就中米及是等の救濟物資貯藏假倉庫を橫濱に建築する材料の輸送を訓令した。九月七日の該委員會に於ける決議は左の通り。

一、桑港・シアトルに於ける赤十字社購買船積部に購入物資輸送の急速實行を命令せり。

二、シヤトルのキートランドより假收容所へ物資貯藏建築用木材の輸送を命令せり。

三、シヤトルより直ちに最近便にて食糧品二百萬封度輸送を命令せり。

四、桑港より同樣食糧品六百萬封度輸送を命令せり。

五、男女子供用下着類二十萬着、靴下三十萬足買入て直ちに船積の手配せり。

以上は第一段の計畫なるが、桑港シアトルより最近送り出だすべき、積荷は魚類、穀物の粉、ミルク其他の食糧品なり。

米國赤十字社は、桑港に於ける在庫米全部五千五百噸を買上げ、續々本邦へ輸送中なるが、桑港穀物商組合は、今後の値段釣上を豫防する爲、一切の思惑買を爲さざる旨申合せを爲した趣である。尙ホサザーン・パシフイック、ウエスターン・パシスイツク及サンタ・フイーの三鐵道會社は、米國赤十字社又は日本救恤團宛の物資に限り無賃輸送を爲すべき旨、在桑港本邦總領事に申越した。

十月二十四日、米國赤十字社長ベーン氏より大統領に提出した報告に據れば、同日までの日本震災救援金應募總額は一千四十四萬八千四百餘弗であつて、右の內救恤物資購入其他の爲に支出した額は六百三十一萬七千五百餘弗差引殘金四百十三萬一千百九十餘弗となる。右義捐金は今後の分尙約五十萬弗あるべき見込であると。此報告に對し大統領は大要次の如き感謝狀を送つた。

今回日本の大地震に際し、米國赤十字社の活動は吾人の誇とする所である。日本に對して一千萬弗を超ゆる義捐金を送ることは、米國民の滿足する所なるべく、尙又將來、國の內外を問はず如何なる凶變あるも、米國赤十字社の迅速有效なる措置に依賴するを信ずる。

ボートランド市商業會議所を中心とする、日本震災救恤基金募集部は、赤十字社と聯絡を執り、全米赤十字醵金五百萬弗に對する當市割宛額四萬五千二百弗を即時醵出し、別に十五萬四千八百弗を加へ、總計二十萬弗醵出の目的を以て活動中の處、八日赤十字社本部より、當地醵出金を以て即時木材百五十萬フイートを被害地へ購送すべき命を受け、目下取計ひ中である。邦人側は各地日本人會を中心として義捐金募集中にて、應募額在ボートランド帝國領事館管內は約二萬五千弗に達し、オレゴン日本人會は取敢へず麥粉四千俵を九月十四日ハオナ號にて送附の手續中である。

九月二十三日、シアトル發プレシデント・ジェフアリン號にて、米國赤十字社派遣ラムゼー氏・ドクトル・タスラー氏・フレザー氏・基督教青年會幹事ヂョーヂ・フェルプ氏・スタンダート・オイル會社日本支配人エンスウオース氏夫妻・前東京市顧問ビアード博士夫妻は、多量の救恤品を携帶して渡日の途に就いた。ビアード博士は、學理及經驗に基きたる市街建設意見を東京市當局に述べた。

ロツクフエラー財團の經營する支那北京の醫學研究所から派遣されたリーナ博士夫妻は、九月二十日來朝し、今回の震災に因つて病症研究上の不便を蒙りつつある、日本醫學家十名を募集して、北京なる同研究所に招致し、經費は全部向ふ持ちとして、研究を持續せしめることとした。

十月二日、米國國務長官より埴原大使に交付した覺書には左記の意味が記されてあつた。

日本の震災に對する米國の救恤運動は、九月三日、國務長官より埴原大使に致したる應急援助の申込に對し、同大使が受けたるに共端を發し、米國政府は最も有效なる救助を遲滯なく遂行する爲め、大統領は當局をして法律上特別權限を有せざる場合に執り得べき、最善なる應急手段を講ぜしめたる次第なりと述べ、更に大統領が米國赤十字社を通じて米國民に寄附を勸誘したるに對し、米國民が翕然として之に應じたるは、是れ偏へに米國民が日本の災厄に同情し、其復興の速ならんことを希望したる結果にして、之に依り米國が日本に對して有する篤き友情を立證するの好機會を得たりとし、大統領の勸誘に對する米國民の迅速なる贊同は、克く赤十字社をして救濟用諸物資及義捐金を調達せしむることを得たりと述べ、尙此大災難に際して著るしく現はれたる日本國民の

風尙に言及しにる後、罹災地方に於て米國民の爲めに與へられたる布國政府の配慮・保護・救濟、竝に米國の外交官・領事官に與へられたる便宜殊に米國大使一家の宿所として皇族邸を與へられたる帝室の御厚意に對し、米國政府は深甚なる謝意を表する旨を敍述した。

米國救援部を指揮した比律賓のマツコイ少將は、十一月一日マニラに歸着したが、其本邦滯在中に、皇室を始め朝野一般から受けた待遇に對して深く感謝した。而して同少將は、日本人が上下の別なく災後の救護に素晴らしい活動振を示してゐることや、米國救援部は震災救護事務局及日本赤十字社と協力して救護に當つてゐることや、又米國からの救恤金額は幾百萬を算するけれども、罹災者數の僅かだけしか救恤し得るに過ぎないことなどを話し合つてゐた。

九月六日、山本總理大臣は、在米埴原大使を經て、左の通りクーリツヂ大統領に申入れた。米國よりの救援狀況を梗概的に窺ふに於て頗る要を得たものである。

歐洲大戰後に於けるヴエルサイユ條約及華盛頓條約は、世界平和の大本を確立し、人類の福祉を增進するに於て、吾人の慶祝禁ずべからざる所なり。帝國は條約の趣旨に率由し、之が實效を遂ぐるに最善の努力を爲しつつあり。此時に際し、偶ゝ帝都及附近に大震災起り、祝融の殃厄之に伴ひ、悽慘名狀すべからず。皇上を始め奉り、官民の憂恨極まりなきの折柄、支那方面に在る米國東洋艦隊司令長官は、直に其の麾下の艦隊を震災地方て派遣して、食糧物資の運送其他應急必需の爲め、艦隊の全力を提供せんことを申込まれ、既に其の一部の艦隊は橫濱に到着し、尙比律賓政廳は、數隻の運送船に物資を滿載して發航せしめ、更に米國大統領は布告を發して、米國國民に對し、援助を勸誘せらる。是等の報道は既に多數罹災者の耳に入り、其の敏速なる人道的處置に對し、深く感動を與へつつあり。

此間に於て米國大使以下館員は、在留米國人と共に、大使館が火災の厄に遭ひたるに拘らず、獻身的努力を以て救援の事業に貢獻せらる。以上の事實に對し、本大臣は帝國政府を代表し、滿腔の感謝を米國政府に致すと同時に、大統領及米國々氣の深甚なる同情に對し、我君主及國民の熱誠なる謝意を表し、尙此不幸なる災害の秋に際し表彰せられたる米國政府及國民の友情の發露が、貴我兩國の親交に一層の鞏固を加へ、延いて宇內和平の連鎖を益々强靱ならしむべきは、本大臣の信じて疑はざる旨附言せんと欲す。

第三　墨西哥

墨國政府は五萬ペソを救濟費として寄贈し、又、下院は特別決議を以て代表者を帝國公使館に派遣し、弔意を表した。墨國に於ける同情は實に熾烈なるものであつて、勞働者・小學兒童に至るまで應分の義金を醵出し、其の額は在留邦人の分と合はせて十一月三十日までに二萬七千三百六十一弗餘に達した。

第四　巴奈馬

巴奈馬では大統領・外務大臣・各國公使・領事等が帝國領事館に來訪慰問し、又、在留邦人は逸早く救濟義捐金を醵出し、巴奈馬赤十字及運河地帶赤十字社は一般の寄附金募集を開始したが、又個人で直接領事館へ寄附を申出でたのも尠くない。名優マリア・テレサヴアラリノ孃ばシセリア劇場に於て義捐興行を爲し、其上り高百八十弗を義捐した。斯くて義捐總額は邦貨に換算して約四千圓(內半額は邦人)に達した。

第五　玖　瑪

玖瑪では在留邦人の醵出額が約六千圓に達した。

第六　伯　剌　西　爾

伯剌西爾は國人及邦人での義捐額が邦貨で一萬三千五百七十一圓に達した。尙ほサンパウロ地方在住の邦人は母國震災救護團を組織して、毛希一萬餘枚を便船で送附して來た。

第七　亞　爾　然　丁

亞爾然丁では勿論、國民擧つて同情を表し、義捐金募集運動が各地に起つた。斯くして應募された額は邦貨で約四萬三千八百八十四圓に達した。

第八　智　利

智利では在留邦人及び各方面の醵出額が一萬七千八百七十七圓に達した。政府では、曾て同國の震災に對し日本より援助したに對し、今回大いに酬ゆる所あらむと努めたるも、日本近海に軍艦を有せざる爲め、其の意に任かせ得ないことを深く遺憾とする旨表示して來た。

第九　秘　露

秘露では在留邦人の義捐額南米第一を示し、十一萬六千餘圓に達し、外に砂糖三百四十五袋を送附して來た。居留外人側の分も二萬圓に達した。里馬府の大學生は舞踏會を催して其の收入を義捐した。

第十　英　吉　利

英本國に日本震災の報達するや、上下を擧げて驚目駭心し、皇帝よりは直に御見舞の親電あり、政府よりも電信あり、皇太子は特にトレッター大將を我大使館に差遣はされ、嘗て多年の同盟國たり、大戰中の殊勳國たる極東の友邦が蒙りたる未曾有の大災厄に對し、深甚の同情を表する旨を述べしめられ、尙ほ別して御深交ある我皇太子殿下の御恙なきことを切に祈り居る旨を申傳へしめられた。

外相カーゾン卿其他朝野知名の人士は電信又は書信を以て見舞を寄せて來た。尙ほ皇帝は議會閉院式に於ける御演說中に於て、懇切なる同情の辭を述べられた。

英國政府は我朝鮮近海に在る東洋艦隊に對し、即刻震災地へ急航し、日本政府指揮の下に救護事業に參加すべき旨の同情深き訓電を發した。

斯くて同艦隊は十日橫濱に入り、旗艦ホーキンス號は取敢へず支那方面より米百噸及藥品・衞生材料を調達寄贈し來り、提督レヴェソン大將は親しく我海軍省を訪問して、『（前略）本國の訓電に依つて申す儀なり、此際如何なる助力も敢て厭ふ所に非ず、遠慮なく御指示ありたし』と慇懃なる挨拶を述べた。我當局は其の好意を深謝して、直に米艦隊同樣、罹災者及食糧品・救護資料の運搬方を委囑し、約半箇月間熱心に其の任務に服し、我官民の深甚なる感謝を得て任務を終了した。

倫敦では市長發企の下に直に義捐資金の募集に着手した處、市民の同情は翕然として鍾まり、二十日までに既に十萬磅に達した。此內には皇室の出醵も、我大使の出金も含んでゐる。此外、市內の婦人達は、種々の生活必需品

を集めて罹災者に慰安を與へたいといふので、救恤品寄贈委員會を組織し、モーリス・ブンゼン氏指導の下に大に活動して好成績を擧げた。其他各商會・會社等よりの寄贈も多額に上ぼつた。救世軍の世界的本部たる同軍大本營では、アルバート・ホールに集會を催し、ブース大將は自ら陣頭に立つて義金を募集し、是れ亦總額三萬磅に達した。尙同軍は其の主催で市民集會を催し、決議の慰問を寄せて來た。市內の日本人會及日本人協會に於ても逸早く義金醵出に着手したが、其れは悉く市長發企の資金に加へることとした。斯くて倫敦市だけの義金總額は邦貨に換算して百八十一萬二千八百五圓に達し、外に英蘭銀行よりは四萬六千八百餘圓を寄附し、エリオツト大使は五百磅を出捐した。寄贈の物品は此以外である。

カンタベリ大僧正は敎區ガゼツトを通じて、義捐方に關し、管轄敎區及敎會の同情に訴ふる所があつた。是亦好成績を得た。

英國都鄙の諸新聞は、何れも深甚の同情を表し、義捐金の募集には國民が進んで應ぜんことを勸告し、且つ日本の經濟的復興力を確信する旨を述べ、若し日本が復興事業の爲め倫敦で外債を募集するならば、其の成立は決して困難でないと論斷した。

倫敦に在る日本協會の年次晩餐會に列席したる英國學士院長バルフオアー氏は、一場の演說を爲して曰く、『英國學士院は、震災に因つて大被害を受けた東京帝國大學圖書館の英文書籍を大部分補充するやう計畫しつつある。若し之が爲めに必用あらば、英國政府の支出をも期待したい、云々』と。當夜は英國皇太子殿下、アー・サー・コンノート殿下を始め日英兩國の名士が數多參列した。林駐英大使は、『日英同盟は廢止されたけれども、其の精神は存續しつつある、云々』と演說し、コンノート殿下は、日本武士道の精神を賞讃して、『之あるが故に日本は先般の大震災にも堪へ、復興の途に進むことを得る』と演說された。

倫敦商業會議所會頭キーダーソン氏は、十日我林大使を訪問し、震災に就て同情の意を述べたる上、貴國の罹災せる大會社にして、若し英國に於て社債を起す場合もあらば、我商業會議所は出來得る限り援助を與ふべく、尙復興に必要なる物資を購入する場合もあらば、此際特に十一月末まで現金の支拂を猶豫すべきやう取計らふべしと申出でた。グラスゴー市に於ても義金の募集を始め、其第一回分一萬磅は既に送金濟みとなつた。蘇格蘭なるヘイスレー市長よりは、同市市民の義捐金第一回分として一千三百磅電送された。リバープール市よりは同情を表示して來た。ハル市民は三百三十磅、グレーブセント市民は百五十二磅、キヤランダー市民は四十七磅を醵出して寄贈した。

英國々際聯盟協會からは、日本國際聯盟協會に對し、日本協會と聯絡をとり、今回の震災救助に盡力したいとて、此際執るべき措置に就て相談して來た。同協會は英國の諸大學と關係が密接であるから、日本の諸大學で校舍破壞若くは燒失の爲めに學業を中止せなければならないものは、此學生を英國の大學に收容すること、及び英國の軍隊が戰時に使用した天幕や毛布を救援の爲めに送ることに就て目下考慮中であると云つて來た。之に對して日本協會では、校舍の收容力等は相當恢復の見込はあるが、此際圖書館・研究室の破壞・燒失は今後の研究に差支を生ずるに依り、寧ろ書籍等の送附を希望する旨回答した處、快諾の旨を云つて來て、直に之に着手し、圖書の寄贈方を學校其他市民に勸誘した。斯くて英帝國大學局は逸早く圖書の寄贈を申込み來り、帝室天文學會も天文學の刊行物を寄

贈して來た。尙ほ續々寄贈されてゐる。

十月一日、英帝國議會の開かるるや、英本國首相・各自治領首領及印度代表者は、其の劈頭に於て、緊急動議を提出し、英國と永年交誼深き盟邦日本の蒙りたる大慘害に對し、院議を以て深厚なる同情の意を表すると共に、日本國民の愛國的熱情に敬意を表すること、竝に速かに恢復して、世界の社會的及經濟的進運に寄與する爲め占むべき地位も障碍なく繼續せらるるやう希望する旨の電信を、日本政府に寄するの件に關し、滿場一致を以て議決し、直に其の手續に及んだ。

全英國の新聞通信關係者は、ロイテル及國際の兩通信社を通じて、日本の新聞通信關係者に對し、慰問の意を述べ、懇談を共にする旨を告げて來た。ボーツマスに於ける海軍下士卒家族婦人會は、衷心の同情を日本罹災民諸君に傳へられんことを依賴する旨、在英帝國大使館附武官まで申入れて來た。

第十一　英　國　領

(1)濠太剌利亞

濠洲に於ては、首都シドニーに凶報達するや、全土に亙つて深甚なる同情を喚起し、各新聞は何れも筆を揃へて、人道の爲め速に救濟方法を盡すべきを唱論し、テレグラフ紙の如きは、此際船舶を急派して、食糧・茶品等の必需品を輸送すべしと說き、我總領事官への見舞者引きもきらざるの有樣であつた。

濠洲聯邦總督ロード・フオスター氏は、在東京英國大使を經て篤き同情の意を表すると共に、全濠に對して同情に富める勸誘狀を發し、『日本の首都及附近に於て、犧牲となれる人命幾何なるを知らざるのみならず、辛うじて死を免れたる多數の同胞が衣食住に困難せる慘狀は、濠洲の世界各國と共に默視する能はざる所なり。予は全濠洲人が必ずや全力を擧げて善隣國の危急を救ふべきを固く信ず』と述べ、直に政府より一萬磅を支出し、尙聯邦政府當局をして、各洲政府及地方團體と協力し、日本救恤委員會を組織せしめ、新聞社の援助を得て各方面の醵金を勸誘した。又同總督は救援船として、オーストラル・マウント號に多數の物資を積載し、十五日シドニー出帆にて日本へ急航せしめた。

ニュー・サウスウエルス州政府は、戰時中濠洲の僚友たりし日本に於ける未曾有の慘害に對し、聯邦政府に進んで助力すべしとの意向を明かにして來た。

メルボルン市民及ヴイクトリア州民は、アーガス紙の募集に依つて一萬五千磅を醵出し、ヴイクトリア・ハードウエヤー協會は七千餘圓を出捐し、シドニー商業會議所は二千磅を出醵し、ニュー・カレドニアに於ける邦人は二千四百圓を醵出した。此等が大口で、全濠洲に於ける義捐金總額は邦貨で四十萬圓を突破した。

新西蘭政府に於ても同情を表明すると共に、義金の募集に着手し、其の額は我二十三萬圓に達した。

(2)埃　及

埃及では政府の弔意表示あり、ピール商會よりは五百磅を寄贈して來た。

(3)加　奈　陀

凶報の加奈陀に達するや、全土の同情は白熱的となり、殊に在留邦人多きことゝて、其の驚きは譬ふるに物なく、母國救援の聲は所在に高唱された。加奈陀內閣は五日緊急閣議を開き、

一、日本に對する救恤品として、食糧は不取敢六日晩香坡發のエムプレス・オブ・ロシア號に積込み得る限り積載すること。

二、加奈陀の産物にして日本政府の必要と認むるものは、種類の如何を問はず廉價にて仕送りを爲すこと。

三、加奈陀政府は日本政府と、加奈陀赤十字社は日本赤十字社と、夫々連絡をとり、全國に亘り大活動を開始すること。

等を議決し、商務大臣ロー氏をして救援事業を總轄せしむることとした。斯くて政府は二十萬弗の支出を爲し、其内で、ミルク罐詰十萬七千餘個、粉ミルク千二百九十六個、鮭罐詰十五萬八千餘個、麥粉（四十九斤入）七千四百袋、同（九十八斤入）千三百袋を調達して、前記の如く六日エンプレス・オブ・ロシア號で輸送し、次で十一月九日ヴイクトリア發のカナデアン・トランスポーター號で木材二百十一萬八千餘呎、毛布一萬三千五百枚を輸送した。

加奈陀赤十字社晩香坡支部は衣類・食糧其他救護材料五萬六千六百餘弗の品を輸送して來た。尙同社は、相當人員の衛生隊を寄越すこととした。

加奈陀各地に在留する邦人は、晩香坡を中心として義金を募り、其の總額は二十五萬圓の多きに達し、以て母國愛護の精神を表明した。其の他、英米人側の寄附も相當にあつた。

(4)加奈陀B・C州政府

英領コロムビア洲政府は、日本救恤品輸送に關する鐵道賃を全免することとした。尙ほ同政府よりは、罹災地復興用の木材を寄贈致したきに付、運送及受領方に關し何分の回答有之度旨、我晩香坡領事まで通告して來た。其の結果寄贈を受けた木材の見積價格は約十二萬圓に達した。

(5)印　度

印度に凶報達するや、總督レヂイング卿は自署せる長文の檄文を以て全印度國民に令し、本邦大震火災の狀況を告げ、印度副王指揮の下に救恤資金を設定する旨を布告し、該義金は印度帝國銀行各支店に於て取扱ふべき旨を附記し、自から五千ルピー（一ルピーは約我六十五錢）を之に醵出した。

孟買の有力者は、知事を委員長とする英印人混合委員會を組織し、新聞社とも協力の上、救恤金の募集に努力し、九月十日までに十八萬ルピーを集め得た。在留邦人も別に醵金し、取敢へず第一回として一萬ルピーを直接祖國に送つた。斯くて全印度に於ける義捐金額は内外人の分を合せて三十七萬六千圓に達した。

(6)緬　甸

緬甸の蘭貢に於ては、九月二十七日までに、支那人・印度人及日本人の義捐金一萬七千ルピーを集め電送して來た。

海峽植民地

海峽植民地に於ては、日本人會の募集に係る義金第一回分四萬四千圓を送金し來り、別に海峽植民地及ジョホール政廳よりは六萬圓近くを送付して來た。斯くて英領馬來半島に於ては義金の總額三十一萬六千餘圓に達した。

(7)香　港

香港のレジスラチツヴ・カウンシルは、總督の提案に基き、六日、日本救濟の爲め銀二十五萬弗支出の件を可決し、尙ほ香港政廳を後援として、英人及在留日・米・支諸國人を以て聯合救濟會を組織し、義金を蒐めて冷肉八萬斤・

衞生材料其他を調達し、九月七日輸送した。次で支那人罹災者に對し米百噸、外人罹災者に對しビスケット五百罐・牛乳罐詰二十二函を輸送した。

(8)南阿聯邦

南阿聯邦では、英大使を通じて深厚なる同情を寄せ來ると共に、救濟の一助にもとて、五千包の玉蜀黍を輸送して來た。

ケープタウン市長は、市會の決議に依つて好意を表して來た。

(9)愛蘭

英國の自治領たる愛蘭自由國よりも、深甚なる同情を表する旨の電信を寄せて來た。

以上の如くにして英國本土及屬領全般の同情に依る義捐金總額は、邦貨に換算して三百七十六萬圓以上の多きに上ぼつた。此內にて物品を調達して來たのもあるが、多くは現金で送付して來たものである。尙其外の寄贈物品も多量に達した。

震災に對する英國輿論の一端を窺ふ爲め、左に一二を記るす。

オヴサーヴアー新聞は評論として左の如く云つた。

(前略)日本は今回の大震災の爲めに、世界の一强國としての位置に影響を受けるであらうとの說を爲す者が往々にしてあるけれども　吾人は決して信ずることは出來ない。何となれば往年の桑港に於ける震災と同樣、日本が確實に而かも迅速に、完全なる回復を見るべきことは、奇蹟ともいふべき程の日本の近代的進步に徵しても明かであるからである。(日本人が强大の勇氣と忍耐とを以て今回の災害に處し、不屈不撓の精力を傾倒して復興に着手した事實を列記して)此點に於て、歐洲諸國の中に、日本に匹敵し得るもの果して有るや否やを疑ふ。

本邦在留中の國際通信社長(英國人)ケネデー民は左の如く通信した。

今回の震災に關し、吾等外國人の齊しく驚嘆し居るは、日本國民の勇氣に富み、且つ沈着なることである。歐米に於て若し斯かる大事變が突發したとすれば、必ずや民業の神經は極度に昂奮して、精神錯亂者は頻出し、道途は忽ち阿鼻叫喚の巷と化し、秩序の恢復容易ならざるを常とするであらうが、今回京濱間に於ける實際を見るに、斯る擾亂なく、旬日を出でずして殆んど平靜に歸したことは、實に感嘆措く能はざる所である。余の入手せる電報に依れば、震害に就ては諸外國の同情頗に日本に鍾まり、倫敦タイムス、モーニングポスト・デリーニュース等の諸新聞は筆を揃へて深き同情を表し、救濟方を力說した。

又英國支那艦隊旗艦ホーキンス號は、本國政府の電命に依り、米二百萬封度其他多くの救護材料を搭載して上海より東京に向つた筈である。云々

第十二　支　　那

支那は最も近き隣邦であり、同種同文であり、國際關係も極めて密接であるだけに、我災殃に對しても人ごとは思はず、同情も亦極めて熾であつた。

悲報の一たび北京に達するや、擧城は震駭した。外交總長顧維鈞氏は取敢へず山本兼任外相宛にて見舞の電話を發し、次で上下兩下兩院も亦山本本首相・貴衆兩院及東京・橫濱兩市長宛にて懇篤なる慰問の電報を發した。北京政

府は緊急閣議を開いて救濟日災令の發布を議決し、同時に國幣二十萬元を支出し、一面、防穀令を一時解禁し、日本へ輸出の食糧品・衣類竝に藥品・衛生材料等の關稅を免除し、紅十字社では南京分會を通じて米二千石を寄贈すると共に、直に救護團を東京に派遣し、十四日到着して、日本赤十字社と連絡を通じた。留日中華基督教青年會では義捐の擧を發し、遊日來業同人壽販會では我外務省及東京の各新聞社へ宛てて哀悼の電報を發した。殊に感謝に堪へないのは、前淸の宣統皇帝が永らく悲境の身に在はすにも拘らず、御手許の銀一萬元を寄附された上に、西太后の愛藏せられた眞珠の珠數及淸室に傳來する貴重の陶器三十餘點を黃金に代へて贈れよとて提供せられたことである。上下兩院よりの電報は左の如くである。

貴國を襲ひたる慘澹たる震災を電報にて承知し、衷心愁傷に堪へず。今次の災厄は全世界殊に最近接壤の地に在る吾人中華民國々民に對し一大戰慄を感ぜしめたり。吾人は謹んで民國全國民に代はり、深厚なる同情の意を表示するものなり。

北京に於ては右の外、曹錦氏より金三萬圓、巡閱使王懷慶氏より銀一萬四千元、督軍田中玉氏より銀三萬元、日災救濟畫會より銀一千元、黎元洪氏より銀一萬元、紅十字社より銀二萬元、交通部直屬の各機關より銀六萬元等の出捐があつた外、居留外人の捐出が三萬圓に上ぼつた。其の外、ロックフエラー醫學研究所支部及京津米人赤十字社よりは多額の食糧品及衛生材料を帝大醫學部宛にて寄贈し來り、張懷芝氏はビスケット一千箱を寄贈し、在留日本婦人有志は慈善市を催ふして、其の收益金八千八百餘圓を差出だした。又、馮玉祥氏は部下の兵士と共に永河の改修工事を爲して得たる報酬四千七百元の半額を寄贈する等、各方面の同情は素晴らしいものであつた。

十月十五日、總統府懷仁堂に於て新任大總統曹錕氏の接見式を行ひ、各國公使一同列席した節、大總統は日本公使に對し、兩陛下及攝政殿下の御機嫌を伺ひたる後、親密なる貴國の大災殃に對しては、深甚の同情を寄する所なるが、兩來、善後策の漸次進捗しつゝある趣を聞き、衷心欣喜に堪へずと述べた。

名優梅蘭芳は、先年我邦へも來て好評を博したのであるが、今回、日本公使を訪問して厚く同情の意を述べ、銀五百元を呈出し、更に倏優を糾合して藝界國際助賑大會を興行すること二日、其の收入を擧げて義捐金に捧げた。

天津では、前大總統徐世昌氏より一萬元の出捐あり。天津官民の合同組織に係る關東地方震災慰問會、段祺瑞氏の主盟に係る救濟同志會、廣く直隸省內の有志を以て組織された日災救賑會等、何れも其の活動目覺ましく、天津開瀾鑛務局多額の出捐あり、斯くて義捐總額は十數萬圓に達した。日本人側では別に母國震災慰問會を組織して懸命活動を爲し、其の調達又は蒐集して送附した各種の物資は價格約八萬圓の多額に上ぼつた。毛布約八千枚、蒲團五千枚、亞鉛板千八百枚、屋根材料價格七千圓などが其の主なるもので、此等の物資は九月九日を初回として數回に亙り發送された。尙ほ支那側では紅十字會より衣服一千枚を日本赤十字社に寄贈した。

青島では邦人よりの捐出額が五萬三千餘萬圓に達した外、邦人・支那人・其他の外人より寄贈の食糧品が多額に上ぼつた。

濟南では支那官民の有力者が督軍署に參集協議した結果、直に義捐金募集に着手し、取敢へず四萬元を財政廳より立換へて送ることとした。邦人側では母國災害救濟會を組織し、其金額一萬三千餘圓、其他數多の物品を送付した。

香港に就ては既に英國の項に於て記るしたが、尙ほ香港では支那側の代表者十名と救護班二十餘名とが救恤品を携へて渡日した。

廣東では孫文氏より鄭重なる弔電があつた。日支有志の醵出金は六千六百餘圓に達した。

厦門に在留する我臺灣籍民は、救濟金として一萬圓を醵出送付し、其他日支人の分が三千四百餘圓に達した。

汕頭では在留門外人の寄附が約二萬圓に達した。

上海では各種團體を網羅して日本震災救濟義賑會を組織することとなり、其の初會合の日には、官界・商界・學界・宗教界等に於ける代表者三十餘名列席し、朱葆三氏を議長に推し、盛竹書氏は起つて、『日支兩國、從來動もすれば感情阻隔の憾ありしも、元來同種同文にして、古來の情誼極めて淳し、今回日本は未曾有の災禍に遭ふ、奚んぞ座視すべけんや。云々』と述べて喝采を博し、直に義金の募集に着手した處、即座に仁濟堂より一萬元、銀行公會より二萬元、紅十字社より一萬元、聯義善會より五千元、其他中國濟生會、郁氏等より應募の申出があつた。斯くて直に白米一萬擔・麥粉二萬包を調達し、八日出帆の招商局汽船神銘號で、慰問使附添の上發送された。此地に在る日本諸學校出身者は、留日同學共濟會を組織し、文部省を經由して諸學校に見舞電信を發し、尙ほ日本官憲及各汽船會社が、留日學生を保護して歸國せしめた好意に對し、感謝會を催し、一面市内を誘說して金品の募集に努めた。在留邦人側では母國災害救濟委員會を組織して義金の募集を爲し、其の應募額は杭州の分を合せて二十六萬圓の多きに上ぼつた。尙ほ邦人側で毛布四萬枚を送つたが、之は義捐金の中で調達したものであらう。此地の陳俄氏は、我帝大圖書館の延燒に深く同情し、四部叢刊全書八千五百餘卷を、日本總領事を經由して寄贈の手續を執つた。

杭州では督辨盧永祥・省長張載陽兩氏の連名で銀一萬弗、第四師團長陳樂山氏より麾下將校の捐出金として銀五千弗の寄附があつた。其他支那側より一千圓、邦人側より八百七十五圓あつた。

蕪湖に於て官民の組織せる日災救濟會では銀六千元、蚌埠日災救濟會では三萬元の募集を爲し、在留邦人は三百九十圓を醵出した。

九江に於ては蔡督理より特使を派し日本領事を訪問して見舞を述べ、一萬元を出捐した。商務總會の募集したる義金は四千二百元に達し、其他日本人會及在留白人よりも義捐した。

漢口に於ける支那各團體は、聯合して商務總會内に日本震災救濟義賑會を設立し、蕭督軍の一萬五千元を始めとして合計五萬元の應募あり、居留外國人會は一萬二千圓を送付して來た。其他居留民團扱として日支人より二萬圓、日本婦人會より二千餘圓、鄭州日本人會より八百圓の醵出があつた。土着居留民の親交倶樂部では衣類四千點を寄贈して來た。

雲南では唐繼堯氏親から部下の各軍民高官長官を率ゐて本邦領事を訪問し、又、管下の重なる建物をして半旗を掲揚せしめ、演劇を停止せしめ、雲南政府よりは雲南銀二萬元を寄贈し、各機關及各團體の公民よりも出來得る限りの義金を醵出せしめ、尙各劇場をして三日間の收入全部を擧げて寄附せしめた。其他昆明市政公所よりは雲南銀三千餘元、東陸大學よりは同一千六百餘元の寄贈あり、在留の佛國人及安南人よりは千七百餘圓の醵出があつた。

福州では薩省長・孫督理等より義金を募集した結果、邦貨に換算して一萬圓の提供あり、居留邦人は八千餘圓を醵出した。學生聯合會も四百餘圓を提供した。

芝罘では、支那總商會より四千元、支那各民より一千墨弗、龍口支那人より三百三十餘元等の醵出あり、其他邦人側より二千三百餘圓及衣類の醵出があつた。

蘇州では在留邦人より千五百餘圓の醵出があつた。

南京では在留内外人より二千餘元の醵出があつた。

宜昌では日支歐米各方面の分が千五百圓に達した。

澳門(葡領)に於ける葡萄人一同よりは一千百六十三墨銀を寄贈し、參議院議長は弔意表示を爲した。

間島では我總領事館・居留民會等の分七千二百餘圓を始め、其他内鮮人、外人等の分が合せて二千八百餘圓に達した。

安東縣の縣尹は同地方文武官憲よりの義捐金として四千圓を寄贈したが、其後九月十九日までに同縣に於ける應募額は、支那人側六千圓、採木公司及稅關三千七百圓、日本人側一萬五千圓に達した。

奉天では、吉林將軍孫烈臣・黑龍江督軍吳俊陞の兩氏、我總領事館を訪問して恭しく弔意を述べ、殊に東三省保安總司令張作霖氏は、深厚なる同情を表し、取敢へず軍隊用として蓄へ置いた麥粉二萬袋、生牛百頭を寄贈し、又、慰問の爲め朝野の顧問と本邦に派遣し、更に三省に命じて食糧其他物資の寄贈を命じ、九月八日より十月三日に亙り、大連を發して日本に輸送せしめたが、之が海陸の輸送に就ては、滿鐵會社が主として其の局に當つた。其の物資の主なるものは白米三千三百四十五石、麥粉二萬袋、麻袋六千三百九十枚、毛布八千枚、綿布四千四百匹、粗布二千百匹、食麭麵一萬三千餘斤、外に前記生牛百頭等である。在留邦人よりも金品及慰問袋等を數多醵集した。張氏より寄贈の生牛は其の儘船で門司の彦島まで送り、滿鐵會社の費用で屠殺した上、罐詰に仕立てて送つた。

張家口では、齊々哈爾・米國領事を始め主なる官民が、帝國領事館を訪問し、支那人側では日災救濟籌備會を起して、約三千圓、邦人側では一千八百餘圓を醵集した。

遼陽地方では、支那側官民の發企で九月十九日より四日間慈善演劇を催ふし、其の收入三千元を送金して來た。

鐵嶺では、日支鮮人の醵出額二萬圓、其他在留邦人より衣類約千點の寄贈があつた。

長春では、内外人の醵金四萬一千圓、外に附屬地商務會より麥粉千三百三十袋、城内總商會より同二千袋の寄贈があつた。

鄭家屯では、在留邦人其他より二千七百餘圓と衣服との寄贈があつた。

農安からは、支那側より九百五十圓、邦人側より百四十二圓の寄贈があつた。

滿州里からは、九百六十餘圓の寄贈があつた。

吉林からは、邦人が木材二百五十坪を義捐し、九月十一日大連發にて發送した。

牛莊では邦人側よりメリケン粉・米・衣類・慰問袋等數多の寄贈があつた。

哈爾賓在留の我鮮人は金三百圓、外に習志野の廠舍に收容された鮮人へ向け百五十圓を送つて來た。

赤峰からは、王懷慶氏より一萬四千七百餘圓を寄贈して來た。

總じて南滿洲一帶に於ける同情及援助は、關東州及滿鐵會社の宣傳及施設に因つて顯著なる成績を見たのであつて、廳及會社の募集に係る義捐金品も多額に上るのであるが、之は記述を省略する。尙、滿鐵は夫等應募の救護物

品の輸送を悉く無賃で引受けた。

支那に捲き起りつつあつた彼の日貨排斥運動の如きも、今回の震災の爲に、何時とはなしに消散した態であつた。排日を以て名のあつた東三省民報の如きも、『連日聞くに忍びざる日本震災の報に對し、吾人は同種同文の關係上、其の救濟の責任は大半負はねばならぬ。日本は今や此危機に在り、今後國歩の艱難察するに餘りあり、是れ實に日本の不幸なるのみならず、又東亞の不幸なり。云々』と述べてゐる。

支那佛教徒は、日本震災救援の爲め中國佛教普濟會を組織して全國信徒に檄し、震災に因る死者の靈を慰むる爲め大鐘を鑄造して寄贈することとなし、又代表者を京濱地方に派して災區を慰問する所があつた。

震災當時、東京市内神田方面に在りし支那留學生の大部分は殆ど悉く遭難し、生死不明の者も尠くなかつた。然るに、留學生中の有志は、此の非常の秋に際し、晏如たるに忍びずとて寄々協議し、房州に避暑中であつた馬伯氏等急遽歸京して之が牛耳を執り、本國各地の有力者・商會・學生聯合會・省議會等に對し、『今次日本の地震は千古稀なる所にして、之が救濟恢復は人類の責任なり。我國人は一致團結して援助の方法を盡され度し。』との意を電報したといふことである。

第十三　佛蘭西

佛國は大戰の創痍未だ癒えざるに拘らず、東亞友邦の災禍に對して心からなる同情を寄せ、多大の物質的援助をも爲した。

大統領ミルラン氏より我　陛下に對し、深厚なる見舞電報があり、政府よりも亦同樣電報があつた。首相ポアンカレー氏はアングヴイルに於ける演説に於て、往年の大戰中、日本より受けた大なる援助を想起して、感慨無量なる旨を述べ、多大の感動を與へた。七日は、政府の示達に依り、國民的弔祭日に定められ、全國の官公衙は悉く半旗を掲げ、劇場・活動寫眞館其他興行場は一齊に休業し、深厚なる弔意を表し、伊國のそれと共に吾々日本國民に多大の感激を與へた。

尚、政府は、震災の報を受けると共に、東洋艦隊に打電して、運送船アルコル號を横濱に廻航して救護に應援せしめ、又特に圓貨公債五千萬圓を償還することとし、一面木材を實費にて提供することとした。

義捐金に就ては、巴里新聞組合に於て、全國同業者の援助の下に、一般に義捐金を募集するの決議を爲し、直に之に着手した處、大統領・内閣員を首め、全國より續々應募あり、其の額二百萬法（フラン）に達したので、之に依つて數多の移動病院材料を調達し、寄贈の手續きを執つた。尚、巴里赤十字社より義捐金五萬法、赤十字社聯盟より十萬法、日佛協會より十九萬法、巴里市民有志より五萬法、巴里市會より五萬法、アー・ルロアー氏より二千法、其他の寄贈があり、在留の米人シェリル氏は三萬法を診田伯爵まで寄せ、其處分方を依頼して來た。其他在佛の帝國各宮妃殿下を始め邦人の婦人達よりネル襦袢五百二十五枚の寄贈があり、帝國大使館員・聯盟事務局員等よりは二千三百餘圓の寄贈があつた。右の外、大統領ミルラン夫人を會長とする佛國兒童共濟會は、日本罹災兒童に對する義捐金を募集して二萬三千法を得、在鄉軍人協會聯合も募集に盡力した。十月最初の土曜・日曜兩日は各劇場に於て觀客より寄附を募り、又、別に日を定めて救恤興行をも爲した。市内の五大雜貨店の屋上には、日本救濟宣傳の大文字が掲げられ、市民の話柄は一時日本震災の事が重きを占めてゐた。

寄贈の移病勤院材料は、五百ベッド・千五百十箱醫藥・厨房・發電機・水道・X光線機等をも具備した自給自足的のもので、海軍軍醫少將ベレー博士の一行が病院船ポール カ號で搭載し來り、東京赤羽なる濟生會病院裏及飯田町なる大使館跡に根據を備へて熱心に救療に從事した。

里昂に於ても、同情著しく、直に市會の決議を以て同情を表すると共に、十萬法の義捐支出を滿場異議なく可決した。其他義捐金として市民より約一千法、商業會議所より一萬法を出した。

馬耳塞では、商業會議所より一萬法、在留日本人會より二千法の出捐があつた。

佛領印度支那は、本邦に近いだけに、其の同情殊に著るしきものあり、總督始め、交趾縣知事、商業會議所會頭、海防市長、河內市長等より、何れも懇篤なる弔意を寄せ、官衙及び各港碇泊の軍艦は半旗を揭げ、又、政廳よりは、時を移さず米百噸及び各種傳染病豫防注射液十萬人分、其の他外科材料・擔架等を數多寄贈して來た。軍醫モテー、ローラランス兩博士も、同乘して來朝し、診療に從事された。總督は、又、同時に義捐金の募集に着手して、十二萬五千ピアストルを集め、印度支那醫學會は會員より四千圓を集めた。其他在留邦人の分も邦貨で四千六百餘圓に達し、其寄贈があつた。

第十四　伊太利

伊國は屢次地震の苦痛を體驗せる國だけに、同情も亦旺盛であつた。皇帝は其の御旅行先より態々特使を羅馬に還して我大使館を見舞はしめられ、政府羅馬市長等よりは深厚なる見舞電報又は弔意表示があつた。朝野各方面の見舞客は交々帝國大使館を訪問し、各新聞紙は同情記事を連載した。政府は取敢へず支那上海に投錨中の巡洋艦カラブリア號に命じて日本に出動せしめ、更に緊急命令を以て國庫より百萬リラを赤十字社に交付し、救護諸材料を購入して輸送せしめた。此等物資は防寒具及び被服二百三十梱、移動家屋百十九噸で、移動家屋はシシリー、カラーブル等、同國震災地方の經驗に依つて考案せられた極めて便利なものである。尙、政府は、九月十四日を以て弔意表彰日と定め、全國に亙つて弔旗を揭げしめ、歌舞音曲を停止せしめた。

ミラノ市では、市長が日本領事を訪問して弔意を述べた。

(附)羅馬法王廳

羅馬法王は、今回の震災に對し、直に我皇室及び政府に對して深厚なる弔意を表すると同時に、在本邦代表者ヂヤルヂニー大司教を經て、差當り救恤資金として二萬米弗の寄贈を申入れた。尙、法王は、十二日付の敎書を以て、南北兩米の加特力敎徒に對し、特に排日行爲を愼み、天父の旨を守り、滿腔の同情を日本に表示すべきことを勸告せられた。

第十五　白耳義

白國も、大戰の際に於ける日本の援助及戰後復興の爲めに、多額の義捐金を受けたことを大に德として、震災に對するの同情援助も頗る熾であつた。皇帝・政府等よりの見舞は申すに及ばず、政府は其の指導の下に日本救援中央委員會を成立せしめ、之に皇帝・皇后兩陛下を奉戴し、メルシエ大僧正・閣員全部及上下兩院議長を名譽總裁と爲し、日白協會々長ゴヒイン男爵を總裁と爲し、地方長官を支部長として、義捐金の募集に努め、百二十萬法を應募し得た。十月中旬には日本デーを催ふし、全國の劇場其他娛樂場に於ける當日の收入は擧げて義捐金に提供された。日

本デーの催しには皇后・皇子等の台臨もあつた。

其後またリエージュの畫家の發起に依り、わが罹災民慰問の一方法として、繪畫を寄贈するの議まとまり、全白國の美術家達の之に賛同するもの相亞ぎ、忽ちにして繪畫彫刻百三十四點が集まつたので、駐白安達大使を經て震災一周年を經た大正十三年の秋に日本に到着したので、社會局主催の下に、其の十一月十六日より十一月二十二日迄の七日間、社會局三階に、白耳義國作家寄贈繪畫展覽會を開催し、之を一般の鑑賞に供して、遠く吾々の心に慰めと和らぎとを與へられたる白國民の優しい同情を國民に傳へ、繪畫は又廣く希望の人々に賣却して、其美しい賣上金を以て更に罹災民救護の費に當てることとした。此擧は普く朝野の同情を惹起し、殊に開催前十一月十二日には畏くも皇后陛下の行啓あり、越えて二十四日には攝政宮同妃兩殿下の御成があり、夫々御買上品があつた。又、開期中には、各皇族宮初め朝野の名士及び一般觀覽者陸續として參觀し、陳列の作品一物を殘さず賣却濟となつた。

第十六　獨　逸

獨逸は、三日外務次官が、政府を代表して帝國大使館を訪問し、鄭重なる見舞を述べ、各新聞紙は、何れも同情的論文を掲げて、弔意を表した。北獨逸ロイド會社の汽船ウェーゼル號は、當時日本に來航してゐたが、横濱より神戸まで內外の避難者二百五十名を無賃輸送し、獨逸大使も船中に在つて、斯く日本國の災厄に微力を盡して得たことは喜ばしきことであると語つたといふことである。國歩の至つて艱難な際、獨逸政府として物質的援助に出で得なかつたことは已むなきの次第であらう。個人として獨逸人及在留邦人より寄贈した義捐額は、邦貨で一萬三千餘圓に達した。

第十七　墺　地　利

墺國は、大統領及び政府代表の見舞があり、國情の目下極めて困難なる場合にも拘らず、救護品及救護團派遣の準備に取懸つたとの情報に接したのであつたが、我政府は此際國歩艱難の彼國から援助を受くるに忍びざる旨を表示し、且は遠路の事でもある旨を以て其の好意を厚く謝して派遣を辭退したので、墺國では誠意を具體化するに止め、各種の醫療具及藥品を、十一月初旬、馬耳塞發の日本郵船に托して發送して來た。又、休會中の議會再會せらるるや、劈頭に於て、議長は、墺國國民の同情を表示する爲め、左の演說を爲し、其の旨我公使に通牒して來た。

議員諸君、數週前、怖るべき大地震日本を襲ひ、繁華なる若干の都市を破壞し、幾多の人命を奪へり。世界を擧げて此不幸に對し最も深甚の同情に傾かされたり。余は、玆に本議會に於て、墺國國民の熱烈なる同情を全世界の前に披瀝せんと欲す。日本人の才幹能く此災厄の創痍を醫し、勤勉有爲なる該國民が、新に繁榮の道程に進むの時機遠きにあらざること、吾人の斯くて望む所なり。余は諸君の許可を得て、我國民議會の此感情表示を維也納駐劄日本公使に傳達せんとす。

第十八　洪　牙　利

洪國は、王室及政府より見舞電報を發し、議會及びブダペスト市長も深厚なる弔意を表した。

第十九　和　蘭

蘭國は、女皇・皇太后の御名代を我公使館に派遣して弔意を傳へられ、政府は、一萬フロリン即ち我が八千圓許の見舞金を日本赤十字社に寄贈した。又、ロッテルダムのカツテンブルグ商會は被服類三梱を寄贈した。

蘭領印度は、日本に近く、且つ關係も深いだけに、內外人の同情は頗る熾烈で、バタヴィアでは救恤委員會を設

けて義捐金の募集に着手し、其の募集高は邦貨に換算して七百圓に達した。尙、爪哇日報も義捐金を募り、募集高は一萬六千餘圓に及んだ。同市に在る熱帶病研究會又一千餘圓を寄贈し、同市其他に在留する邦人の醵出額も二萬圓程に達した。スラバヤに於ても救恤委員會の組織を見、其の募集高は邦貨で八萬圓餘に上つた。日本人會でも二萬六千圓を醵出し、スマランに居住する支那商人建源氏は八千餘圓を出捐した。

第二十　瑞　典

瑞典は、皇帝より見舞電報あり、一流の人士を網羅した日本救濟官民委員會は、外務大臣を總裁として組織せられ、全國の新聞社及日瑞協會等と協力して義捐金の募集を爲し、十萬クロン即ち我五萬圓許の應募を見た。上海に碇泊中の汽船カントン號は、米穀二千八百六十五袋を調達し、官民委員會よりの寄贈として神戸に入港した。同國赤十字社は逸早く二百五十磅を我赤十字社に寄贈して來た。首都ストツクホルムに於ける總ての寺院特にウプサラノ大本山に於ては、日本震災横死者追善大祈禱會の催あり、我公使館員全部も之に參席した。

第二十一　諾　威

諾國は、皇帝より見舞電報あり、同國赤十字社より五百七十一圓、在東京同國總領事代理より五百圓を寄贈した。

第二十二　露西亞

勞農露國では、從來の行懸りは兎に角として、今回日本に同情を寄せたことは列國に讓らなかつた。報道が莫斯科政府に達するや、四日農勞政府の外交委員長チチエリン氏は、直に政府に電信を發し、日本國民が多年精勵の結果建設し得た文化の結晶が一朝にして喪失したことを惜み、其の窮狀に對して多大の同情を寄すと共に、之が救援に一臂の勞を惜むものに非ざる旨を表示し、一面、聯邦人民委員會は、直に會議を開いて左の如く決議した。

一、日本勞働者に實質上の援助を爲すこと。

二、太平洋沿岸に在る船舶は所要の食糧を積載して能ふ限りの援助を爲す爲め日本に向ふこと。

右決議と前後して、聯邦中央執行委員長カリニン氏は極東革命委員會（極東總會）に左の意味の電信を發した。

日本罹災者に救援を示す爲め、直に汽船と食糧とを發送すべし。

右は政府の執つた最初の處置であるが、尙、此際日本人に對して好意を寄するの方針に出で、其の入國及通過に關して特別の取扱を爲すこととした。沿海州沿岸の森林採伐及び木材輸送に關しても、此際特別の便宜を講ずるとの噂さも出たほどで、從つて地方の同情も旺んに、所々で義捐金の募集が行はれた。

沿海州の執行委員は、管内に日本震災の劇甚なることを周知せしめ、同時に布令を發して、『沿海州のプロレタリア諸君よ、吾等勞働者及び農民は、今次日本に於けるプロレタリアの受けたる大不幸に對し、深甚の同情を表はさなければならぬ。沿海州は甚だ貧弱であるけれども、日本の友人を救濟するの義務を忘れてはならぬ。殊に吾人の懸念に堪へざるは罹災せる勞働者の兒童である。云々』といひ、政府や國民を對象とせず、主としてプロレタリアを對象として同情を寄せた所に、勞農代表國の特色が現はれてゐる。

ニジニノヴゴロツドの有名なる定期市でも、其の委員會は、外相チチエリン氏を通じて、日本の人民及び政府に深甚の同情を表し來り、且つ義捐金を募集した。

實質上の援助としては、かのレーニン號（原名シムビルスク）の來航となつて現はれたけれども、遺憾ながら或

事情の爲めに、われの納るる所とならなかつた。併しながら其の好意に對しては固より異議を挾むものでない。

露領亞細亞では、浦鹽を主としたる各地に於て、邦人、外人（露人・支那人及び其他）の總義捐金額が一萬五百餘圓に達した。

薩哈連州アレクサンドルフスク港の露人は、其の總代を我派遣軍司令部に出頭せしめて篤く同情の意を述べた。

第二十三　波蘭

波蘭は、嘗て日本が同國の窮狀に同情して救援に盡力し、殊に孤兒の扶養や送致に盡力したことに感き、深く其の好意を感じてゐることでもあつて、同國民の我に對する同情は頗る盛んであつた。即ち大統領の弔意表示の外、救援團を組織して派遣することを企て、政府・兩院・ワルシヤウ市・日波協會・學生團體等が寄々協議してゐたのであつたが、我國は之に對し、遙々それには及ばぬと旨を傳へ、其の好意を謝するに止めた。

首都ワルシヤウ市の小學兒童約三百名は、十月七日、日本公使館前に整列して口々に同情の詞を述べ、罹災兒童を慰める一助にもとて、彼等の製作した手藝品や繪畫を提供した。繪畫の中には日傘をさした日本ムスメやキモノの圖案などがあつた。

波蘭復籍民協會は、十一月十六日、日本震災犧牲者冥福祈禱會及び復興祈禱會を寺院に催した。

第二十四　瑞西

瑞西は、政府の弔弔と共に、同國赤十字社代表、我公使館を訪問し、同國竝に同社の現狀に於いて、多額の義捐金を支出し能はぬことを遺憾とするが、協力の誠意を現はすの一端として、瑞貨二萬法即ち我一千圓許を寄贈したいとて提供して來た。尙、ベルンの日曜學校よりも若干の寄贈があつた。

第二十五　ラトヴイア

ラトヴイアの官民また日本震災に多大の同情を表し、百三十五磅の寄贈があつた。

第二十六　サンマリノ

サンマリの共和國執政官は、深厚なる弔電を寄せ、同時に九月十日を同國の表弔日と定めた旨を通知して來た。

第二十七　暹羅

暹羅では皇帝の表弔あり。政府は五萬チカル（一チカルは我約七十五錢）を寄贈し、其他邦人及暹人・外人等よりの義捐金を邦貨に換算して約一萬八千圓寄贈し來つた。

第二十八　其他

右の外、ユーゴー・スラヴ、フインランド、ルクサンブルグ、希臘、チエツコ・スロヴアキア、芬蘭、土耳古、羅馬尼、西班牙、葡萄牙、丁抹、玖瑪、グアデマラ等より、何れも深厚なる同情表示があつた。斯くの如くに我邦への同情は世界の隅々に亙つて、人類愛の結晶として、衷心から深甚に行はれたことを感謝する次第である。

大正震災志　外篇（終）

大正震災志　附錄

第一篇　藝術品並に史的古物及古典籍の損害

第一章　藝術品並に史的古物の損害

第一　概　說

今度の大天災に滅亡したものはいづれか惜からざるものはなく、國家空前の大損失たるには相違ないが、尋常必需の建造物や衣類什器などは直ちに復興しなければならぬものであるから、やがては其の舊狀或は夫以上のものの再現するを疑はないのである。然れども藝術は唯一無二だ。一旦亡びたらば千秋二度之を獲ること能はざるものであるから、其の滅亡は眞に痛惜の情に勝えず、其の怨み緜々として盡きざるものがある。申すまでもなく、藝術は人類文化至高の産物で、國法の上では其の所有權は法人なり個人なりに屬してはゐるが、夫等存在の本來の意義は個人的のものにあらずして、人類共通の文化的モニユメントである。即ち藝術に國境なしといふのも、此の意味に外ならぬのである。故に其の損失も個人ばかりでなく、國家的といはんよりは寧ろ世界的といふことになる。本志が震災被害の各方面を調査するに當つて、特に力を此に致した所以も亦此の意義に基くに外ならぬのである。乃ち先づ罹災諸家を歷訪して其の眞相を聞き糺し、或は他方面からの研究にも努めたのではあるが、何分短日月の間に

焦土廢墟の內を踏査探討するのであるから、遺漏のあるのは免れ得ない。又罹災所藏家の十中の九分九厘までは、其の目錄も道具帳も失はれてゐるが爲めに、僅かに記憶を辿るの外ないのであるから、其の正確詳細なる品目を得ることは甚だ困難な業である。殊に幾百千といふ多藏家の被害は、一朝一夕にしては其の要領すらも得難い。或は主人が死亡して分らぬのもあり、或は先代の蒐集したもので、當代主人は其の趣味を異にし、よく其の品目さへ知らなかつたのもある。又從來世間にあまり知られなかつた處で名品の燒失したのもあらうと思はれる。夫等は急速に調査を進むることの出來ないもので、相當の時日を待つの外ないのであるから、今は是迄探知した一斑を記錄するに留める。而して所載の品種は、古藝術を主として、之に若干重要の現代藝術を加へ、又諸種の史的古物の類も便宜上此項下に收錄したのである。

第二　麴町區

公爵山縣伊三郎氏（五番町）の藏品は、恩賜の諸品と豐太閤尺牘幅其他數點の持ち出された外は總て烏有に歸した。其重要なるものは刀劍で、就中有名な淺井一文字の燒けて、其殘骸さへも失はれたのは最も惜まれる。此刀は長さ二尺六寸五分、淺井長政から、淀君、德川家、柳澤家と傳來した名物であつた。其他には、

一古備前埴次刀拵金造　一一文字則宗刀拵革造　一直江志津刀　一大和千手院行信刀　一備前長船清光刀　一吉光短刀　一兼吉短刀　一三條宗近刀　一長船住祐定刀　一平安城貞光短刀拵付　一堀川住國廣刀拵付　一一文字吉平刀　一來國俊刀拵付

等があり、書畫も多數失はれた、其內の主要なるものは、

一宋默菴瀧見觀音　一土佐光信高野明神像　一武田信玄二首懷紙　一大雅淺絳山水圖　一文晁枯木寒鴉圖　一竹田菊圖山陽題贊　一海屋淡彩秋景山水圖　一海屋漢詩六曲屛風一隻（一隻は古稀菴にて助かる）一山陽一行書身留一劍答君恩

侯爵鍋島直映氏（永田町）は、土藏が助かつたので、寶物類は幸に無事であつた。本邸は全燒し、洋館で左記の御下賜品其他を燒失した。

一朱檀製書棚（明治廿五年七月九日明治天皇鍋島邸行幸の際御下賜）　一御紋章入唐草模樣卓被赤青二枚（同十日昭憲皇太行啓の際御下賜）　一牙彫尾長鳥（明治天皇御遺物）　一御紋章入花鳥模樣古銅花瓶一對（今上陛下の東宮にましませし頃大磯別邸へ御避寒の際御下賜）　一油繪兜圖（御下賜品）　一ゴッホ作水彩肖像畫

伯爵井伊直忠氏（一番町）は、本邸寶藏を擧げて一炬に附した。名物宮王肩衝、傳李龍眠四季山水圖四聯幅、牧谿猿鶴圖双幅、彥根屛風、文晁畫數點、古代更紗、古文書等は救ひ出されて無事なるを得たが、直政以來殊に近世三代の好事によりて蒐集せられた名器夥しきものであるから、其損失の甚大なること推して知るべしである。而して、道具帳も失はれて、同家の調査も未了なれば、其詳しきを知り得ないから、今是までに知られただけのものを左に擧げておく。

一定家卿小倉色紙小倉山　一定家卿小色紙（光廣爲頼證狀添）　一宋畫草衣文殊圖　一古畫法興寺蹴鞠圖　一兆殿主群仙圖　一雪舟中鐘馗左右鷹三幅對　一蛇足山水圖屛風一双　一宗丹墨畫花鳥圖双幅　一土佐光信源平合戰圖屛風一双　一元信四季耕作圖屛風一双　一元信墨畫花鳥圖小屛風一双（秀忠將軍より直孝拜領）　一元信游魚圖　一雪村瀟湘八景圖卷　一楊月松猿梅八哥鳥圖屛風一双　一宗祇筆黑木文　一山雪墨畫秋冬山水圖屛風一双　一探幽猿猴圖屛風一双　一古畫三十六歌仙圖屛風一双　一東福門院入內行列圖屛風一双　一光琳中人物左右鳩鷄圖三幅對　一光琳人物圖二枚折　一東大寺薪能圖小屛風　一許六畫贊屛風一双　一古筆手鑑　一崇禎九年朝鮮國禮曹參判書　一德川家康書一卷（崇源院夫人へ賜りしもの）　一德川家綱書嘉辰云々（家綱より拜領）　一德川綱吉畫馬圖（綱吉より拜領）　一鎌倉時代硯筥　一小倉山蒔繪文臺硯箱　一鮫着水車蒔繪硯箱　一梨子地扇蒔繪見返近江八景料紙硯箱　一平目地雲龍蒔繪硯箱　一住吉浦蒔繪十種香筥　一金地寶石入都名所蒔繪香筥　一金蒔繪十二ケ月圖印籠　一宗哲作宗觀好十二ケ月棗　一宗觀好銅製漣風爐　一宗觀作茶杓銘萬年　一飛鳥川　一長次郎茶碗銘早船（利休文添）　一呂宋茶壺　一湖東燒其他陶器數百點　一金唐革　一染革　一直孝着用赤具足一領其他代々着用甲冑多數　一葵紋付團扇（家康より拜領）　一名物邪切當麻刀無銘　一元重刀（豐太閤遺物）　一荒波一文字刀無銘　一唐織、黑紅紅段織金檜垣菊牡丹秋草　一同、紅白段織金水卷几帳枝垂櫻　一同、鼠地秋七草　一同、紫白段織鱗形源氏車市松揚羽蝶　一同、茶地龜甲花菱鶴菱　一同、茶地七寶繫扇子　一同、紺茶段織秋草吹寄　一大口、赤地金荒波菊花　一友水作面源氏

三井高光氏（一番町）は、先代得右衞門氏が熱心に蒐集せられた能道具悉皆を燒失した。就中能面は百數十枚あつたが、其中所謂十作六作中の名物其他を左に採錄する。

一登利春日作小町老女（山內侯家傳來、神作と云ふ稀品なり）　一日光作翁　一赤鶴作大癒見　一同作しかみ　一辰右衞門作曲見　一同作般若　一小中作小尉　一德若作邯鄲男　一同作猩々　一福來作黑色　一千種作千種（金剛家本面）　一道本作小鼓筒銘小芒　一能笛銘千鳥（森田流家元傳來の名器）一五郎兵衞作太鼓胴（臺は與左衞門作）一小鼓皮銘波返し（鷹司家傳來の名皮）一觀世元章筆花傳書　一觀世流謠本光悅本二百十餘番一箱　一同卯月本一箱

能裝束も百數十領あつた、其尤品を擧ぐれば、

一唐織茶地菊唐草　一同茶地飛雲　一厚板赤毘沙門龜甲獅子丸一箔納戶地立桐枠　一狩衣納戶地鳳凰　一長絹紫地秋草花　一舞衣、白地櫻花　一紋大口、萌黃地金波扇面

子爵松平乘榮氏（富士見町）は、隣接の日本齒科醫學專門學

校て失火して、直に其猛烟の襲ふところとなつたがために、敢へなく焚めつくされてしまつた。燒失品の主なるものは、

一毛松虎圖　一錦縈潘魁星圖　一直菴楠鷹圖　一抱一壺盧飛簪圖　一觀山陽又深居記　一井伊直弼作竹掛花生銘千代の始掛（乘全筆にて表面簗書逑殘の二字、裏面隷書にて天鵞蝶卵云々の文章あり。）一筐銘玉椿一管（凡管に正應三天周防劭造之とあり、文化年間光格天皇の叡覽に供す。）一筐銘鷺音一管（日野亞相資枝卿銘、潘安仁が筐賦に「長短揮鳳翼洪細募鷺音」に因る、工管に大治五庚戌初春慶摯作とあり）一簀簗銘鳳凰足一管（宇治鳳凰堂の鳳凰の足の形にて造る）一簀簗銘竹爲師一管（清涼殿庭上の吳竹を以て造る）一簀銘隣龍一管（大嘗會御假建物長子前の竹を以て造る）一茶端匂威大鎧一領　一具足波戴不動一領（胴鐵浪不動像打出し）一螺鈿劍一腰　一銀衙府太刀一腰　一閑院宮御紋附太刀一腰　一絲卷太刀一腰（三葉葵紋散し）一金作り短刀一口（同上）一鳩丸模造太刀一腰　一楠公帶用短刀模造一口

濱口吉右衞門氏（永田町）藏品の東京にあつたものは幸に多くなかつたが、燒失した中の數點を錄する。

一木芙蓉山水百牀靈冊二帖　木芙蓉が蜂須賀侯の命に依て摹靈設色粗密各牀の山水畫百幀の大冊

一芳崖鶴鷗圖（尺八絹本）一時代蒔繪料紙硯箱（伊達家傳來）

平岡熙氏（永田町）は、有名な袋物、金工物の蒐集家で、是迄再度割裹せられたが、尙數百點の秘藏品のあつたのを悉く燒失した。

池田徹八氏（大手町印刷局長官舍）は、歐米へ出張の留守に所藏書畫其他を總て此災神に捧げてしまつた。氏は鄕里宇治山田市に鄕賢遺影館（一名月僊館）を建設する目的で、十數年來熟心に蒐集した鄕先賢其他儒者勤王家の遺墨五百餘點と、月僊三百餘點と、月僊が晩年山田奉行所へ寄附金をした時の願書の草稿、月僊遺物木如意、盃、袱紗、遺印四顆等があつたが、遺印の殘餘三個の外は悉皆煙となつた。

文部省（竹平町）には、文展帝展へ出品の繪畫彫刻にして政府買上の分七十八點を保管してあつたが、幸に搬出せられて何れも無事なるを得た。其他、震災當時、內閣、大藏省、陸海軍省へ貸出しあつた十四點も安全であつたが、唯東京高等工業學校へ貸してあつた左記の四點が燒失した。

一松林桂月寒汀六曲屛風一双　一結城素明馬六曲屛風一双

一川合玉堂潮　一和田三造煙燄

畑仙鶴氏（元園町）は、天平古裂帖（法隆寺傳來の錦綾綾纈類約八十品を貼つけたもの）並に光格天皇から拜領した數寄屋形金蒔繪の御辨當等の失はれたのが、最も惜まれてゐる。

清水東校氏（元園町）は、雪中菴十一世で、雪中菴傳來のもの二百數十點ある上に、氏が漸次に購入して增加したもの多數あつたのを、一物も殘さず此處に鬩せられてしまつた。雪中菴第一の寶物は樂の黑茶碗で、「すゞむしのりんともいはず黑茶碗」の句あり。又嵐雪自畫像の贊には、「喃一葉喃一葉喃一葉ちる風の上」の句あり、其他嵐雪木像、吏登、蓼太以下代代の畫像、遺墨等多數のものであつた。而して、氏は亦雪中菴文庫を創建する目的で蒐集した雪中菴關係其他の俳書三千數百種に及んで殆んど完成の域に達せんとするところで、是も亦運命を同じくした。

第三　神田區

男爵岩崎小彌太氏（駿河臺東紅梅町）は、其の藏弃の美術品が、高輪の別邸にありて、今度の大災に罹らなかつたのは、眞に至大の僥倖であつた。本邸にては、應擧の松鶴圖を燒いた位で、他は尋常のものであつたが、深川の淸澄園の土藏に於て、一住吉具慶屋島合戰圖屛風一双　一光琳松島圖屛風一双を失はれたのは遺憾であつた。其他、同所に於て

一周文山水圖橫物　一直菴柏に鳩圖　一常信琴棋書畫圖三幅對　一董其昌七絕書　一藍田叔山水圖　一諸昇雪竹圖

又同園洋館に於て、ブランギン、イースト、レートン、モルトン等の油繪、又ブリンクリー蒐集並に其他の和漢陶磁器數十點を燒いたが、幸に陶磁器の大部分約五百點は陳列館が無事であつたために助かつた。又日本館松の間に於て、雅邦下繪山水圖を小川松民が彫刻した金板の小襖四枚を失つた。

內田寬作氏（駿河臺東紅梅町）は、一日地震の後間もなく猛火の襲來するや、自動車を利用して書畫類百數十點を運び出されたは機敏なる成功であつたが、其他は悉皆火中に葬られた。其內に有名な慶忍筆過去現在因果經第七第八の二卷と中興名物祖母懷茶入銘紘のあつたことは甚だ殘念である。其他の損失左の如し。

一探幽竹林七賢圖　一具慶摹寓來迎寺藏十界圖十五幅　一應擧靈雲觀桃圖　一抱一花鳥圖小屛風一双　裏其一筆薄圖　一花月帖（文政頃京洛の名家四十餘人の書畫帖で賴山陽の花月帖と題せるもの）一古薩摩文琳茶入　一秀忠將軍所用卯花威甲冑　一大久保彥左衞門所用兜、上り藤前立　一金小札白絲威具足

子爵秋元春朝氏（駿河臺北甲賀町）所藏什物の一半は、往年處分せられたが、殘存のものも少からざるものであつた。震災の日猛火邸邊に迫り、百計盡きた絕對境に臨んで、氣轉を利かして刀劍の大半は泉水に投じ、軸物類は池邊に散置して、萬一の燒倖を祈りつゝ、僅かに公任卿古今集の二冊を小脇に抱いて家職どもは逃げ去つた。翌日に其の結果いかにと駈けつけて見れば、一面焦土と化した中に不思議にも右の奇計は成功して、軸物の十餘點は依然として無事に儼存してゐた。かくて刀劍書畫の重要なものは九死に一生を得て幸に此厄を免れた。併し滅亡したものも少くない。相州廣光在銘の無の字の槍ほか助かつたが袋は燒け、又小柄笄造り拵えのものは大部分失はれた。又從來あまり世間には知られなかつたが、同家の寶藏の內に祀られ

第七篇　藝術品並に史的古物及古典籍の損害

た德川家康の木像があつた。此像は日光廟の建立の際法橋左京が其本尊像を刻んだ時に副製したもので、由緒やかましい像であつたが固より助かるべくもなかつた。其他燒失したものの主なるものは、

一先祖但馬守泰朝が大阪陣に着用の甲冑其他七八領　一常信下繪鷲・蒔繪刀箪笥並に刀掛　一東海道繪卷五卷　一朝鮮人來聘行列圖卷　一日光山東照宮造營帳、其他幕政關係の記錄古文書類

等で、書籍類は大部分館林文庫にあつて、此災には無關係であつた。

伯爵戸田氏共氏（駿河臺南甲賀町）は、土藏一棟を殘して他は全燒した。同家は刀劍の豐富なるを以て有名で、總計四百口ばかりあつたさうだが、其内上の部約百口は刀身だけ右の燒殘つた土藏中で無事であつたのは、卽ち同家寶物の眼目が助かつたわけで、眞に仕合であつたが、其拵え全部を燒燼したのは又なき大恨事である。未だ其の詳細を調ぶるに遑ないが、今其一例を申せば、板切り貞次の脇差についてゐたダイヤ拵といふは硝子を精巧に應用したもので、實に天下無双の珍品であつた。又小櫻威其他十餘領の甲冑も全滅した。

醫學博士金杉英五郎氏（駿河臺南甲賀町）の藏品は、一部分は不思義に土藏の一隅で助かつたが、大半は燒亡を免れなかつた。其數少からざるものなれば、今左に其の重要品を摘錄する。

一古筆手鑑（貫之、佐理、行成、公任、俊頼等約五十家）
一啓書記花鳥圖　一應擧狗兒圖　一狙仙群毛圖大幅　一蕃山書酒頌賦帖　一陳白沙書七言絶句　一文晁珍藏天山石並賦書栗山外三十六家　一文晁筆對岳樓會合圖二卷　一同樂翁公畫像　一同韓退之貶潮州圖　一同老子像　一同孔子遊說圖
一同富士百種十帖

其他文晁稿本多數畫帖七點

一心越禪師自像自贊　一稼圃密畫山水圖大幅　一山陽孝養山水圖大幅　一海屋書出師表大幅　一浦上玉堂虎圖大幅　一董其昌其他肉筆法帖七帖　一水戸諸名家尺牘百餘點（内烈公廿五通、東湖二十八通、其他六十二通）一維新元勳並志士尺牘三百七十點　一近世儒家尺牘四百二十點　一明治大正諸大臣尺牘八十七點　一明治大正醫家尺牘三百八十點　一明治實業家學者尺牘二百五十點　一明治大正詩人尺牘七十八點　一現代百二十大家畫冊五帖　一近衞公外三十二知己書畫帖二冊
一高田敬輔琴棋書畫圖屛風、其他屛風數双　一江漢自筆稿本西遊旅譚四冊　一田善油繪額五點

森岡平右衞門氏（駿河臺南甲賀町）の書院は、近年數寄を凝らされた建物で、床廻りの裝飾は木内半古の彫刻であつたのが總て滅亡し、土藏も第二の雜物藏が殘つたのみで、第一の寶庫を灰燼に附したのは太だ惜しいことであつた。其内容の主要なものを左に掲げる。

一大燈國師墨跡　一雪舟渡唐天神後陽成帝御贊　一秋月壽老圖團扇極彩色　一柴菴鯇圖大横物　一元信水鳥圖大横物　一狩野宗秀松鳳凰圖屛風一双　一狩野秀頼中柳燕左右桃竹雞圖

三幅對　一永德金地柳燕圖二曲屛風一隻（大德寺傳來）一探幽中壽老左右日月圖大幅三幅對　一同中觀音左右風雷神圖三幅對　一同秋草圖双幅　一常信藤花秋草圖八曲小屛風一双
一同　遊女群遊圖（吉原玉屋の舊什、抱一手紙附）一光起松紅蔦圖　一長春春遊圖卷　一乾山富岳圖　一應擧中道成寺左右狐釣圖三幅對　一應擧吳春鯉圖双幅　一蕭白四季山水圖四幅　一抱一鶯浦合作草花圖屛風一双　一文晁菜花蝶圖双幅
一澤菴紫野紀行一卷（伊達家傳來）一砧青磁袴腰香爐　一時代枝栗蒔繪硯箱（仙臺家傳來）一古染付石疊振出　一仁清七寶透し向附五人前　一柿右衞門輪耳付花生　一同芹模樣長皿三十人前　一同重色紙模樣長皿三十人前　一遠州作竹花生銘つる

其他色々で、近世物では竹内久一の彫刻、木内喜八、同半古の作品が多かつた。

伯爵平田東助氏（駿河臺鈴木町）は、文晁、蕪村其他を中心として收藏少からざるものがあつたが、當時伯爵は内大臣として宮中に奉仕し、留守の事ではあつたし、悉皆を灰燼に歸した。特に惜むべきは日本憲法に關する貴重書類で、中には　明治天皇陛下の御加筆のものもあつたと聞く。其他日本法制に關する數ある貴重書類の燒失は、日本憲法史、政治史、法制史上の大損失であるといつてよい。

男爵谷森眞男氏（駿河臺鈴木町）は、古筆、土佐繪、古畫方面と刀劍類の收藏中、類燒の際書畫數點を帶出せられた外は、皆火中に投ぜられた。其内の要目を左に錄する。

一道風朝臣半首色紙　一行成卿升色紙　一尊圓親王後伏見院御贈答消息　一宣房卿文書　一秋月山水圖　一福島正則畫像贊雄嚴叟　一傳又兵衞人物畫　一尙信瀑布圖卽非贊　一一蕙源氏野分圖　一爲恭小野篁圖　一爲恭大江匡房源義家圖　一手搔包永刀在銘　一來國行刀在銘　一古備前高綱刀在銘　一肥前弘天作鐵鍔　一貞廣作梅花形鐵鍔　一與四郎象嵌黃石公孟宗圖鐵鍔　一鐵桐象嵌太刀鍔、豐太閤所賜　一左經記古字本

清水釘吉氏（駿河臺北甲賀町）は、一池大雅一行隷書双幅（秋巖、雪城、靄厓等の跋文一卷添）一吳春白藤双鯉圖の名品を燒失した。又、古拓法帖五經文字、九經字樣の二種も燒けた。

田村謹蠡氏（駿河臺北甲賀町）も全燒で、秘藏の金工類其他若干の幸に運び出されたものはあるが、書畫類の大半は失はれた。其内の重要品を左に摘錄する。

一探幽密畫山水圖横物三幅對　一木米米法山水圖山陽題贊
一草坪花鳥圖（柿沼氏舊藏）一馬孟熙月下吹笛圖　一高嵩谷金地群鶴圖屛風一双

新田純孝氏（仲猿樂町）は襲藏の書畫骨董の盡くを燒盡して一物を餘さなかつた。その藏品は多種多樣に渉つてゐるが、就中先代が菊池容齋と懇親であつた爲めに、容齋の作品約三十餘點、其他、容齋の稿本類並に容齋遺愛のものが澤山にあつた。其内の主なるものを擧げると、

一容齋筆、中笠置皇居圖、左右義貞袂別拜謁圖、楠公迎鳳輦圖三幅對　一同楠公櫻井驛袂別圖　一同長年船上山圖　一同

小楠公如意輪堂圖　一同勿來關圖、院庄櫻圖双幅　一同新田義宗追尊氏圖　楠世寧刀圖双幅　一同登龍門圖　一同土佐日記繪卷稿本三卷　一同花卉鯽毛魚介寫生帖二十六冊　一同本朝二十四孝圖卷稿本一卷　一同北越紀行（寫生圖入）一冊　一同　剩筆（前賢故實の材料として右社寺の寶物などを模寫せるもの）八帖

其他のものにては、

一金銅彌勒菩薩像（高約五寸、廣隆寺傳來）

一文衡山書文天祥正氣歌拓本一帖（吳門長洲文徵明、邸後絕壁の下に文天祥の祠堂を造り、其後壁に正氣歌を刻したるもので、其拓本の我國に渡來したもの二三本に過ぎず、先代純崎氏安政年間長崎在役中之を海關に獲て、小甘根乾堂が秘藏せる玄宗皇帝舞衣の片袖と傳ふる蜀江錦を以て裝したるもので、芳野金陵の跋文に天下一品の帖と稱したもの。）

一鄭成功所持竹刀（長さ約一尺七寸、成功の子宗韋が河內國金田村金田行義の家に遺したもので、文化の頃畫人空谷の手に入り、芝山大納言持豐卿より　光格天皇の叡覽に供したものといふ。芳野金陵の天下一品竹刀記あり）

一左甚五郎木彫蝦蟇（左宗全作の銘あり）一許六筆芭蕉翁像

一抱一筆中野碩翁向島別業圖

宮本伸氏（雉子町）は、土藏一棟が殘つて書畫類の大半は助かつたが、他の一棟が落ちて、骨董品、屏風の類は日常坐右にあつた畫帖印譜類と共に失はれた。就中氏が專門的に蒐集せられた佐久間象山の遺墨軸物の大部分は助かつたが、其七八幅と草稿類の全部が燒けた。其內では文久二年幕府へ上書の草稿、長さ一丈五尺にも亘る細書の一卷、之に次で渡邊崋山親筆の遊相日記一冊、參海雜記一冊を煙にしたのは惜しいことであつた。其他、燒失品中の主要なものを左に記す。

一光琳鷺頭藤繪硯箱（秋元家傳來）一常信六地竹圖屏風一双（同）一若沖墨畫雜圖屏風一隻　一三村晴山一品當朝圖（尺五代表的作品）一同東方朔圖（尺八）　一同雪中紅梅圖（尺八）

一野口幽谷草稿臨本約百二十枚　一同四季草花屏風畫十二幀

一明治大家粗密帖

江澤由三郎氏（連雀町）は、古佛像の蒐集約八十軀、加納鐵哉の作品各種のもの約百二十點、其他書畫では來章蔬菜涅槃像、椿岳大津繪卷物などを悉皆祝融氏に奪はれてしまつた。震災當時恰も鐵哉翁作品集印刷中で、それも燒けたが、幸に校正摺の殘つたのによつて、出版されて其佛を留むることゝなつた。

堀內伊太郎氏（鍛冶町）は、儒者物の書幅收藏約五百にも及んでゐた。內百數十點は自動車で避難したが、其他は燒亡した。其內には伊藤仁齋、皆川淇園、額杏坪、梁川星巖、紀平洲などの名品もあつたが、最も惜まれたのは二宮尊德の畫像であつた。岸偕の畫で、上に尊德自ら「故道に積る木の葉をかき分けて天照神の足跡も見む」と題したものであつた。次で骨附扇子約四百握、其內には佐久間象山の七律の細書もあつた。現代畫では廣業西湖圖屏風一双、秀畝谷間圖屏風一双（文展出陳）等も燒けた。

武藤一郎氏（紺屋町）歌物中心藏幅數百の內百餘點だけ助かつた。秘藏の短冊は幸に救ひ出されたが、失はれた幅中には足利義政懷紙を始め、直溫、宣長各十點もあつた。又寺崎廣業の畫約六十點もあつた、白描天平美人、唐美人（大阪の博覽會出品）中魚籃觀音左右奉秋山水の三幅對などもやけた。

小栗義氏（連雀町）は蒐聚した書畫茶器の類寶藏二棟に充滿してゐた、百五六十の軸物を出した外を、悉く烏有に歸してしまつた。

一宗丹山水圖大橫物　一傳雪舟山水圖屏風一双　一探幽枯野雉子圖橫物　一同　三十六歌仙圖畫帖　一澤蓬雲無事三大字橫物　一物徂徠大字詩書屏風一双　一應擧四季花鳥圖屏風一双　一同　近江八景圖大橫物　一同　中月左右滝、波圖三幅對　一雪鼎美人畫中屏風一隻　一無銘木彫極彩色古鏃一式（內裏人形一對、樂人六人、附屬道具一式）

千葉和氏（小川町）は、蕉山の翠軒像、椿山の杏所像を藏せられたを燒失した。其他周作畫像、蕉山蜂猴圖、椿山南天圖、杏所墨竹等も失はれた。

松浦玉圃氏（錦町）は、畫畫、彫刻、錦繪、繪本、甲冑武器等雜多の藏品を失つた。今其內の主なるものを左に揭ぐ。

一福島正則所用弓二張　一笠翁燒物布袋　一北齋四季山水圖四幅

關谷彌兵衞氏（鍛冶町）は、製地の意匠圖案の參考として、元祿頃からの古衣裳、主に、振袖、小袖、打掛等の蒐集したもの約四十着と、現代畫六百餘點を燒失した。其の二三を記す。

一和亭牡丹睡猫圖（二尺幅長條幅）一玉堂老松圖屏風一双

一鞘山松竹梅圖二曲屏一双　一同宮島詣圖双幅（尺八幅）一同　林和靖圖（二尺五寸幅）

村口半次郎氏（今川小路）は、本業の書籍の外に、書畫幅も數十點燒失した。其の數品を左に摘記する。

一蕉山名花十友圖（十大家箱）一竹田花瓶草花圖（華石箱）

一大雅春秋山水圖双幅（萩野博士箱）一文晁青綠山水大橫物

一文晁紺紙金泥四君子圖四幅　一爲恭蟻通圖（萩野博士箱）

一暉部南郭送大潮和尙西歸詩幅　一高野長英畫洋人散步圖贊賸文　一山陽書日本外史後叙（萩野博士箱）

大西淺次郎氏（多町）は、千社札の蒐集に於ては橫綱格の大家であつたのも皆灰にしてしまつた。其の概數は明治以前の分を貼付けた帖が十五冊、明治以後の分が三十五六冊、一冊平均約六百枚位の札が貼つてあつた。其他、幅物數點、又斯道參考書で最も珍希なる題名功德演說（陶華子著、寬政十二年版）を始め、納札祀元其他も失はれた。

醫學博士木村德衞氏（東紺屋町）は、神田と麹町の別邸共に類燒して、一物も殘されなかつた。氏の蒐集は書畫陶磁器幕約一千一百點あつたが、其の中心は古筆物で、名物切の大半は網

羅されてあつた。左に其の要目を擧げておく。

一道風小島切　一佐理筋切　一佐理通切　一公任朗詠切
一萬葉金砂子切（現存四葉の一）一萬葉元暦功　一世尊寺行經
朗詠切　一俊頼高光集切　一頼政自詠切　一寂蓮右衞門集切
一西行白河切　一西行小色紙　一慈鎭補寫兼輔集切（本願寺
三十六人集の內）一慈鎭本能寺切　一實朝中院切二葉　一傳
家姫路切　一光悦春歌八宵卷（下絵あり）一光悦謠本百番
（對州家舊藏、內二番岸光景補寫）一倘信瀟湘八景圖並光悦
月歌松花堂八景詩歌屏風　一奈良法眼山水圖双幅　一宗達寒
山拾得圖　一探幽成陽宮圖屏風一双　一光琳六歌仙小屏風一
隻（全地秋草光琳自畫、內二歌仙岸光景補畫）一乾山山水自
賛火入　一訥言春秋狐狸圖双幅

庵瀨辰五郎氏（元岩井町）全燒、氏の蒐集は主に江戸時代の風俗、浮世繪、玩具等に關するもの多方面に亙つてゐる爲めに、其要領を得るのが容易ならぬことであるが、今左にその大略を記す。

一江戸時代旅行用具數百種（合羽、笠傘、矢立、木札、煙草入、挾箱の類。）一志道軒自像自賛幅　一鳥居清倍畫大江山圖版木（杉村巾三尺竪六尺位）一古版物多數（赤穗義士切腹當時の瓦板、國十郎元祿玩具屋圖、墨摺坊主五平、天愚孔平千社札、孔平肖像の札の類。）一番附類數百枚（元祿頃からの芝居其他）一岡場所關係のもの（水茶屋番附、辻君番附、香枕、錦繪の類。）一江戸時代民衆的器物（山王祭の大行燈、葭座の千兩箱、元祿のくぎや、簞笥、天明年間大山講中の木太刀長さ二間の類。）一男帶八十筋（江戸通人連のしめたものく幅さ一寸六七分のもの博多、蜂龍類。）一紙入百種（江戸橋の袋物屋宮川の遺品を主として、之に追加したもの。）一明治三年以來輸出向玩具標本と茶箱三十個につめたもの、並に其內の重要なる分の寫生圖錄十餘冊。（印刷物は現物貼付）一外國玩具數千點、並に其圖錄三册　一川開遊覽船川一丸の額原書幅　一其他浮世繪肉筆數十點、反古張込帖、ペー パー張込帖　千代紙標本張等多數

水谷一氏（佐久間町）は、茶人水谷萬甫の次子で、先代遺愛の茶器其他の大部分を燒亡した。其の要目左の如し。

一茶入丸屋文琳（丸屋林齋所持）一同女郎花屑衣　一同藤袴屑衣（十一屋藏帳）一松風の茶壺（松屋源三郎傳來）一唐物自在（遠州遺愛の名器にて之を所持せるが爲めに先代は自在菴と號したと云ふ、附屬の釜二個あつた。）一古蘆屋梅釜（遠洲所持）一唐物風爐（同）一唐物菱形水指（同）

本阿彌琳雅氏（五軒町）では寶物の光悦木像、同ほとゝぎすの色紙、光德指料備前長重短刀等は幸に無事であつたが、本阿彌宗家傳來の慶長頃から明治迄の間に出した折紙の巻帳三百六十五冊を失つたのは、實に斯道の大損害として最も惜まれてゐるものである。

第四　日本橋區

松澤琢八氏（本石町）の收藏は、其一半を往年割愛せられたが、殘されてあつた半分が今度烏有に歸してしまつた。其內の主要なものを摘記する。

一雪舟筆中華遨左右文殊普賢三幅對（探幽手紙附）一雪舟筆蘆葉達摩　一宗丹筆草衣文殊　一一蝶筆朝妻船圖（今度の災に燒亡した一蝶朝妻船の圖は數點あるが、松澤氏の分は先年兩國の美術俱樂部に展觀せられて、世人の記憶に新たなるものであつた。）一一蝶筆源氏若紫片袖切幅　一一蝶消息幅　一一蝶作如意（本來無一物の字あり）一宗堀作千物目貫一具　一一乘作朝妻船鍔　一清乘作小柄　一光起筆紫式部石山圖　一光琳筆涅槃像（絹本設色、方約二尺）一守景筆瀧邊群虎圖　大幅物　一柳里恭筆眠童凭几圖　一應擧筆西王母圖（二尺絹本）一其一筆八橋圖屏風一双一同花見車圖二曲屏風一隻　一燕村筆山水圖　一熊斐筆西王母圖（大桃三顆をかいた大幅）一後藤家十二代摘小道具

一安親作四分一觀音立像（高三寸餘、山水彫刻の背屏を附屬す）一夏雄作品約七十點　一羊遊齋作片輪車印籠其他印籠多數　一雪舟　蛇足以下の骨付扇子約二百握

等があつて、金工小道具物が主腦部を占めて多數にあつたさうだが、悉く滅亡して、今は唯江戸時代の報時鐘で、松澤氏がその鐘役を勤めて、同邸の脇通りを鐘撞堂新道といつた由來の鐘（寶永辛卯の銘あり）のみが依然としてもとの廐隅に儼存してゐるばかりである。

窪田惣八氏（室町）は、雅邦の蒐集を以て有名で、其圖錄「我寶集」まで出版せられある位であるが、其雅邦は大概は救ひ出されて安全であつた。燒失したものの二三を左に摘錄する。

一觀山海漫老松圖屏風一双　一廣業富士圖二曲屏風一双
一玉堂四季山水圖屏風一双　一栖雲萬歲樂圖二曲屏風一双

三越吳服店（室町）は、商品藏品を擧げて燒失した。其內には、ターナーのサンセット圖額、芝居衣裳百餘着、各國玩具人形、錦繪類。模樣意匠の參考品では伊達家傳來の古裂帖を始め、江戸時代の染物、織物、刺繍類の標本帳數種、古物にては越後屋創業時代の現金かけ値なしの古看板等もあつた。又震災當時から同店內に開催することになつてゐた彩霞會主催の外國陶磁器の陳列會、並に木下氏遺作油繪展覽會、いづれも陳列したばかりのところを燒かれてしまつた。

高津伊兵衞氏（瀨戸物町）は、繪繪の襲藏其他多種の藏品夥しきものであつたが、僅かに約五十點が救ひ出された外は皆よぎなき運命に囚はれてしまつた。先づ書畫類では、

一定家卿三千年色紙（爲綱極歌入幅添、赤星家傳來）　一周文眞山水圖（赤星家傳來）　一雪舟蘆葉達摩圖（松澤家傳來）　一秋月眞山水圖　一啓書記蘆雁圖双幅　一雪村栗圖　一元信渡唐天神圖　一探幽瀟湘八景圖　一同古畫縮圖二冊　一常信百花百鳥畫帖二冊　一同雪月花三幅對　一光琳寒比須大黑圖双幅　一同鹿圖　一抱一四季草花圖（濃二尺絹本設色）　一同中人物左右山水三幅對　一同雛圖双幅　一同雛圖自賛蜀山賛各一幅　一其一遊女圖　一同五節句圖三幅對　一一蕙五節句圖三幅對　一應擧雨乞小町圖（尺八絹本、文晁抱一手紙附）　一同小松曳圖持豐卿賛　一同仇英寫山水圖　一同林和靖圖　一同松時鳥圖　一吳春梅尾長鳥圖　一同虎圖　一蘆雪昔話双幅　一同軍鷄圖　一文晁雪中山水圖樂翁歌賛　一椿山牡丹椋鳥圖　一竹田　山陽　竹洞　春琴合作書畫卷

其他、晴川、伊川の狩野派のものから、文晁、靄厓、竹洞、梅逸並に支那南畫數十點、古筆畫帖四冊、古筆手鑑三冊。

浮世繪版畫は昔同家から分家した人が錦繪の版元をして所謂高津版といふものを出した關係などで、板卸しの綺麗なものが約五千枚あつた。筆者は主に春章、歌麿、寫樂、春英、春好、北齋、豐國などのところが多くて、世間に評判せられたとのことであつた。又古錢の蒐集家として都下屈指の家であつただけ、昔から集められたもの澤山ある上に、成島柳北遺愛のものが追加せられて、總數約三万五千枚もあつた。

蒔繪ものでは常嘉齋、寛哉、是眞其他の印籠約二百五十個、香合約五十もあつた。わけて寛哉の雛道具一式は最も賞美せられたものであつた。

刀劍は三條宗近の短刀其他約二十五口。古銅其他の花瓶約三十餘。乾隆御製青琅玕九獅の香爐、礎手青磁袴腰香爐二個、其他青磁香爐三個、玉器も少からずあつた。

蘆野楠山氏（大傳馬町）も全燒して一物を殘さなかつた。燒失したは

一心越禪師遺物印刀　一同五佛寶冠（絖に五佛を刺繡したもの）

其他、多年收集の古印譜類數十種、中にも飛鴻堂印譜は立原杏所舊藏の善本であつた。又氏が一々實物に就て影寫編輯した日本古印譜四卷の稿本を失つたのは惜しかつた。

堀越角次郎氏（通旅籠町）の土藏も全滅した。其內容の內には左記の數點があつた。

一宋元畫冊四帖三十八幀　一千金之寶編冊一帖十二幀　一宋元名家畫冊一帖十二幀　一宋元明集冊一帖八幀　一邊鸞雪中鳥圖　一周昉明皇按樂圖

菊地長四郎氏（元濱町）は、火勢の遂にいかんともすべからざる窮極に立至るや、新獲の蘇東坡寒食帖の一卷と、李公麟瀟湘臥遊圖卷、崋山于公高門圖、同湖石白猫圖の四點を携へて危難を避け、次て壁上の草坪六祖圖を取出し來たものがあつて、都合五品は救ひ出されたが、其他無慮幾萬の書畫文房具典籍は擧げて祝融氏の蹂躙に委してしまつた。其の細目は未だ調査の途中にあるから、今左に其の一斑を錄して、異日の大成に資することゝする。

一敦煌石室本法華玄義一卷　一五代董北苑寒林遠岫圖幅（宣和畫譜所載）　一宋米元章水墨山水圖　鮮于樞跋　一宋米友仁山水圖（羅振玉舊藏）　一宋夏圭山水圖立軸　一元王叔明雅宜山齋圖軸　一同松王書屋圖（嶽雪樓書畫記所載）　一同山水圖（同）　一元倪雲林優鉢曇花軸（項墨林、清朝御府、式古堂、嶽雪樓等に傳來したもの。）　一同山水小品　一同詩藁大一冊　一元梅道人山水圖　一同仿北苑畫冊二十二幀　一同艸書墨竹譜卷　一沈石田仿梅道人山水圖卷　一同姑蘇十二景畫冊　一文徵明青綠山水圖大幅　一同桃源圖卷　一董玄宰山水畫冊（嶽雪樓舊藏）　一王陽明行書幅　一同與羅整菴書卷　一同尺牘卷三卷　一唐寅前後赤壁圖祝允明賦書一卷（式古堂書畫彙考所載）　一錢叔寶夏冬山水圖双幅　一黃道周松林山水圖　一同洗心詩帖　一同書孝經一帖　一同尺牘冊二帖　一倪元璐書幅三點　一同山水竹石畫冊十二幀　一同尺牘冊二帖　一徐天池雜畫冊三十六幀（吳墨井、宋漫堂舊藏。）　一同畫冊二點　一程嘉燧倪法山水圖　一査士標枯木竹石書畫合璧冊頁　一惲紳狂草詩卷　一王鐸行艸書銀瀞詩卷　一釋石谿江山無盡圖卷　一釋石濤山水圖立軸　一同老樹橫斜圖　一惲南田山水冊頁　一吳歷仿王叔明山水軸　一董邦達山水花卉畫冊　一梅清山水畫冊八幀　一同桃華潭圖　一黃尊古仿黃大癡山水軸　一伊墨卿行書大字幅　一桂未谷隸書大字幅　一改琦花鳥畫冊　一湯貽汾淺絳山水四聯幅　一諸昇墨竹畫卷　一池大雅柳陰漁火圖、其他書畫十餘點　一玉瀾漁樂圖大幅　一柳里恭山水圖双幅　一高芙蓉山水圖　其他書幅　一來禽山水圖　一中江杜徵雪景山水圖、其他約二十點　一谷文晁武藏野富岳圖、其他十餘點　一渡邊崋山燕磯卸帆圖　一同京口三山圖　一同十二個月風俗圖八曲屛風一隻　一同陶淵明圖小屛風一隻　一同鷹見爽鳩畫像　一同唐兒遊戲圖卷　一同王建章寫山水圖　一同仿馬遠筆意山水圖　一同猛虎圖大幅　一同尺牘齋藤香玉宛繪入一卷　一同尺牘菊池淡雅宛二卷　一同獄中尺牘三宅藩士宛一帳　一同三宅侯へ上書約二十通（三宅家傳來）　一崋山小華俳畫双幅　其他十數點　一椿山玉堂富貴圖屛風一双　一同牡丹圖（淡雅還曆の賀に贈る所）　一同花辨畫冊十二幀　一同松竹梅小條幅三幅對　一同春花廿四番傳双幅（紫川館舊藏）　一同歲寒三友圖（淡雅に贈る所）　一同溪流菊花圖（尺八條幅、靄厓に贈る所）　一同岳飛畫像　一同陸象山畫像一齋贊　一同黃道周畫像訥菴贊　一同王陽明畫像訥菴贊　一同高攀龍畫像訥菴贊　一同平子龍畫像　一同佐藤一齋畫像一齋自贊　一高久靄厓各體山水十二幅（齋藤拳石に贈る所）　其他二十餘點　一高陸古春雨圖　其他約三十點　一立原杏所柳溪仙隱圖　其他約十點　一岡田米山人米點山水圖　一同桃源圖　一岡田半江米法山水　一浦上玉堂山水圖二點　一野呂介石那智瀑圖（靄厓舊藏、崋山の激賞せしもの）　一同老松圖　其他二三點　一賴山陽山水圖畫九六點、其他書幅　一田能村竹田山水圖山陽贊（直入箱）　一同設色花鳥圖圖幅　一同水仙圖　一同山水圖二點　一貫名海屋山水圖　其他書幅數點　一同老松靈芝圖（淡雅還曆祝に贈る所）　一高橋草坪漁夫圖　一同山水圖二點　一釧雲泉山水圖、其他二十餘點　一菊池澹如青綠山水圖　其他　一齋藤拳石秋村行旅圖　其他約三十點　一金子雪操春山欲雨圖　其他約三十點　一田崎草雲秋草千蟲圖大幅　一同田園雜興圖六聯幅　一同花卉圖屛風一双　一同行道山眞景圖　其他數十點　一田結莊千里玉堂花鰭圖　其他百餘點　一林百非設名花卉大卷　其他約七十點　一長井雲坪淺絳山水圖屛風一双　其他約四十點　一小西皆雲竹林山水圖　其他約三十點　一藤田吳江巖壁觀音圖　其他約二十點　一武富清嘯老松圖大橫物　其他約五十點　一木間翠峰貓圖　其他約四十點　一衣笠豪谷仙女圖　其他約三十點　一矢野箸山山水圖　其他約三十點　一奧原晴湖青綠山水圖　其他約六十點　一東澤瀉水墨山水圖　其他約三十點　一金井烏洲約五十點　一帆足杏雨青綠山水圖　其他　一釋五岳青綠山水圖　其他五六十點　一吉嗣拜山淺絳山水圖　其他約十點　一田能村直入青綠山水圖　其他五六點　一高森碎巖二百餘點　一宗星石百餘點　一古畫聖像朱舜水題贊　一三輪執齋畫像一齋贊　一平山行藏自畫自贊像　一渡邊小華筆華山畫像　一笠齋筆大塵後

素畫像頼聿菴賛　一頼山陽畫像頼支峯賛　一相阿彌山水圖屏風一双　一圓山應擧松林山水圖屏風一双　一同唐美人圖　其他二三點　一長澤蘆雪猫圖　其他二三點　一菱川師宣風俗圖

村越庄左衛門氏（長谷川町）は、累代襲藏の書畫骨董も多く、又營業上の參考品たる古織物が澤山に蓄積せられてあつたのを悉く喪はれた。其主要なる品目を抄錄すると、

一雪舟中叭々鳥左右破墨山水横物三幅對　一秋月柳下背面達磨圖横物　一藝阿彌晩秋歸帆圖横物　一相阿彌月夜山水圖横物　一同竹栗鼠圖　一元信金短冊四季草花在印十二幅　一同樹下雙牛圖横物　一光起雨乞小町神泉苑圖横物　一光成紅梅圖　一探幽牧溪寫竹猿岩上猿双幅　一同梅鳩圖大横物　一安信釋迦三尊三幅對　一常信中惠比須左右松鳥柳燕三幅對　一晴川院中小町左右吉野龍田三幅對　一宗達芥子花圖　一光琳墨畫月見船布袋圖　一友禪鵜飼舟圖　一同六歌仙圖横物　一同松竹梅下繪模樣　一應擧福祿壽圖（幅二尺五寸）　一同舜擧寫雞頭花圖横物　一蘆雪眞向の虎圖　一規禮嵐山圖大横物　一吳春柳に鶯圖　一柳里恭金地白菊圖横物　一大雅全唐紙百福祿壽遊圖　一蕪村全唐紙百福女圖　一山陽披麻皴山水横物　一海屋蒲穗蜻蛉圖（絹本設色）　一文晁紅白黄牡丹圖　一同鐘馗（木綿巾三尺、長五尺）　一抱一鐘馗（同）　一同中源氏左右須磨明石圖三幅對　一其一中玉持福女左右紅白梅圖三幅對　一交山富士十二ヶ月景十二幅　一容齋南都薪能圖屏幅　一同十二ヶ月山水圖十二幅　一雅邦春秋山水圖幅　一同武藏野月圖　一景年嵐峽四季圖四幅　一山樂御茶壺圖金屏風一隻　一又兵衛四季耕作圖金屏風一屏　一幽汀群鶴飛翔圖金風一双　一雪旦春秋遊山風俗圖金屏風一双　一曉齋七福神圖二曲屏風一双　一是眞梅圖鶴二曲屏風一双　一伊川院松竹梅鶴龜金地二曲屏風一双　一雅邦君か代歌意同歌題金地二曲屏風一双　一芭蕉其角嵐雪其他俳諧物貼交二曲屏風一双　一大手鑑一函　一名家短冊帖二冊　一行誠上人短冊帖一冊　一津田助廣作大小拵付一組　目貫笄後藤一乘作　一行光作脇差拵付　程乘作目貫源平會戰弓流圖　同作笄魚子地月立浪圖　一貞宗作脇差拵付　乘眞作目貫金二匹龍　福乘作笄魚子地虎圖　一長曾彌虎徹作刀　一繁慶作刀　一水心子正秀作刀　一備前兼光作軍太刀　一妙珍作鐵製甲冑　一五月飾小甲冑（朱塗張子金具付　安永年間作）　一五月飾小甲冑（本緋威拵金具一式天明年間作）　一杜園作木彫小甲冑（春日神社寶物寫）　一宣德製鳳凰大香爐　内箱狩野了兼筆花桐立幹極彩色　一祐乘作赤銅色阿新　勝川院船祈戻しの圖（一乘感狀添）　一顯乘作近江八景小柄八本　一宗珉作鍔四分一肉含高彫鐘馗裏鬼　一利壽作鍔赤銅象嵌入三聖三味　一乘意作鍔四分一月秋草蟲　一政隨作鍔素金象嵌入若水井戸裏鶏　一矩隨作鍔赤銅金銀象嵌蝶牡丹　一直克作鍔赤銅魚子朱色柿裏枝鳥　一赤城軒作鍔同　曲水圖裏櫻樹　一春明作鍔同　七福神高彫　一夏雄作鍔蠟銀地菊葉一枚　一勝平作鍔銀無地昇降龍　一勝珉作鍔四分一象嵌四睡　一勝親作鍔鐵地金象嵌仁王高彫　一彫金黄菊白菊立花之圖　黑檀花入　蠟塗蝶螺鈿花臺附　一青磁角德利一對　一和蘭陀紫金瓶德利一對　一同紫金繪皿二十枚　一ギヤヤマン切子丈長菓子器一對

等がある。又、各種の織物は我邦染織工業史からも亦江戸風俗史から見ても好個の參考品であつた。其數頗る多いから重なるものだけを左に記錄しておく。

一古代裂帖大本一冊　一古代更紗帖一冊　一純子唐綾織本一冊　一慰斗目織本二冊　一上下小紋帖二冊　一一釜錦四尺切十卷　一五色大紋純子　同遠州純子四尺切十卷　一絲錦締切物　大和錦六切　一銀毛織帶地銀線織込一卷　一金華山織二卷　一兩面錦一切　右は明治五年海軍省より注文の軍艦御旗地紋金花菱蜀江模樣中央金丸、竪一丈二尺八寸、幅一丈八尺の四分一大に製作せるもの。

一白茶地櫻霞錨浪紋錦十五切　同年頃から各國へ進物品の表本

一天鷲絨帶地帛紗等五種　西陣名工井商屋清兵衛の作

一古代猩々緋十丈八尺一卷　一古渡り巾廣　更紗　一廣東縞物二十五切　一唐海氣　唐琥珀　唐棧　廣棧二十切

其他、舶來物で毛織物、羅紗、毛氈、段通等、内地物にて金襴、錦、綴織、純子、繻子、鹽瀬織、刺繡物の類多數あつた。

山下忠七郎氏（長谷川町）の藏品の大部分は、下澁谷の別邸にありて被害はなかつたが、此處で燒失したものの内で主なるは左の二點である。

一細井廣澤行書屏風一双　一高野長英詩書屏風一双

荒居床三郎氏（田所町）は、田崎草雲並に小室翠雲の作品に富んでゐたのを悉く喪はれた。

寶井善次郎氏（堀江町）は、家祖寶晋齋其角か關係の古物多數傳來してあつたのを、二三を持出した外は總て燒燼した。其内の主なるものは、

一其角畫像三種（其一は抱一筆、他は不明）　一其角着用紗十德　絽紋付羽織、帶一筋　一其角所用文房具（硯三四面其他）　一其角佩用脇差　一其角遺墨色紙短籍等約七八十點

一一蝶朝妻船圖下繪（一蝶の遠島に處せられるや、出船に臨みて其角に贈るところのもので、一蝶の手紙附屬し、其奥に其角の子孫之を祕藏すべき旨を追記したもの。）

一一蝶畫鹿島踊屏圖風一双　一同大圓窓七福神圖（此幅は持出して駿河町で紛失した。）　一紀文其角宛句入の尺牘

一探幽近江八景圖大横物

等で、其他其角の實父榎本東順所用の藥箪笥、一蝶二十餘點、元信、常信、應擧等の畫、大高子葉の色紙二枚等皆燒けた。

中村茂八氏（小網町）は、代々の襲藏少なからぬものがあつたのを、擧げて祝融氏に委してしまつた。

一宗丹筆猫圖　一雪舟筆墨畫山水圖屏風一双　一探幽筆中黄石公左右樓閣山水三幅對　一常信筆赤壁圖大横物　一光起筆十二月風俗圖卷二卷　一在中筆金地蛇ヶ籠に扇面散し圖屏風一双　一文晁筆琴高仙人圖　一半山筆水墨山水圖　一杏所筆柳下洗馬圖　一幽谷筆八々鳥　松鶴　岩牡丹　其他三十餘點　一曉齋筆羅漢　鐘馗　枯木鳥　高砂尉姥　其他十餘點　一是眞筆内宮外宮圖双幅　一直入筆富士三保松原圖六曲屏風一双　一雅邦筆眞山水圖　一同　鐘馗圖（座敷幟）

其他、玉章、廣業の畫多く、妙運律師、辨榮上人の書屏風、明治諸大家の書畫に豐富であつた。

池永康太郎氏（小網町）は、小網町の倉庫にあつた左記のものを燒失した。

一道雲遺愛平家琵琶銘あやめ（撥面常信筆あやめの圖）
一物祖徠尺牘（一刀萬象の事に關して道雲に贈れるもの）
一一刀萬象の石印　一道雲遺墨約五百枚

植草甚助氏（小網町）は、浮世繪版畫六十冊約五千枚を燒亡した。其大部分は、豐國と廣重との圖で、廣重の作品殆んど全部を網羅したものであつた。其他探幽風雪神の双幅、即擧筆金地蓬萊圖六曲屏風一双を始め、近世の現代畫も多數失はれた。

遠山市郎兵衞氏（北新堀町）は、南宗文人趣味の收藏家で、名品を擇んで數よりも質に於て勝れた方の蒐集であつたが、悉く祝融氏の奪ふ處となつた。其要目數點を錄すれば、

一山陽書食華膾魚歌長條幅（杉子爵舊藏）　一竹田彩蔬菜圖卷（同）　一竹田淡彩喜雀圖（岡澤大將舊藏）　一草坪蟲類寫生圖卷（杉子爵舊藏）　一桑綱桑春秋山水圖双幅　一介石秋景山水圖自題横物　一椿山淡花鳥圖全紙幅　一福岑佳水墨山水圖（三浦將軍舊藏）　一白隱達磨圖　一時代蒔繪秋草鶉料紙硯箱　一笠翁蟹模様硯箱　一朝鮮青磁香爐　一顆山陽自刻印一顆（杉子爵舊藏）

濱京治郎氏（橘町）は、富札の蒐集研究物の悉くを燒き盡したが、其概略を左に錄する。

一富札考稿本一冊　一富札並に其關係參考品元祿頃からのもの約七百種　一格幣私考稿本二冊　一紙幣　藩札　私札　元祿以來約四千種　一錦繪約二萬枚（内安政地震繪二百二十餘種　はしか繪八十種　疱瘡繪二十八種　雷繪安政三年六種　其他色々。）一瓦版集一冊　百七八十種　一巻興十冊　享保十二年から數萬枚　一引札帖八冊　安政頃から三千種　一ペーパー　天保以後明治十五六年頃迄約二千種　一會觸類（文久頃からのもの）　一交通關係諸物（天和慶長頃から人馬御朱印、關所手形類等より汽車汽船關係のもの各種）　一料理屋古印譜十二三冊　一番附類約五百（明暦以後の角力、芝居等の番附）　一キリシタン其他の高札三十餘枚

高橋藤之助氏（村松町）は、千社札の蒐集、寛政から文久までのもので四冊約八百枚、明治初年から二十年頃迄が六冊、二十年以後最近迄のもの三十冊を皆灰燼に歸した。

近藤利兵衞氏（村松町）は、先代以來秘藏第一の巢山耕作圖を幸に救ひ出したほかは、全滅した。其主要なるものを擧げると、

一文晁仿米芾董源山水圖双幅（佐竹家傳來）　一同淺絳山水大幅　一巢山秋景山水圖　一巢山雪柳白鷺圖横幅　一梅逸山雀茶圖　一對山春塘垂釣圖　一雅邦武藏野圖　一探幽金地極彩色帝鑑圖故圖屏風一双

其他オットマン秋景山水、ルノアール美人など、洋畫も數點あつた。

山澄力藏氏（濱町）は、倉庫三棟全燒して數千の藏品を失つた。其内の數點を記す。

一大燈國師墨跡　一抱一櫻町中納言圖（尺八絹本）　一はけめ茶碗　一大島の羽蓑（希有の名品）

酒井正吉氏（濱町）は、宗達蓮花、光琳琴高仙人其他の約三十點が選び出したほかを盡く灰燼に歸した。其内の若干を左に記しておく。

一松花堂宗祇像　歌賛（八幡山傳來）　一與以山水圖双幅
一常信樓閣山水圖屏風一双（鴻儀傳來）　一文晁夜景山水圖（寛政作）　一文晁水墨蓬萊圖　一北晁牽牛樵婦圖　一其一雪月花圖三幅對　一其一蜀葵圖　一是眞漆繪青海波雛屏風
一雅邦眞山水圖雛屏風　一ノンカウ黄茶碗（國村傳衞舊藏）
一獨樂平香合（赤星傳來）　一如泥作遠州好宗熏透水指棚桐
一如泥作夕顏鏡陽透彫材神板（不昧公大崎別業所用）　一一蝶下繪十二ヶ月圖城鼻蒔繪膳

野中萬助氏（濱町）も全燒で、收藏の多くを燒いた。其一二を錄す。

一王鑑萬壑松風圖　一梅黒山西津峽圖

松木平吉氏（吉川町）は浮世繪肉筆版畫の多くを燒失せしめた。殊に、好んで、曉齋、是眞の名品が蒐集せられてあつたのが、悉く燒失した。其内の數點を錄する。

一是眞李龍眠爲羅漢圖二幅　一同御殿山花見圖　一同金地漆繪富士三保松原圖　一曉齋地獄太夫圖大幅　一同極彩色十二ヶ月畫帳　一師宣花見宴圖　一北齋騎牛大黒天像

橋本元佑氏（米澤町）即ち刀劍商壺屋も全燒で、其藏品並に他よりの預品共に燒失したが、藏品中の重なるものを記す。

一長曾禰興正大小（石黒花鳥掃付）　一長曾禰興正刀（時代掃付、興正代表的の上作）　一長曾禰虎徹刀　一來國俊刀無銘（光忠折紙付）　一藤丸掃合口　一中身越武兼光　一備前兼光短刀　延文裏銘付　一長谷部國信短刀　一來國次短刀（来田子晉家傳來）　一即重短刀　一筆元刀　一武藏大掾忠廣刀
一來國光短刀　一備前與三左衞門祐定短刀　一大月光弘作古代切草模様總金具合口

本山豐實氏（矢倉町）全燒。秘藏の竹田一樂帖を始め重要のもの若干は幸に救ひ出された。燒けた内には宗屋石伯の遺墨百有餘點があつた。

赤尾藤吉郎氏（箱崎町）は、日蓮上人像を納めた堆朱龍を失つた。其他の主なるものを左に摘記して置く。

一紙南海墨梅圖自題　一釋百拙江山夕陽圖自題　一高陽山人林和靖圖自題　一馬道良藍橋求瓊漿圖　一玄對海亭圖東江源騎賛　一文晁春急飛燕圖（天明作）　一椿山蓮池游魚圖　一心越禪師林和靖觀梅圖

中村直次郎氏（通一丁目）は、日本橋の本店と駿河臺の別邸とに於て、其藏品の總てを燒亡した。同氏は柴田是眞の作品に富んで、是眞の本場を以て目せらるゝ程に有名であつた。其數各種大小を合すれば夥しきものであつたが、今其代表的なものを擧げると、

一是眞自選八幅（尺三絹本、極彩色密畫、壽星宮、龍に郭公四季野菜、水鴛虎、仙山桃花、翠雀長春、武陵桃源、加茂神事。）　一養老孝子圖（潤一尺三寸、極彩色。）　一五月節句圖、中源氏繪節句圖、左右須摩明石圖三幅對（潤一尺三寸。）
一壽星宮圖（潤一尺二寸、極彩色。）　一壽老圖（同）　一月下萩圖（潤一尺五寸、墨、胡粉繪。）　一薔薇に小鳥圖（潤一尺五寸、極彩色。）　一文昌星圖双幅（潤一尺三寸、極彩色。）

一八仙人圖（濶一尺五寸、密畫。）一富士筑波双幅（濶一尺、墨繪。）一舌切雀圖（軸是直蒔繪）一漆繪大畫帖（高一尺二寸、濶一尺五寸、孔雀、瀧山水千鳥、秋草、梅、春草、天滿宮等十八圖。）一草花圖帖一帖（極彩色、三十六禎。）一魚づくし畫帖一帖（同、五十幀。）一動物山水圖帖一帖（同、五十幀。）一青竹圖二曲屛風一隻（裏墨畫若松）一元祿風俗圖六曲屛風一隻（極彩色）一蠟色葡萄蒔繪書棚（先年美術協會へ出陳の節　照憲皇后陛下の御覽に供し、特に御目にとまつた品。）一色漆蒔繪芭蕉圖書棚　一金地蒔繪鷄圖額　一茅に鴨蒔繪桐戸板二枚　一漆繪山水、鷄犬額面二板　一蒔繪仕法百種手筥

等である。之に次で池田泰眞の作が多かつた。その内では、一蠟色蒔繪翠穠圖手筥　一蒔繪習作手板各種三十枚　一蘭陵王面大額　一是眞泰眞合作紫式部石山圖袋戸二枚

等があつた。其他、書畫にては、

一宗丹筆墨畫馬圖（明治天皇叡覽の光榮に浴したもの）一抱一筆内裏雛圖　一寬齋筆神武天皇圖　一抱一版下畫百餘枚　一北齋版下本畫譜類　一畢山團扇用版下畫

等を始め維新志士の遺墨も數十點あつた。次に、器物では、一五十嵐道甫作紅葉鹿硯箱　一同萩圖硯箱　一古代蒔繪六角卓（高約五寸）一羊遊齋酒器一具　一古銅花生　一利休所持釜十德　一古伊萬里二唐兒掘人形（高約四寸）

等の名品を始め、石川光明作の牙彫觀音像其他十餘點、蒔繪物にて印籠約三十點、刀劍小道具類多數、鐵鍔約二百五十點、伊萬里、九谷、薩摩、其他の陶磁器に西洋燒物も少からずあつたが、特に惜むべきは、同家家業の參考品として、昔から蒐集せられた各國製紙の表本であつた。

細田安兵衛氏（西河岸）は、左記の藏品を燒失した。

一雪舟筆墨畫山水大横物　一宗偏作琵琶香合（漆器、蓋裏在銘）一抱一下繪花鳥能代膳十人前　一是眞筆壽老鹿圖（高一丈一尺、濶五尺）一曉齋筆山水花鳥狂言畫帖（密畫二十幀）

平野治氏（上槇町）文人畫の蒐集一品も遺さずして灰燼に附した。其内の書畫では、

一文晁老子半身像稿本（此畫は、文晁の人物畫に於ける至妙の伎倆を發揮した代表的のものであつた。）

一同溪山行旅圖　一同山水花鳥畫冊十二幀　一同老子全身圖　一桑嗣粲雨後雲山圖卷、第五隆跋　一同雪溪高隱圖　一臺山雪溪探梅圖　一杏所林下步月圖　一同草書七絕　一林谷空谷香祖圖　一靄厓牡丹湖石圖　一杏堂山水畫式冊二帖二十八幀　一新井白石草書七律雨後即事　一梁田蛻巖草書五古　一李公麟白描羅漢渡海圖卷印月江其他題贊、董其昌題字、敬王美其他跋文

一陳元素行書　一袁尙統寒林霜橋圖　一高乾梅花双雀圖　一梁基高齡一品圖　一張培敦柳桃江樓圖　一孫桐竹石珍禽圖　一惲南田花卉畫冊十二幀　一趙思山水畫冊十二幀　一蕭顯書聯古詩卷　一文徵明行書横物　一周順昌書卷　一沈茶草書長條幅　一劉正宗行書七律　一李因女史花鳥畫冊十二幀　一諸昇竹石畫冊十二幀　一同竹石煙月圖　一曹間花溪高士圖　一謝時中陶家佳色圖　一徐葆光行七絕書　一張昭臨書卷　一劉石菴草書卷　一秦室秋林漁艇圖　一陳炳篆書七絕　一呂元花具翠影圖　一余原煙江疊嶂圖　一貝點秋山行旅圖　一隱元草書卷　一獨立草書卷　一同草書七絕冊　一高泉水書詩卷　一悅山草書卷　一黃檗諸師尺讀卷　一達禮善行書秋興八首　一明書名家便面書畫數十點　一伊孚九三體書七絕六曲屛風一隻

等を擧げる。文房具にては硯約五十面、其内で端溪九星硯、明双魚研、歙州龍尾研、宋坑雲月研等が尤物であつた。其他古銅器十餘點、和漢書籍約五千冊、印譜詩文集には珍書があつた。又眼科の專門書は獨佛英のもので、一八八〇年以後のものは殆ど網羅して、約六千冊もあつた。

外池五郎氏（通二丁目）は、元祿風俗春秋遊宴圖全屛風一双と、水戸家から拜領した金拵えの一刀はじめ、約百點の品物を燒いた。

若尾謹之助氏（佐内町）の燒失したものゝうちには、左記の二點と、浮世繪版畫があつた。

一探幽獅子圖屛風一双（因州池田家傳來）　一是眞貝盡圖二曲屛風一双

川部利吉氏（新右衞門町）は、藏品商品ともに多數に燒失したが、其内特記すべき左の三品があつた。

一過去現在因果經二十七紙（鎌倉時代のものと鑑せられたとのこと、彼の慶忍の分とは別種。）一古筆手鑑（本庄子爵家舊藏のものを增補したもの）　一東山傳來鶉籠茶入

第五　京橋區

大住喜右衞門氏（南傳馬町）は、茶器を入れた一長持を搬出したほか、概ね火中に葬られてしまつた。其重品の二三を記す。

一古畫千手觀音像（穆山和尙箱書）　一貫之かりがねの色紙　一牧谿寒山圖　一宗達金地草花六曲屛風一双　一松花堂藤圖題詩書六曲屛風一隻　一同松竹梅圖三幅對江日欠伸子贊

少池平三郎氏（大鋸町）は、茶器並に其方面の蓄藏の殆ど總てを擧げて一夜の煙と化し去つた。何分夥しき點數で、其品目は未だ調査中に屬する。

金田兼次郎氏（大鋸町）は、柴田是眞の女の緣付いてゐる關係で、是眞の作品は多數にあつた。就中鵜飼の繪（尺五絹本）漆繪畫帖一帖、欅材素彫福女（高約一尺）等の佳作あり、其他印籠、根付、盃など各種のものがあつた。又、懷玉齋、竹陽齋、樂民、舟月、明鶴齋、東雲、龍硅、壽玉、出目右滿等の名作の根付が約二百個許り、みな烏有に歸した。

喜谷市郎右衞門氏（大鋸町）も亦是眞の名作を以ても知られてゐた。今度燒けた内には、地袋桐戸二枚二對、一は漆繪枇杷一は同扇百散し、四分一塗研出蒔繪秋草料紙箱箱、見返し銀月（故條野採菊の爲に作る所）などの名品があり。又、夏雄彫の葡萄に栗鼠の金具、其他雪舟中觀音の三幅對以下畫幅も多數あつ

た。

諏訪松之助氏（蠣町）は、其藏品の約一割を持出した外は、皆燒失した。浮世繪版畫約一萬枚、肉筆約百四十點と註せられる。肉筆物の內で、

一又兵衞時代古畫美人圖　一鳥居派古畫忠臣藏十二幅　一俊滿三都美人圖　一重政朝妻船圖　一北齋郭子儀圖大橫物　一北齋十二ケ月風俗六曲屛風一双　一廣重興津清見寺三保松原圖六曲屛風一双　一秋暉菊鴨圖　一山陽詠史十二首書屛風一双

などが重要なところで、外に宗達の草花圖六曲屛風一双があつたとのことである。

渡邊庄三郎氏（五郎兵衞町）は、師宣以來浮世繪師の標本的版畫約五十枚、清親寫生帖五冊、浮世繪研究の參考書約三千冊、約三千種の版木、並に其製品千數萬枚等を擧げて灰燼に附して了つた。

松澤八右衞門氏（銀座）は、傳來の古物悉く灰燼に附してしまつた。其二三を左に揭げる。

一定家卿小倉色紙花の色は（集古十種に隱士貴良藏とあるもの）　一雪舟中東坡左右夏冬山水圖三幅對　一探幽龍頭觀音像　一光琳雲中大黑天圖　一同乙御前圖橫物　一光起栗穗鶉圖　一應擧梅營圖　一容齋能畫高砂尉姥三幅對　一是眞漆繪鯉圖橫物　一是眞鍾馗圖

平岡權八郎氏（竹川町）は、文晁の蘆江滿月圖の四枚襖のほか、藏品の盡くを燒失した。

新井慶次郎氏（南鍋町）は、蒐集書畫骨董約一千數百點を算するものを悉く燒失した。未だ其詳細は知られないが、其內の數點を左に揭げておく。

一周文眞山水圖　一蛇足羅漢圖　一元信設色夏草岩鼠圖橫物　一探幽楊柳觀音圖　一安信花鳥十二枚屛風一双　一二天松鷹圖大幅　一雪山耕織圖双幅（紙本幅三尺位の長絛幅、耕圖は驟雨田植景、織圖は養蠶夜景。）　一雪山寒山孤亭圖　一椿山梅菊圖　一秋暉菊鴨圖　一山陽詠史十二首書屛風一双

吉田嘉助氏（元數寄屋町）は、袋物類、古更紗、金唐革、金工物等の蒐集に於て充滿した土藏を落した。

池田金太郎氏（元數寄屋町）は、土藏の一棟が幸に助かり、他の一棟で書畫の一半と書籍類が燒失した。其內の若干の要目を左に摘　する。

一探幽洛陽街衢圖卷　一文晁阿倍仲麿圖橫物　一文晁並一門合作天龍下り圖卷　一馬孟熙八仙圖卷　一司馬江漢瀑布圖　一雪山竹雀圖　一淵野棣園来點山水圖　一樂翁公編輯寬政畫冊　栗山二洲結里題贊　一雪山寫生小品約百點　一祐信淺草觀音境內圖大橫物　一鏑屋立圃數點　一馬琴其他尺牘多數　一張秋谷花卉圖

船橋三郎氏（木挽町）の庫には、佐竹侯舊藏の信實筆三十六歌仙中の猿丸太夫があつたので、震災當時同好者間に其安否を氣遣はれたが、同幅は一旦目塗のせられた土藏から持出されて幸に無事なるを得た。併し其他は總て火中に葬られた。其の重要なるもの二三を擧げると、

一瀨戸茶入銘野々宮、蓬雪箱（尾州德川家傳來）　一瀨戸茶入銘橋立、宗甫箱（尾州德川家傳來）　一交趾狸香合　一高取四方茶碗、宗甫箱（紳尾藏帳、尾州德川家傳來）　一與次郎釜　一宗和作茶杓、宗和文添（近衞家傳來）　一一休寶嶽二大字、遠州文添　一古筆手鑑三帖　一爲恭筆駒迎圖　一桂谷畫龍、伊藤公贊、遊陽陷落記念合作　一是眞蒔繪尉姥印籠

小倉純右衞門氏（木挽町）即ち劍商網屋にては、所藏の約百刀、預り物の約二百刀を火燄に委するの外ないこととなつた。藏品中には古拵の模造によい參考品があつた。今、其の主要なるものを左に揭げておく。

一鎌倉八幡宮杏葉衞府太刀模造　一黑漆糸卷北條末期太刀模造

右二太刀中身正恒中身は燒失せず

一宮本武藏佩刀模造中身無銘左文字　一三齋公歌仙拵刀模造中身備前勝光　一東照宮三池刀模造中身月山貞一　一飛驒國分寺小烏丸太刀模造中身土野直弘　一七寶拵大小中身大虎徹小興正　一東明寮拵大小中身用惠國包　一豐太閤朱鞘金蛭卷大小模造中身大忠吉小埋忠　一三齋公信長刀模造中身平安城長吉　一赤銅七寶模樣大脇差中身虎徹龍彫　一楠公拵合口模造中身朱銘正宗　一一乘梅の卷三所付拵差中身水心子正秀　一一乘花草拵合口中身相州廣正文和年號　一清正公網代鞘合口模造中身祐定　一東照公佩刀合口模造中身埋忠　一八幡公海老鞘合口中身宗吉　一古溪和尙合口模造中身圓眞劍

其他、萌黃威大鎧、腹卷、胴丸等三領、幅物にて尙信筆中福祿壽左右梅竹三幅對（紳尾藏帳所載）一蝶龍坂長範、夏雄、一乘の盡各十點位あつたが皆燒亡した。

平井恒之助氏（木挽町）も全燒した。燒失品の主要なるものの左の如し。

一守景仙人圖　一文晁青綠山水圖（尺八）　一雪山童子遊戲圖　一國虎秋景山水圖　一海屋山水自畫賛大額　一是眞四季花鳥圖屛風一双　一同十二支圖二曲屛一双　一光琳盛菊蒔繪料紙文庫　一時代蒔繪秋草書棚　一是眞秋草蒔繪重箱（五重）

農商務省商品陳列館（木挽町）陳列品全燒。總點數約十萬五百點。內外各國各種の工藝品並に一般商品の標本を網羅したもので、中には精巧なる美術品も多數あつたが、目錄を失したるが爲めに、其詳細を知ることが出來ない。其內美術的作品の重なるもの數點を左に記す。

一祐乘以下後藤家代々の金工物　一是眞漆繪波上海老圖額　一夏雄彫金雨中柳鷺圖額　一夏雄彫水仙圖硯箱蓋　一川島甚兵衞作綴錦（明治二十九年製）　一齋藤正吉作草花蒔繪書棚（巴里博覽會出品）

羽山半三郎氏（築地）護持の金銅觀世音像と大師將來神護寺傳來の念珠とは帶出し、其他二三點の偶然に焦土の裏に無事であつたものの外、蒐集の佛教美術品の多くを悉皆燒失せしめた。今名殘の品目だけを記すこととする。

一平安朝古畫不動明王像　一同一字金輪佛頂曼荼羅　一同種字曼荼羅

一鎌倉時代五大明王像五幅（蒙古降伏の修法に用ゐたといふもの、高野山傳來、銘に眼公菴とあつた。即ち隆辨阿闍梨の筆である。）

一傳住吉慶恩春日曼荼羅（般若寺傳來）　一鎌倉時代金剛界曼荼羅　一軍荼利夜叉像（醍醐寺傳來）　一弘仁時代鍍金柄香爐　一唐製鬼面四天王鈴　一大師將來鍍金四面器一組三函（法起寺傳來）　一藤原時代粉溜螺鈿厨子　一同鍍金水瓶（八幡法勝寺傳來）　一同天蓋幡六流　一由良莊興國寺法燈國師所持塔鈴　一古經卓（多武峯遠明寺傳來）　一平安時代脇卓　一大和古印並古鏡八面　一古菊燈臺（田安家傳來）　一孝恭曲水重陽圖双幅　一同夕顏圖　一同中嵯峨野左右勿來關香爐峰三幅對　一同敏行朝臣加茂社頭圖　一應擧丹鶴圖（鄕男爵家舊藏）　一景文柳下鶯鶯圖　一雅邦山村行旅圖　一春草湖畔月夜圖

堀越福三郎氏（築地）では先祖岡十郎以來代々の遺物一品も殘さずして灰燼に附してしまつた。其內の要目は、

一雪舟觀音像　一文晁楊貴妃圖（享和二年作）　一峯山不動明王圖（齋藤拳石の爲に作る所）　一同徒然草圖卷　一一蝶麻衣浮舟圖　一春好二、四、五、六代目團十郎似顏　一豐國元祖、三、七代目團十郎似顏　一芳幾八代目團十郎似顏　一廣業九代目團十郎似顏　一元祖團十郎願文（元祿十年九月十一日）　一二代目團十郎筆矢の根五郎のつられ　一同自畫贊矢の根五郎　一二代目傳來四山瓢（芭蕉翁の米櫃に代へて使用せし瓢にして芭蕉自筆の四山瓢の贊幅を添ふ）　一二代目の自筆日記老の樂　一四代目團十郎自畫贊遊女圖　一春草暫圖、五、六、七、八代目寄書　一七代目團十郎自畫贊鎌輪奴　一破笠作時鳥の尺八　一鳥居清貞筆歌舞伎十八番の引幕

其他代々の遺墨、舞臺使用の衣裳小道具等多數で、記すに遑なき程である。九代目が山內容堂から拜領した勸進帳の衣裳などもあつた。

大澤幸次郎氏（築地）は、古畫の一部分を持出したほか、大半は燒失した。其內の二三を錄する。

一雪舟三十三觀音の內二幅（此二幅は福島正則の所持で信州の某寺に傳來したもの）

一元信瀑布圖大幅　一興以山水圖屛風內十扇（二扇は助かる）

醫學博士山田鐵藏氏（築地）は、藏品中の大德寺、黃檗諸僧墨跡の殆ど完備せるもの、文晁古畫摹本中の大幅のもの數十點、白隱禪師十餘點、水戶志士の尺牘數卷、陶磁器約百點、古畫數點、洛陽古寺の壁畫の一部分（幅一尺堅一尺五寸位、仙人美女狐等を描いた彩色畫。）等のものを燒失した。最も惜まれたのは、米澤の志士雲井龍雄の遺書類多數を遺族から引受けてあつた一束であつた。其內には、

一討薩の檄（日下太郎左衞門の手紙などを貼りつけたもの）

一外交帳（半切紙に認めた日記で、主として薩長の離間策を講じて却て乘ぜられた時のことを米澤藩へ報告した時の記事であつた。）

等の如き、維新史料として重要なものであつた。

杉山茂丸氏（築地）は、愛刀家中での被害の甚大なるものである。木挽町網屋の倉庫に保管してあつたもの約百刀を燒失した。其主なるもの大凡左の如し。

一相模國正宗短刀、在銘、號立田、拵付　一同同無銘、號吉野、拵付

一筑後國元眞刀、在銘
一筑州住弘行劍、在銘　大小拵付

一備中國貞綱刀、在銘文永四年
一備中國貞次短刀、在銘元弘元年　大小拵付

一相州秋廣大平造脇差、在銘貞治三年、拵付（堀尾吉晴所持、（埋忠銘鑑所載）　一平戶住盛廣短刀　在銘建武五年　拵付

一西蓮刀　在銘　拵付　一伊勢國村正刀並短刀　在銘　大小拵付　一和泉守兼定刀並脇差　在銘　大小拵付　一備前國盛光短刀　在銘、應永二十年、拵付　一和泉守兼定短刀、在銘、拵付　一兼氏刀、無銘、拵付（酒井家傳來）　一因州住景長短刀、在銘　一青江吉次刀、在銘　一長谷部國信短刀、在銘

（右二口は山岡騎兵大佐が明治天皇より御手づから拜領せし由緒付）

一肥前國近江大掾忠廣刀並短刀、在銘、大小拵付　一丹波守吉道刀並短刀、在銘、大小拵付

一肥前國忠廣刀、在銘
一肥前國忠吉短刀、在銘　大小拵付

一長曾彌虎徹刀、並脇差、在銘、拵付大小　一國廣刀並短刀、二字銘、拵付大小　一日本善清堯脇差、拵付　一出羽大掾國路太刀、在銘、長三尺三寸五分　一越前唐繼刀並脇差、在銘、大小拵付

千葉松兵衞氏（築地）も多數の藏品を全滅した。其細目は未だ知られないが、冷泉爲恭の仁德天皇、養老勅使、黃金獻上の三幅對など世に知られたものであつた。

別府金七氏（新富町）は、俵屋宗達關屋の屛風、光琳波浪の二曲を、往年割愛し、居を關西に移したので、多く這般の禍を免れたが、然もなほ多年の收集一千數百點を今度の震災に祝融氏に讓渡してしまつた。其目錄中では、

一信實歌仙切能宣朝臣像（曉齋舊藏）　一玉樂筆十一面觀音（福岡子爵舊藏）　一上杉房定筆文殊實傳贊　一雲溪筆水墨山水双幅（秋元伯子爵家舊藏）　一宗歲筆岩上觀音　一尙信筆蓮鷺蓮鶴鴿圖双幅（溝口伯爵家舊藏）　一常信筆蓮鶴鴿圖　一松花堂筆牡丹木蓮圖双幅　一壽昌筆蘆雁圖双幅　一嵩谷筆月下砧圖　一光琳筆韋駄天圖（百圖の內）　一同扇面鵜飼圖　一同扇面寒山拾得圖乾山贊（百圖の內）　一光悅蓮華下繪百人一種切　一始興筆中壽老左右筍雞菊雁圖三幅對　一宗雪筆中東坡左右芙蓉梧桐圖三幅對　一抱一筆內裏雛（玉屋遊女白玉に與へたるもの）　一同中鍾馗、左右松竹梅圖三幅對（木綿地幟繪）　一北齋筆清少納言圖鵬齋贊　一巢兆筆菊竹小禽圖　一廣重筆多摩川夜景圖　一呂杞筆溪澗双禽圖　一是眞筆雪中鶯鶯圖　一幽谷筆月波圖　一芳中筆竹雞圖双幅　一抱一筆四季花鳥圖二曲屛風二双　一同牡丹獅子圖二曲屛風一双　一光琳筆扇面散團扇散二曲二屛風一双　一光琳墨畫山水小品張交二曲屛風一隻　一松花堂筆詩歌書屛風一双　一嵩谷筆萬歲圖二曲屛風一隻　一椿岳筆百鬼夜行圖二曲屛風一隻　一長春筆四季遊行圖卷　一是眞蒔繪波貝袋戶二枚　一潮戶肩衝茶入銘常磐山（松平乘邑箱）　一島物耳附茶入　一高麗吹墨茶入　一井戶茶碗（遠州箱）

等がある。其他琳派末流のもの頗る多く、椿岳も約二十點あり、現代畫も少からずあつた。墨蹟にては中峰明本の一行物を始め、近世の名僧愚堂、無難、白隱、遂翁、東嶺、仙崖、諏訪等の書畫約五百點と稱し、此方面に於ても亦屈指の蒐集家であつた。

男爵森岡荘一郎氏（南小田原町）は、其藏品約一千點、悉皆を烏有に歸してしまつた。其の内書畫では、

一印陀羅筆豐干寒山拾得圖月石溪賛双幅　一同中布袋（賛不明）左右朝陽對月圖中峰賛三幅對　一默庵筆拾得圖（表具織部好）　一同朝陽圖　一恩斷江禪師墨蹟　一李安忠筆鵜圖　一毛益筆南天雀猪圖　一夏圭筆月夜山水圖　一馬遠筆月舟笛吹人物圖　一西行法師消息　一雪舟筆岩鶴鴛圖（遠州所持）　一同淡彩山水圖　一同山水圖　一同青葉達磨圖　一啓書記筆山水圖　一同維摩圖　一相阿彌筆月夜山水圖　一元信筆中鶴、左右柳燕、鷺鴛三幅對　一同三教圖　一探幽筆中文殊、左右獅子三幅對　一守景筆中龍虎、左右風雷神圖三幅對　一光起筆櫻下西行圖　一光琳筆宇都山圖二曲屏風　一同紫式部圖　一同中太公望、左右蓮鷺圖三幅對　一笠翁筆扇面乙御前圖　一應擧筆猫圖　一同櫻花流水遊馬圖　一同栗穗鶉圖　一抱一金地杜若圖二曲屏風一双　一藍瑛米法山水圖等の尤品を擧ぐべく、器物はまた之に劣るよりも、寧ろ優ると見るべき名品揃ひであつた。

一中興名物生海鼠手茶入銘妹背山　一唐文琳茶入　一飛春慶茶入　一源十郎茶入銘上風　一薩摩燒茶入銘小柴垣　一同銘額回（玉室傳輯添）　一高取燒大海茶入銘唐崎　一高取燒茶入銘夜の雪　一佛前燒茶入銘春雨　一玉子手茶碗銘雪柳（姫路酒井家舊藏）　一古井戸茶碗銘小濱　一同銘七屋　一無地志野茶碗　一人形手茶碗　一雨漏茶碗銘鳴子　一繪高麗梅鉢茶碗銘巖松　一遊擊五器茶碗　一ソバカス茶碗銘卯花　一柿の蒂茶碗銘巖松　一玉子手茶碗銘若菜　一御本御所丸茶碗銘山の井　一朝鮮唐津茶碗銘眞藏院　一瀨戸唐津茶碗　一元茶碗銘澁柿　一宋胡錄柿香合（丹波屋の柿と稱す）　一青磁桃香合　一仁清琴香合　一染付圓窓菊香合　一吳洲周茂叔香合　一青磁鴛鴦香爐　一伊賀花入（唐犬耳）　一吳州赤繪金花鳥鉢　一毘寬作純金觀音像（高約二寸立像・銀製厨子入、河合寸籟舊藏）　一時代蒔繪山川ノ箱　一時代蒔繪鍋緣小硯箱　一小町蒔繪硯箱　一胴亂形獅子牡丹紋散シ蒔繪印籠　一榮川下繪觀松齋桃葉作岩に巢蒔繪印籠　一破笠作黑奴長印籠

武井五藏氏（南小田原町）全燒、氏は古畫趣味の古い數寄者で、今度失はれた内の數點を左に揭げる。

一寧一山墨跡　一周文關扇樓閣山水圖　一雪舟淡彩眞山水圖橫物　一相阿彌出山釋迦圖

一近世名家貼交屏風（中には光琳椿、乾山菊、寬政文晁歸去來、蘆山莊子等の名品があつた。）

副島延一氏（明石町）は、文人物殊に支那畫の蒐集、それは質に於て優れた名品を燒失せしめた。左にその要目を揭げる。

一宋易元吉花鳥圖卷、設色密畫　一倪雲林小山疎林圖並尺牘

款曰壬寅十月二日寫贈寓齋尊文倪瓚湘管齋寓賞編及過雲樓書畫記所錄

一黃鶴山樵出峽圖　一沈石田山水圖卷（羅振玉舊藏）　一文徵明沈周唐寅太湖圖卷

文三橋の跋文に衡山青綠畫三品之一也とありしもの。

一文徵明沈周唐寅太湖圖卷

文沈唐の三家が蘇州潘牛巖の爲めに作つた水墨山水三圖を合裝したものに、乾隆皇十一子並に頂墨林其他の跋文を附屬したもの。

一楊文驄山水畫冊十二幀　一王石谷青谿曳杖圖　一王鑑雲泉垂釣圖　一釋道濟雲逸先生歸新安之圖　一釋弘仁梅竹高士圖　一惲南田花鳥山水畫冊八幀　一同同十二幀　一同扇面花卉帖十二幀　一馬守眞山水墨蘭畫冊九幀　一華山山水扇面帖十二幀

辰澤延次郎氏（新船松町）は、日本美術院派の畫を悉皆今度の火難に滅燼してしまつた。左に其要目を摘錄する。

一雅邦維摩圖　一大觀日蓮上人圖　一同釋尊供乳圖　一同壽老圖大幅　一同漁樵問答圖　一觀山天心先生像　一同波題目圖　一春草辻說法圖大橫物

鹿島清平氏（四日市町）は、收藏の珍什の悉皆を祝融氏の手に攫み去られた。

一兆殿司筆觀音像（麻地畫）　一同羅漢圖二幅　一雪舟筆中釋迦、左右人物三幅對　一雪村筆瀟湘八景圖双幅　一元信筆鴛鴦圖大橫物　一同中釋迦左右魚籃觀音、柳下舍人圖三幅對　一豐太閤天下色紙　一光悅書百人一首卷　一探幽筆中淨瑠璃鏡、左右閻魔、奪衣婆圖大三幅對　一同筆中庚申、左右餓鬼女英圖三幅對　一常信筆中西王母、左右樓閣山水圖三幅對

一光起筆中文珠、左右牡丹金鶏、芙蓉蘑香猫圖三幅對　一光琳筆業平東下圖双幅（百圖の內）　一同金地草花八曲屏風一双　一何晶筆觀圖大橫物　一一蝶筆朝妻舟畫讃（當谷箱）　一應擧筆太上老君之像（抱一舊藏）　一同波浪圖六曲屏風一双　一同中御所車、左右青楓鹿馬圖三幅對　一同花鳥圖六曲屏風一双　一抱一筆中郭子儀、左右鶴龜三幅對　一文晁筆唐繪寫畫帖　一曉齋筆師旭山姥圖双幅　一備前則光刀（拵夏雄作）　一備前盛光刀（同）　一康光脇差（拵一乘草花）　一祥瑞大鉢（徑約一尺五寸）　一祥瑞花瓶　一飛青磁花瓶　一青磁獅子大香爐　一小堀遠州遺愛硯銘文友　一夏雄作竹手焙一對　一同謎圖額　一同金地墨畫清水寺舞臺圖風呂先　一是眞蒔繪青海波模様膳椀三十人前揃　一是眞、泰眞合作雛道具一式

鹿島千代氏（銀町）は、收集の書畫器玩の盡くを燒失した。然も其藏弄の富は驚くべきもので、牧齋が十餘點もあつたといふことを見ても、其一斑を推知すべしである。かかる寶庫を一朝にして煙と化し去つたのは眞に痛恨に勝えないことである。しかも、道具帳も燒失したので、其品目の詳しきを知ることが出來ない。殊に、支那畫、墨跡等の筆者名が喪はれたのは遺憾の極みである。今左に知られた限りに於ての重要なものを揭げる。蓋し九牛の一毛にも過ぎぬであらう。

一牧齋紅榴圖　一同茄子圖

此二品は有名なる龍光院の柿栗ともと同卷中のものであつた。

一同朝陽圖　一同寒山圖　一同出山釋迦圖　一同觀音圖

一同布袋圖　一同猫圖　一同牡丹椿圖双幅　一同龍虎圖
一同栗鼠圖　一戴文進四五點（鍋島家傳來）　一兆殿司白衣觀音

其他兆殿司四五點

一雪舟雪景山水圖　一同觀音圖三種　一同龍虎圖双幅　一同瀑布圖　一相阿彌蘆雁圖六曲屏風一双　一雪村山水圖卷、序文あり　一同　達磨圖　一同釋迦圖　一同觀音像、其他二三點　一元信中壽老左右松竹雞圖三幅對　一同唐子遊圖

其他元信三幅對三組、單幅數點

一友松物花鳥圖屏風一双　一探幽中壽老左右秋草圖三幅對
一同中壽老左右夏冬山水圖三幅對　一同十六羅漢圖双幅
一同釋迦三尊三幅對　一同近江八景横物八幅　一同山水圖卷
一同花鳥圖六曲屏風一双　一同金地鶴圖二曲屏風一双　一同鍾馗大幅双幅　其他探幽約七十點
一尙信西湖山水圖六曲屏風一双　一同中布袋左右山水圖三幅對　一同葡萄栗鼠圖　一同白狐圖　其他尙信二十餘幅
一常信宇治茶業圖六曲屏風一双　一同郭子儀圖　一同十六羅漢圖大横物　其他常信數十幅
一探幽尙信常信三夕圖三幅對　一守景京四季圖六曲屏風一双
一松花堂西行圖賛江月　一同驢馬圖　一同布袋圖　一同水仙圖　一同竹雀圖　一同中布袋左右山水圖　一同達磨圖其他松花堂數點
一光琳業平東下り圖（尺八絹本）　一一蝶朝妻船圖　一應擧中雉子左右鶏圖三幅對　一同枯木鷹圖　一同丹鶴圖　一同萩鶏圖　其他應擧四五點
一大雅高砂尉姥圖双幅　一文晁丹頂圖大幅　一同西湖圖大横物　一同四季山水圖四幅　一同風雨晴蓮圖三幅　一同中月左右富士筑波三幅對　其他文晁多數
一古筆手鑑　一平康頼島からの文　一定家卿色紙其他十二三點　一利休書置の文　一芭蕉嵐雪其角其他色紙短冊百餘點
一不昧公筆物數種

器物の數も夥しきもので、一例を申せば、茶入だけが箪笥四棹、香合が二棹、茶杓が約三百本といふのである。其他之に準じて知るべし。

一唐物茶入漁夫、夫婦二個（小堀家傳來）　一藤四郎吉光茶入、遠州箱（小堀家傳來）　一古瀬戸茶入富士　一銀製唐草毛彫棗形茶入　朝鮮來聘使の献上品にて支那物なり。
一滿月茶碗（豐太閤傳來）　一若草茶碗　一ノンカウ黑二ツ印茶碗　一ノンカウ黑茶碗　一魚屋茶碗淀船　一三島茶碗
一小夜中山茶杓、利休文附　一和歌浦香箱　一ノンカウ獺子香爐　一青磁獅子香爐　一青磁佛器形香爐　一赤繪赤玉香合
一染付香爐約五十點　一ノンカウ手爐　一青磁水盤二十餘組
一青磁鳩置物　一青磁置物釋迦三尊　一青磁花生多數、內瓢形四　一古銅花生多數　一漢竹爐緣　一名物琴形硯　一堆朱物數十種　一光琳梅料紙硯箱、色紙箱短尺箱共　一古更紗數十種　一刀劍約百五十口　一緋威鎧二領　一萌黃威鎧一領

說田彥助氏（南新堀町）も、襲藏の蓄積七千數百點と稱する夥しきもののうち、長持七八棹、約一千點のものは救ひ出された。因果經、崋山溪澗野雉などの名物は、幸に其内にあつて助かつたが、其他は擧げて灰燼に歸し、疇昔の盛觀は忽焉として影だになくなつてしまつた。

一貫之高野切　一道風卷物切　一佐理飛雲切　一行成室町切
一俊頼民部切　一俊成顯功切　一定家本能寺切　一宗尊親王有栖川切　一西行白川切　一傳春日基光若松圖、後京極良經和歌賛、光起添狀　一宅磨榮賀東鉢繩敷天神圖（大聖寺家舊藏）　一鳥羽僧正鳥獸戯畫卷殘缺　一明兆羅漢圖　一同朱達摩圖、天海僧正添狀　一可翁岩窟觀音圖　一周文樓閣山水圖、五山僧詩文責　一同柳燕圖、探幽極　一宗丹設色花鳥圖七幅（一橋家舊藏）　一同箱根湖上富岳眞景圖、大横物　一能阿彌富岳山水圖　一藝阿彌牧溪寫猫圖　一相阿彌夏冬山水圖双幅　一啓書記酢吸三聖圖、佐久間將監箱　一同寒山圖　大德寺清巖箱　一雪舟風雨山水圖（秋元家舊藏）　一同雪中山水圖大横物　一同僧形文殊圖　一雪村東鉢天神圖　一同松鷹圖　一同破墨山水圖双幅　一秋月春秋山水圖双幅　一同梅雪山水圖　一楊月朱達磨圖、策彥賛　一道安設色枝柿圖　一元信琴棋書畫圖双幅　一同夏冬山水圖双幅　一同岩翡翠圖　一同燕菜圖、策彥賛　一同蝦蟇鐵拐圖双幅、常信極　一眞笑眞山水圖　一山樂東鉢天神圖、近衞龍山公賛、名物和解天神と云　一等伯丹霞燒木佛圖　一等顏瀑布人物圖　一松花堂中陶淵明左右鶏圖三幅對　一同中人物左右寒山拾得圖三幅對　一同笑布袋圖（秋元家舊藏）　一二天蘆葉達磨圖　一探幽雪舟寫中布袋左右鶴圖三幅對　一同中裸鼎左右竹雀柳燕圖三幅對　一同楊貴妃圖（秋元家舊藏）　一同牧溪寫枯木猿猴圖、天海僧正賛、（護國院舊什）　一同半身觀音圖（越又舊藏）　一同槇雀、竹雀圖双幅、澤庵賛　一尙信竹林七賢圖　一同枯木猿猴圖、江雪賛（酒井家舊藏）　一安信周防內侍圖　一守景中舟辨慶左右壇浦山水圖三幅對　一同中牡丹花肖柏左右紅白牡丹圖三幅對　一同雪舟寫春秋山水圖双幅（大聖寺家舊藏）　一雪信李夫人圖　一常信瀑布圖双幅　一同激浪群燕圖双幅　一一蝶日出杉玉鶏月下燒蛤圖双幅　一同百燕百雀圖双幅　一同土器賣桶師臼目立圖三幅對　一同行平松風村雨圖　一光起淨土曼荼羅圖（大聖寺家傳來）　一同王昭君圖　一宗達千代能圖　一同中竹朝顏左右紅白躑躅雉子鶏圖三幅對　一光琳中壽老左右鹿鶴圖三幅對　一同梅竹圖小袖切、抱一箱　一同團扇雪松波橋圖双幅　一乾山白百合圖自賛　一同柴船圖　一應擧中人麿左右須磨明石圖三幅對　一同孔子像、應震箱（聖堂舊物）　一同黑白兎圖、龍公美賛　一同寒鯉圖（一條家傳來）　一同綿木圖、秋成賛　一同虎乘鍾馗圖大幅　一同　林和靖圖、應震鶴圖添幅　一同夏雨農舟圖　一蘆雪常磐都落圖　一同菊慈童圖　一同竹蜘蛛竹印月圖双幅　一同蜀三傑圖三幅對、淇園賛　一源琦瀧山水圖　一同渡唐天神圖、龍公美賛　一素絢水中蘆鶴圖　一同富岳圖大横物、蜀山鵬齋賛　一南岳雨中牧童圖　一狙仙白猿圖　一同雪中芭蕉老猿圖　一同章魚圖　一吳春松塘群鴨圖　一同川柳鴨圖、清暉箱　一同雨中山水圖　一同洛葉老父圖　一景文茅柳三日月圖　一同花菖蒲螢圖　一同金泥富士圖　一豐彥平泉印月圖　一岸駒赤壁山水圖長條幅　一蕭白樓閣山水圖　一柳里恭白鷹圖、堂上賛　一同鶏頭花圖、共箱　一同中月下竹圖左右五言一行書三幅對　一大雅　蘭亭曲水圖、栲亭箱　一同蘭亭周茂叔圖双幅（蜂須賀家傳來）　一同水墨山水圖、蓁葭堂箱　一同青綠春夏山水圖双幅、龍公美賛　一同淺絳松竹山水圖　一燕村柳陰山水圖　一同漁夫圖双幅　一同北越紀行遊女圖、奥平家傳來）　一同墨梅圖、月溪箱　一竹田中白菊左右月見圖三幅對、直入箱　一同水墨蓮圖山陽題詩、直入箱　一同戴安道雪中山水圖、直入箱　一同群獬圖自題、直入箱　一同陳賢寫羅漢圖、直入箱　一同燈下讀書圖自詠題　一同松嶺白雲圖長條幅、杏雨直入箱　一同水墨春景山水圖、壯年所

作　一山陽水墨山水自題長條幅　一同山水圖除夜作　一来山人水墨桃園山水長條幅　一同水墨松林山水圖自題　一牛江青綠淡彩四季山水圖四幅對　一同水墨溪陰山水圖(田中介眉舊藏)　一同　来法山水圖(介眉舊藏)　一同水墨淡彩山水圖六幅對　一同淡彩花卉果物圖八幅對　一草坪花鳥圖松翁贊　一同青綠松林山水圖　一淇園旭光照波圖　一同遊女背奏圖　一介石仿伊孚九水墨山水圖　一同春秋山水圖二幅、裏金　一竹石其面瀑布眞景圖長條幅　一梅厓秋景歸雁圖　一同秋景山水圖淇園添舟爲赤壁云々のあり、長三洲箱　一春翠墨梅竹圖竹田添並題詩　一梅逸羅浮仙圖　一同大湖石水仙圖山陽題詩　一同四季花卉圖巻　一高陽山人夜梅圖長條幅　一海僊夏雨歸牛大幅　一木米陶器窯圖大横物　一竹洞石川丈山像　一同青綠山水圖　一海屋秋江歸帆圖　一同青綠春景山水圖長巻　一對山梅尤圖　一文晁青綠松林山水圖　一同青綠春景山水圖　一同氷室夕立圖樂翁公贊　一同秋帆孤亭圖　一同梨花圖同贊　一同牽牛織女圖箱幅　一巢山蔬谷贊　一同秋帆孤亭圖　一同能阿彌寫茂林宿鴉圖　一巢山仿伊孚九長江萬里圖、小華箱　一同秋溪幽牖圖、小華箱　一同藤雀圖、小華箱　一同林和靖圖、小華箱　一同秋草鶉圖、小華箱　一同夕顏棚納涼圖、小華箱　一同虎溪三笑圖、椿山添書梁谷箱　一同猛虎圖、小華箱　一同瀧山水圖、河村雪鴻箱　一同内裏雛圖、小華箱　一椿山松白鷹圖、小華箱　一同秋雛圖、小華箱　一同秋草鶉圖、雪鴻箱　一同黄菊百蟲圖(淺野梅堂舊藏同箱)　一同紅梅小禽圖、雪鴻箱　一同黄菊百蟲圖(淺野梅堂舊藏同箱)　一同南田寫牡丹圖自題　一杏所青綠樓閣山水圖　一同水墨山家幽靜圖　一鷗厓淡彩春景山水圖　一同雪中山水圖長條幅　一抱一中達磨左右禪語三幅對、共箱　一同百合石竹圖双幅、鵬齋題詩　一同杜若圖　一同紅白椿花圖双幅(鴻儔舊藏)　一同光琳寫風

雷神圖双幅、其一箱　一同遊女白玉圖白玉贊　一同春雨猫圖自題(鴻儔舊藏)　一同金地秋草圖双幅　一其一白衣觀音親鸞熊野詣圖双幅、共箱　一又兵衛鸞照女圖　一同保々狂亂狂言圖大横物　一師宣淨瑠璃姫圖　一歌麿遊女圖　一榮之遊女圖　一芳厓夏景眞山水圖大幅　一同春景山水圖大横物　一曉齋傀儡師圖大幅　一容齋四民四季圖四幅　一同那智瀧觀音圖大幅、行誡上人箱　一同徐世賓像　一和亭遊魚圖　一同秋江吹笛圖　一草雲秋景山水圖　一同楊柳觀音圖　一玉章濱邊老松竹林圖三間四枚襖　一土佐光茂西行物語二巻　一如慶職人盡繪長巻　一具慶三十六歌仙圖巻　一探幽孔子一代記一巻　一松花堂いろは四十八字書巻、羅山跋　一源琦祇園加茂祭圖巻二巻　一牛江設色花卉盆栽圖巻二巻　一同遊覽筆記大巻(東海東山四國方面遊行中の寫生圖巻)　一棒山日光七瀧圖一巻、雪鴻箱　一巢山淡彩山水人物帖八幀、小華箱　一棒山花鳥蟲魚帖四十八幀、小華箱　一同花卉帖、小華箱　一棒山花鳥帖十二幀、小華箱　一同梅花帖、蕊翁序、梅堂跋　一牛江花卉山水帖、共箱　一春荘帖一帖、書畫百六幀、春嶽公贊文書巻添　一樂々帖二帖、樂翁公所輯、和漢名畫寫六百十餘幀　一小山林堂明清金扇面帖四帖、七十二幀　一和亭密畫花鳥帖、二十四幀　一古土佐名物帖　一元信花合戰圖屏風一双(姫路酒井家傳來)　一啓書記眞山水圖屏風一隻　一宗達金地四季草花圖八曲屏風一隻　一光琳金泥鳴子稻穂圖屏風一双　一探幽松竹梅圖屏風一双(川越侯傳來)　一晴川院玄宗楊貴妃圖屏風一双　一始興武藏野屏東海帆船圖屏風一双　一土佐光信松竹梅春草雉子圖屏風一隻　一同光則大内繪屏風一双　一應擧雪中松梅圖屏風一双

一同京名所圖八曲屏風一隻　一蘆雪花鳥魚介人物圖屏風一双　一同牡丹芍藥雀圖屏風一双　一皆川淇園歸去來賦書屏風一隻　一竹田柳鳥流水圖屏風一双　一文晁四季山水十二景圖屏風一双　一华江花卉圖縑屏風一双　一景文牡丹小禽圖四曲屏風一双　一古筆張交屏風一双　一桃山屏風橋邊櫻花圖一隻　一寬齋春秋水山圖屏風一双　一大雅山水圖二曲屏風一双(兼良堂舊藏)　一同松竹圖二曲屏風一双、鷗厓添書　一蕪村金地鹿圖二曲屏風一隻　一竹田漁夫圖詩書二曲屏風一隻　一巢山荻窪驀蟲圖自句題二曲屏風一隻(小華傳來書添)　一素絢柿烏圖二曲屏風一隻　一其一職人盡繪抱一題句二曲屏風一双　一李龍眠靈照女圖(蜂須賀家傳來)　一劉松年白鷺圖、永納寫添(永平寺舊藏)　一夏圭樓閣山水圖　一梁楷普化禪師圖　一李迪花卉蟲圖　一牧溪水月觀音圖、探幽縮圖添、伊川院箱　一無準岩上觀音圖　一同四睡圖　一毛益筍圖　一默庵白衣觀音圖(蜂須賀家傳來)　一舜擧花鳥圖　一紅白川鵜圖、東山御物　一趙子昂馬人物圖　一趙仲穆人物畫贊　一戴文進柳下牧童圖　一諸昇墨竹圖長條幅　一沈石田冬景山水圖　一唐伯虎風雨山水圖(松平阿波守舊藏)　一呂紀老松孔雀圖(寛永寺傳來)　一藍田叔松林山水圖、梅逸箱　一沈南蘋花鳥圖長巻、樂翁公題字花鳥二字　一同指頭畫花鳥圖双幅(增山家傳來)　一羅牧水墨山水圖長條幅　一金冬心紅梅圖　一椋圃秋景山水圖、海屋箱　一伊孚九山水圖六幅對、信天翁箱

中澤蓬吉氏(南新堀町)は、蒐集の文人趣味のものを中心に、古佛像、古繪巻、墨跡等の收藏品の總てを灰燼に附してしまつた。其の重品としては、

一六朝佛數點　一天平銅佛々頭

一藤原末期大日如來坐像(高約二尺五寸)

一高野大師行狀圖繪第一巻(高野山地藏院傳來　のものであると云ふ、其第二巻以下は現に同院にありて國寶である。詞書は近衞道嗣公筆、繪は土佐行光と稱せらるるものである。)

一雪舟筆四皓圖　一相阿彌筆達磨(永眞紙中極)　一降陽縐墨跡尺牘　一了菴桂悟墨蹟(江湖集七絶)　一元信筆水墨山水圖六曲屏風一双　一探幽筆前後赤壁賦書六曲屏風一双　一大雅筆富岳圖大横物　一同書畫六曲屏風一双　一蕪村筆剛亭曲水圖　一同樵夫伐柯圖　一物徂徠筆草書五律大立幅　一吳春筆春秋山水圖六曲屏風一双　款存允白)　一崋山筆一路功名圖一同尺牘長巻　一木米筆秋景山水圖　一竹田筆觀音像　一海屋筆秋景山水圖旭莊贊　一爲恭筆四季人物圖四幅對　一寬齋筆雪景山水圖巻　一親枝山草書巻　一費隱草書巻　一陳賢筆觀音像自贊(紙本淵二尺、長條幅)　一詹景鳳筆背面羅漢圖　一江稼圃筆五柳先生圖額春水贊(絖本淵二尺、春水に贈る所)

等を擧げ得るが、其他にも、黄檗物、草雲など特に多かつた。器物では最も木米を愛せられて、其の尤物約四十點も秘藏せられた。其内の涼爐、筆筒、祥瑞寫火入、赤繪香合寶珠などは希覯の名品で、往年京都の洛陶會に、東山の靈鷲山莊で一席を持たれた時にも出陳でせられて賞贊を博したものである。又唐宋の古窯物から伊萬里、九谷等に至る和漢の蒐集少からぬものがあつた。而して、大正八年歐米漫遊の際に將來せられたものは、美知草と題する圖錄の編著があつて、其儘だけは偲ぶことの出

來るのは不幸中の幸であつた。今左に其目次を記しておく。

一ロダン作鑄銅思索する人　一ルノアール畫西班牙服の女
一埃及碧硝磁小人形二軀（紀元前五六世紀のもの）　一埃及白磁人形　一埃及鍍金銅像　一獅頭人身磁像及碧磁像　一希臘黑繪手レキートス（紀元前五百年頃のもの）　一希臘黑地オイノーケ　一希臘テラコッタ像二軀　一羅馬綠釉月桂樹紋陶盃　一波斯碧釉人形二軀　一波斯唐草文樣碧陶器水注及綠釉耳附陶器花瓶　一波斯碧釉耳附陶壺　一波斯藍釉小陶壺　一波斯硝子釉陶盞　一高加索繪附玻璃瓶　一トンボ玉一連（古代アツシリヤ製、色硝子玉）

第六　芝　區

岩原謙三氏（芽手町）は、幸運にも土藏が燒け殘つて、什寶の多くは事なきを得たが、偶ま居室に取出されてあつた弘法大師眞蹟金剛般若經開題一卷（赤星家舊藏）が此災厄に罹つたのは、今度の燒亡古書中の尤品で、最も惜まるるのである。又粉引茶碗（大聖寺家傳來）も火に入つたが、之は不思議にも灰燼の裡から無事に掘出された。

服部金太郎氏（愛宕下町）は全燒して藏品も失はれた。其重品の二三を左に錄する。

一畢山耕作圖（柿沼氏舊藏、椿山摹本添）
一應擧山水圖双幅（二尺絹本）　一春琴花鳥圖大幅　一海屋詩書屛風一幅　一對山幽亭曲水圖大幅　一雅邦山水圖一幅（双幅の內）

小宮次郎氏（鐵道省汐留官舍）は、先代親文氏遺愛刀劍の內三十六口を燒失した。其內小笠原家傳來のもの數點を左に揭げておく。

一備前兼長刀、拵付　一志津刀、同　一備前宗光勝光合作、同一備前景光刀、同　一左刀、同

第七　赤坂區

大倉集古館（葵町）は、男爵大倉喜八郎氏が明治十年前後の頃から蒐集した東洋古物を、大正六年の秋に、財團法人の博物館となして、同七年五月から公開したものであつた。同館は豫て防火設備として屋上に水道を引いてあつたさうだが、今度の震火災には何等の功能もなくて、陳列館と事務所とを一夜の煙と化してしまつた。

同館の建築物は元來公開的の陳列館として設計せられたものでないが爲に、廊下などの多い複雜なる構造であつたが、大體に於ては第一號から第三號までの三館から成るものであつた。その三號館の階下には桂昌院の靈廟があつた。桂昌院は即ち五代將軍綱吉の生母で、其廟は芝增上寺境內にあつたが、明治の初年頃大倉氏の聘ひ取て保存せられてあつたのを、此館新築の時に、其規模を縮小して階下に仕組んだもので、內陣の壁畫唐獅子蓮華圖は常信一派の筆に成つたものであつた。此の靈廟內に安置してあつた金銅釋迦坐像と迦葉、阿難の立像はもと北京の萬壽山にあつたものであつたが、いづれも廟もろともに燬斃けてしまつた。又同館階上の一室に上段の間といふのがあつた。之は京都伏見の興正寺に傳つてゐた桃山城遺構の一部分で、床壁の帝鑑圖說の圖、帳臺飾の鵜の圖、襖の梅竹の圖などは桃山風の快濶なるものであつた。次に構內の西北隅靈南阪に添うた高處にあつた齋善堂はもと京城景福宮の一宇で、朝鮮建築の標本と見るべきものであつた。以上悉く灰燼に歸して、殘つたのは倉庫と表門だけである。

集古館の藏品は總數四千四百六十六點であつた。其內倉庫にあつたものと、火事の際努力して救出されたものと、又火災には罹つたが修理して復活の見込あるものとの概數約一千百七十點あるから、之を除いて約三千三百點が全く燒亡したわけである。

さて其藏品の種別は、第一が東洋諸國の佛像頭像の類が中心で、其他は概ね東洋諸國の工藝品である。即ち日本の蒔繪品、支那の堆朱品、石佛、銅佛、古銅器、墓磚、陶俑等で、繪畫は最も少なかつた。

佛敎道敎關係の造像法具の類は大體に於て約千點許りと稱するのであつたが、其內佛像の完全に殘つたのは、同館の優品木彫普賢菩薩象坐像（藤原時代）同法蓮上人坐像（鎌倉時代）釋迦如來夾紵像（朝鮮李朝初期）等を始め、暹羅、西藏の銅像類の十七點で、其他は大部分燒滅した。其內には、

一飛鳥時代釋迦三尊碑像、其他二軀　一天平時代乾漆優婆離尊者立像（十大弟子の一、興福寺傳來同寺の六軀は國寶）
一百萬塔二基　一粗塔四基　一平安時代木彫阿彌陀三尊三軀（多武峰傳來）　一平安時代佛像、五重塔、法器類約二十點
一鎌倉時代木造彩繪厨子　一同　木彫阿彌陀如來立像　一足利時代木彫阿彌陀如來立像一軀　一同　木彫千體佛　一同　藥師如來懸佛（銘應永三年）　一同　如意輪觀音懸佛
支那の佛像佛具は約三百軀あつたが、古いのは、
一六朝銅佛像七軀（內に大建五年、開皇十年、同十五年の銘あるものあり）　一唐時代金銅大五鈷　一南宋時代銅板千體佛（金の皇統戊辰の銘あり）
位のもので、他は總て清朝のものであつた。其內の佳なるものは、
一青銅盧舍那佛坐像　一同　十一面千手觀音坐像（殘缺あり）
一同　準提觀音坐像（同）　同一　喇嘛敎式普賢菩薩像
朝鮮佛像にて、
一三國時代釋迦如來其他七軀　一同塑造五重塔一基　一高麗時代觀音像其他二軀
西藏の佛像並に佛器類約二百三十餘點はさ程古からぬものなれども、此館の一特色であつた。其內の珍物には觸髏形の灑水器二個、龜背盤二座、木造白檀塔大塔婆、降魔樣六個などがあつた。支那造敎像約百五十軀、暹羅佛像約七十餘軀等皆亡びて、金佛殘骸の累々たるもののみだ。

近年、關野貞博士が新に將來せられて、大倉男から寄附せら

れた支那古物七十三點の內には見るべきものがあつた。即ち、

一石彫獅子（三國時代か）　一石彫龍頭（同）　右二點は魏の曹操が築いた銅雀臺の遺址より出土したと稱するもので最も優秀なるものであつた、殘缺あり。一大理石彫釋迦三尊並千體佛像（六朝時代正光三年の銘あり）　一大理石彫釋迦三尊立像（六朝時代）　一大理石彫菩薩形立像（六朝時代）　一大理石彫釋迦三尊像（唐咸享年間の刻）　一龍門刻石零片三個（六朝時代）　一貴像石二個（漢時代、一は河南所出、一は故端方舊藏）　一石彫獅子一對（六朝時代）　一石彫鬼頭（六朝時代）　一塼塔、墓塔十二個（漢時代）　一晉故沛國相張君之墓碑石（晉時代）　一四神圖刻藏墓石（唐時代）　一銅製權、同量（秦時代）　一石造鼻鈕蟠龍形磨盤（漢時代）　一蟠螭銅鐘（周時代、清初の畫家王時敏の所藏）　一銅鏡三面（周秦時代か）　一銅製馬車金具百五十五個（漢時代、河南より出土したと云ふ）　一龜版龜甲片十六個（殷時代）　一同骨片十六個（同）右三十二個河南省彰德府より出土

以上の內銅器の殘骸の少々存するばかりで、大理石佛などは燒け崩れてしまつた。

次に工藝品で、蒔繪物は、總數約五百ばかりあつた。其內の優品なる鎌倉時代長生殿圖草手繪手箱、同時代の香奩二個、德川時代山水高蒔繪書棚、同流水菊蒔繪文臺硯箱、同唐山水蒔繪料紙硯箱、支那元時代螺鈿花唐草文樣伽羅箱等は幸に搬出せられた。此種のやけたものの內では、

一公驗辛櫃（鎌倉初期、木地に花鳥の彩繪あり）　一散地蒔繪螺鈿群蝶文鞍（足利時代）　一斑錫梨地高蒔繪松鶴文鞍並鐙（同）一梅樹柴垣虎溪三笑蒔繪書棚（桃山時代）　一散地蒔繪山水圖伽羅箪笥（同）　一明月梳五客（鎌倉明月院傳來）　一秀衡椀十九客半（德川時代摹造）　一竹組地鉛嵌入御所車蒔繪手箱（德川時代）　一御厨子黑棚一具（同）

などが目ぼしいものであつた。其他約二百ばかりの印籠全部と、經箱、机、文臺硯箱、料紙箱、文箱、手箱、硯箱、香箱等各種の調度、並に蒔繪した武器鞍具の類總て燒亡した。

陶瓷器の類は元來左程多くなかつた。又支那朝鮮ものが主に多くて、日本物、西洋物は尤も少なかつた。支那陶瓷器五十餘點、支那青瓷六十餘點、朝鮮陶瓷器約百三十點の內、砧手千鳥香爐の名品が一點救ひ出された外は、全部火中したが、燒跡から掘出されて比較的無事なものも多數ある。燒滅したのでは、

一宋窯綠釉鼎二座　一同彩虹壺　一天龍寺浮牡丹大香爐　一萬曆赤繪雲龍文筆盒　一白瓷紅彩蝙蝠並雲文花瓶　一彫紅五彩列仙圖並做銀花文大花瓶　一朝鮮青瓷白釉魚嵌雲鳳文合子　一彫り三島手茶碗

などが尤物であつた。次に古墳から發掘した支那の明器即ち副葬品の陶俑、漢代の婦女俑（燒滅）一つを除いては、悉く唐朝のもので約百五十點、三彩釉のもあり素燒に彩色したのもあつた。此等の大部分は燒殘りがある。朝鮮三國時代の古墳から出た古陶器約五十點、又日本の古代土器も數點あつた。

支那の七寶器（約十點）玉石器（約五十點）支那朝鮮の螺鈿器（約三十餘點）の內で、の尤物は左の如し。

一七寶白地藻魚文盞（明時代）　一廿青玉有蓋茶甌（清時代）　一白玉琢彫十干十二支文玉版十六枚（同）　一甲板樓閣人物圖周邊蔓草文螺板（明時代）　一神龍弄珠圖螺鈿琴（同）

銅器で、支那は上周漢から下は元明に至る間の鼎、尊、彝等の祭器から鑑鏡其他の雜器各種類で總數約百六十點ばかりあつた。就中周時代の彝が優れて見るべきものであつた。それから

一漢代銅鼓二座　一明代胡文明鉄金狩獵飛文鼞耳熏爐　一同作鉄金古祥文香爐　一同作鉄金龍鳳文螭耳香爐　一宣德銅流金香爐　一明代銅琴　一乾隆青銅鱗文豆四座　一青銅鉄金鐙二懸（乾隆十三年製の銘あり）　一唐金製雲版（乾隆己巳の銘あり）

朝鮮古銅器は大概高麗時代のもので、鑑鏡、雜器等約九十點ばかりあつた。日本銅器は左程多くなかつた。其內では、

一整珉作唐金蛾文香爐　一同作唐金蚊虻蝙蝠文香爐　一長崎龜女作黃銅茄子形香爐　一明珍宗助作鐵鎚起鬼面硯箱

支那の堆朱器約百五十點は集古館第一の特色として、世に誇示したものであつたが、今や全く消えて影だになし。就中、

一乾隆堆朱圓形雲龍文大菓盒（清朝宮廷の什器）　一明代堆黃圓形樓閣人物圖香爐盆　一明代堆黃八花式陷地紅錦萱草文大盆（故端方舊藏）

等は特に傑出したもので、其他、元明代の香盒、香盒盆、香爐盆、茶托、印匣、文具匣、筆管、拜匣、菓盒、座屏などの類概れ上作のものであつた。

伎樂、舞樂、能狂言の面、並に樂器約九十點は全燒、能衣裳小道具五百七十餘點は近年佛前池田侯爵家舊藏のものを取込んだのであつたが、其約六割は倉庫にあつて災を免れ、其餘は燒亡した。

又、德川時代から明治初期に亙りて用ゐられた公武男女の裝束類約七十餘點、並に婦人化裝用具十五點も全滅した。

武器では刀劍拵へ付で四十餘振の大部分は搬出せられて助かつたが、裝劍小道具の類約六十點は亡びた。甲冑九領、鎧直垂四領、又鞍具には平安時代の製と鑑せらるる鐵製の壺鐙二隻、輪鐙一隻あつた。其他朝鮮、支那、印度、波斯、南米智利等の武器も數十點あつた。

尙、支那古物で、墓誌石六朝から唐代のもの七個、周漢代から六朝末期に至る間の墓塼約二百八十個、萬里長城の塼一個、朝鮮三國時代の墓塼數個、漢代から唐代の瓦當、棟瓦數十個、殷代の龜版數個、漢代の封泥十數個、周代陶器の零片約八十個、以上全燒。

書畫類は比較的少く、總て約三百點に過ぎなかつた。此館を美術館と稱せなかつた、所以は玆にあるのだ。書蹟では燉煌石室發掘の寫經二十四卷あつた。其書目は、

一妙法蓮華經二卷、穀紙墨字、隋時代　一大般涅槃經二卷、同同　一妙法蓮華經六卷、同唐時代　一同一卷、黃麻紙墨字　同　一佛名經卷第八、穀紙墨字、同　一佛說賢劫十方千五百佛名經、同、同　一維摩詰經卷上、同、同　一大般若波羅蜜多經二卷、同、同　一金剛般若波羅蜜經二卷、同、同　一戰

一切有部集異門足論卷第九、同、同　一法集經卷第一、同、同
一大般涅槃經卷第五、同、同　一妙法蓮華經卷第一、同、同
一金光明最勝王經二卷、同、同
又日本寫經七卷、その內に、
一大寶積經卷第六十八、白麻紙墨字　光明皇后御願經の一で、天平十二年の奥書、卷中「東大寺印」の印記あり。
又、古筆家で所謂大聖武切に和漢の碩學十五大家の讃詞を併せて一帖としたもの、並に神護寺傳來の平安時代の經簀、其他朝鮮暹羅、緬甸の寫字經もあつたが、悉く燒亡した。
繪畫の大部分は、幸に倉庫にあつて助かり、やけたのは僅かに二十點ばかりに過ぎなかつた其內の主なるものは、
一桃山屛風檜畔垂柳水車圖一双　一古畫蹴双圖屛風一鞠
一友松筆金地松竹梅圖屛風一双　一關帝曼荼羅（道佛混淆の思想で作られた珍畫）　一乾隆帝南巡圖卷一卷（此卷は高宗皇帝の乾隆十六年南巡の盛典を內廷供奉の畫人徐揚が描きたる十二卷中の第五卷であつた。もと淸朝御府の舊物で、堆朱の筥に納めてあつた）
又同館には支那誦芬室舊儲の書籍一萬三千四百八十二册と、全唐書一千四冊と、日本の淨瑠璃丸本四百五十餘部との藏本があつた。此等は幸に倉庫にあつて災厄を免れたのはせめてもの幸であつた、日常參考用の雜書約千冊が事務所でやけた。
男爵大倉喜八郎氏（葵町）の藏品の一部分で、赤坂の本邸に藏せられたものは悉く燒亡して一物も留めなかつた。其詳細は調査中で未だ知られないが。今先づ是迄知られた重要品の數點を左に擧げておく。
一光悅蓮下繪百人一首三卷（之はもと本阿彌家の重寶で、光悅書卷の代表的の名品であつた。此卷往年一度切斷せられたことがあつて、其際幾分は他へ分讓せられたが爲め、標本は殘つてゐるが尙七十首位はあつたのが燒けた）　一光悅漢詩書大卷（高さ約二尺、明治天皇の故伊藤公へ賚つたところのもので、公爵薨去の後ち大倉男へ贈られたもの）　一元信唐人物圖屛風一双　一探幽長良川鵜飼寫生圖屛風一双　一應擧波浪圖屛風一双　一源琦應擧寫雪松圖屛風一双　一光琳秋草圖小襖二枚　一是眞古名畫寫屛風

第八　本鄕區

伯爵松平賴壽氏（元町）の藏品中、其大半は近年舊領地讃岐高松の別邸に保管せられてあつたが爲めに、本鄕の本邸は全燒したが、重要なる美術品の概ね災を免れたは僥倖であつた。滅亡したものも少くないが、就中長次郎七種茶碗の一の木守は尤も惜まるるものである。
一長次郎茶碗銘木守（此茶碗は茶宗利休が長次郎に命じて燒かせた數個の茶碗を門人等に頒つた時最後に殘つたもので木守と銘じたのである。木守とは俗に柿の實を採る時には來年の豐作のまじなひに一つを殘しておくのを木守といふのに倣つて名づけたのだといふことである赤樂の茶碗で、利休が愛用したものである。）
一傳吳道子筆孔子像（高一丈餘、濶四尺餘）　一貫之高野切
一雪村筆柳鷺圖屛風一双　一探幽筆龍虎圖屛風一双　一吳春筆夏冬山水圖双幅　一文晁水墨山水圖　一黃金茶釜（維也納世界博覽會出陳）　一左文字刀（無銘、先祖類重指料）
一左文字短刀（銘表左、裏筑州住）　一兼光短刀（銘表備州長船兼光、裏文和三年三月日）　一包淸鑓（兩鎬大身鑓、銘表讃岐國高松住文殊四郎包淸作、裏元文五年八月日）　一一光太刀（銘表備前國長船住左近將監長光造、裏永仁六年十長月日）　一一文字太刀（銘、表一）　一象谷作わすれ貝香合三個（八個の內）
小菅丹治氏（元町）は、左記主要なもののほか、多くの古書畫古器物を全滅せしめた。
一相阿彌筆東坡騎驢圖　一大雅筆水墨山水圖　一祇南海筆山水圖　一文泉筆墨馬圖十二幅　一峯山筆淺絳夏景山水圖
一靄厓筆墨梅圖（全紙）　一杏所筆淡彩秋景山水圖四幅
一梅逸筆百花圖（全紙）　一寬齋筆十六羅漢圖　一漢符壺（古銅、花瓶として所用）　一白高麗水盤　一柿右衞門五艘船模樣食器七種二十人前揃並同大皿二枚　一柿右衞門花模樣小皿四十枚　一同八角丼二十個　一同丸丼十個　一光琳作如意硯箱、白樂天問答料紙筥　一是眞蒔繪波月文臺、龍虎料紙硯箱　一鐵哉筆金地墨畫蘭亭圖屛風一双　一大觀筆金地四季山水圖屛風一双
山內晉氏（湯島四丁目）にて有名なる竹田筆香雪齋圖、米庵西遊折瓊等は幸に濱町の土藏で助つたが、湯島の邸では震災の頃恰も香溪翁重患の病牀にあつたが爲めに、火の迫るや家人一同其の看護救出に全力を盡して、他事を顧るの暇なく遂に藏品を擧げて灰燼に附してしまつた。其內で最も惜しまるるものを左に錄する。
一佐理卿艸書白詩綾地切　一香雪齋書畫冊　一明王中立花卉圖卷（淺野梅堂舊藏）
田中慶太郎氏（本鄕一丁目）は、藏品商品ともに全燒した。其內二三の重品を左に錄する。
一敦煌石室本六朝書抱子一卷（論仙第二對俗第三の殘卷）
一煌敦石室古畫天龍八部圖　一郎世寧唐岱合作湖石光花鳥圖大幅　一吳昌碩畫百數十點
東京帝國大學（本富士町）にて失つた美術品類は、圖書館に於ては、
一伴大納言繪卷三卷、田中訥言模寫　一紫式部日記繪詞二卷住吉廣尙模寫　一光明寺本當麻曼荼羅緣起一卷、摹者不明
一竹崎五郎繪詞二卷、摹者不明　一福富草紙一卷、摹者不明
一海洋淸宴圖卷（淸朝初期の畫）
其他、浮世繪の版畫類で、廣重の東海道五十三次の如きは別版の七八種ばかりもあつた。又、美術史研究室では、次のものを燒失した。
一アジャンター佛窟壁畫摹本十二種二十幅　一敦煌石室本佛畫摹本二十幅　一和漢古畫絹本數十種　一圓覺寺舍利殿模型（二十分一）　一朝鮮陶磁器約三十點（約五十點の內）
高田單三氏（湯島三組町）は、蒐集の美術品を擧げて灰燼に附してしまつた。其內繪畫の主要なるものは往年出版せられた

圖錄「心華帖」三卷に收められてあるから、其圖樣だけは知られる。又、「心華帖」以外に屈指の名畫が數點ああつた。今左に其の重要なるものを摘錄する。

一傳弘法大師木筆不動尊（高野山傳來）　一可翁筆中布袋左右叭々鳥三幅對　一周文筆淡彩梅花屋圖　一同泥引山水圖　一岳翁筆竹林七賢圖了菴贊（田中青山伯舊藏）一明兆筆羅漢圖二幅（落款明兆筆）　一宗丹筆寒江歸牧圖（印元賀）　一藝阿彌筆中觀音左右蓮鷺蘆鷺三幅對　一雪舟筆羅漢圖三幅（第一、第六、第七尊者）　一同豐後鎭田瀑布圖　一雪村筆觀瀑遊戲圖（西鄕家舊藏）　一元信筆風雨晴山水圖三幅　一光起筆紫式部石山圖　一光琳筆米囊花圖　一乾山筆桔梗圖　一應擧筆雪中狗兒圖　一蘆雪筆李白圖　一景文四季花鳥四幅　一竹田筆淺絳雲仙山阿婆灣眞景圖　一同金碧山水圖　一畢山筆富岳寒林圖　一長春風俗繪卷一卷　一容齋水墨蓮圖　一夏圭筆山水圖大橫物　一王暉筆樓閣山水双幅　一趙子昂筆盧同煎茶圖（相良子爵家傳來）　一印陀羅筆寒山拾得圖双幅　一明畫無款山水人物圖　一戴文進筆溪山銷夏圖　一周東村筆溪文公圖　一謝時臣筆夏山積雨圖　一藍田叔筆寒山行旅圖　一陳嘉言筆梅花鵲圖　一張瑞圖筆水墨山水圖　一龔賢筆溪山飛泉圖　一橋柱寺緣起三卷（畫飛驒守光秀、詞書世尊寺行能卿）　一傳周文筆眞山水圖屛風一双　一傳元信筆壇浦合戰圖屛風一双　一探幽筆泥引墨畫山水圖屛風一双

高木利八氏（湯島三組町）は、少からざる襲藏品を全滅した。其内には、

一元信花鳥人物圖屛風一双　一木米淺絳山水、賴山陽題詩双幅　一雅邦裏金地山水圖屛風一双

等の尤品がある。又、木米の凉燈、三友卿急須、七賢人茶碗等の煎茶器にもよいのがあつた。

湯淺了雅氏（湯島新花町）も土藏が落ちて書畫器物と鑑定用の參考書類とを失つた。藏品中に西行櫻間の池の懷紙といふものがあつた。之は阿波國名西郡の名所櫻間の池にて西行法師が詠んだ歌をかいたもので、古來同地の庄屋の家に傳來した名物であつた。その歌は「かがみともみるべきものをはるくれば月のみかかるさくらまの池」といふので、圓位とあつた。

一頓阿法師作人麿像（頓阿が歌供養の爲めに百體作つたといふものの一つである。世間に摹作のものが多いが、之は飛鳥井榮雅の門人淡路の歌人稻田の家に傳來したもので、有賀長鄰が人麿忌を修した時にも態々此像を淡路へ借りに來たとのことである。）

一春琴筆文房陳具圖山陽贊（大橫物、山陽が五言二句を隷書にて題したのが珍らしかつたといふ。）

一應擧筆墨畫髑髏圖　一堂上武家短冊帖

飯田藏太郎氏（湯島天神町）が本草の藏書を失はれたことは別項の如くであるが、燒失した書畫の内に扶桑壯遊百五十韻三卷があつた。此書卷は先哲叢談、林羅山の條に記されたやうに明曆元年に來朝した朝鮮使愈秋潭が、江戸出發の前夜に、愈使一行が東行の途上東海道の風物を詠んだ詩を淸書し扶桑壯遊百五十韻と題して之を羅山に寄せて賡詩を求めた。此時恰も羅山は内子荒川氏が重患の床にあつたのを看護しながら、一夜にして唱和の稿を作つて、朝鮮使を追ひかけさせて小田原で之で渡したら秋潭は大に驚いたといふことである。其秋潭の百五十韻の林家に傳來したものが又飯田氏に讓られてあつたのである、又、同家にはシーボルトの尺牘（主に宇田川榕菴宛）十二通封筒共にあつたのが燒失した。

第九　下谷區

子爵加藤泰秋氏（御徒町）は、本邸土藏總て燒亡し、祖先傳來の寶什を擧げて一炬に附してしまつた。其重要品目を左に錄する。

一源順萬葉集切　一定家小倉色紙瀧の音は　一同大記錄切　一信實歌仙高光卿像歌爲家　一兆殿主羅漢圖　一雪舟中福祿壽左右蘆雁三幅對　一同出山釋迦圖　一秋月枯木鷹圖　一武田信玄自畫贊水仙圖　一元信黃鷹攫雉圖　一同蓮翡翠圖　一同猿猴圖屛風一双（天文十七年云々）　一友松蘆鷹圖　一加藤光泰畫像、贊文明乙未南化玄與　一探幽中普化左右蘆雁三幅對　一同獅子圖双幅　一同霓圖屛風一双　一尙信中達磨左右寒山拾得三幅對　一同李白觀瀑圖　一常信中太公望左右瀧鯉三幅對　一同金地松竹梅圖屛風一双　一光悅書歸去來辭卷　一一蝶中瀑布左右紅葉鶉幅對　一藤樹書格物致知三語二行　一物徂徠書寄山縣孝孺七律　一應擧山水人物圖　一文晁布袋山水三幅對、其他數點　一山陽書過櫻井驛址古詩　一同書屛風一双　一古筆貼交金銀地屛風一双　一馬遠林和靖舟遊圖　一日觀蒲萄畫贊橫物　一舜擧水仙圖　一寧一山墨跡　一孫君澤西王母仙宮圖　一明馬良畫贊朱晦菴像　一明英宗足利義教へ贈品之色目　一獨立禪師書卷　一藤袴茶入　一古薩摩茶入銘雪中　一木下文琳茶入　一藤四郎柿茶入銘木守　一大和茶入銘なでしこ　一唐津茶入銘老茄子　一井戸茶碗　一熊川茶碗　一文字高麗茶碗　一吳洲染付茶碗　一餅羅茶碗　一高麗邪茶碗　一唐津筐菊模樣茶碗　一交址水指　一宋胡錄水指　一南蠻銅たき桶水指　一瑠璃雀香合　一交趾牡丹香合　一和歌浦文臺（東山御物）　一菊蒔繪硯箱（豐公重箱之由）　一富士模樣釜（先祖光泰所持）　一相州廣次鎗（在銘、先祖光泰の朝鮮役に功名を爲したもので、林鷲峰の倒韓槍記あり）　一備前安綱刀　一千手院重弘太刀　一備前家眞刀　一忠光刀　一金之熨斗馬印之出シ（豐公より拜領）

尙同家には約八千冊の書籍があつた。其内に有名なる韓魏公集、並に光泰の朝鮮役陣中に携帶した朝鮮本論語孟子などがあつた。

三輪善兵衛氏（二長町）は、其收藏せる大名筋の名器類を悉く此の刼火に禍せられた。其内の數品を摘錄する。

一南浦紹明禪師墨跡消息（若州酒井家舊藏）　一馬遠山水圖橫物（秋元家傳來）　一俊頼卿民部切、其他佐理、行成等古筆切多數　一周文眞山水圖　一雪舟巖上觀音圖（戸田彥助氏舊藏）　一利休所持茶入銘木葉猿（對州家傳來）　一光悅白茶碗　一瓢箪形風呂並釜（北野の大茶會にて用ふる所といふ）　一萬曆枡水指（加州橫山家傳來）　一初代春正萩蒔繪香箪笥　一平脫塵八角筥　一足利時代蒔繪西野屋棚　一落穗手茶入銘豐年（伊達家傳來）　一青貝入雲龍蒔繪硯箱（赤星家傳來）　一銀銅經筒花生、鐫銘長文（同）

伯爵立花寛治氏（西町）は藏品のうち、書畫類百二十餘點、屛風五双、刀劍約五十口、馬具數十點を燒亡した。其内には

一可翁寒山圖明道和尙賛　一一休蜆子畫賛　一探幽金地大追物圖風屛一双　一常信月波大横物　一新太郎少將狩獵畫卷五卷　一應擧龍虎圖双幅　一狩野柳雪大江山繪卷三卷　一定家色紙　一西行歌切　一松花堂布袋澤菴賛　一文晁赤壁圖　一廣業海邊老松圖屛風一双　一金梨地高蒔繪挾箱、文臺、文庫、料紙硯箱、香具等一式（近衞家より山内家へ持込のものの更に當家へ轉じたるもの）

杉原榮三郎氏（北稻荷町）は土藏が全く助かつて、藏品無事であつた。燒失したのは光起筆源平一谷壇浦會戰圖屛風一双、其他文展出陳新畫一二點に過ぎなかつた。

安東守男氏（西町）家傳の朱舜水並に張斐關係のもの其他の古書類を燒失した。其内の一二を左に擧げておく。

一朱舜水書敎子樂天四大字並文　一張斐文飛白書

本阿彌光遜氏（東黑門町）では諸家から預りの刀劍約四百口は救ひ出されたが、自家所藏の約百刀は力及ばずして遂に放棄した。其他古文書類並に刀劍關係の古本自著の書册多數も燒失した。

第十　淺草區

神木猶之助氏（今戶町）は、南蘋、文晁等の十點許りを救ひ出した外は、空しく丙丁に附してしまつた。併し氏の燒失畫は往年出版せられた妙蹟圖錄、傳神錄等に依りて其俤を傳へたのはせめても幸である。今其要目を左に錄する。

一大雅疎林返照圖　一同近遠屋木寸馬豆人式圖卷　一應擧溪山飛瀑圖　一僧佚山松下瀹鵝圖　一湊水奇峰觀瀑圖　一諸葛監木蓮飛鳥圖　一桑嗣粲沒骨雁來紅圖　一同　湖山勝景圖　一風夜溪山訪隱圖　一馬孟熙猛鷲圖　一竹石海魚圖　一臺山歸去來圖屛風一双　一雪泉溪山閒居圖　一雲對梅月相思圖　一文晁溪山渡牛圖　一同石上高士圖　一同　射干花圖　其他文晁十餘點

一靄厓萬年報喜圖　一同琵琶法師圖　一椿山花弁畫冊　一同四時集花圖卷　一華谷芙蓉小禽圖　一一蕙盆踊圖　一曉齋十六羅漢圖　一陳喜十八羅漢圖卷（雲對舊藏）　一張可觀漁樂圖　一諸昇竹林七賢圖　一胡玉昆米法山水圖　一何遠、鞾曠、陳坦等花卉山水畫冊　一顧雲卿花鳥人物山水畫冊　一鄭培花鳥數幅　一朱式穀杏花春燕圖　一于壽伯花魚圖卷　一洪滑基牡丹圖　一梁基籬下晚節圖　一秦梧園山水畫冊　一同溪山高隱圖（大横物）　一王林屋遂初園圖卷　一余崧牡丹竹雀、桐實小禽双幅　一同西湖圖卷（柴栗山跋）　一陸鴻山水畫冊十幀　一薛天爵秋溪落暉圖　一貝點溪山溪逸圖　一許儀人物畫冊　一何焯行書杜詩　一査士標水墨山水圖卷　一蔣嵩拜石圖　一李因秋溪双艷圖　其他古銅單、古硏、堆朱器、文房具多數も同し運命に囚はれた。

小栗空嚴氏（今戶町）は、其聚むる所の佛像、法器、聖典等總て三千有餘點、滿堂の莊嚴世間實に其の比儔を知らないものであつたが、這般の靈寶も劫炎一過、悉く寂滅に歸して遺すところ僅かに十餘點に過ぎなかつた。燒亡品中の重要なるものを玆に記錄しておく。

一傳聖武帝御物含利塔春日厨子一基　一傳光明皇后御物華瓶二口　一天平時代舍利悔過一卷（唐招提寺傳來）　一同螺鈿大卓　一同螺鈿御案　一弘法大師將來獨股杵　一同金銅寶珠　一智證大師將來輪寶　一慈覺大師筆兩界種字曼荼羅二張　一傳菅家筆金光明最勝王經十卷　一同理趣經卷　一西大寺流兩部曼荼羅傳授全部廿卷　一淨嚴大和尙筆三十帖策子（箱竹內久一模）　一同兩部大法六卷　一淨嚴大和尙編次第三百卷　一安流大事口訣全部八冊　一蓮體和尙筆儀軌稟承錄全部七十冊　一秘密儀軌（本軌七十四冊、錄外十三冊、十二冊、五冊、四冊、智明和上加筆）　一普光阿闍梨和筆辨財天像　一大雲樹法比丘筆大威德明王八使者渡海圖　一法隆寺金堂壁畫摹本十二幅　一弘法大師將來兩界曼荼羅摹本二幅　一智證將來胎藏三味耶曼荼羅二卷（櫻井香雲摹寫）　一同胎藏曼荼羅二卷（同）　一同胎藏舊圖像一卷（同）　一法隆寺內陣天人全部（同）　一法界寺壁畫天人一卷（同）　一正倉院御物模有職彩色筥（竹內久一摹作）　一同小案並香印坐（同）　一印度將來牙彫吉祥天像　一同　白金塔（高五寸）　一同袈裟其他佛器多數一舍利塔約五十基

栗山善四郎氏（吉野町）は、幸に土藏一棟が無事であつた爲めに、名品の正信布袋などは助かつたが、他の一棟に於て失はれたものも少くない。其内重なるものは、

一抱一筆三十六歌仙二曲屛風一隻　一同四季俳句短尺張二曲屛風一隻　一同稚兒文殊像一幅　一其一筆金地四季草花圖六曲屛風一双　一孤村筆全地月波千鳥圖二曲屛風一隻　一羊遊齋胡民合作三棚諸道具一揃　一抱一下繪羊遊齋三組盃　一胡民、松民合作膳椀一揃　一古雛並附屬小道具一式（抱一金地紅白梅六曲小屛風一、其一若松山小襖等）　一高尾所持三味線銘誰袖　一文化文政以來獻立帳數十册

萬場米吉氏（淺草公園）は、代々蒐めた古い玩具や、玩具に關する參考書、錦繪類並に淺草吉原關係のものに富んでゐた。本は約五千部ばかり、其内玩具のもの約二百種大抵は寫本で、

一歌川豐春筆玩具寫生圖一卷　一齋藤月岑筆同圖一卷　一歌川芳藤筆同圖二百枚一帖

などあつたが、版本は極めて少く、其中で、

一江戶二色、小本一册、重政畫、蜀山序文、安永二年

が珍本であつた。玩具錦繪は約二千枚十二帖、其内には豐春、春章、北條、北馬などのよいのもあつた。又博覽會關係のもの即ち賞牌賞狀、目錄、入札券、案内書類など何くれとなく蒐集したものが澤山あつた。それは維新前英國倫敦に開いた世界博覽會の時のものから、明治大正を通じて内外大小となく殆んど網羅せられたのであつたさうである。以上は皆本所の藏で燒亡した。

神谷傳兵衞氏（花川戶町）は、所藏の玉器類は往年東京帝室博物館へ献納し、軸物約二十點は同館へ寄托してあつたが、其他の書畫器物約一千點を、向島の別邸で燒失した。其内には左記の如きものがあつた。

一慶親王所持螺鈿模樣大書棚三個　一文晁墨畫山水圖八曲屛風一双　一同紺紙金泥十二ヶ月竹圖屛風一双

本多賢祐氏（永住町）は、所有の軸物數十點を住寺誓敎寺寺藏の分と共に燒失した。其內に崋山墨畫碁盤忠信圖大幅の、双幅は全樂堂遺墨中の珍品で、款記に爲孝子賢之丞寫於東都靑山海藏精舍廊下崋山とがあつたさうである。又、文晃の大壁紙李白觀瀑圖もあつた。

子爵大久保忠春氏（小島町）も、全燒して襲藏の什物悉く亡びた。其內の主なるものを左に錄す。

一後醍醐天皇和歌色紙　一銀地金象嵌寶盡茶釜、同丁子風呂、寶盡蒔繪臺（三代將軍より拜領）　一探幽蘆雁圖大幅（同）　一印籠無地色變り（同）　一正宗刀（楠木某佩用）　一高麗獅子高蒔繪鞍

子爵柳澤德忠氏（小島町）も全燒した。同家の重寶は、先祖が綱吉將軍の學問の高弟で、同將軍から拜領した兼光の刀であつたが、他の軸物甲冑什器諸共に失はれた。

澁井新太郎氏（向柳原町）は、其蒐集の雅邦物及其他の新畫多數を燒出した、雅邦中の數點を左に擧げておく。

一雅邦謝安圍碁圖　一同四季月四幅　一同竹林彈琴圖　一同仙洞娛樂圖　一同深林幽猿圖屛風一双

永岡六三郎氏（福井町）は、收藏の抱一上人の作品及び琳派のものを燒いた。法華宗關係のものでは日蓮大士の紅の御本尊を始め、大士の御文、日朗、日像の曼荼羅などの池上本門寺の重寶が、永代借用と稱して永岡家のものとなつてゐたが、此等は幸に持出されて、左記の三點が燒けた。

一日蓮大士所持柄香爐（池上傳來）　一釋尊一尊一代記三卷、池田孤村筆　一日蓮大士一代記六卷、同筆

小林亮一氏（駒形町）先代文七氏は世に能く知られた浮世繪の蒐集家で、其の蓄藏肉筆二千、版畫十萬と稱せられたのも強ち誇大の言でもなかつたらしい。其他、光悅光琳派のもの、浮世繪以外の古版物、繪本類等の收集に於ても少からぬものがあつた。此度の大火が全く夫等を殫滅して一紙をだに殘さなかつたのは、浮世繪並に版畫史料の大災厄で、寔に心外至極のことであつた。今、玆に、其內若干の要目を記錄することゝする。

まづ浮世繪肉筆ものでは、

一土佐光則美人圖　一浮世正歲中男舞左右白拍子三幅對　一雛屋立圃同圖三幅對　一正歲風美人圖　一又兵衞風美人畫其他約十點　一師宣若衆美人圖双幅　一同年中行事圖　一同伽羅留圖　一同編笠みどり圖　一師房遊里後朝圖　一同遊里圖小屛風　一師重伽羅留圖　一師政松風村雨圖　一清信遊女、草摺引圖二曲屛風　一同美人文を見る圖　一清倍演劇荒事圖　一懷月堂安度美人圖五六點　一政信女萬歲圖双幅　一同美人弄笛圖　一遊女喫煙圖、淅水茗園主人題詩　一同草摺引、牛若辨慶圖二曲屛風　一常行三美人圖　一同遊里繪卷　一常正觀楓三美人圖　一長春自畫像（室內續書圖）一同美人立姿圖　一同美人男舞圖　一長春長喜　合作江口君圖　一春水三曲圖　一春章團十郎十扮圖卷　一同美人立姿圖　一同美人遠磨續章圖　一春章嵩谷合作美人閻魔圖　一春潮櫻下美人圖　一春好五代目白猿外郎賣圖、白猿口上書あり　一重信遊女看櫻圖　一豐信浴後美人圖　一春信男女春郊遊行圖　一同美人三番叟圖　一春重七福神見立子供遊圖卷　一寫樂團十郎暫圖、蜀山人並七代目團十郎贊）　一同力士圖下繪九枚　一湖龍齋三美人三幅對　一同墨畫金泥松風村雨圖三幅對　一同美人執燭步行圖　一湖龍齋、春章、文調合作美人若衆圖　一重政歌妓仗三絃圖　一政演靑樓十二時の內六段圖卷　一蕙齋美人聽鵑圖　一同朝日夕日圖双幅　一俊滿宮女觀櫻圖　一同遊女弄羽子圖、蜀山人贊　一同美人螢籠圖　一石燕、歌麿、春町合作美人鍾馗圖　一哥麿美人畫工圖　一同美人立姿圖、眞顏贊　一榮之福神遊廊圖卷　一同美人對鏡圖　一同墨畫遊女圖、三陀羅贊　一淸長梅下美人圖　一同羅生門圖　一同櫻下遊女圖　一同團十郎暫圖　一豐春歲且美人圖大幅　一豐國向島圖　一豐廣女萬歲圖　一北齋美人月下讀書圖　一同筑波祭圖　一同自畫像　一同馬上鐘鳩圖（木綿地五月幟高一丈九尺幅九尺）　一同人物山水草花畫帖、外題薰齋書　一廣重諸國風景圖約三十幅　一同兩國花火圖屛風一双

等が知られた內での主要なものである。而して殊に北齋を好んで、同派のものは肉筆だけでも約四百許りあり、北齋の著作、挿繪のあるもの、錦繪等は殆ど全部を網羅し、又小說挿繪の版木も多數にあつた。版畫は十萬といふのであるから、大低のものはあり、今は所詮其目錄を記す餘地もないが、其內で北齋が可候落款の雲母摺などは珍中の珍として同好者間に持囃されたものであつた。氏は又浮世繪以外の版畫にも注目し、鎌倉足利時代のものを集めた。其內には有名な應永の奧書ある融通念佛緣起二卷が筆頭であることは申すも迄ない、其他一枚摺のもので

一十三佛圖（鎌倉時代）　一理趣會曼陀羅（同）　一葉觀音像、道元禪師贊（仁治壬寅云々とあり）　十三佛圖（足利時代）　一大師御修行御影（同）　一地藏尊圖（同）　一毘沙門天像（同）　一天平曼陀羅（足利時代か）

等は古い方で頗る珍とするもの、德川初期のものは多數にあつた。

又光琳派のものの蒐集にも熱心で、其數少からざるものがあつた。就中光悅廉圖屛風の如きは光悅の畫蹟として重視されたものである。其種の內の主なるものを左に摘錄する。

一光悅筆群鹿圖屛風一隻　一同蘆鷺圖屛風一隻　一宗達源氏浮船圖人曲屛風一隻　一同白罌粟圖二曲屛風一隻　一同宇都山圖小屛風一隻　一光琳双廉圖二曲屛風一隻　一同扇面流し六曲屛風一双（東本願寺傳來）　一同團扇五扇面二（桔梗薄、山寺、罌粟、波浪等佳）　一同雪中柳圖二曲屛風　一同團扇雪松圖　一乾山花卉圖中屛風一隻　一無款光琳風草花圖屛風一隻

尙軟派ものの繪本即ち赤本類から蓖翦本黃表紙類並に各種の挿繪入本蒐集があつた。而して自家編纂もので光琳二百圖浮世繪其他洛款集、浮世繪衣裳文樣集、繪本目錄等の稿本並に大部分印刷の出來たのもあつた。以上の如く小林氏の損失は甚大なるものであるが、全體を通じて最も惜むべき最も優れたものは藤原時代黑地螺鈿草木鳥獸蒔繪經筥等であつたことを特記しておく。

柴田徹齡氏（下平右衞門町）は是眞の孫で、祖父傳來の藏品

の若干は持出したが大半は燒失した。其内の數點を玆に揭げる。

一是眞筆水草圖　一同莊子圖（以上大典博に出品したもの）
一木米茶碗五客（内二客は香山補作）　一香山木米寫茶碗五客

其他是眞が古社寺の什寶を寫した縮寫圖が多數あつた。

古立千吉氏（下平右衞門町）は入江長八塑造の尤物が悉く滅亡した。就中大廣間の床柱椋の大木の空洞に附工した白蛇は人の能く知るところのものであつた。其他置物にて

一白象大香爐（高二尺位、彩色あり）　一大黑惠比須（高一尺三寸位）　一文福茶釜（黑色、高一尺五寸位、長八の尤も丹誠を籠めたる作）

又三間床一杯の文晁墨畫の獅子の幅は、比類稀れなる豪勢なもので、いかにも文晁の巨腕を偲ばしむるものであつた。

酒井清兵衞氏（上平右衞門町）は世傳の茶器を失つた。就中光悅茶碗七種の一なる鐵壁が滅亡して、玆に始めて七種の一を缺くに至つたのは惜みても猶餘りある次第である。同家燒失品中のめぼしいものを左に揭ける。

一光悅茶碗銘鐵壁（黑、千家、冬木、酒井雅樂頭、土方縫之助傳來）　一光悅茶碗ヘゲメ（光悅十作の一）　一南蠻銅鑼（鳥羽屋傳來の名品で、餘響四十抄に及んだもの）
一日蓮上人觀心本尊抄切（長さ約三尺）　一中峰明本墨跡
一印月江墨跡　一定家三首懷紙　一雪舟三十三觀音中一幅
一松花堂小色紙大津馬、澤菴短冊歌贊　一光琳葛に朝顏圖（鴻儀傳來）　一抱一中寬永寺根本中堂左右感應寺塔橋場渡三幅對　一抱一草花圖大色紙六十餘枚（共箱、鴻儀傳來）

第十一　本所區

侯爵德川圖順氏（新小梅町）全燒の内にも第一の寶藏一棟が殘つて、書畫茶器等の重品の事なきを得たのは仕合せであつたが他の土藏に於て傳來の寶刀を悉く火中にしたのは甚だ殘念至極のことであつた。被害の刀劍總數約一百六十餘口拵之小道具類全部約二千點と註せらる。其内の貴重品十二刀を左に特記しておく。

一後鳥羽院菊の御作刀（禁裏から拜領したもので、水戸家第一の寶刀なるのみならず、菊御作中の第一品であつた）
一備前光忠刀號燭臺（伊達政宗此刀を以て人を斬つた時鐵の燭臺も併せ斷つた。德川頼房之を請ひ受けて燭臺と稱した。）
一備前光忠打刀號池田　一備前長光打刀號香西　一大長光刀（光圀指料）　一粟田口吉光短刀號清水　一粟田口國吉短刀號大織冠　一正宗刀號昇龍降龍　一貞宗短刀號宗喜　一包永刀號兒手柏　一國光刀號新躬（アラミ）　一物懼（モノオヂ）（作者不明）

伯爵藤堂高紹氏（横綱町）は祖先傳來の家寶を擧げて火中に投ぜられた。併し不思議にも名物破被茶入を始め燒物類の灰燼の裡に比較的無事に殘存して、其姿を再現するを得たのは啻に伯爵家の幸慶ばかりではあるまいと思はれる。同家には近世詢

羌齋、二洲の如き文人趣味の人が相次で出て、其方面の蒐集に努められたから、其藏品の新古煎抹兩方面に亙つてあつたのは、他の大名華族の道具とは其趣を異にしたところであつた。又同家も道具帳のやけたが爲めに、其の細目を知ること甚だ六かしいが、今は先づ是迄の調査の結果だけを記錄することとする。

一虛堂禪師墨跡　一日觀蒲萄圖　一舜擧花鳥圖　一王建章桐城十景圖十幅　一徐天地花長竹石圖　一同芭蕉圖　一趙彥欽趙君友松桂詩畫卷（米菴舊藏）　一趙之璧蘆雁圖、大鹽後素、頼山陽舊藏）　一七道士魚畫冊（崋山椿山舊藏）一張壽民萱壽延齡圖　一李復堂蟬圖　一同藤花双猿圖　一黃道周七律元旦詩書　一定家小倉色紙君かため　一同逢坂の　一同四季歌書卷一卷

其他定家卿十數點

一能阿彌載嵩寫牧牛圖　一雪舟八々鳥圖

其他雪舟四五點

一德川家康自筆書狀四通一卷　一傳淀君當麻曼茶羅緣起一卷　一豐臣秀次書狀　一本多正純書狀二通　一圓照寺文智女王御消息　一宗達衣桁圖屛風一双　一同扇面荔枝圖　一周信宇治川合戰圖屛風一双　一光琳中壽老左右菖蒲四幅對　一同金泥畫花卉色十二枚　一同雪竹圖　一抱一枯木強日圖　一應擧冬狐狸圖大横物　一同春月圖横物　一同夏月田舍家圖　一同墨畫竹日圖　一同扇面蕨、同兎　一狙仙狸圖　一大雅淺絳山水二曲屛風一隻　一蕪村蕉十哲圖　一文晁青綠山水圖　一竹田華陽歸馬、桃林放牛双幅（中川家傳來）　一同枇杷　一同墨竹圖　一木米吉野山圖山陽題詩小巷　一山陽羽二重說（祝猪飼敬所七十初度）　一同詠史八首双幅　一米山人芝居見物圖　一同高砂圖　一半江花鳥山水畫冊十四幀　一崋山兩國橋納凍圖　一同桃溪流鴨圖長條幅　一同墨竹大幅　一同芭蕉翁像　一同芭蕉十哲像　一同筑波祭圖小二曲屛風一隻　一同三宅侯邸角兵衞獅子圖　一同往還人物圖卷一卷　一同寒塘泛鴨圖

其他崋山十餘點

一椿山軍雞圖　一同大和繪六玉川圖双幅　一同名花十友圖双幅　一同耕作圖　一同鷺圖卷一卷　一同岩躑躅圖双幅　一同崋山寫耕織圖　一同粉本多數

其他椿山多數

一海屋靈芝畫贊　一梅逸花鳥圖卷一卷　一幽谷紅梅鶯圖
一其一楓鹿圖大衝立　一二洲王忘菴寫花卉圖卷　一芭蕉蕎麥花尾花自畫贊双幅　一同いびき圖　一同遺物燒物水雞笛
一同頰杖　一同根來木魚　一號食饕匾壺（米菴舊菴）　一李洞硯（遠州藏帳所載）　一山陽自刻埋木材印　一宋羅小華墨
一玉折枝梅花硯、米菴舊藏）　一支那古筆五函百九十五幹（同）
一中興名物古瀨戸尻膨茶入銘破被　一同飛鳥川手茶入銘雲井
一同茶入銘有明　一古井戸茶碗銘老僧　一有樂齋手造赤樂茶碗銘おそらく　一遠州作茶杓銘二村山　一中興名物利休作花生銘昇龜　一古伊賀水指（世に藤堂伊賀と稱す）　一祥瑞丸紋香合　一金製建水、天目臺（豐公より拜領金器七種の内、其他は殆ど無事）　一れぢの茶碗　一朱泥急須萬寶順記（茗壺圖錄所載）　一松民摹作明月椀膳十人前（内原品一個）
一牙彫福祿壽置物　一伯耆眞守刀　一貞宗刀門貞宗と稱す
一大兼光雉刀　豐太閤遺物　一安綱刀　一包光短刀　一小道

具類三箪笥　一燈籠古田織部所持　一桃山城遺物五三桐透彫屏二枚　一廣袖衣類一枚（高虎大阪陣中着用）　一羊皮製筒袖衣類一枚　一鎧直垂四枚　一虎皮威鎧（高猷着用）　一甲冑約三十領　一唐織萌黃地市松宮殿唐人物　一縫箔白地金波芦舟唐草干網　一唐織萌黃地金立涌桐鳳凰　一狩衣赤地鞘形菊紋　一石橋赤毛（加州家の分と双璧と稱せらるゝもの）

子爵京極高光氏（龜澤町）は一家十人被服廠跡で悲慘な最後を遂げられた位であるから、藏品の一つも助からう筈はない。家藏の名刀三振は遊就館に寄託してあつたが燒失した刀三十餘口、其内には三條宗近の大刀もあつた。其他軸物類百餘點馬具類數點等滅亡した、甲冑は舊藩地豐岡に藏せられて無事である。

安田善次郎氏（横網町）は數百點の香合をはじめ、藤弃の寶庫を擧げて丙丁に附してしまつた。故に其の詳しきを知り難いが左に其の主要なる品目を錄しておく。

一寸松菴色紙　一俊成卿歌切　一定家卿小倉色紙　一定家卿歌切　一良經卿朗詠切（箱抱一）　一兼好法師伊勢物語隅田川　一石室善玖墨跡　一茂古林墨跡　一蛇足一休禪師像一休自贊　一一休墨跡數點　一應擧山水圖双幅　一同許由巢父圖双幅　一同柘榴小禽圖　一江漢蓬萊圖　一抱一紺地金泥阿彌經大幅物　一同十二ヶ月花鳥圖畫贊屛風一双　一同金他盛上草花圖屛風一双

其他鴻儀傳來の抱一多數、抱一屛風尙數双あつた

一椿山ぬれ牡丹圖　一是眞郭子儀圖大幅　一雅邦秋冬山水圖双幅　一同八仙人圖　一同樓閣山水圖　一名物裂地手鑑（冬木家傳來）　一銅鑼遠州銘遠寺　一古銅爭耳茶入（前田家傳來）　一碪青磁花生（箱遠州）　一雲草香爐銘忘れ草（溝口家傳來）　一松花堂下繪會席膳十客　一仁清茶碗宗和銘きりかけ　一仁清屋形舟香爐　一瀨戸累代作品約六十點（初代より二十三代迄）　一古銅印約百個　一名家短籍約一萬枚　一能面小鼓胴類約百點　一根付類數十點（竹内久一舊藏其他）　一村正大刀　一備前祐貞大刀

其他茶器多數の内、祥瑞香合蜜柑などの灰燼の裡より比較的無事に掘出されたのもある。又横網本邸の一部は田安德川家の舊邸で、茶室又隱は玄々齋が田安家の命によりて江戸へ下り千家宗旦の茶室又隱を模して造つたもので、市中の古茶室では有數のものであつたが、附屬の又隱の額、同書幅、大中小三個の棗もろともに燒け、同じく附屬の與次郎の大燈籠も大破した。又其庭も玄々齋好のものであつたが是亦全滅した。

式守蝸牛氏（元町）は石造の一屋が殘つたので、茶器軸物類は無事であつたが、燒けた方には左記の如きものがあつた。

一抱一墨畫檜圖二曲屛風一隻　一其一金地柿圖屛風一隻　一同金地草花圖色紙張二曲屛一隻

北村泰一氏（綠町）は德川家光の枕屛風に貼つてあつたといふ日本及世界地圖（紙本着色、長一丈七尺、幅二尺九寸）一卷を燒失した。

子爵久世廣英氏（表町）も邸宅什寶を擧げて灰燼に附し、唯德川家康から拜領したといふ花崗石の大手水鉢がころがつてゐるだけである。燒失品中の主要なるものを左に記す。

一梁楷柳下布袋圖　一定家卿文藁横幅　一探幽富通士山圖大横物　一備前長船盛景刀（在銘）其他約四十口拵付　一家康から拜領の鐙、其他甲冑四領

淡島寒月氏（向島須崎町）は蒐集の玩具一切を火中に葬つてしまつた。玩具は世界各國からの大蒐集で總數約三千數百種あつた。其他先考椿岳の遺物遺印十四顆また筆藏と題する寒月氏數十年來の聞見雜錄數百十冊を失つた。

村松萬三郎氏（北二葉町）は所藏の美術品類を此別邸で燒失した。その主なるものは

一光琳花卉圖卷一卷（抱一添狀）　一應擧中養老左右鶴龜圖三幅對　一抱一中壽老左右松竹圖三幅對（雨華庵傳來）　一師宣西王母圖　一雅邦春秋山水双幅　一寬齋三社圖三幅對　一寬齋墨畫山水圖屛風一双　一松年韓信圖屛風一双　一松年松圖屛風一双

其他石川光明高村光雲木彫猪などあつた。

故杉山孚氏（太平町）は錦絲堀に於て一家全滅の悲慘極る運命に捕はれた。氏は文人趣味の蒐集家で、尤も華椿の名蹟に富んでゐたが今その詳細を知るによしなしだ世評の高かつたものは華山秋草圖椿山、柳陰雉子圖、同設色花卉十二幀の屛風一双、雅邦瀟湘八景四幅等であつた、就中此の屛風は椿山の傑作に屬するもので、震災直前に同氏の手に歸したものであつたさうだ。

杉山權兵衛氏（表町）は蕉門十哲の一人鯉屋杉風の子孫で家には杉風の遺物遺墨のあつたのを燒失した。併し幸に杉風の木像陶像、文臺等は豫て親類に預けてあつて助かつた。

福島彌兵衛氏（綠町）は少なからざる藏品を燒亡した。其内の二三點を擧ぐ。

一探幽密畫彩色觀音像　一抱一中翁左右男波女波三幅對（繪表裝松竹梅）　一峯山毘沙門天像

第十二　深川區

三野村安太郎氏（西大工町）は前扶煎抹兩方面の書畫器玩を納め寶藏二棟を燒亡した。其數また少からぬもので、未だ其調査を終らないから、今は世に知られた一粒擇りの名品を摘錄しておく。

一明畫邯鄲一炊圖（峯山が同圖の粉本）　一松花堂布袋圖江月來々去々贊（表裝庸軒好、同箱、松花堂遺作中の絕品）　一乾山百合罌粟圖和歌贊双幅　一抱一中山小町草紙洗左右風雨秋草二幅對（永岡傳來、抱一長文の手紙附、抱一代表的の傑作）　一竹田盧同煎茶圖　一華山林和靖圖（秋野雅太郎氏舊藏）　一椿山花鳥圖十二幅（中村清藏氏舊藏）　一靄厓半江贈答畫帖（菊池長四郎氏舊藏）　一靄厓百鶴百鹿圖（三尺幅青錄山水中）

太田德九郎氏（島崎町）氏は、代々蒐集の書畫器物のを全燒した。同家は調査未了なるが爲めに、今詳細を錄することを得ないから、重要なるもの二三を摘記しておく、同家で尤もやかましきものは光琳佐野渡の二曲屛風一隻である。裏の鳥襷模樣

は其一が書いたので光琳名蹟の一であつたが、近年あまり公示せられなかつたが爲めに、世人多くは之を知らなかつたやうである。

一元信筆中布袋、左右松竹圖三幅對　一光琳筆中楠公、左右菊櫻圖三幅對　一大雅筆中書、左右山水圖三幅對　一應擧筆十二ケ月山水圖六曲屏風一雙　一文晁筆牡丹孔雀大幅双幅　一雪谷筆金地松竹梅圖六曲屏風一雙　一容齋金地墨松二曲屏風一隻

村林藥助氏（小松町）は十藏一棟が幸に助かつたので屏風類は無事であつたが、他の一棟で重要なる美術品を失つた。氏の愛藏は書畫よりも寧ろ金工の小道具類で、その收藏の內には獨人セキン氏（伯林博物館の囑託で東洋美術蒐集の爲めに來朝した人）の蒐めた多數の小柄の內から百點を撰り拔いたものなどがあつて斯界屈指の蒐集家であつた。其內には宗珉の繪馬の小柄、乘意の鍾馗、夏雄の柴仙竹壽などの名品があつた。刀劍の約百口印籠の多數も燒けた。書畫類では

一鼻延二世日向上人筆安國論　一雪信筆中女三宮、左右毬人物三幅對　一光琳筆壽老人圖　一同墨畫松竹梅圖双圖　一蕪村筆鳥圖双幅（尺三絹本淡彩、月夜熱柿三羽烏、柳上蔦の風雨に惱める圖の傑作）　一竹田筆前赤壁坡遊圖　一華山筆遊鯉圖　一其一筆金地極彩色紫式部石山圖、銀地墨畫月下鶯賓圖二曲屏風一双　一李士達筆密畫秋景山水圖　一京傳俳句色紙十數葉張交、周圍に京山秋草をかける二曲屏風一隻

等があつた。又同家は川端玉章が深川に住んだ頃懇親であつたために、同時代の作品百餘點も藏せられた。其中には百老、百鳥、雪中松、青綠山水などの傑作があつた。又村林氏の舊居龜住町七番地は鯉屋杉風が採茶庵の跡で、同所にあつた芭蕉の句短冊を刻んだ塚石は村林氏の邸內に移されてあつたのが、今度の火で文字は消滅した。その塚から掘り出した多數の胡麻石（徑一寸位の白石に名號を細書したもの）は助かつた土藏の內で無事なることを得た。

渡邊喜十郎氏（安宅町は）蓄積の文人物の殆ど總てを失つた其の要目を左に記錄する。

一常信石山紫式部圖　一應擧墨畫游鯉圖三幅對　一蕉斐岩上双鶴棟　一徐枫夜雪詩圖　一臺山雲松燈柏圖自題　一文晁梅林山水圖　一同東方朔圖杏坪題詩　一椿山花卉畫冊十二帖　一同　萬年報喜圖　一梅逸菊花水仙圖　一王文治行書聯句双幅　一彭寧求行書七律詩　一隱元禪師獅子吼三大字橫物

宮川曼魚氏（富岡門前町）は、深川關係の書籍證書をはじめ三井親和松本交山等の書畫幅百數十點、古代細棹三絃（古近江及幸藥作）十挺、古代櫛並叙類約三百點、和漢洋古陶器、古代グラス器類百數十點其他江戶風景風俗の版畫軟派文藝の書物等の多數を燒失した。

向井黃德氏（富吉町）は芭蕉門人向井去來の次兄向井元成の後裔で家に元成、去來等の父なる御所醫官贈正五位向井元竹の遺墨並に元竹が宮中から拜領した銅製兎の水滴並に去來鉢たゝきの文などが藏してゐたのを燒失した。

入江長八氏（常盤町）は鏝工の名人伊豆の長八の三代目である。今度の大災で下町にあつた長八の遺作は殆ど總て燒亡したが其家に傳つたものも全滅した。其內の主なるもの泥像

一初代長八自作坐像（高一尺五寸位）　一成田不動尊縮摹像（高一尺餘）　一龍華寺其他山水泥畫額　一鍾馗像二個（一は絲染）

其他長八の畫て聖德太子像、八笑人、蓬萊岡稻、田姬纂畫鍾馗等があつた。

火災區域以外に居住する人々の所藏品で、震災當時偶ゝ罹災地內に於て保管せられ、或は修理裝幀の爲めに經師屋其他にあり或は地方人の上京中携帶せるもの、其他色々の事情に依て此の不慮の災に滅亡したものも少なからずある。今左に是迄見聞したものの重要な分を記錄しておく。

原六郎氏（北品川）經師屋に於て燒亡

一狩野長信風俗屏風一隻（一双內）

神崎平二氏（芝區白金臺町）は其藏品の一部分約四十二三點を三井銀行に於て保管中失はれた。其內の主要なものを左に擧げておく。

一文晁秋山煙靄圖（寬政八年作、世に貸屋文晁と稱せられて有名なもの）　一文晁懸厓畫樓圖（寬政作、栗山贊、大岡硯海舊藏）　一海屋松柏並茂圖（天保十一年作、田近竹村遺愛）　一浦上玉堂水畫冊二十七幀　一是眞漆繪畫冊二十餘幀　一雅邦江邊秋月圖（尺八絹本）　一乾山和陽寫八角絲卷香爐（抱一箱）　一古今里莞磯菓子鉢二對　一勝琅、光長作金工品二十點

高橋光威氏（赤坂區新坂町）は外遊中左記の二點を某骨董店へ保管を託しておいたのが燒失した。

一文晁青綠武陵桃源圖（寬政作）　一倪元璐書幅（伊藤博文舊藏）

池田成彬氏（麻布區永坂町）經師屋にて　一道風朝臣歌切幅

西脇濟三郎氏（小石川區關口臺町）經師屋にて

一冷泉爲恭清少納言秋野遊圖大橫物（谷森男爵舊藏）

西脇鐘治氏（牛込區市ヶ谷仲之町）は西脇銀行並に經師屋にて左記のもの並に屏風五六双、青磁器數十點を灰燼にしてしまつた。

一相阿彌浦湘八景蒲大橫物　一抱一中二見浦左右三社幅對　一巢兆櫻雉子、楓鴨圖屏風一双　一孤村金地紅白蓮圖屏風一双（裏銀泥波浪圖、共箱、鴻儀舊藏）

渡邊雄男氏（大森）は宮本仲氏の土藏で左の屏風を燒失した

一華山兒童遊戲（柴棋書畫）圖屏風一双）

柏木祐三郎氏（下谷區上根岸町）は祕藏の後水尾院の造らせ給ふところの木偶氣樂坊、並に附屬の調度一式を豫て知人の土藏へ托して、その安全を期して居たのが、量らずも今度の大災に襲はれたのは殘念至極のことである。氣樂坊は後水尾院が時勢を憤らせ給ふあまりに造らせられた木偶で、高さ一尺二寸、頭上の平たくして首腦の缺けたやうなのは、御詠に「世の中を

氣樂にくらせ何事も思へばおもふ思はねばこそ」とある意を表し胴體は一木の心棒だけで手も足もないのは、何事も爲す能はぬ意を寓せられたのである。院御登遐の後ち近衞應山公に賜はつたのが、轉々して故探古翁に傳來した。そこで探古翁此の像にふさはしき調度をとて多年丹誠を凝らして集めたのが三十餘點あつた。今左に其内の二三を記すことゝする。

一弘法大師筆無量品軸標（仁和寺傳來）　一豐臣秀吉筆和歌豆色紙小幅　一住吉如筆浮世繪六曲雛屏風一双　一東山時代蒔繪末の松山小硯筥

堀川實次郎氏（本郷區駒込林町）は藏品の一部分を北新堀の東京ビルブローカー株式會社の倉庫に收藏したのを全く燒失した。其内の重要品を錄する。

一南蘋松菊壽帶鳥圖　一柳里恭睡童圖自題　一玉堂水圖山水圖（半切長條幅）　一木米淺絳山水圖　一華山蘆邊虎圖長文自題　一椿山梧桐書屋圖　一山陽湯筆山水圖（半切長條幅）　一竹田茄子圖　一金銅象嵌古銅壺　一存星菊模樣器局　一硯手青磁千鳥香爐　一堆朱筆管（山内邸堂舊藏）　一明代金更紗一卷　一唐三彩大丸鉢

山本悌二郎氏（上目黒）は藏刀の内約三十口を網屋て失はれた。其の重品左の如し。

一來國行刀、號見返り（因州池田家傳來）　一備中片山一文字則房刀　一備前三郎國宗刀、號梵字　一備前長船兼光短刀、號蓮華　一山城中堂來光包短刀　一左安吉短刀

男爵**郷誠之助**氏（麹町區上二番町）は濱町の別邸に於て古印並に書畫の若干を失はれた

榮螺神社（水戸市）の國寶左記の一刀は、もと烈公の指料を德川侯爵家から寄進せられたもので、本所の同侯爵家で保管中火災に罹つて燒損の刀身と鎺だけとなり、國寶資格を取消された。

一備前長船長義大脇差一口（貞治六年丁未云々の銘、元祿四年の折紙附）

松原神社（佐賀市）の國寶左記の三刀は故鍋島直大侯の寄進に係るもので、麹町の同侯爵家で保管中、燒損して國寶の資格を失した。

一相州行光刀一口（朱銘あり）　一相州國廣短刀一口（龍造寺傳來）　一肥前忠吉太刀一口

賀茂神社（愛知縣）の所藏大般若經三卷（保延二年の奥書ある古寫本）は内務省神社局に保管中燒亡した。

高倉神社（福岡縣）所藏足利時代の古寫と見るべき社頭古圖一卷、内務省神社局に保管中燒失した。

友國龜太郎氏（神戸市）所藏曲亭馬琴尺牘十願卷は東京の某旅舘に於て失はれた。右は馬琴が伊勢の殿村篠齋に贈つたもので、幸に其内容は先年出版になつた曲亭書翰集にある。

第二章　古文書、記錄、圖書類の損害

第一　概　說

這般の震火災に罹つた處は、主として商工業の區域に屬して、文獻圖書の類には比較的緣故の薄い方面であるが爲に、此の種の損害は左程のことでもあるまいと思はれたのであつたが、火事は内務省大藏省の官衙に及び、帝國大學は自火を出して圖書館を全滅したといふに至つて、甚だ重大なることとなつた。近年發達しかけた各區の通俗圖書館各學校の文庫、出版書肆や賣捌店の在庫品、古本屋の堆積物、乃至個人の藏書等の損害を計上するならば、幾千萬か幾億か驚くべき數量のものであらう。是も國富の一つで、其損害は容易に償ふべからざるものには相違ないが、夫等圖書の大部分は一般的のもので既に世間に流布したものであるから、只數量の減少したといふだけの結果である。即ち物質的經濟的の損害であつて、必要なものは何時でも復製せらるるものである。從つて夫等は尋常の物貨と同じく、經濟的の損害として計上記錄せらるべきものである。本章に於て取扱ふところの文獻圖書は、本質的内容的なものをいふので、古人の自筆稿本手澤本等の唯一無二のもの、古版本の極めて稀なるもの等の貴重なものだから、其の大部分は何等の力を以てしても永久再び獲べからざるものである。内務大藏其他の諸官衙に於て多大の國家的記錄を失ひ、帝國大學に於て貴重の古文獻を燒き、靈雲寺に於て新安流相承の根本聖教を滅し、安田・黒川兩氏に於て稀覯の古典籍を一炬に附したが如きは、實に我國史創まつて以來の典籍の最大厄難と稱すべきもので、夙に世の齊しく痛惜長大

息したところである、其他、罹災學者の書架に於て亡びた寶冊秘卷も少からぬであらう。又、素封家等の土藏に於て闇から闇へ葬られた珍本稀籍も隨分あるであらう。夫等を精細に調査するのは、一朝一夕の業では出來ないことなれば、本章には、其の重要なる損害に就ての梗概を錄するに過ぎないのである。

第一　麹町區

宮內省諸陵寮（宮城內）帝室御藏の貴重圖書を寶藏する圖書寮倉庫は前述の如く天佑的に此難を避けて全く無事なるを得たが、和田倉門內にあつた諸陵寮は帝室林野管理局の火を被つて全滅の餘儀なき運命に捕はれた。同寮で燒失した書類は、公文書百六十五冊、寫本百二十八冊、刊行物三千百九十五冊と報せられてある。其內では御陵關係の記錄並に明治以來多年に亘つて作製せられた御陵圖等の貴重なるものもあつた

內務省（大手町）警保局圖書課には出版條令に依る納本の書籍雜誌新聞を保管したのが六棟の大倉庫に充滿してあつた。是こそ眞に汗牛充棟の蓄積で、其の大數をすらも測量し難いが圖書だけで概算百萬冊はあつたといふことであれば、數量に於ての圖書被害の最大なるものである。其の書目も固より詳かならぬが、抑も出版條例は始め出版條目といつて明治二三年頃から執行されて、其の頃は文部省で取扱はれてゐた。明治八年出版條例となつた時に內務省へ移管せられたのであるから、明治八年以來のものは全部あつたがそれ以前の分は後に購入したものもあつたけれども悉皆揃つてはゐなかつたらうといふことである。而してその大部分は世間に流布してゐる尋常書肆の賣本ではあるが、其他に官廳の刊行物並に私人出版の配本の類の非賣本も少なからざるもので、其內には奇書珍籍があつた。かゝる明治大正文獻大擧への大圖書館が一朝にして滅亡したのは我が近世文化の大レコードを失つたわけで、大學圖書館の損亡とともに痛惜無限の情に勝えないことである。

次に官房文書課の保管に係るものでは、琉球藩の記錄類が約一千五百冊あつた。之はもと、外務省から引繼いだもので其の內容はいつ頃からのものか詳かならぬが、相當古い時からの記錄と琉球併合に關する淸國との交涉の記錄が主なるものであつた。又藤波子爵家の記錄が約百冊あつた、其他幕府引繼のものでは、江戶並に江戶の地圖數十枚（內數枚は內匠寮へ貸付中で助かつた）舊高舊領取調帳（慶應元年調査）全國治水誌等盡く燒失した。

神社局の藏書も全燒である、其內で同局特殊のものを左に揭げておく。

一神廷雜纂、十五冊　神宮に關する記事を集錄したるもので、中に御巫淸直其他名家の自筆の處多し

一本朝神社牒、四十八冊　吉田家の支配に屬する神社の臺帳とも見るべきもの

一特選神名牒稿、四十二冊　敎部省時代に編纂した式內社及び國史見在社の調書にして小中村淸矩栗田寬其他名家の自筆の處多し

一特選神名牒、三十二冊　右稿本に基き式社の部分を淸書したもの

一國史見在神名牒、八冊　湯川潔主任となつて內務省內部に於て編纂したもの

一官社誌、五十八冊　官國幣社祭神由緖祭祀寶物古文書等を調査したもので內務省內部で編纂したもの

一攝末社考案、十冊　官國幣社攝末社の調査で內務省內部に於て編纂したもの

一官國幣社祭神考證、二冊　敎部省時代に編纂したもの

一訂正官國幣社祭神考證、三冊　吉岡德明の前者を修補訂正したもの

一式社の栞、一冊　吉岡德明主任として內務省內部に於て編纂した式內社の調書

一特殊神事調書、十四冊官國幣社以下各神社に行はるゝ古代の神事を調査したもの

一式社祟敬社調書、數百冊　神祇官再興以來政府が地方廳に命じ各管內式社其他主要なる神社の由緖を調査せしめた大部のもの

一官國幣社古文書　官國幣社所藏古文書中の重要なるものを影寫編輯したもの

造神宮使廳のものにては

一兩宮關係古文書、十二點　舊神官の家に傳來した古文書で明應前後の御造營に關したもの多し

一殿舍圖、十冊　一金具圖、八冊　何れも御造營の典據となるべき古圖で造神宮使廳の創設と共にその所管に屬したもの

一明治二十二年度式年御造營類纂、六十冊　御造營に關する公文書を類纂したもの

一明治二十二年度式年御造營編年錄、十二冊　右公文書に基き御造營の次第を編年體に記錄したもの

一式年御造營提要、一冊　右編年錄に基き更に之を約要したもの

一御裝束神寶圖、十三冊

一同斜面圖、四十五枚　御神寶裝束圖並にその製作に必要なる斜面圖で何れも二十二年度の御造營に關するもの

一明治四十二年式年御造營類纂五百冊　御造營關係の公文書を類纂したもの

一明治四十二年度式年御造營編年錄、三十一冊　右公文書に基き御造營の次第を編年體に記錄したもの

（會計官時代及民部省の一部）

大藏省（大手町）の同書並に文書は總數約六十萬冊と稱せられて、六棟の倉庫に充滿してゐたのが、地震で倉が潰ぶれて路傍へ溢れ出てゐたのを、隣の內務省の方から來た火の爲めに捲はれてしまつた。そこで日本の財政、經濟、貿易等に關する史料の唯一の寶庫が全く空虛に歸してしまつたのは眞に無限の恨事である、其內の重要なる書目を左に列擧して少しく解說を附錄しておく。

一憲閣手簡、二冊　三條實美、岩倉具視、伊藤博文、松方正義、陸奥宗光、大村益次郎外數十名の主として財政上の意見又は献言に關する自筆の書翰を蒐集したもの。

一金座書類、五百拾冊　舊幕府からの引繼書類で、主として金座に關するものであつたが、銀座錢座のものも幾分あつた而してその多くは文化以後のものであつたが、日記類の如きは享保から慶應までつゞいてあつた。

一舊幕府理財會要書類、千百七十八冊　明治十一年時の大藏卿の命に依り記錄局理財會要取調掛を置き、德川時代の財政經濟に關する事蹟の沿革取調の時、各舊藩華族から借上げた舊記文書の類を、明治十六年に當時の時文に修譯して、之を舊幕府理財會要と題し、大正六年に至りて經濟叢書の一部に編入して世に公にした。又日本財政經濟資料と改稱し大正十一年に公刊した。然れども此等編纂の材料になつた一千餘冊には御觸書、御處置類例集等の如き唯一無二の有益なる書類が多數保管せられてあつた。

一大日本租稅史志料、五百冊　明治十八九年刊行された大日本租稅史の資料で、租稅研究材料として最も完備したものであつた。

一大日本通商志、千三百册　明治十八九年の頃時の關稅課に於て日本通商史の編纂を企劃し、景行天皇の韓國通商から明治廿三年に至る間の史料を關稅所在地其他から蒐集した大部のものであつた。

一藩制錄並餘存、二百三冊　明治二年太政官達を以て各藩に命じ、各藩支配地の制度を錄上せしめたもので其內容は支配地總高職員數、兵員數、支配地人口戶數、租稅、豫算、錄高數等一般の事實を掲げ、別に各藩管轄地の地圖三十四帙を附けてあつた。此圖は各藩の區域考證に必要なものであつた。

一祿高帳、三百三十二冊　明治四年から八年に至る近衞兵の賞典祿を首め開拓使并に東京府以下各府縣貫屬士族の祿高及其氏名を一々記錄したもので、其の祿高を奉還した者には「壬支日月奉還」の朱印を押捺してあつた。

一金銀調帳、百二十九冊　皇族及華士族平民の舊家祿賞典祿に關する金銀調帳で元石高、金祿高縣稅及殘金を各使府縣每に一人別に記載したるもの。

一遷祿資金調帳、百九拾三冊　明治七年から十年に至る開拓使以下の祿高奉還者に下賜した資金の調査臺帳で、其金額並に金券番號等を一々記載したもの。

一金券帳、百五十三冊　皇族華族士族平民に支給した金祿の一ケ年額、累年額、券面高並に其種類番號等を一人別に記載した臺帳で實印を押捺してあつた。

一神宮配當祿調書、七十二冊　三府二十六縣から明治十年三月太政官の布告に據りて提出した各神宮の額書並證據書類府縣廳の上申書及び本省に於て調査した書類を編纂したもの

一神官配當金祿公債高調帳、七冊　各神官配當金祿の金額及び公債證書の番號等を記載し氏名の下に領收の證として其實印を押捺したるもの。

一社寺遷減祿調帳、百四十五冊　三府二十九縣の社寺を市郡に區分し、其朱印地高、米穀并金額と十ケ年間の遷減とを一寺一社每に記載したもの。

一地租改正書類、二千三百五十冊　本書は明治六年七月地租改正事務局設置に始り同十七年地租條例發布に至る迄の書類を編纂したもので、地租改正の條例規則の原議を首めとし各府縣に舊幕時代の租稅方法並に改正稟議等を收めたものなれば、單に租稅の參考資料であるのみならず農政資料としても貴重なものであつた。

一本領安堵者調書、一冊　明治二年の調査に係る高家旗下等の本領安堵者の石高、領所名等を記載したもので歷史の參考として重要のものであつた。

一藩札鑑、一冊　舊各藩に於て流通した金、銀、錢米札の楮幣百六十九枚を蒐集帖附したもので、享保十五年から明治四年に至る當時の現物であつた。

一吹塵錄、四十五冊、同附圖、十帙　勝安房の編纂した德川時代の財政經濟事情を記した吹塵錄は明治二十三年に出版されたが、其附屬の圖面は原稿のまゝであつた。其重なるものは西丸圖、佐渡鐵山圖、天主閣骨組圖、町會所圖、江戶消防區域圖、天保分銅圖等であつた。

一國與石高帳、一冊　弘化四年嘉永二年の二ケ年に亙る代官等の所轄高を五畿內、中國筋、西國筋、海道筋、北國筋に區分して、前年に對する增減を附し、總計額等を登記したもの

一會計官日記、三冊　明治元年正月から二年九月に至る會計官即ち大藏省の日記々事で、當時の實況を徵するに足るものであつた。

一御親征書類、一冊　明治元年二月から同二年九月に至る御親征に係る軍費を記載したもので是を軍事費書類の嚆矢とす。而して大阪行幸發令の當時先づ御用金を京阪の豪商に嚴命したが如き新政府財政の實況を徵するに足るものであつた。

一九州地方賊徒征討費書類、六冊　明治十年二月から十二年に至る西南戰役に於ける軍費の整理并に決算規程整理順序區分概則等重要なる書類を蒐集したもの。

一琉球處分原議、三冊　琉球の處分に關し明治五年大藏大輔井上馨正院に建議した原議を首め官吏を派して調査せしめた書類を編纂したもの。

一中山世譜、一冊　本書は雍正三年二月琉球國の國師祭温と云へる者琉球沿革志等の書に據り按司尙賢が撰した中山世譜を改修したもので始に地圖地名世統圖を載せ次に天孫氏以上歷代の事實を記述したもの。

一琉陽、一冊　撰者不詳、中山世譜と大同小異のもの右二書は琉球處分の際國王から提出したものであつた。

一臺灣蕃地事務局書類、千五百冊　明治七年臺灣征伐に關する一切の事實を網羅したので、當時太政官內に設置した臺灣蕃地事務局で編纂したものだ。即ち處蕃原書、處蕃會計決議、同要錄、臺灣始末處分、蕃地往復都督府書類等に分類してあつた。本書は清國政府との條約によつて、內容は一切發表せない事になつて秘密扱としてあつたものである。

一賀易備考綴篇稿本、約三百冊　賀易備考は商業辭典のやうなもので、イからカまでの二千百餘頁の大冊は明治十八年に出版せられたが、翌十九年に經費節減の爲め其綴編は原稿のままであつたものである。

文部省（竹平町）の圖書の燒失したは約十一萬冊である。內其の大部分は教科書關係のものであつたが、寫本で希覯のものは、

一岡屋關白記、三冊　一明月記、七十四冊　一貞信公記、四冊　一玉葉、二十五冊　一阿婆縛抄、六十一冊　一殘燈偎談、十一冊　一筆の露、三十一冊　一淺草文庫書目、十冊

等である。其他十餘年前支那の提學使來朝の時に寄贈した欽定

古今圖書集成の特別製本のものの約一割二百冊許りが燒亡した又宗教局の古社寺保存會に於て多年の丹誠に成つた國寶の臺帳並に特別保護建造物の實測圖（奈良縣の分だけは土藏で助かる）を失つたのは復興の容易ならざる大損害である。

維新史料編纂會（三年町）の被害に就ては同會から發表せられた「大正震災善後事業報告」中に左記の如く記されてある。

（前略）九月一日ニ至リ突如トシテ帝都ハ大震大火ニ遭遇シ巨億ノ文物ヲ擧ケテ烏有ニ歸セシメ本會廳舍モ亦タ夜間數町ノ遠キヨリ燃火ノ襲フ所トナリ宿直員ハ全力ヲ揮テ防火ニ從事セシモ終ニ其功ヲ奏セズ本館（建坪延五〇五坪六〇一）ハ勿論所藏ノ什器其他物品三千六百六十四點圖書一萬三千三百十二部（三萬〇七百點概ネ普通ノ刊行書ニシテ辭典地圖等ヲモ含ム）ヲ燒燼シ、且ツ借入史料八百六十四點（內官廳ヨリ借入レタル刊本寫本等五百四十五點ヲ含ム）ヲ燒損シタルハ容易ニ回收シ難キノ損失ニシテ甚ダ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ。然モ書庫一棟附屬木造家屋二棟及ヒ六個ノ金庫中五個ノ池魚ノ殃ヲ免レタルハ稀有ノ事ニ屬シ、該書庫ニハ既成稿本ノ全部借入史料一萬五千七百二十九點及ヒ圖書六千七百三十七部（一萬六千五百二十六點概ネ貴重ナル原本若クハ本會作製ノ副本ナリ）トヲ格納シアリタルヲ以テ若シ之ヲ燒燼センカ、本會ノ事業ハ根柢ヨリ銷失スベキモ今其事ナクシテ前緒ヲ紹デ編纂ノ步ヲ進ムルヲ得ルモノ眞ニ不幸中ノ幸ナリト云ハザルベカラズ云々。

本會ニ於テ從來作成セル副本ハ四千二百四十一部（四千八百二十五點）ノ多キニ及ベリ。然ルニ震火災ノ際收藏圖書ト共ニ內約八百十三部（一千四百九十三點）ヲ燒失シタルヲ以テ新ニ史料ヲ蒐集シテ其副本ヲ作成スルコトハ本會ノ事業中必要ノ事ニ屬セリ云々。

右の燒失した借入史料八百六十四點といふ內の二百餘點は內閣其他の官廳並に華族等から借入中であつた根本的史料の記錄類の原本であるから最も貴重なるものであつた。

子爵松平乘承氏（富士見町）は前述の如く全燒した。同家歷代中乘完、乘寬、乘全は幕府閣老の要職にあつた人々で、夫等の自筆日記、並に幕政に關する書類澤山あつたのが燒けたは眞に德川史々料の一大損失であつた。其他歷代の手澤にて、

一乘邑倭歌集、並自筆懷紙二幅　一乘佑金井詩集、月の發句一幅　一乘完鶚乘洲集（詩文和歌）自註論語、自訓點唐本資治通鑑全部、自書自刻石摺孝經、其他草稿類十數種

伯爵井伊直忠氏（一番町）の藏書も全燒した。其の細目は調査未了の爲めに知られないが、宋版五書韻總（高衍孫著）其他古版の珍籍少からぬものであつたとのことである。

醫學博士井上通泰氏（內幸町）は本業の內外に歌學者歷史家として知られ所藏の軸物典籍は概れ其方面のものであつたが書籍は殆んど其全部を燒失した。それを大別すると史書七分歌書三分の割であつた。史書は主として蕃山關係のもので、是迄の蕃山研究家が蒐集したものは大抵同氏に歸して居たのである。歌書では萬葉集新考稿本の內一卷中、古今集新考稿本、隨筆全部等が尤も惜まるるものであつた。軸物は藍紙萬葉切、西行白河切其他少々と、短籍帖三十冊の內六冊が持出された外は皆失はれた。其內に故前田香雪の舊藏であつた春日祐春の六首詠草の幅があつた。六首の內には元寇に關する歌が一首あつて元來稀なる祐春の筆蹟中の珍として斯界に知られたものであつた。又織田家に傳來した信長十三回忌に近衞龍山公が追悼の七首詠草、額尾常房がお法華二十八品を詠んだ和歌一卷も火中に滅した。

村上覺二氏（山元町）も全燒である。氏の蒐集は和歌國學者のが中心で、それから靈寶茶器に及んだものであつた。其內に

一水月文藻九冊（堀田正敦の文集を樂翁の自寫せしもの）
一麗玉集六冊（首尾二冊樂翁書他四冊北村季文書）　一無題歌日記二冊（樂翁自筆）　一枝直千蔭雜書片大卷　一短冊約千枚（內和歌七百、俳句三百、俳句の大半は大野酒竹舊藏のもの）
一梅逸水墨山水圖全紙大幅　一植松包美叢竹蒔繪文机硯箱銘竹莖

石村貞吉氏（上六番町）氏の先考桐陰氏は增補國史略の著者として世に知られてゐたが、漢學の傍に又佛學にも達して、藏本頗る多くその一半は明治廿六年に鄉里長州に雄山天庫を建て分置せられた。其後追々增加して貞吉氏に及んだのであつたのを悉く祝融氏の强奪に委してしまつた。其內て

一天平寫經二卷（奧に書記生の名あり、島田蕃根舊藏）
一結定義經二卷（宋代寫本、高山寺傳來）　一駿河版銅活字本大藏一覽　一萬曆板二十一史全部　一唐本孝經衍義　一人帖（文天詳其他の拓本）其他法帖類數種等の希覯のものあり、又桐陰氏の著書は既刊二十三種の外に一三實史料百四十冊　一佛教史略十冊

が未定の稿本であつた。三實史料は佛教史料を類別したやうな大部なものであつた。桐陰曾て六法と安田老山に學んだ。老山與ふるところの粉本、其他色々に靈法を指教したものをまとめて數冊の靈帖にしてあつたのも燒けた。又書靈數十點、其中には乃木大將の尺牘もあつた。

財團法人大橋圖書館（上六番町）は明治三十五年六月の開館で、蓄積の書籍八萬八千三百餘冊に及んでゐたのを全く燒失した。其內には尾崎紅葉の遺書一千二百七十八冊、大橋乙羽遺書、黑井海軍大將の寄贈書の內には相當の珍書があつた、其他には博文館出版の帝國文庫溫知叢書其他の原稿となつた古本類又坪谷館長所藏の明治大正諸名家の尺牘、成島柳北手稿の柳北詩鈔、成島司直の日記、詩歌集等の此書庫に托してあつたのが燒けた。

巖谷泰生氏（元園町）は故一六翁の嗣子である。故翁の遺物も大概燒失した。其內には、

一懷素千字文法帖（楊守敎跋）
一子昂千字文法帖　一一六翁日記約五十冊（明治四年から十三四年頃迄の分は親戚の家にありて助かり、其以後三十八年頃迄の分なり。）
其他拓本類多く、遺印材の大部分は殘骸が掘出された。

岩溪裳川氏（三番町）も全燒で、秘藏の詩書約百三十帙を喪はれた。其内で、
一吳漢槎秋笳集、耶梅溪自筆評入二冊　一趙其詩稿寫本、湯潛菴自筆評入一冊
等は希覯の珍籍であつた。氏又豫て達磨像の蒐集があつたのも燒いた、其内の珍物には乾山燒達磨、吳俊明遺愛鍛出達磨、平賀源内手造達磨、廣瀨臺山嵐山燒達磨等があつた。

第二　神田區

東京商科大學（一ッ橋通町）の圖書館は幸に此の火難を免れたが、商品陳列館が全滅し、又同校に保管せられてあつた法學博士村瀨春雄氏の藏書約一萬冊が燒けた。其の内容は主として博士專攻の海上保險に關するもので、他に比類なき蒐集であつた。

私立明治大學（駿河臺南甲賀町）では圖書約六萬冊を燒失した。其の内の特殊なものはポアーソナード文庫の約三千冊である。其の大部分はポ氏が日本の古法研究の爲めに蒐めたものでポ氏自筆並に令嬢に筆記させた民法草案其他のものが二十餘冊あつた。又麻生記念文庫約三千餘冊、之は元帝國大學教授ステルンベルヒ博士の藏書を麻生氏の購入して寄贈したもので主に獨法全般に亘つたものと經濟哲學文學のものもあつた。其他岡田朝太郎博士の蒐集に係る刑法關係の書約三千冊並に小風文庫の財政經濟に關するものがあつた。

私立專修大學（今川小路）では圖書二萬八千百三十七冊を燒亡した。明治大學が法律書に富んでゐたに反して此大學には經濟關係のものが多かつた。其の主なるものは相馬永胤學長田尻稻次郎學監の寄贈に係る相馬田尻文庫と稱したもので、其中には希覯の珍籍もあつた。又高橋捨六の圖書も此所で燒けた。

私立日本大學（三崎町）の圖書館も全燒した。就中有名なる獨逸の刑法學者ビンデング教授の遺書全部約一萬三千卷を多大の苦心の結果入手したばかりのところを失つたは最も惜まるゝものであつた。又林博士の文庫を始め其他約七千卷の和漢書は他所へ預けてあつて助かつたのは不幸中の幸であつた。

公爵西園寺公望氏（駿河臺南甲賀町）にては孝明天皇御印譜明治初期頃の官印々譜、ベルサイユ會議の記錄等が失はれた。其他書畫支那陶器の類等全燒であるが、其内には水戸光圀遺愛の机があつた。

醫學博士岡崎桂一郎氏（小川町）も全燒した。藏書中詩文集の類は土肥博士の鶚軒文庫に寄托してあり。又醫書中の營養關係のものは内務省の營養研究所にあつていづれも無事なること

を得たが、其他の醫書は悉く失はれた。博士は古醫書の蒐集に於ては實に第一人者であつた。燒失書目約七千卷中の重要なるものを左に摘錄する。
一大同類聚方、大同三年勅擇、百卷　一醫心方、丹波康頼著、三十卷　一醫略抄、丹波雅忠著　一頓醫抄、梶原性全著、五十卷　一萬安方、六十二卷　一金創療治抄　一福田方、僧有隣撰、十二卷　一悲田方、同　一卷　一癰疽方、同　一卷　一琉璃壺、僧允能撰　一卷　一鴻寶秘要、坂淨秀撰　一棒心方、中川子公著、二卷　一全九集、僧月湖著　五卷　一大德濟陰方、同　一靈蘭集、細川勝元輯　一續添鴻寶秘要鈔、坂淨運撰　十六卷　一五體身分集、三卷　一口内針秘傳、丹波親康撰　一卷　一管蠡備急法、度會常光撰　一卷　一管蠡草灸診抄、同（自筆稿本）一卷　一外科新明集、僧良善撰　一卷　一詩經本草式、稻若水稿本（新井白石所持）一卷　一醫方淵源考、喜多村直寬手寫一卷　一醫家古籍考、中川故自筆本　一卷　一日用灸法、曲直瀨玄朔著　一卷　一南柯醫稿、直鹽翼自筆稿本　一卷　一延壽和方彙函、三宅意安自筆稿本　一卷　一豹斑錄、奈須恒德自筆稿本　一卷　一敗鼓錄、同　一卷　一采賢異言、新井白石著、杉田玄伯、桂川月池等手寫　一耆宿茗話、稻葉元熙自筆稿本　一卷　一諸肆漫筆、山田廣業自筆稿本　一卷　一外科鋏、大槻玄澤自筆稿本　一卷　一古翁醉話、阿波藩醫某自筆稿本　一卷　一鼠窩鶏肋、澁江抽齋自筆稿本　三卷　一多紀家歷代の手寫古書　約百冊　一曲直瀨道三以下歷代の歷代の遺墨、遺書　一補食營養本草、岡崎博士稿本　七卷

男爵細川一之助氏（駿河臺北甲賀町）では故十洲翁の遺書多數を全燒した。其書は和漢洋の多方面に亙つたもので其の内には高島秋帆の遺書が幾分含まれてあつた。又和書の珍らしきは天海僧正自筆の如法經次第十冊があつたといふことである。

村口半次郎氏（今川小路）も藏品商品を擧げて灰燼に委してしまつた。其内の重品左の如し。
一魚養筆藥師寺經　六卷　一光悅源氏物語　五十四冊　一光悅本謠鈔　十冊　一慶長活字版吾妻鏡　五十冊　一慶長刊富脊堂活字太平記　卅一冊　一掖齋孝經鄭註　一冊　一掖齋校正影寫本玉燭寶鑑五冊　一柳亭種彥自筆漫筆　二冊　一春秋左氏傳秋山玉山書入本尺牘附　十五冊　一劇場雜纂關根只誠自筆　卅一冊　一太政紀要小中村清矩初稿本　三冊　一金平六段本（寬文より延寶頃迄）十餘種　一江戸繪圖（寬文より元祿迄）十一張　一西鶴物語江戸時代古版本　十餘種

藤澤衛彥氏（今川小路・錦町）は本郷の居は無事であつたが、其著「日本傳說研究」の發行所である神田今川小路大鐙閣に於て其蒐集稀書數十冊を、錦町三丁目日本傳說叢書刊行會に於て日本歌謠叢書の原本聲曲に關する古典籍を燒失した。その主要なるものの二三を摘記する。
一七十二候抄（元祿四年版）　一百合若大臣（丹綠本）　一四國巡場記（元祿版）　一幕末小唄集（寫本）　古謠集其他

木全宗八氏（佐柄木町）も、先代宗儀翁以來蒐集の茶道書約八百冊、香道書約百冊、料理書百數十冊、平曲畫五種、並に平家琵琶三面、香木等を皆燒失した。書畫幅類は幸に持出されて

大半無難であつた。

水谷一氏（佐久間町）の藏書も全燒した。氏の蒐集は主として有職故實關係のもので繪卷物類の重なるものの摹本は大抵備へられてあつた。其内の三四を摘する。

一後三年戰繪卷纂本三卷（長谷川雪堤が松平伊賀守の爲に寫す所）　一犬追物圖卷（傳土佐光茂筆）　一大内裏圖考證（裏松固禪の原本に近きもの）　一家屋雜考五冊（澤田名垂自筆稿本）　一家屋雜考一冊（小杉榲邨自筆增補本）

第三　日本橋區

菊池長四郎氏（元濱町）所藏の典籍も全滅した。其數量は詳かならぬが、二酉の富に於ても亦相當の大家であつた。今左に其の重要書目の一部分を記す。

一稿本大日本史（其大部分は立原翠軒の書寫したもので、哀公烈公の朱批附箋のあつたもの）　一立原杏所双鉤寫王鐸法帖三冊　一高山彥九郎自筆江戸日記一冊　一蒲生君平自筆山陵繪圖取一冊　一近藤重藏自筆本（書名失）一冊　一曲亭馬琴自筆草稿椿說弓張月十冊　一同　羇旅漫筆全部　一淺野梅堂自筆雜記一冊　一池永道雲稿本篆髓四冊　一浦上春琴自筆睡菴清祕錄一冊　一宣和印譜四冊　一清承館印譜　一學山堂印譜五冊　一集古印存十二冊（楊守敬舊藏）　一漢銅印源四十冊　一錦囊印林二冊　一顧氏集古印譜十冊　一三橋印譜　一飛鴻堂印譜五集四十冊（初版最良本）　一曉采居印々四冊　一隋大僕鄉元公墓誌銘拓本　一舊拓不完本九成宮醴泉碑　一肅府初印本閣帖　一披齋模刻本淳化祖帖　一王陽明眞書行

豪堂記拓本

早川龍助氏（室町）は夙に歐洲に遊學して植物學を修め、多大の洋書を將來せられたと、又歸朝後も益蒐集したのであるから、植物學關係の圖書は其右に出るものなしといふ程の大蓄積であつたのを向島小梅の別邸に於て悉く灰燼に附してしまつた其の細目は未だ知られないが其の内の希覯のものとして知られたもの左の如し。

一ブルーメ著、爪哇植物志、四冊　一ブランコ著、比島植物誌、四冊　一カーチス植物雜誌、初號以大來揃　一サッカード著菌譜、既刊全部

澁澤家編纂所（兜町）は、子爵澁澤榮一氏が故萩野文學博士を主任として德川慶喜公傳編纂の爲めに設立したところで、同傳刊行完成の後は澁澤家同族會の事業として、澁澤子爵傳の編纂中であつたが、夫等の史料、並に參考書籍一切を擧げて此の慘禍に葬られてしまつた。其内の重要書目を左に錄する。

一朝彥親王御日記、七冊　元治元年七月より慶應三年九月迄
一久邇宮文書、二十三冊
一德川慶喜公傳初稿、約六十冊　慶喜公並に澁澤子爵の閲覽して夫に意見を附箋したもの
一廿日夢會筆記　慶喜公談話の筆記
一晩香堂雜纂並續輯、約百冊　慶喜公傳の史料を蒐輯したもの
一守國公御傳紀料、十冊　松平樂翁傳の史料にして其臣田内主税の手稿本
一樂翁公幕政意見、三冊

土生敦氏（住吉町）は曾祖父贈從四位土生元碩が我國實驗眼科の開祖とも稱せらるる人で、藝州藩から出て幕府の奥醫師となつた大家である。祖父玄昌、父義禮相承いで敦氏に及んだのであるから、家には歷代の一族の遺書、遺墨、遺物澤山にあつたのを悉く喪つた。

▲銀海療法題言（玄碩遺稿）　一〇獺祭錄（同）　一〇白内翳手術人名實驗錄　一〇迎翠堂方函　一〇師談錄（玄碩述、水野善章記）　一〇勤要錄（玄昌記）　一〇土生玄碩像（五渡亭國貞筆）　一〇野村正友像　一〇大黑天像（將軍家より拜領）　一〇和蘭製玻璃小コップ（同）　一〇金蒔繪玉蟲盛出し印籠（同）　一〇和蘭風景彫刻眞鎖製煙草入（シーボルト寄贈）　一〇施氏眼科書及後篇共　三〇舍里鳥眼科書後輯卷三　一〇舍李斯眼科書卷二下　一〇業泄兒眼篇卷五　一〇ボードイン眼科書　一〇謨斯土眼篇續　一〇謨斯土焮衝論　一〇昆良實盡盲併里障之說　一〇舍利斯灰翳之說　一〇里旆蘭土氏菲叔祿義新書　一〇千里年眼序　一〇金篦一撥　一〇視學一步　一〇莫私土黑障眼篇　一〇白内翳治術穿瞳衡器具之圖　一〇應用方函　〇袖珍内外新法　一〇眼療新編　一〇鷗氏眼書卷五一、二　六〇瀏修思眼目篇　一〇刺朱私外科病理論　一〇黃斯篤眼科發蘆　一〇白翳方術論オンセノールド緒方洪菴譯　一〇舍李斯眼篇　一〇李子眼目篇　一

其他古文書數十通、玄碩所用の醫療器械、文房具類並に書畫類數十點。

幸島市右衛門氏（室町）の先代頃の家人に正助といふがあつた。此人桂花園桂花と號して歌俳諧狂歌書畫を能くし、維新前後の頃には朝幕双方の遺顯諸家へ出入し、成島柳北、末廣鐵腸などとは特に親交した人で、日常上は政治上の事から下市井の雜事に至るまで何くれとなく見聞の事を記錄したものを沿革雜記と題した六百七十五卷の遺稿があつたのを、其他の雜錄が約五十卷、書畫類もろともに灰燼に附してしまつた。その中には芭蕉翁自筆初稿本の幻住菴記の一卷を代々の宗匠が持傳へたのがあつた。

後藤龜市氏（馬喰町）は昔の金座々頭の家であつたので家には金座關係の舊記古物が澤山にあつた。其一部分は往年大藏省へ納めたが、殘つたものも少からずあつたのを悉く燒いた。

一金座總日記（表題には御用留とあり、弘化二年十一月から明治五年迄の分、葛籠三杯、長持一杯、弘化以前の分は大藏省にて燒亡した）　一佐渡金山圖二卷　一金座圖錄二卷　一眞崎金次所圖錄一卷（天保錢鑄造所也）　一深川州崎鐵錢工場圖錄一卷　一金座及諸役所古圖一箱　一金座の印（木印二個）　一金座所用諸道具標本多數　一東大寺天國力（德川家康より初代庄三郎拜領）

第四　京橋區

農商務省（木挽町）の藏書は約十萬九千三百冊と計上せられてあつたのが悉く燒亡した。同省圖書は幸に往年目錄の印刷せられたのがあるから、其大半の書目は知られてゐる。今左に同

省特殊の書名を掲げる。いづれも寫本で他に複本のないものである。

一勸農志料、二百四十三冊　穀類、油料、染料、蔬類、桑蠶、漆蠟、果樹、柑橘、飼牧等十九類百五十二種の植物の性狀栽培法等を說明したもの、明治初年頃の編製ならん。
一商業類纂、百六十八冊　德川末期に於ける各種商業の慣例を調査編纂したもの
一農事有功傳、十三冊　古來農事功勞　者の事蹟を調査したもの
一農商工沿革史、十二冊　太古以來の沿革を記述したもの、但し未完成
一內國農具類聚、二十五冊　明治初年頃の調査に成れるもの
一清國鹽法志、四十冊
一各府縣漁業漁具志料、五十冊
一物價調査、一冊　天保元年以降五年間の調査
一物價沿革、一冊　天保年間のもの
一牧荒書類、二十一冊

遞信省（水桶町）は、其附屬の遞信博物館が先年麴町富士見町に移轉してあつたが爲に、今度の災を免れたのは誠に幸運であつた。圖書類の幾分は博物館にあつたのもあるが、無慮四十五萬冊といふ大數は本省に於て亡びた。最から申せば內務省帝國大學に次での大損害である。內容では汽車船舶方面のものが多く、電氣關係のものは日本一であつたといふことである。夫等の重要なものは概れ洋書であつたが、同省編纂のものは往年出版せられた驛遞志稿の外は大したものはなく、左記の二種が特別のものであつた。

一驛遞明鑑、十一冊(二部)　慶應三年より明治十八年に至る驛遞規則の沿革を蒐めたもの
一工部省報告、一冊物二冊物各一部明治二年燈臺局に於て一般電車事務取扱開始より同三年工部省に電信寮創設までの沿革を記述したもの
其他明治元年から大正十三年までの公文書の綴込約三萬冊がやけた。其內の重要書類は明治元年から同四年に至る正院本省、工部省から引繼いたもの、及び驛遞局時代の郵便電信創制に關する理由書などである。

海軍大學校（築地）では圖書六千三百四十三冊を燒失した。其の內特殊のものは主に軍機に關する秘書で、公表の出來ないとのである。

說田彥助氏（南新堀町）も約一萬卷の藏書を喪はれた。其內の特筆すべきものを左に摘錄する。
一文徵明印譜、文三橋跋、四冊(谷文晁尺牘付)　一中庸、一冊、藤原惺窩書入、並に惺窩の中庸に就ての考說稿本二冊
一二十一史全部、頼山陽書入並に箱書(鳩居堂舊藏)　一韓非子、僧五岳其他書入並に五岳箱書　一王右軍草書孝經帖三冊(伊達家版)

東京地學協會（四紺屋町）は其創立古く、四十有餘年間に蒐集した圖書夥しきものであつた。內容は勿論地理地質地文に關するもので、此方面に於ては農商務省の地質調査所と相並ひて豐富なる資料を包藏してゐたのであるが、兩所共に災厄に罹り御厨子所日記約五百冊は延喜以來明治六年迄の記錄で宮中の大膳職にもその所傳の缺けたところのことも此記錄に依て補ふことの出來た位の貴重のものであつた。其他高橋家傳來書中の主なるものは

一厨署類琳、高橋宗直自筆稿本、十五冊　一當家類要、同上、四冊　一要事類目、同上、一冊　一圖南軒法帖、同上、二十冊　一草菴漫錄抄、高橋宗芳抄寫、十冊

等で、石井家傳書の主なるものは

一四條流庖丁傳書、五十卷　一四條流料理法傳書、八十卷　一勅使參向愛膳圖、十卷　一朝鮮信使饗應圖、五卷　一諸家婚禮祝儀用向書留、三十冊　一石井治兵衞三代(嘉福、嘉孝、嘉重)日記、三十三冊　一近世料理彩色圖、同器物圖、石井嘉晴筆、十二卷　一料理雜記、石井嘉晴稿、五十冊　一料理旅行記、石井泰次郎、稿本。四十冊　一鰹魚考、同、五冊　一蒲鉾考、同、五冊

其他台計約八千冊が喪はれた。

第五　本鄉區

東京帝國大學（本富士町）は、申す迄もなく我邦最高の學府で綜合大學の最初のもので、最大なるものなれば、其の附屬の圖書館の內容も推して知るべく、貴重なる圖書を豐富に儲有することに於て我圖書館中一二を爭ふばかりの位置にあるものであつたが、一朝にして此の天災に亡びたのは、眞に東洋文獻空

て全燒したのは斯界の大打擊である。協會にはまた假寓に關する古文書も少からずあつたとのことである。

後藤武夫氏（水桶町）は楠公の後裔と稱する楠木正一家傳來の古文書類を保管のまま烏有に歸した。其目錄

一後村上天皇綸旨（右中辨奉河內大夫判官宛、保安寺領若松庄知行安堵）　一庄木正儀副狀(右の綸旨に副へしもの)
一正親町天皇綸旨（右中辨奉楠河內守宛、先祖正成の朝敵赦免）　一女房奉書（右の綸旨に副へしもの、永祿二年十一月廿日）　一口宣案並に宣旨（永祿二年十二月十九日楠正虎任河內守）　一口宣案(永祿六年二月廿三日楠正虎叙從四位下)
一口宣案(天正四年十一月十三日楠長蔓叙法印)　一正親町天皇宸翰詠草楠の歌　一松永久秀書狀（楠河內守宛正成朝敵赦免の綸旨を賜はりし事を傳へしもの）　一文書目錄(康正三年二月三十日)　一傳承覺書(延享四年楠閑休宛)　一楠氏系圖二卷　一楠太郎左衞門正長書上（永祿九年正虎朝敵赦免の事情）　一楠正虎筆刀箱書並に額

其他數點あつた。其他大石良雄の遺墨十餘點、高山彥九郎のもの十點許り、これ亦子孫の保管品であつたものを、所藏の忠孝節義士の書畫、並に現代諸名家の書畫帖（約一千二百帖）と共に失つた。

石井泰次郎氏（鈴木町）は家世々幕府の料理方指南を勤め、公正家の方は御厨子所預高橋家の門人であるが爲めに、高橋家傳來の古書を保管してゐたのを、自家の古記錄と共に此災を免るるを得なかつたのは甚だ殘念なことであつた。就中高橋家の

前の大損害で、又震災被害中文化的損失の最大なるものゝ一つである。大學の圖書の大部分は圖書館に儲藏されてあつたが、一部分は各科の教室研究室等に夫々分置してあり、又其の若干は救ひ出されたのもあるから、燒失圖書の詳細を調査することは相當の一大事業で、一朝一夕に知るべからざるものである。因て本志に於ても容易に其の委曲を盡すことは出來ないが、幸に貴重書目錄の副本の存在したのがあり、又同館關係諸氏の所說等を綜合して左に其の一斑を揭げることゝした。總損害の數量は約七十萬冊と公表せられてあるが、尙精査したらば五十萬乃至七十萬の間にあるであらうといふことである。

（一）文書及記錄（原本）

寶買券　寶龜五年十一月二十三日備前國津高那莵垣村　一通〇
寶買券　弘仁十年二月十六日近江國坂田村大原鄉　一通〇岡本寺田券紛失狀　仁安二年五月廿三日相慶大法師判　一通〇東大寺井東寺款狀　建久七年七月六日書寫　一卷〇蓮性寄進狀　元應二年十一月二十一日　一通〇觀世音寺談義緣起案文　一〇七條院廳下文　貞應三年正月　一通〇東大寺三綱等奏請文　安元元年十月擯繼那法師般眞等判　一通〇弘安十一年永仁四年　具注曆　殘闕　狩谷掖齋舊藏　一卷〇斑島文書　文保二年至康應元年　四十二通　一〇鎌倉時代女房消息　三十一通　一卷〇西大寺古圖　鎌倉時代　室町時代　德川時代　三鋪〇壽寧院所領に關する足利時代の御敎書應永七年　永享四年　長祿二年　文明十年　五通　一卷

紛河寺文書　應永年中　三通〕一卷〇
三聖寺文書　文龜至天文年中　六通〕
兵庫北關入船納帳　文安二年正月二日　一〇春日社御八講季頭日記　天文二十三年快尊筆　一冊〇細川勝元同政元兩御書　一冊〇豐臣秀吉朱印　天正十三年、同十七年　二通〇德川家康朱印　天正十一年四月十九日　一通〇春日社頭諸日記　永享八年一冊〇同　寶德四年　一冊〇糸株役人勸向奪狀　自享和三年至天保十五年　一卷〇仁和寺朱印　永祿十一年、天正十三年　二通〇松尾祭綸旨十二通　一卷〇手搦大路北邊家地手繼券文　養和元年、寬喜三年間　一卷〇東大寺鐘神殿邊上敷地券習失狀　寬元元年　一卷〇　聖舜讓狀　弘安二年、青蓮院文書の內　一通〇天王寺別當可補天臺座主事院宣寫　弘安九年　一通〇織田信長朱印　天正三年　一通〇宣秀御敎書案　一冊〇南都大佛修復勸進帳　貞享二年五月勸進沙門公慶　一帖〇奈良町並寺社方御法度書留帳　寬永十五年至正德二年　三冊〇奈良町方公事裁許帳　元祿十七年中　一冊〇生駒文書　松平忠昌、松平直政、細川綱利、蜂須賀至鎭等書翰　一三通〇淀君消息　松原氏宛　一通〇足利義持寄附屬狀　應永廿九年十二月廿三日　一通〇前大僧正持嚴附屬狀　文龍三年十一月廿四日　洛中傾城局公事補任狀　大永八年六月二日　同十六日　一卷〇加藤家日記　寬保四年至安政七年　三四冊〇曲亭馬琴日記　文政九年至弘化三年但闕本　一五冊〇町尻家日記　寬永六年至明治元年　七六冊〇松尾社日並記　寬永十九年至萬延二年　一九二冊〇松尾社家日並記　九冊〇宋版太平寰宇記書皮所貼故紙本文廿張、南宋淳熙實祐年間公文書數十通　一冊〇陸涼軒日錄　永享七年至明應二年　六二冊〇鹿苑日錄　長享元年至享和三年　內二冊殘存　一五七冊

右二記錄は京都相國寺塔頭慈照院に傳つたのを明治二十八年頃に後記の桃源和尙自筆の史記抄、百衲襖等と共に購入したものである。

青蓮院舊藏文書　八帖
野宮文書　約三〇〇〇點〇主に有職和歌に關するもので購入したもの。
幡文書廣　約三〇〇〇點〇主に有職故實公事に關するもので、幡家から寄贈せられたもの
舊幕府評定所記錄類　約九一〇〇冊〇舊幕府寺社奉行所記錄類約一〇〇〇冊〇右二記錄は德川氏施政研究の資料として唯一の根本的のものであつた。前者は內閣から、後者は內務省から引繼いたもの舊幕府社寺領文書類　御朱印の類　約二七〇〇點
舊幕諸藩調達金證書寫　約一二〇〇冊〇右種大藏省から引繼
釜山文書　寬文七年至明治廿年　約一〇〇〇冊〇德川時代の日鮮交を涉見るべき根本的文書集で、釜山領事館に藏せられてあつたのを、外務省から引繼いたものである。詳細目錄は現存してゐる。

郡村誌　約六四〇〇冊〇內務省元地理局の編纂に成り、全國各町村の行政を始め其他一切の事項を明細に記錄し、添ゆるに各町村二千分一の地圖を以てしたもので、日本地誌の大百科全書的のものであつた。
內藤碧海叢書　七三冊〇內藤碧海集　內四冊殘存一五四冊
小中村清矩遺書。
幕末外國關係文書（各國條約正本）
是は外務省の所有に屬するもので、大日本古文書幕末外國關係文書編纂資料として明治四十二年以來帝大圖書館に保管せられてあつたものである。其內燒失の分を左に記す。

（1）露　國
安政元年條約　二通〇同　附錄　二通〇批准條約書　三冊〇附錄批准條約書　三冊〇批准條約交換證書　三通　二鋪〇批准取極書　一通〇三箇所　江戶大阪兵庫　開港取極書　一通〇
安政四年條約　三冊
安政五年條約批准書（譯文一冊）　二冊〇批准條約交換證書二通
慶應三年緤太雜居規則　三冊
慶應三年改稅約書及運上規則　三冊〇明治元年約書取極通知書一通

（2）蘭　國
安政二年條約批准書　一冊〇批准條約交換證書　一通
安政四年條約　二冊〇追加兼批准條約交換證書　一通
安政五年條約批准書　一冊〇批准條約交換並條約書中誤正の證書及添翰　二通
慶應二年改稅約書及運上目錄規則　一鋪

（3）葡　國
萬延元年條約　一鋪　一冊〇批准條約交換證書　一鋪
慶應二年改稅約書又運上目錄規則　一鋪

（4）獨　國
萬延元年條約　三鋪　一通〇批准條約交換證書　三通

（5）瑞　西　國
文久三年條約　一鋪　一冊　二通〇批准條約交換證書　一鋪
慶應三年改稅約書取極證書　一鋪

（6）白耳義國
慶應二年條約　一鋪　一冊〇批准條約交換證書　一鋪

慶應三年改稅約書取極書　一綴

（7）伊　國

慶應二年條約　一綴　一冊○批准條約交換證書　一通

（8）丁　抹　國

慶應二年條約　一綴　一冊○批准條約交換證書　二通

（二）古寫經

善見毘婆沙律卷第六　天平十二年、東大寺印　一卷○大方廣佛華嚴經入法界品卷第十四　天平時代か　一卷

菩薩瓔珞本業經集衆品　奉弘仁三年二月德一連一校了　聖寶朱印　一卷○佛說守護大千國土經　藤原中期か、高山寺印　三卷○大般若波羅密多蜜卷第一百廿九　藤原末期か　一卷○繼摩羅詰經入文疏第十四　藤原中期か　一卷○說有一切有部俱舍論卷第卅　保延元年覺樹跋　一卷○大集大虛空藏所問經卷第一　長治元年藤雅康高山寺舊藏　一卷○大集大虛空藏所問經卷第二百六十　藤原末期か　一卷○大般涅槃經卷第卅一　傳曰明惠上人筆一卷○大智度論第卅一　鎌倉時代か、高山寺印　一卷○大般若波羅蜜多經卷第四百七十七　定寬跋、東大寺八幡高印　一卷○妙法蓮華經五百弟子受記品第八　鎌倉時代か紺紙金字　一卷○大隨求附羅尼　鎌倉時代、高山寺印　一大○佛母大孔雀明王經　室町時代か　三卷○金光明經文句卷中　一卷○佛說盂蘭盆經　長錄元年施主道友跋　一卷○瑜伽師地論卷第八十　法隆寺一切經印　一卷○梵網經　天福元年僧長眞寫、高山寺舊藏　二卷○大教王經卷第二　藤原末期か、高山寺舊藏　一卷○大般若波羅蜜多經卷五百卅八　文和三年修復願主嘉尙跋一卷○文殊師利苦薩八字三昧經　鎌倉時代か　一卷○大乘理趣六波羅蜜多經義疏卷第六　一卷○華嚴經五十要問答卷上　建久五年奧書　一卷

（三）古版經

百萬塔所收陀羅尼五種　附百萬塔二基　五卷○成唯識論卷第九　建仁元年春日版　一卷○本分戒本　元亨二年泉涌寺版　一帖○大般若經卷第四百七十四　應永三十肆年施主梵寅跋　一帖○三部經　元亨二年僧知眞版　四帖○付法藏因緣經卷第四　北宋崇寧元年版三聖寺舊藏　一帖○瑜伽師地論卷第五十三　元版一帖○宗敎錄卷第八十二　宋版、徑山慧元重校本　一帖○大方廣佛華嚴經疏卷第一百七　宋版、高山寺印　一帖○釋迦譜卷第五　北宋崇寧元年版、三聖寺舊藏　一帖○梵網經菩薩戒　高麗版、開德寺及石清水神宮寺印　一帖○淨心誡觀祕眞鈔卷下　南宋嘉定三年版、西大寺印　一帖○大法炬陀羅尼經卷第十五　南宋版　一帖○大正句王經卷上下　高麗玉正版　二帖○大毘盧遮那成佛經疏　高野版、等海印　二十篇○大毘盧遮那經供養次第法義疏　高野版、正德五年亮範跋二冊○阿毗達磨大毗婆沙論卷第五十三、第五十六、第一百四十五　高麗版　三帖○十住毘沙婆論卷第六　同　一帖○金剛薩埵說頌那夜迦天成就儀軌經卷第二　同　一帖○阿毗曇毗婆沙論卷第十一　南宋版、南都善光院

○勝鬘寶窟卷下　唐人筆か　一卷○大般若波羅蜜多經第三百二　鎌倉時代、東大寺舊藏　一卷○同　第十九鎌倉時代　一卷○大方廣佛花嚴經入法界品第卅九之十二　奈良朝か、法隆寺一切經印　一卷○大毗盧遮那成佛神變加持經卷第一　鎌倉時代か　一卷○大般若波羅蜜多經卷第卅四　奈良時代か　一卷○同　第一百十四　嘉應三年跋　一卷○十誦律第四誦卷第廿一　天平十二年跋　一卷○佛說迦葉赴佛海槃經　大治四年僧智範跋法隆寺一切經印一卷○阿毗達磨大毗婆沙論卷第一百卅四　寶德三年書　蓮王府印一卷○大方廣圓覺略疏　文祿五年跋、披齋印　一卷

印　一帖○同　卷第五　元版　一帖○阿毗達磨法蘊足論卷第十　高麗版　一帖○西藏譯大藏經　三五二冊

紺紙金泥寫經と白紙紅字版經との混本で、北京の黃寺の什物であつたのを、明治三十三年北清戰役の時に將來して宮內省へ獻し、翌年大學へ御貸下になつたものである。

其內二三帙は河口慧海師將來の分と共に研究室で助かつた。

蒙古譯大藏經　滿洲譯大藏經

右二大藏經は奉天の黃寺にあつたのを、日露戰役中御內帑金一萬五千圓の下賜を願つて之を購入し、大學へ御貸附になつたものである。

（四）古寫本

梵文　承安二年六月廿三日跋高山寺印　一卷○碧巖錄抄　永正弘治年間僧惠光筆最聰印　一○冊○論語集解　應永廿二年仲春十二日跋　五冊○山谷詩集註　古寫本、天文前後五山僧侶筆二冊○帳中香　大永七至享祿四年僧大甬筆　二○冊○百衲襖文明六年至九年僧桃源自筆慈照院印　二三冊○史記抄　文明八年至十二年僧桃源自筆慈照院印　二○冊○實語敎及童子敎記文明三年春日跋　一冊○蒲室集疏　文明九年仲秋仲瀚跋長得院印一冊○天下白　永正十四年三玄道人示敎跋　一三冊○禪林騈花室町中葉至德川中葉書繼　一八冊○大隨求陀羅尼　貞應三年僧喜海跋　一卷○十八道梵文　大治元年僧禪仁跋　一卷○臣軌首楞　鎌倉時代か　一卷○諸師印信　承久元年跋、方便智院印一卷○諸寺略記　首楞　貞和二年跋　一卷○具書（十一面觀音に關する注疏）藤原末期　一卷○美編門院五十ヶ日御逆修行次等　保元三年注進草菓案　一卷○弘法大師傳　天養元年加點第一卷○經進北斗御修法　天養元年法師信舜等注進ノ寫　一卷○增賀上人講式　天正二年遺塵親王跋　一卷○仁和寺御傳　文祿二年僧亮深跋　一卷○日本皇帝系圖　南北朝頃書寫永祿中書繼一卷○雲圖抄　古寫　三種○金剛界傳法灌頂作法　鎌倉末期か高山寺印　一卷○傳法灌頂記　大永三年僧眞海跋　一卷○松尾託宣　永祿天正頃　一卷○松尾社造營勸進狀　永正十五年跋一卷○松尾社修造勸進狀　永祿十一年頃　一卷○松尾明神七社次第記　永祿天正頃　一卷○結緣灌頂三昧耶戒作法　金剛界一卷○應安元年光嚴卅三回聖忌御佛事等ノ記　一卷○實冬公大將拜賀記　正德四年藤原尙房跋　一卷○連歌百韻　慶長十年里村玄仍、同其仲等奧行　一卷○後陽成院崩御之記　天和三年四洞院時慶筆　一卷○法輪寺再興勸進狀　寬文元年渡月橋再興勸進　一卷○加藤枝直五十賀集　寬保元年　蘇悉地羯羅經略疏卷第七　延久二年跋　一冊○赤染右衞門家集　傳云小倉實名鄉筆　一冊○公事根元抄　天正頃書寫　一冊○和歌方與勝覽　明曆三年飛鳥井雅章寫　二冊○諸儒註解古眞實　明應元年書寫　六冊○きぬかづきの記　傳云一條兼冬筆　缺本一冊○源氏物語抄出　永和二年觀意跋　缺本二冊○平家物語　古寫本、妙長寺謙藏書印　一二冊○平家物語　譜節附　元祿頃書寫カ、帖表美裝本　一二冊○侍中群要　養和、嘉元寫本ノ傳寫本、寬政十一年校合跋一○冊古文孝經　孔子傳　文明天文頃カ　一冊○類聚雜要抄　天和三年二月跋　四卷○源氏物語紹巴抄　慶長十二年意運跋　二○冊○菩薩心論證私記　建治二年僧尊緣跋　一冊○連歌新式　天文頃カ、阿波國文庫、不忍文庫印　一冊○日本書聖德太子傳曆平氏撰　天文四年跋　二冊○菩薩戒本宗要　享祿四年僧一白跋